

301.3245/

調査資料第二十二輯

# 朝鮮の人口現象

朝鮮總督府



入	贈
第六三	禮部
號	三
	年
	月
	日



## 序

今や人口問題は世界の重大なる悩みとなり、外に在りては曩きにゼネヱアに於ける國際經濟會議及び國際學術會議の議題となり、内に在りても既に政府は人口食糧問題調査會を設けて對策を審議しつゝあり。由來人口に關する根本的調査は、單に當面の問題たる人口調節若くは食糧自給の如き小範圍に止らず、社會萬般の施設研究上に基礎となる極めて大切なるものなり。「朝鮮の人口現象」一卷が、斯かる大使命を果し得るや否やは斷言し難きも、朝鮮に於ける人口狀態に關しては、實際的にも、學術的にも、相當に精密なる調査を爲し居れるものと思料す。

本書は囑託善生永助をして編纂せしめたるものに係り、人口の統計的觀察たると共に、またその歴史的地理的研究として多少の價值あるべし。添附の府面別人口密度圖及び府郡島別出生死亡率圖の如きは比較的苦心を費したるものなるが、尙ほこの外數葉の地圖、圖表、寫眞をも掲載せり。本書を繙くに於ては、人口食糧問題より見たる朝鮮の地位の如きは自ら明瞭となるべく、併せて朝鮮の人文と經濟の實情を究むるの資料ともなり、執務上竝に研究上幾分の裨益する所あるべしと信ず。

昭和二月十月

朝鮮總督府總督官房文書課

調査資料  
第二十二輯

# 朝鮮の人口現象

## 目次

第一章	戸口の變遷	一頁
第一節	戸口に關する文獻	一
第二節	道別戸口の消長	一〇
第三節	世宗時代の戸口	二三
第四節	正祖時代の戸口	四七
第五節	李朝末葉の戸口	六九
第六節	併合以後の戸口	九七
内地人の戸口		一〇一
朝鮮人の戸口		一一一

目次

一

大韓帝國  
社會學部

外國人の戸口…………… 一一四

李朝五百年間の戸口表―世宗時代の慶尙道戸口數―世宗時代の八城戸口―正祖十三

年己酉式京外戸口―正祖十三年己酉式年戸口數―李朝末葉の各地方別戸口數―明治

三十三年初韓國戸口數―明治三十二年七月京城五署戸口明細表―韓國戸口表―明治

四十二年以前の戸口數―朝鮮人道別戸口數―累年戸口表―道別戸口表―併合前の内地

人數累年調―併合後の内地人戸口累年調―内地人戸口道別表―現住内地人本籍別戸

口表―朝鮮人戸口累年比較表―朝鮮人戸口道別表―支那人戸口累年調―支那人戸口

道別調―外國人(除支那人)戸口累年調―外國人(除支那人)戸口道別調―現住外國人(除

支那人)國籍別調

第二章 人口の構成…………… 一一一

第一節 内鮮外人別及び體性別人口…………… 一一一

第二節 年齢及び配偶別人口…………… 一五五

第三節 職業別人口…………… 一九〇

內鮮外人別及び體性別人口數―體性別累年比例表(男千人に付女)―女百人に對し男百人以下の郡・島―女百人に對し男百人以下の面―女百人に對し男百人以上の府・郡―女百人に對し男百二十人以上の面―年齢及び配偶關係別人口數―成年者數―結婚年齢者數―妊孕年齢者數―労働可能者數―學齡兒童數―選舉資格年齢者數―兵役義務年齢者數―犯罪年齢者數―現任人口職業別―内地人現任人口職業別累年比較表―内地人現任人口職業別累年比例表―朝鮮人現任人口職業別累年比較表―朝鮮人現任人口職業別累年比例表

### 第三章 人口の分布……………二〇三

#### 第一節 地方別人口密度……………二〇三

#### 第二節 地勢別人口密度……………二〇五

都 市……………二〇五

平 野……………二〇八

河川流域……………二一〇

沿海地方……………二一四

山地帯……………二一六

島嶼……………二二三

鐵道沿線……………二二六

第三節 市街地の分布……………二三一

市街地の分布……………二三一

市街地の地勢……………二三七

内地人の多い市街地……………二四四

支那人の多い市街地……………二五四

西洋人の多い市街地……………二六三

市街地の發達……………二六五

一方里當人口數府面別分類表―各府人口密度―各府接續地の人口密度―平野人口密度―河川流域人口密度―沿海地方人口密度―山地帯人口密度―面積三十方里以上あ

る面の人口密度―眞高二百メートル以上の位置に在る市街地―著名島嶼人口密度―  
 鐵道沿線人口密度―國有線運輸收入額比較表―人口三千人以上の市街地分布表―人  
 口三千人以上の市街地地勢別表―内鮮著名地緯度比較―市街地眞高表―内地人百人  
 以上在住の市街地―支那人二十人以上在住の市街地―外國人(除支那人)十人以上在住  
 の市街地―市街地人口數累年比較表

## 第四章 婚 姻……………二九一

### 第一節 結婚離婚數……………二九一

### 第二節 離婚の原因……………二九九

### 第三節 結婚年齡……………三〇九

### 第四節 内鮮人の通婚……………三二三

結婚離婚及び年末配偶數―人口一萬に對する結婚及び離婚數―現住朝鮮人一萬人に  
 對する結婚及び離婚數五箇年對照―現住朝鮮人結婚離婚數と米産額、市場取引高比  
 較―離婚原因種別件數表―朝鮮婦人本夫殺地方別表―朝鮮婦人本夫殺原因別表―朝

鮮人結婚年齢別調―内地人と朝鮮人との配偶者數

第五章 出生.....三一九

第一節 出産數及び出生率.....三一九

第二節 地方別・男女別出生率.....三三〇

第三節 月別出生・死産状態.....三五一

現住人口出産數表―現住人口出産率表―一箇年人口千人に付出生數道別調―地方別

出生率調―一箇年人口千人に付出生數三十五人以上の地方―一箇年人口千人に付出生數三十人未滿の地方―出生男百に對する女數―出生月別表―内地人出生月別調―

朝鮮人出生月別調―死産月別表―内地人死産月別調―朝鮮人死産月別調

第六章 死亡.....三六一

第一節 死亡者數.....三六一

第二節 地方別死亡率.....三六七

第三節 死亡の季節……………三八七

第四節 死亡の原因……………三九六

第五節 死亡者の年齢……………四〇六

第六節 傳染病……………四一八

第七節 自殺……………四二二

現住人口死亡數累年表—出生百に對する死亡數—人口千人に對する死亡數道別調—  
地方別死亡率調—一箇年人口千人に付死亡數二十五人以上の地方—一箇年人口千人  
に付死亡數二十人未滿の地方—死亡者月別表—内地人死亡者月別調—朝鮮人死亡者  
月別調—神經系病死亡者月別—消化器病死亡者月別—呼吸器病死亡者月別—感冒死  
亡者月別—傳染性病死亡者月別—老衰死亡者月別—内鮮外人男女別死亡者病類調—  
死亡者病類別千分比表—現住人口死亡者病類別累年表—地方病患死者表—死亡者年  
齡別—死亡者年齡別千分比—一歲未滿の死亡者累年表—一歲未滿の死亡者と出生と  
の比較—神經系病死亡者年齡別—消化器病死亡者年齡別—呼吸器病死亡者年齡別—

感冒死亡者年齢別—傳染性病死亡者年齢別—老衰死亡者年齢別—傳染病患者及び死亡者數—内鮮外人別傳染病患者對死亡者及び死亡率調—自殺者數累年比較表—自殺者地方別—自殺者月別表—自殺者因由別—自殺者方法別—自殺者年齢別—阿片癮者及びモルヒネ類中毒者調査表—農村住民の腸内寄生蟲卵調査表—各種蟲卵檢査成績—學校生徒腸内寄生蟲調査表—檢査人員に對する蟲卵保有者百分率—官公立學校生徒身體檢査表

## 第七章 人口の増減…………… 四四三

第一節 人口の自然増加…………… 四四三

第二節 移住人口の推定…………… 四四九

第三節 朝鮮人の内地移住…………… 四五五

第四節 朝鮮人の海外移住…………… 四六五

第五節 將來の人口増加…………… 四七六

人口自然増加累年表—人口自然増加道別表—人口自然増加千人に付二十二人以上の

地方—人口自然増加千人に付十人以下の地方—五年間に於ける旅客出入調—貿易船に依る旅客出入表—鐵道に依る旅客出入表—外國及び内地朝鮮間貿易船旅客港別調—新義州並上三峰に於て鐵道に依り對岸に出入せし旅客數—移住人口推定表—在内地朝鮮人累年比較表—朝鮮人内地渡航者及び歸還者數—内地在住朝鮮人戸數及び人員—在内地朝鮮人職業別人員調—朝鮮人内地渡航歸還—併合以後外國移住朝鮮人累年比較表—國外在住朝鮮人分布一覽表—人口増加總數及び増加歩合比較

## 地 圖

### 高度及び溫度圖

### 人口密度圖(十三枚)

### 内地人集團地分布圖

### 支那人集團地分布圖

### 人口千人當出生率府・郡・島別圖

### 人口千人當死亡率府・郡・島別圖

百五十萬分の一圖

圖表

職業別人口百分比

結婚離婚數と米産額市場取引額の比較

結婚及び離婚比率表

出生率比較表

出生及び死亡者數月別表

死亡率比較表

死亡者年齢及び死因別表

併合以來の人口と米産額

寫眞

慶尙道地理誌

世宗實錄地理誌

戶口總數

平壤志

松都誌

光州牧志

大丘丁酉戶籍

朝鮮に於ける支那人

東京に於ける朝鮮人

福岡縣下に於ける朝鮮人

嶺南邑誌

蔚山庚午戶籍

大阪に於ける朝鮮人

間島に於ける朝鮮人

調査資料  
第二十二輯

# 朝鮮の人口現象

朝鮮總督府囑託 善生永助 著

## 第一章 戸口の變遷

### 第一節 戸口に關する文獻

徴兵、課税、賦役の必要から、戸籍に關する調査編制は、朝鮮に於ても比較的早くより行はれて居たが、現今の如く民法上の制度として存したものでないから、兵役の忌避、租貢賦役の逋脱の爲め、その申告を偽る者が多く、従つて甚だしく不正確であつた。惟ふに李朝以前に在りては、國家統一の業未だ全からざりし爲め、全土の戸口は窺ふに由なく、斷片的に古書文記に記載されたるものはあるが、多くは一部分の記述か大雜把なる推測にして、信憑するに足るものは少ないやうである。古朝鮮の幹部を爲して居た前漢時代の樂浪郡は、その全盛時には二十五縣を領し、戸數六萬二千八百十二、人口四十萬六千七百四十八人を有し、同時代の玄菟郡は三縣、四萬五千餘戸、二十二萬餘人あり、隣接の遼東郡は十八縣を支配し、戸數五萬六千許り、人口二十七萬餘に達して居たと傳へられ、三國遺

事には、新羅の全盛時には京中の戸數十七萬八千九百三十六戸とあり、東史補遺に載する所に據ると、高麗麗の全盛時には二十一萬五百八戸、百濟の全盛時には十五萬二千二百戸と見え、新唐書には、百濟の亡びた時の戸數は七十六萬に達したとある。いづれも一地方の記録であるから、現在の面積に當て箝めてその戸口數を推測することは不可能である。高麗史食貨志の戸口條に『國制は民の年十六なるを丁と爲し始めて國役に服せしむ、六十を老と爲して役を免ず、州郡は毎歳日を計し民を籍し戸部に貢す、凡て徴兵と徴役は戸籍を以て抄定す』と、また同史刑法志の戸婚條に『戸を編するには人丁の多寡を以てし、分ちて九等と爲し、その賦役を定む、家長にして口を漏し及び年壯を増減し、課役を免るゝ者は、一口なれば徒一年、二口なれば一年半、三口なれば二年、七口なれば二年半、九口なれば三年、若し増減して課役を免るゝに非ざる者は四口を一口と爲し罪は徒一年半に止む、里正にして漏脱増減を覺らず課役を出入すること一口なれば笞四十、四口なれば五十、七口なれば杖六十、十口なれば七十、十三口なれば八十、十六口なれば九十、二十口なれば一百、三十口なれば徒一年、四十口なれば一年半、五十口なれば二年、六十口なれば二年半、若し情を知るときは家長と同じくこれを法科す』とあり、高麗國初以來戸口の調査を嚴にし、戸籍の申告を偽り、課役を免る者、及び戸籍取扱者に對する制裁の規定を設けて居るなど、制度の稍完備した跡が見えるけれど

も、その反面には戸籍の申告に虚偽の多かつたことを物語つて居る

李朝時代に及びては戸籍の制度は大に面目を一新し、戸口の調査は屢々行はれ、各時代に於ける朝鮮全土の戸數及び人口は不完全ながら略ぼ窮ひ知るを得るに至つたのである。經國大典には『每三年に戸籍を改め、本曹、漢城府、本道、本邑に藏す。

(大典通編には「本曹に籍を藏するは令廢し每式年(西の年)の翌春帳簿を江都に藏し仍て舊籍を晒す」とあり)

京外は五戸

を以て一戸と爲し統主有り、外は則ち每五統に里正有り、每一面に勸農官有り、地廣く戸多ければ則ち量加す。京は則ち每一坊に管領有り』とあり、また續大典には『式年(子午、卯酉の年)成籍の時外邑各面の監官は士夫を以て擇差す。士大夫、庶民は一に家座の次序に従ひ統を作り、移來、移居の類は元居の官、新居の官と公文相準の後接を許す、入籍したる者は戸口を成給す。入籍して戸口無き者は制書有違の律を以て論ず。戸口の字畫を塗擦し、印文を改めたる者は、盜踏六部印書の律を以て論ず。大小の推閱公事は戸口を以て現納せしめ、頭辭に載録す。京外の聽訟官若し考籍の事ありて由を具し、京兆及び該邑に移文せば元・隻共に見る處に謄示して回答し帳簿を送らず。每式年に中外の戸口實數を京兆入啓下し史官に付す』とあり、大典通編には『周禮獻民數の制に依り每歲末に中外の戸口實數を京兆入啓し史官に付す』とあるは、戸籍調査に關する規定を示したものである。燃藜室記述には、高麗恭讓王三年に、水陸軍丁に號牌を佩ばしめたることが見えて居るが、李朝でも太宗二年より號牌を用ゐさ

せることとし、續大典には、『男丁十六歳以上は號牌を佩ぶ、東・西班及び内官二品以上は牙牌を用ゐ、三品以下及び三醫司、雜科に登りたる者は角牌、生・進は黃楊木牌、流品・雜職・士庶人・書吏・郷史は小木方牌、公・私賤、假吏は大木方牌とし、京は京兆、外は各その官に於て烙印して給す、これを佩びざる者は制書有違の律を以て論じ、他人の號牌を借佩したる者は漏籍の律を以て論じ 與へたる者は杖一百徒三年、軍兵は尙ほ腰牌を用ふ』との規定を設けて居る。また戶籍法規の違反に關しては、續大典に、『戶籍を限内に上送せざる觀察使は推考し守令は罷黜す、漢城府、諸道の遠近を視て限を定め知委す』とあるを始め、漏戶者、漏丁者、漏籍者、年歳を増減したる者、虛戶者、冒錄者等に對する罰則を明細に示してある。新羅以前に於ける戶籍の制度に就いては何等徵すべき資料なく、高麗時代には三年毎に必ず戶籍を編成する制度があつたやうだが、勿論その詳細は知るに由ない。

李朝の初の戶籍制度は依然舊制に依つて居たが、成宗の時に至り、更にその制を確立したのである。子、午、卯、酉の式年毎に戶口を調査して戶籍を改むることとし、戶口式を定めたことが攻事新書に載せてある。經國大典の戶口式に據ると、戶籍記載事項は、戶主の住所、職業、姓名、年甲(生年甲子)、本貫(祖先の)、四祖(父、祖父、曾祖父、外祖父)、妻某氏の年甲、本貫、四祖。率居子女某某の年甲。女婿某の年甲、本貫。及び奴婢雇工某某の年甲等を錄することになつて居る。英祖の時に至り成籍時監官擇差の制を

定め、以て戸籍の調査を嚴にし、且つ戸主をして届出の義務を負はしたのである。建陽元年には戸口調査規則及び戸口調査細則を制定し、戸籍は毎年修正することとなり、居地を原籍と稱し各戸に戸牌を掲げしめ、居住の事實は統主及び里・洞長をして調査報告せしむる制を設け、その後幾多の變遷を経て今日に及んだが、李朝の戸口調査方針は、現在者調査に重きを置きたることを窺ふことが出来、今日の國勢調査に相近き方法が、既に行はれて居たものと見えるのである。

然しながら李朝時代の戸籍は、人民の申告を基礎としたものであるから、徴兵を逃れ、租貢賦役を免れんとして、虚偽の申告を爲した例が尠くないのみならず、行政事務の不整頓の爲め戸籍に漏脱多く、或は地方官吏が中央政府へ對する租貢の納入を私する爲め、故意に戸籍を誤魔化した例も乏しくなかつたので、戸口數の正確は期し難き憾みがあつた。正祖十三年編成の戸口總數は、李朝時代の戸口を知るに最も有力なるものであるが、試みにこの戸口總數、及び東國文獻節要、増補文獻備考、燃藁室記述、その他數種の古書を參考として、李朝五百年間の戸口表を調製し、左にこれを掲ぐることにした。左の戸口表に従へば、太祖四年の京五部を除く戸口は、十五萬三千四百三戸、三十二萬二千七百四十六人となつて居る。世宗時代より仁祖時代まで約二百年間の調査を缺き、仁祖十七年の戸口は、四十四萬一千八百二十七戸、百五十二萬一千六百六十五人となつて居るが、これ等の戸口數より判

斷するときは、勿論當時の人口數は男丁のみを計上し、女子や六十歳以上又は十六歳未滿の男子はその數に加はつて居ないやうである。それでも尙ほ當時の調査は實數の幾割かに止まり、全部に及んで居らぬやうに思はれる。顯宗十年の戸口數、百三十一萬三千六百五十二戸、五百一萬八千七百四十四人は、その前後の計數に比較して調査が稍一般的になつたことを想像される。

戸口記録の多いのは、肅宗時代の十六回、英祖時代の十七回にして、男女別の調査の行はれたのは正祖時代である。當時は男の數よりも女の數の方が遙かに多いが、これは徵兵賦役を免るゝ爲めに多少男の數の届出を偽つて居るやうに思はれる。即ち正祖十三年の戸口表に據ると、百七十五萬二千八百三十七戸、男三百六十萬七千三百七十六人、女三百七十九萬七千二百三十人とあり、總數に於ては女の數が男の數より十八萬八千八百五十四人多いことになつて居るが、漢城五部、京畿、原春道（今の江原道）、黃海道の如き、中央政府の權力の最も能く及んで居る所では、男の數が女の數より多いに反し、地方に行くに従つて女の數の多いのは、その記録に疑ひを挾む餘地がある。

## 李朝五百年間の戸口表

朝鮮年	西曆年代	戸數	人口數	備考
太祖四年	洪武乙亥	一三,五五〇	一五,三〇三	京五部の調査を缺く文献備考には太宗四年とあり
太廟六年	洪武丁丑	一三,九七〇	一八,〇二四	右 同 文献備考には太宗六年とあり
			三七〇,三六五	

世宗十年	宣	丙午	一四六	(一六九二)	(一〇三三八)
仁祖十七年	崇德	己卯	一六三九	四四一、八二七	一五二、二六五
仁祖二十年	崇德	壬午	一六四二	四八二、六六〇	一六四九〇二
仁祖二十三年	順治	乙酉	一六四五	五〇五、九一一	一七三八、八八八
仁祖二十六年	順治	戊子	一六四八	四四一、八二七	一五二、一六五
孝宗二年	順治	辛卯	一六五一	五八〇、五三九	一、八六〇、四八四
孝宗五年	順治	甲午	一六五四	六二八、六〇三	二〇、四七三六一
孝宗八年	順治	丁酉	一六五七	六六八、七七七	二二〇、一〇九八
顯宗元年	順治	庚子	一六六〇	七五八、四一七	二四七、九六八
顯宗四年	康熙	癸卯	一六六三	八〇九、三六五	二八五、一九一
顯宗七年	康熙	丙午	一六六六	一、〇八、三五二	四、一〇七、一五六
顯宗十年	康熙	己酉	一六六九	一、三二、三五二	五、〇二八、七四四
顯宗十三年	康熙	壬子	一六七二	一、一五、八六六	四七、〇八一五
肅宗元年	康熙	乙卯	一六七五	一、一五〇、二九八	四七、五七〇四
肅宗四年	康熙	戊午	一六七八	一、三三、四四六	五、八七三、二二七
肅宗七年	康熙	辛酉	一七八一	一、三七六、八四二	六、二八三、四四二
肅宗十年	康熙	甲子	一七八四	一、四四三、七七七	六、五七三、一〇七
肅宗十三年	康熙	丁卯	一七八七	一、四六八、五二七	六、七六九、七三三

八道の調査を缺く

増補文獻備考には戸數四四一、三二一  
人口一、五三一、三六五とあり

増補文獻備考には戸數六五八、七七一  
人口二、二九〇、〇八三とあり

増補文獻備考には戸數一、三一三、四五三  
人口五、〇一八、六四四とあり

増補文獻備考には戸數一、三四二、四二八  
人口五、二四六、九七二とあり

朝鮮の人口現象

英祖十七年	英祖十四年	英祖十一年	英祖八年	英祖五年	英祖二年	景宗三年	肅宗四十七年	肅宗四十三年	肅宗四十年	肅宗三十七年	肅宗三十四年	肅宗三十一年	肅宗二十八年	肅宗二十五年	肅宗二十二年	肅宗十九年	肅宗十六年
隆辛酉	乾隆戊午	正乙卯	正壬子	正己酉	正丙午	正癸卯	康熙庚子	康熙丁酉	康熙甲午	康熙辛卯	康熙戊子	康熙乙酉	康熙壬午	康熙己卯	康熙丙子	康熙癸酉	康熙庚子
一、七四一	一、七三八	一、七三五	一、七三三	一、七二九	一、七二六	一、七二三	一、七二二	一、七二七	一、七二四	一、七二一	一、七〇八	一、七〇五	一、七〇一	一、六九九	一、六九六	一、六九三	一、六九〇
一、六八五、八八四	一、六七二、一八四	一、六八一、七七一	一、七二三、八四九	一、六六三、二四五	一、六六四、五九八	一、五七五、九六六	一、五五九、四八八	一、五六〇、七三四	一、五〇四、四八三	一、四六六、二四五	一、四〇六、六一〇	一、三七〇、三三三	一、三四二、四八六	一、三三三、三三〇	一、二〇〇、一四五	一、五四七、三三七	一、五二四、〇〇〇
七、一九二、八四八	七、〇九六、五六五	六、八八二、〇四二	七、二七三、四四六	七、一三一、五五三	六、九九五、四〇〇	六、八六五、四〇四	六、七九九、〇九七	六、七八八、七八九	六、六六二、一七五	六、三九四、〇二八	六、二〇六、五五四	六、〇六二、九五二	五、九三二、五二〇	五、七七四、七三九	五、二〇八、五〇〇	七、〇四五、一一五	六、九五二、九〇七

平安、咸鏡兩道は凶年の爲め調査を缺く

増補文獻備考には戸數一、五六〇、五六一  
人口六、八四六、五六八とあり

増補文獻備考には戸數一、五七四、〇六六  
人口六、八六五、二八六とあり  
増補文獻備考には戸數一、五七六、五九八  
人口七、三〇二、四二五とあり

第一章 戸口の變遷

英祖二十年	乾甲子	一、七四四	一、七四九六二	七、二〇九二三	
英祖二十三年	乾丁卯	一、七四七	一、七五九六九	七、三四〇、三八	
英祖二十六年	庚午	一、七五〇	一、七八三、〇四四	七、三三八、六七	
英祖二十九年	乾癸酉	一、七五三	一、七七二、七四九	七、二九八、七三五	増補文獻備考には人口七、二九八、七三一とあり
英祖三十二年	隆丙子	一、七五六	一、七七二、三四九	七、三二八、三五九	
英祖三十五年	乾己卯	一、七五九	一、六九〇、七一五	六、九六八、八五六	
英祖三十八年	隆壬午	一、七六二	一、六九一、〇四〇	六、九八一、五九八	
英祖四十一年	隆乙酉	一、七六五	一、六七五、二六七	六、九七四、六四二	
英祖四十四年	乾戊子	一、七六八	一、六七九、八六五	七、〇〇六、二四八	
英祖四十七年	隆辛卯	一、七七一	一、六八九、〇四六	七、〇一六、三七〇	
英祖五十年	隆甲午	一、七七四	一、七〇三、〇三〇	七、〇九八、四四一	
正祖元年	乾丁酉	一、七七七	一、七二五、三七一	七、三三八、五二三	内男三、五三七、七八六、増補文獻備考には人口七、二 内女三、七〇〇、七七七、三八、五二二とあり
正祖四年	隆庚子	一、七八〇	一、七二四、五五〇	七、三三八、〇七六	内男三、四九八、〇三六 内女三、七三四、〇〇〇
正祖七年	乾癸卯	一、七八三	一、七三三、七五七	七、三二六、九二四	内男三、五三六、六八五 内女三、七五三、三三九
正祖十年	隆丙午	一、七八六	一、七四〇、九九二	七、三三〇、九六五	内男三、五七六、五四一、増補文獻備考には戸數一、七三七 内女三、七五四、四五二、六七〇、人口七、三五六、七八三とあり
正祖十三年	乾己酉	一、七八九	一、七五二、八三七	七、三三三、六〇六	
純祖七年	丁卯	一、八〇七	一、七六四、五〇四	七、五六一、四〇三	
憲宗三年	丁酉	一、八三七	一、五九一、九六三	六、七〇八、五二九	

哲宗三年壬子	一、八五二	一、五八八、八七五	六、八二〇、二〇六
李太王元年甲子	一、八六四	一、七〇三、四五〇	六、八二八、五二一
光武八年甲辰	一、九〇四	一、四一九、八九九	五、九二八、八〇二

### 第二節 道別戸口の消長

更に増補文獻備考の記載に據りて、李朝各時代の道別戸口を見ると左表の如くなつて居る。而してこの年代及び計數と、正祖十三年の編成に係る戸口總數の年代及び計數には多少相違の點がある。

太宗四年各道戸口數 (西曆紀元一、四〇四年)

忠清道	一九、五六一	四四、四七六
全羅道	一五、七〇三	三九、一五一
慶尙道	四八、九九一	九八、九一五
豐海道	一四、一七〇	二九、四〇一
江原道	一五、八七九	二九、二三八
東北面	一一、三一—	二八、六九三
西北面	二七、七八八	五二、八七二

都計

一五三四〇三

三二二、七四六

備考 豊海道は現今の黄海道なり、東北面は現今の咸鏡南北道、西北面は現今の平安南北道なり

太宗六年諸道戸丁數 (西曆紀元一、四〇六年)

京畿左道 一〇、七三九 戶 一九、三一九 丁

京畿右道 九、九九一 一八、八一九

忠清道 一九、五六〇 四四、四七六

慶尙道 四八、九九三 九八、九一五

全羅道 一五、七一四 三九、一六七

豊海道 一四、一七〇 二九、四四一

江原道 一五、八七九 二九、二二四

東北面 一一、三一 二八、六八三

西北面 三三、八九〇 六二、三二一

都計 一八〇、二四六 三七〇、三六五

備考 京畿左道は現今の京畿道の大部及び江原道の一部を含む、京畿右道は現今の京畿道及び黄海道各一部を含む

仁祖二十五年戊子式京外戸口 (西曆紀元一、六四八年)

京五部 一〇、〇六六 戶 九五、五六九 口

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

一二

京畿道	二六、〇四三	八一、二四四
忠清道	六七、六二四	一七四、〇五二
全羅道	一二二、六五九	四三一、八三七
慶尙道	一一五、一二五	四二四、五七二
黃海道	二四、六八七	五四、九二七
江原道	一〇、六六〇	五四、〇〇三
平安道	三九、九二七	一四五、八一三
咸鏡道	二四、五三〇	六九、三四八
計	四四一、三二一	一、五三一、三六五

京五部	一五、七六〇	八〇、五七二
京畿道	四二、〇五〇	一三二、九四七
忠清道	九七、五五二	二八六、五九一
全羅道	一五九、四九六	五二二、〇三三
慶尙道	一九四、二九八	七六三、二九二
黃海道	四五、二二〇	一三七、九三九
江原道	一六、五七三	七二、一五七
平安道	五五、六二三	一八四、七九九

孝宗八年丁酉式京外戸口 (西曆紀元一、六五七年)

咸鏡道 三二、一九九  
 計 六五八、七七一  
 一〇九、七五三  
 二、二九〇、〇八三

顯宗十年己酉式京外戶口 (西曆紀元一、六六九年)

京	五	部	二二、八九九	戶	一九四、〇三〇
京	畿	道	一二〇、〇五八		五四六、二三七
忠	清	道	一七〇、八一四		五九五、〇三〇
全	羅	道	二六三、二〇六		九七三、三七一
慶	尙	道	三六〇、四九七		一、一七三、九四一
黃	海	道	九四、八一五		三六〇、八二九
江	原	道	四五、三一五		一八五、七七〇
平	安	道	一七七、九一二		七二〇、三九一
咸	鏡	道	五六、九三七		二六九、〇四五
都		計	一、三一三、四五三		五、〇一八、六四四

肅宗四年戊午式京外戶口 (西曆紀元一、六七八年)

京	五	部	二二、七四〇	戶	一六七、四〇六
京	畿	道	一二〇、五二八		五五四、一三二
忠	清	道	一八九、四三九		七一四、二〇四

第一章 戶口の變遷

朝鮮の人口現象

全羅道	二五六、一五八	一、〇〇〇、〇〇四
尙海道	三六九、一七五	一、〇〇五、三二八
黃海道	一〇五、四六八	四五五、〇八〇
江原道	五六、三〇三	二七〇、五一七
平安道	一五〇、六八九	七〇六、六七五
咸鏡道	七一、九二八	三七三、六二六
計	一、三四二、四二八	五、二四六、九七二

肅宗四十三年丁酉式京外戸口 (西曆紀元一、七一七年)

京畿道	二八、三五六	一八五、八七二
忠清道	一二六、六六八	五六六、一二〇
全羅道	二二二、一六五	八四六、一〇〇
慶尙道	二八五、〇二四	一、一〇一、六四一
黃海道	四七三、五九五	二、一六五、七三六
江原道	一一六、四四九	四一〇、四六四
平安道	六四、一九〇	二七七、八八一
咸鏡道	一六七、七四九	七六三、三四〇
計	一、五六〇、五六一	五二九、四一四
計	一、五六〇、五六一	六、八四六、五六八

景宗三年癸卯式京外戸口 (西曆紀元一、七二三年)

京	忠	全	慶	黃	江	平	咸	都
畿	清	羅	尙	海	原	安	鏡	
道	道	道	道	道	道	道	道	計
二五、八四四	一二七、八七三	二二〇、八七六	二九〇、七九七	四四九、一三四	一一九、二五三	七三、九一四	一七四、三七三	一、五七四、〇六六
戸								
九〇、〇二二								
一四七、七七二	五六三、一八五	八九五、三七六	一、〇九七、八四六	二、二三三、五四三	四一九、五四四	二八一、三七四	七九一、九一八	四三四、七二八
口								六、八六五、二八六

英祖二年丙午式京外戸口 (西曆紀元一、七二六年)

京	忠	全	慶	黃
畿	清	羅	尙	海
道	道	道	道	道
部				
三二、七四七	一二七、三六八	二二五、三二八	二八一、五五四	四四一、二七八
戸				
一八八、五九七	五五九、五九八	九一一、二〇二	一、一〇五、二四九	二、二四三、二五二
口				四六八、七一六

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

江原道	七三、〇一四	二九〇、二六三
平安道	一七二、七二〇	七三四、九四四
咸鏡道	九五、二一四	五三〇、六〇四
計	一、五七六、五九八	七、〇三二、四二五

英祖二十九年癸酉式京外戸口 (西曆紀元一、七五三年)

京畿道	三四、九五三	一七四、二〇三
京五部	一五七、二三六	六四二、〇一二
忠清道	二三五、四三二	九三一、一七〇
全羅道	三二六、九二四	一、一九二、九五〇
慶尙道	三九二、二九七	一、六六二、二五三
黃海道	一三九、五八七	五四〇、三四九
江原道	九〇、八一四	三九〇、六四〇
平安道	二九七、六〇三	一、二六七、七〇九
咸鏡道	九八、四四三	四九七、四四六
計	一、七七二、七四九	七、二九八、七三一

正祖元年丁酉式京外戸口 (西曆紀元一、七七七年)

京五部	三八、五九三	一九七、九五七
-----	--------	---------

京都	忠清道	全羅道	慶尙道	黃海道	江原道	平安道	咸鏡道	都
----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---

計

一四九、七七一	二二二、六六五	三一五、〇七三	三六二、一三一	一三四、六八六	八三、七四九	二九六、四三三	一一二、二七〇	一、七一五、三七一
六〇七、二五二	八七〇、八一七	一、一八九、七七八	一、五六八、八八〇	五四九、四七六	三四〇、八一四	一、二七四、四〇五	六三九、一四八	七、二三八、五二二

正祖十年丙午式京外戸口 (西曆紀元一、七八六年)

京畿道	京畿道	忠清道	全羅道	慶尙道	黃海道	江原道	平安道	都
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	---

第一章 戸口の變遷

五二、七八六	一五七、二七〇	二二〇、三八八	三一八、四一七	三六二、七九九	一三六、二四八	八〇、四八七	二九九、五二三	一九九、一二七	六三七、四八二	八六四、八八七	一、二二一、二七七	一、五八八、六二四	五六四、七三四	三二五、八〇四	一、二八八、三九九
--------	---------	---------	---------	---------	---------	--------	---------	---------	---------	---------	-----------	-----------	---------	---------	-----------

朝鮮の人口現象

一八

咸鏡道	一一九、七五二	六六六、四四九
都計	一、七三七、六七〇	七、三五六、七八三

純祖七年丁卯式京外戸口 (西曆紀元一、八〇七年)

京畿道	四、五七、七〇七	二〇四、八八六
公忠道	一六四、三五一	六七四、六二七
全羅道	二二四、六〇七	八九二、七四七
慶尙道	三二〇、九九〇	一、二五一、〇六九
黃海道	三六五、〇五三	一、六〇七、〇四四
江原道	一三六、〇四六	五八二、九三〇
平安道	八二、三二一	三三六、一二二
咸鏡道	三〇二、〇〇五	一、三〇五、九六九
都計	一二四、四二四	七〇六、〇一二
備考	一、七六四、五〇四	七、五六一、四〇三

憲宗三年丁酉式京外戸口 (西曆紀元一、八三七年)

京畿道	四、五、六四〇	二〇三、九二五
公忠道	一五六、七六七	六五七、六八〇
全羅道	二二〇、八六二	八四六、一一三

全	慶	黃	江	平	咸	濟	都
羅	尚	海	原	安	鏡	州	
道	道	道	道	道	道	牧	
二六四、一〇二	三五四、五八〇	一二六、二九八	七九、七八九	二一四、九七六	一一八、一五二	一〇、七九九	計
一、〇一六、七四四	一、五〇〇、六四四	五四六、八〇七	三一八、三八三	八五三、〇四八	六八九、八一七	七五、八五八	一、五九一、九六三
							六、七〇八、五二九

哲宗三年壬子式京外戸口 (西曆紀元一、八五二年)

京	京	忠	全	慶	黃	江	平	咸
畿	畿	清	羅	尚	海	原	安	鏡
部	道	道	道	道	道	道	道	道
四五、六七八	一五八、〇〇〇	二二二、九三三	二七二、五六七	三五五、一七三	一一〇、〇八四	七九、九六一	二一七、一四一	一一七、三三八
二〇四、〇五三	六七二、六〇三	八八〇、五四九	一、〇六八、一七一	一、五三五、八一〇	六七二、六〇三	三二四、四八八	八六八、九〇六	六九一、六五五
戸								
口								

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

二〇

都 計 一、五八八、八七五

六、八一〇、二〇六

李太王元年甲子式京外戸口 (西曆紀元一、八六四年)

京	五	部	四六、五六五	二〇二、六三九
京	畿	道	一五八、〇九一	六七四、三九九
公	忠	道	二二三、五一四	八七九、〇四〇
全	羅	道	二六〇、九八二	九九六、八一四
慶	尙	道	三五七、四三〇	一、五二一、二七三
黃	海	道	一二八、三五七	五六七、八五二
江	原	道	八一、二三〇	三三二、一七三
平	安	道	二一七、五七七	八七二、八二五
咸	鏡	道	一一八、八一五	六九五、七二八
濟	州	牧	一一、八八七	八五、七七八
都	計		一、七〇三、四五〇	六、八二八、五二一

光武八年甲辰京外戸口 (西曆紀元一、九〇四年)

京	五	署	四二、七三〇	一九二、三〇四
京	畿	道	一七〇、四二四	六七二、六三六
忠	北	道	七六、八七七	三〇〇、三四五
忠	南	道	一二四、三七〇	四七四、三一二

全羅北道	一一〇、八三五	四四〇、九〇一
全羅南道	一二四、三一〇	四九〇、〇五四
慶尙北道	一六一、五二二	六〇一、一六三
慶尙南道	一三一、四八七	五〇九、九六七
江原道	八二、一五四	三〇一、八八五
黃海道	九六、四六六	三八二、二三〇
平安南道	九七、三三二	三九二、二七二
平安北道	九七、五三四	四二〇、七二五
咸鏡南道	五八、九二八	四五〇、六九三
咸鏡北道	四四、九三〇	二九九、三一五
計	一、四一九、八九九	五、九二八、八〇二

これを要するに、増補文獻備考の記載に據ると、李朝の戸口數は、太宗四年の十五萬三千四百三十八戸、三十二萬二千七百四十六人を最少とし、その後次第に増加し、顯宗十年には百三十一萬三千四百五十三戸、五百一萬八千六百四十四人となり、時に多少戸口數の消長はあつたが、純祖七年には百七十六萬四千五百四戸、七百五十六萬一千四百三人に増加し、その後却つて戸口數の減少を來し、光武八年には、百四十一萬九千八百九十戸、五百九十二萬八千八百二人となつて居る。右の戸口調査も決して正確なものでなく、その戸口數の脱漏も尠くなかつたであらうが、概してこの間の戸口増加率は

甚だ低くかつたものゝやうに思はれる。即ち李朝時代には、半島の地は屢々外敵の侵略を受け、兵火の爲めに家屋を焼かれたり、戦死したる者も多く、または捕虜として多數の人民を奪ひ去られた事實もあり、且つ國內に饑饉の起つたり、疫病の流行したことも稀れでなかつたから、年に依り人口の著しく減少した例は多いのである。加ふるに歴代秕政の結果、中央政府も地方廳も苛斂誅求を事とし、それが爲めに、國勢弛廢を極め、民力疲弊して、國民の生活は甚だしく困難に陥り、延いて全鮮に於ける戸口の増加を妨げたことは頗る大であつたと信ずる。

### 第三節 世宗時代の戸口

李朝に於ける各時代の戸口消長を究めることは、朝鮮の人文研究上極めて興味が多いが、私は先づ李朝初期に属する世宗時代に就いて、府・牧・郡・縣といふやうに、各地方別の戸口状態を精密に觀察して見たい。勿論朝鮮の古書には、數字に關する記録の信憑するに足るものが少く、殊に戸口や結數には、徵稅、貢租、賦役の關係上、脱漏隱蔽が行はれて居たので、正確なる數字を捕捉することは一層困難であるが、李朝に於ける最初の地方別戸口記録たる「世宗實錄」中の地理誌、及び「慶尙道地理誌」に記載されて居る戸口計數は詳細を極め、この種の文獻としては甚だ貴重なるものである。「慶

尙道地理誌」は李朝最古の地理書に係り、世宗六年甲辰(西曆一、四二四年、稱光天皇の應永三十一年)及び世宗七年乙巳(西曆一、四二五年、後土御門天皇の應永三十二年)各道に命じて編纂せしめた地理誌の一であるが、現に傳はつて居るものは、この「慶尙道地理誌」のみで、他道のものは散逸してしまつて一も存しないのである。「世宗實錄」中の地理誌は、「慶尙道地理誌」と共に編纂せられた、各道の地理誌を基礎として、端宗二年甲戌(西曆一、四五四年、後鄭麟趾等の撰修したもので、前者が南鮮の一道のみの記録たるに反し、後者は全鮮の各道を網羅して居る點が異なつて居るけれども、その内容は殆んど相似て居る。先づ「慶尙道地理誌」に據りて、當時の行政區劃と各地方の戸口數を示して見やう。)の行政區劃と各地方の戸口數を示して見やう。

### 慶尙道の行政區劃

留守府一 慶州

大都護府一 安東

牧三 尙州、晉州、星州

都護府六 金海、寧海、順興、昌原、密陽、善山

郡十五 梁山、陝川、蔚山、醴泉、榮川、永川、清道、咸安、草溪、興海、咸陽、金山

大丘、昆南、青松

縣 四 十 義城、盈德、慶山、東萊、固城、巨濟、高靈、開寧、昌寧、彥陽、咸昌、龍宮

泗川、居昌、禮安、河陽、河東、機張、長鬐、靈山、珍城、基川、仁同、

玄風、奉化、義興、新寧、迎日、開慶、漆原、軍威、山陰、安陰、知禮、

清河、三嘉、宜寧、鎮海、眞寶、比安

慶 尙 道 戶 口

道内時居四萬一千三百二十戶

人丁十九萬一千七百十九 内

別牌八百十六、奉足三千九百四十七、侍衛二千二百二十、奉足七千八百九十五、營鎮屬二千

二百六十、奉足六千七百七、守城軍一千二百二十三、奉足二千三百六十二、騎船一萬五千九

百四十一、奉足三萬六千七十一、兵船二百七十五隻、雜色一萬六千五百七十四、奉足四萬

七千四百六十二上京從仕各品員人老弱合五萬一千九百四十

慶 尙 道 戶 口 數

地 區 方 別	慶 州	戶 數	男	女	計
		一、五五二	五、八九四	六、三三六	一一、三三〇

昌 東 慶 解 河 壽 大 興 清 蔚 東 梁 豐 守 密 慈 神 杞 安

塞 萊 山 顏 濱 城 丘 海 道 山 平 山 角 山 陽 仁 武 溪 康

第一章 戸口の變遷

八二五	二九〇	三二八	一九八	三五二	二六四	四三六	四三三	六四〇	一,〇五八	一〇八	四二五	二九四	九三	一,六一二	二二七	九五	一七七	二七一
四,三五一	一,一五一	一,三七一	一,一〇九	一,二四九	六四四	一,三一九	一,八八五	三,三六一	四,一六一	三四一	九三七	九〇七	一五六	五,五三三	一,〇〇六	四四八	四九一	一,四五〇
四,五七三	一,二六五	一,一七一	一,四三八	八二八	七〇四	一,二二四	二,一五一	三,三三七	四,一八二	二八五	八九一	一,〇七四	三三二	五,五六四	一,三三〇	四六九	五七	一,五二二
八九三五	二四二六	三,〇四九	二六六一	二,〇六七	一,三四八	二,五五三	四,〇三六	六,七七八	八,三四三	六三七	一,七八六	一,九八一	六七八	一一,〇八六	二,三三六	九二七	一,〇二八	二,九八一

朝鮮の人口現象

青	英	寧	才	春	奈	甘	吉	一	豐	臨	安	清	迎	玄	桂	靈	長	嶺
杞	陽	海	山	陽	城	泉	安	直	山	河	東	河	日	風	城	山	響	張
二九	四〇	二二五	三三	四二	八三	一六一	四四	七二	二八二	三三	八四七	二三五	四二七	四七七	二二四	二五七	二〇三	一七四
二三四	四八一	一,五三八	一五七	一〇五	三七一	五二四	一六三	八二	一,〇一九	一,九〇五	三,三三〇	七四	一,七四二	一,八七一	九七	一,三三四	八三	三九七
二三八	五四五	一,八六一	一五七	一〇一	六六〇	五二六	一九四	八九	一,一九五	一,三二三	三,五三九	四八五	一,八八六	三,〇六八	九四〇	一,一九一	九三	六二〇
四六二	一,〇二六	三,三九九	三三四	二〇六	一,〇二二	一,〇五〇	五五七	一七三	二,二三四	三,二二八	六,八五九	一,一〇九	三,六八六	四,九三九	一,九二二	二,三三六	一,七三六	一,〇一七

率 若 仁 股 基 率 河 宜 禮 盈 義 安 松 青 永 榮 多 醴 順

第一章 戶口の變遷

化	木	同	豐	川	安	陽	仁	安	德	城	德	生	松	川	川	仁	泉	興
二四三	三七	三三〇	七五	一六〇	四八	一七七	九九	一七四	二八六	六三七	四八	五〇	三六	八六三	三七七	三二一	七八一	二八四
四七二	一,〇六一	一,〇六六	三〇七	七〇九	二四六	一,〇八七	三三九	七四九	一,一一〇	一九五五	二五五	三四三	二二五	三,六七一	三,〇八七	一,四三七	三,八〇〇	一,六七九
六八七	一,一四八	一,二二五	三三二	八〇二	二八四	一,〇六九	三〇八	六九六	九七二	二,一四七	二五四	三六四	一五八	四,四三二	二,八二五	一,九九五	四,三九一	一,九二〇
一,一六〇	二,二五〇	二,三〇一	六一九	一,五一一	五三〇	二,二五六	六二七	一,四四五	二,〇八二	四,一〇一	五〇九	七〇七	三七三	八,一〇四	五,九〇二	三,四三三	八,一九一	三,五九九

朝鮮の人口現象

義興	三〇七	九五五	一,二五〇	二,〇〇五
新寧	一二七	四七九	七〇八	一,一八七
利寧	三八二	一,三〇一	一,三六九	二,六七〇
眞寶	八八	一九八	二二二	四一〇
比安	七八	五二六	四六八	九九四
安貞	二六六	一,二〇三	一,〇〇六	二,二〇八
尙州	一九七	八七〇	九九九	一,八六九
中牟	一〇九	一五〇	六七二	八三三
青里	五四	三〇七	三三三	六二九
丹密	一四〇	七〇〇	七五五	一,四三五
山陽	一一二	六六七	六七二	一,三三九
功城	一一〇	六三〇	六四九	一,二七九
化寧	一一九	五五七	五六九	一,一三六
永順	一三三	一三三	一四一	二七三
星州	一,四七九	五,八〇七	六,〇〇七	一,一八二四
加利	二九九	九二四	九四八	一,八七二
花園	三三二	一,三六一	一,四九〇	二,八五一
八莒	三四七	一,四八一	一,五三九	三,〇二〇

岳 永 班 晋 知 孝 軍 加 開 龍 咸 開 高 金 草 任 陝 海 善

第一章

陽 善 城 州 禮 令 威 恩 慶 宮 昌 寧 靈 山 溪 內 川 平 山

戸口の變遷

岳	永	班	晋	知	孝	軍	加	開	龍	咸	開	高	金	草	任	陝	海	善
陽	善	城	州	禮	令	威	恩	慶	宮	昌	寧	靈	山	溪	內	川	平	山
一六一	二五四	二七七	一,六二八	二二〇	一〇六	二八四	一〇五	一六一	三九六	三六八	五三二	二八七	五三三	四六三	二三七	四六四	一九六	八〇九
一八一	七四八	六八七	五,九〇六	一,一〇〇	三七五	六七七	七二〇	一,〇六五	二,二二五	二,一四〇	二,三五九	一,七三三	三,〇六四	二,五三七	八四三	一,五一七	一,三八九	四,三二八
一九六	七四	七三	六,〇三九	一,三〇〇	三七八	一,二四七	八〇六	一,四九九	二,四二〇	二,三七二	二,四七八	二,〇五九	二,四四七	二,六四五	六六三	一,四一七	一,四八八	四,九一八
三七七	一,五三三	一,四一〇	一,一九四五	二,五〇〇	七五三	一,八二四	一,五二六	二,五六四	四,五四五	四,五二三	四,八三七	三,七八一	五,一一一	五,一八二	一,五〇五	二,九三四	二,八七七	九,一三六

朝鮮の人口現象

金	海	一、二九〇	六、六四三	七、三三〇	一、三八七
熊	神	六三三	三、一八	三、三三	六四一
莞	浦	三七	一、七九	一、五三	三三三
昌	原	九四四	四、〇六六	四、二二二	八、二七八
會	原	一五〇	八八九	一、〇六	一、九二五
咸	安	七三三	三、二六	三、四二二	六、六八七
咸	陽	四二八	一、九四八	一、九八一	三、九三九
昆	南	二一〇	一、三三九	一、八三三	三、〇六二
南	海	六一	七	一〇〇	一七一
固	城	五三一	二、八八五	二、八三三	五、七二八
巨	濟	二二三	四、三三	五、三	九四五
泗	川	三七〇	一、八一七	一、五六九	三、三六六
居	昌	五〇五	一、六四〇	一、五二〇	三、一五〇
河	東	三四六	一、二〇八	一、〇五二	二、二六〇
珍	城	二三四	八七二	不明	不明

當時の慶尙道は大體現今の慶尙南北道を包含し、朝鮮中で最も文化の進み、經濟力の發達した、また人口密度も高い地方で、殊に古來日本と密接な關係のあつた所であるから、これを今日と比較して見ると頗る興味が深い。勿論右の戸口記録がどの程度まで信賴し得るかは斷言出來ぬが、右の數字中

最も注目すべきは、男の數よりも女の數の遙かに多いこと、一戸當りの人口數が甚だ多いことである。男の數よりも女の數の多いことは、徵兵、課税、賦役の關係上、虚偽の申告を爲した結果であると思ふが、一戸當りの人口數の多いことは、榮川の十五人七分、河陽の十二人二分、善山の十一人三分、昌寧・金海・固城の十人八分、清道・醴泉の十人五分、玄風の十人四分、東萊の八人三分、慶州蔚山の七人九分、晋州の七人三分、大丘の五人八分などを見ても、當時に於ける大家族制度の片鱗は窺ふことが出来やう。尙ほ参考の爲め同誌中より戸口の分布と密接の關係ある、道内の土地の肥瘠、水泉の深淺、風氣の寒暖、民俗の所尙に就いての記述を見ると、「道内俗尙。大槩重禮讓。崇質儉。崇文好武。務農桑不事工商。繁華富庶。伸諸他道。名門右族滿於□□」とあり、各地方を左の如く分類して居るが、斯くの如き觀察は、人文と經濟の研究上にも、亦有力なる資料であると思ふ。

道内各官土地肥瘠、水泉深淺、風氣寒暖、民俗所尙

地方名	地質	水泉	風氣	民俗所尙
慶州	肥瘠相半	深	暖	淳儉、力農、好學
安東	瘠	淺	寒	務農桑、重禮讓且節用
尙州	肥瘠相半	深	暖	簡樸、好學問
晋州	肥	淺	同	強敏、富麗、崇文、好武

全 咸 興 草 咸 清 永 榮 體 蔚 陝 梁 善 密 昌 順 寧 金 星

山 陽 海 溪 安 道 川 川 泉 山 川 山 山 陽 原 興 海 海 州

同 肥 同 肥 肥 同 肥 瘠 肥 肥 肥 同 同 同 肥 瘠 肥 同 同  
瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠  
相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相  
半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半

淺 深 同 同 同 同 同 淺 同 深 同 同 同 深 同 同 淺 同 深

暖 寒 同 同 同 同 暖 寒 同 暖 同 同 同 同 暖 寒 同 同 同

華麗、崇文、好文、好武、善女功  
強簡、力農、好學  
武藝、好歌舞  
勤儉  
蠱暴、爭訟、力農  
力農、好學、然好鬪爭  
華麗好學問  
強戾、力農  
儉率、力農  
武藝、好商賈  
平易  
儉率、務蠶桑  
平易、好學問  
儉率、務蠶桑  
儉率  
儉率、力農  
武藝  
謙恩、力農  
華麗、力農、善女功

河 禮 居 潤 龍 成 彦 昌 開 高 巨 固 東 慶 盈 義 青 昆 大

第一章

陽 安 昌 川 宮 昌 陽 寧 寧 靈 濟 城 萊 山 德 城 松 南 丘

戸口の變遷

肥 瘠 同 肥 瘠 肥 肥 肥 肥 肥 肥 肥 瘠 肥 同 瘠 肥 肥  
瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠  
相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相  
半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半

同 同 淺 同 深 同 同 淺 淺 淺 深 淺 深 同 同 同 同 同 同

暖 寒 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 暖 同 寒 同 同

儉率 節儉、務蠶桑 強狼 武藝 和陸 強畜 強儉、力農 氣慨、好學問 侈靡、力農 強武、力農 同 儉率 恭儉 儉率 武藝 儉率、務蠶桑 同 儉率 儉率、務蠶桑

清 知 安 山 軍 柴 開 迎 新 義 奉 玄 仁 基 珍 靈 長 機 河

河 禮 陰 陰 威 原 慶 日 寧 興 化 風 同 川 城 山 髻 張 東

瘠 同 肥 肥 瘠 肥 瘠 肥 同 肥 瘠 同 肥 瘠 肥 肥 瘠 同 肥  
瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠 瘠  
相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相 相  
半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半 半

同 淺 深 同 同 淺 淺 深 同 同 同 淺 深 同 淺 深 淺 同 深

暖 同 同 寒 同 暖 寒 同 同 暖 寒 同 暖 寒 同 同 同 同 同

武 儉 強 簡 同 儉 同 同 儉 鈍 節 儉 儉 強 強 平 強 武 同  
囊 率 擇、好鬪爭 質 率 朴 儉、務蠶桑 蓄 率、務蠶桑 狼 武 易 擇 藝 同

朝鮮の人口現象

三	嘉	肥	同	同	同	強擇
宜	寧	同	同	同	同	同
銀	海	肥瘠相半	同	同	同	儉率
眞	寶	瘠	同	寒	同	同
比	安	肥瘠相半	深	暖	愚頑	

「世宗實錄」は「慶尙道地理誌」にあくれること約三十年の後に編纂されたもので、その戸口の部には、八域の戸數及び人口數が左表の如く地方別に記載されて居る。試みにこれを前に掲げた「慶尙道地理誌」と對照して見ると、戸數は二者殆んど同一であるから、後者は前者と同時に編纂された、各道地理誌の戸口數を基礎として居ることが確められるが、只人口數に於ては「慶尙道地理誌」が男女を擧げて居るに反し、「世宗實錄」中の地理誌には男のみを擧げ、女を除外して居ることは閑却してはならぬ點である。「世宗實錄」には、徵兵、課税、賦役の必要から、これに關係なき女の人口數は一切記述の外に置いたのであらうが、斯かる例は李朝時代の戸口調査に屢々行はれたことで敢て珍らしくないのである。現在では散逸してしまつたので斷言は出来ないが、惟ふに「慶尙道地理誌」と同時に編纂された各道地理誌には、男のみならず女の人口數をも記載してあつたであらう。然るにこれを基礎として編纂した「世宗實錄」の方には、男の數のみを掲げて女の數を除外したことは、一面より

見るときは、中央と地方との人民に對する觀念の相違とも解されぬでもない。而して斯かる事例が李朝の各時代を通じて非常に多いことは、人民の膏血を搾取するに汲々として居た、當時の中央政府の財政状態を想像することが出来る。然しながら戸口記録を以て、單に人民の負擔力を測定するの基準とするやうでは、その政治が勢ひ苛斂誅求に陥り、上の行ふ所下これに倣ひて一層甚だしく、爲めに人民は租税、課役の重荷に堪え切れず、遂ひに戸口の隱蔽を計るの餘儀なきに至るは、洵に止むを得ないことである。

世宗時代の八城戸口

府牧郡縣名	戸數	人口數	驪興都護府	戸數	人口數
京都漢城府	五	?	楊根郡	三八八	一六八六
城底十里	一七七一	?	陰竹縣	三九〇	一〇八八
東至楊州松溪院及大峴。西至楊花渡及高陽德水院。南至漢江及露渡。			利川縣	一〇三六	三、八九八
開城	四八一九	八、三七二	果川縣	二四四	七四三
開城縣	八四四	二、〇二二	川寧縣	四三三	一、三三四
京畿道	二〇、八八二	五〇、三三二	砥平縣	二六七	五二五
府牧郡縣名	戸數	人口數	稔川縣	三三七	九三七
廣州牧	一、四三六	三、一〇〇	楊州都護府	一、四八一	二、七二八

第一章 戸口の變遷

長湍縣	永平縣	朔寧郡	鐵原都護府	陽智縣	陽城縣	龍仁縣	振威縣	安城郡	安山郡	南陽都護府	水原都護府	加平縣	抱川縣	積城縣	臨津縣	交河縣	高陽縣	原平都護府
一七〇	一三八	二二三	三五二	三四八	四三五	四五七	三三二	四四四	三〇〇	四八七	一、八四三	二八八	三七二	二二二	二七四	五九〇	六七九	四九四
四六七	四四九	七三三	七〇〇	六〇〇	一一、二〇〇	一、二六八	五三三	一、七三三	五八八	七七八	四、九六六	九八七	一、三三三	三八〇	六三三	一、六二九	一、三三四	一、三六六

忠清道

陰城縣	槐山郡	清風郡	丹陽郡	忠州牧	通津縣	喬河縣	陽川縣	金浦縣	海豐郡	仁川郡	江華都護府	富平都護府	漣川縣	麻田縣	臨江縣	安峽縣
一七一	四四五	一九一	二三五	一、八七一	四五八	三三二	三三三	三三八	七九三	三五七	二、四四五	四三九	一八六	一四六	三六四	一四〇
七三六	一、三〇〇	六五八	七四四	七、四五二	九七一	五六二	五〇〇	六五一	一、三八一	一、四二二	三、二八三	九五四	三六〇	四八四	八七八	四〇〇

朝鮮の人口現象

延	豐	延	堤	永	清	天	沃	文	木	竹	青	全	燕	稷	平	溫	新	牙	永	黃
縣	縣	縣	縣	縣	郡	郡	郡	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣
一四三	四一五	一九五	一五八九	五〇六	五五八	三五三	四〇四	四七〇	二九三	一六六	三三八	五五三	一七九	三三三	三三八	四八二	二二七	三〇八		
三四一	一,三三五	五八二	六,七三八	二,三六五	一,八三四	一,八七一	二,二八六	二,四一八	一,四一九	五七二	一,四四六	二,二一一	七〇四	一,五二六	一,五五五	一,八三三	九五一	七四二		
懷	報	青	鎮	公	林	韓	舒	藍	庇	定	恩	連	懷	石	鎮	扶	尼	洪		
縣	縣	縣	縣	牧	郡	郡	郡	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	縣	牧		
一四六	三三七	二三五	五五〇	二,二六七	四六〇	三四二	四三二	一八〇	一六六	二五八	五〇六	三七八	三〇〇	三九五	一五三	三八二	三八四	一,三七九		
六三三	一,四七七	六〇七	一,九三三	一〇,〇四九	一,六七二	一,六〇七	一,八七六	九四九	六五一	一,二二三	一,二七七	一,四八七	一,三六六	一,二〇八	五八三	一,三三七	一,五九一	六,〇三二		

## 全 羅 道

第一章 戸口の變遷

	金堤郡	古阜郡	益山郡	錦山郡	珍山郡	全州府		大興縣	結城縣	保寧縣	青陽郡	禮山郡	德山郡	唐津郡	海美郡	沔川郡	瑞山郡	泰安郡	
	四〇九	三三七	三一九	四五二	一一四	一、五六五	二四、〇七三	三八八	三〇四	二六五	二六五	三三一	六四九	二八四	二五八	四〇五	四八九	一七三	
	二、〇六五	一、五九二	一、六三三	一、八九〇	五、二四	五、八二九	九四、二四八	一、五二八	一、六九八	一、二二三	一、〇二一	一、四七七	三、二二四	一、四八九	八、五五	三、一五五	一、八八七	五、四七	
	務安縣	南平縣	咸平縣	茂長縣	康津郡	靈光郡	箕岩郡	海珍郡	羅州牧	礪山縣	高山縣	泰仁縣	井邑縣	扶安縣	咸悅縣	沃溝縣	臨陂縣	萬頃郡	金溝郡
	三三五	三三六	三三五	三五六	三五五	三三三	三三三	三三一	一、〇八九	三三三	二六〇	二四七	一三〇	三三三	二八八	二五七	三九八	一七一	二六二
	一、〇三〇	一、三三三	一、六〇〇	二、〇三三	一、六四四	二、二三七	一、三三九	七〇〇	四、〇二六	一、四一九	二、〇二八	一、五二六	八、五八	一、六三三	一、三八四	一、二五四	一、九四九	七、七	一、二〇〇

朝鮮の人口現象

高 傲 縣	一六四	九七四	三〇六	一四三九
興 德 縣	二二六	一,〇五一	一五七	六六六
長 城 縣	一八三	八四〇	一三九	七三三
南原都護府	一,三〇〇	四,九二二	二二九	九五二
淳 昌 郡	三三七	一,〇九二	二〇九	六五
龍 潭 縣	八六	二七四	九〇	二八九
求 禮 縣	三三七	六七七	三三	八七
任 實 縣	三三八	八〇三	一四四	七四七
雲 峯 縣	三三九	五五一	五七	八三四
長 水 縣	三三〇	八二二	六五	二,〇三三
茂 朱 縣	一七一	七二五	一三三	八,〇〇〇
鎭 安 縣	一六九	七三三	一三三	八,〇〇〇
谷 城 縣	一四八	六五七	四三三	一,七五九
光 陽 縣	二三八	一,三三〇	一,五五二	五,八九四
長興都護府	二七六	一,〇四一	二七〇	一,四九〇
潭陽都護府	三三六	一,七六〇	一七七	四九〇
順天都護府	四六七	二,六一八	九五	四四八
茂 珍 郡	八六〇	四,一八二	三三七	一,〇〇一
寶 城 郡	二五三	一,二四五	一六三	五三三
慶尙道			四,三三七	
樂 安 郡			三〇六	
高 興 縣			一五七	
綾 城 縣			一三九	
昌 平 縣			二二九	
和 順 縣			二〇九	
同 福 縣			九〇	
玉 果 縣			三三	
珍 原 縣			一四四	
濟 州 牧			五七	
旌 義 縣			六五	
大 靜 縣			一三三	
慶州府			一,五五二	
安 東 府			二七〇	
杞 溪 府			一七七	
神 武 府			九五	
慈 仁 府			三三七	
密陽都護府			一六三	

第一章 戸口の變遷

桂城	雲山縣	長鬚縣	機張縣	彦陽縣	昌寧縣	東平	東萊縣	慶山縣	解顔	河濱	壽城	大丘縣	興海郡	清道郡	蔚山郡	梁山郡	豐角	守山
二二四	二五七	二〇三	一七四	四二	八五	一〇八	二九〇	三三八	一九八	三五二	二六四	四三六	四三三	六四九	一,〇五八	四三五	二九四	九三

九七二	二,一三四	八二三	三九七	一,四五八	四,三三三	三,四二	二,一五二	一,三三七	一,二〇〇	一,二四九	六四四	一,三三九	一,八八五	三,三六一	四,六一	九三七	九〇七	三五六
-----	-------	-----	-----	-------	-------	------	-------	-------	-------	-------	-----	-------	-------	-------	------	-----	-----	-----

榮川郡	多仁	醴泉郡	順興都護府	青祀	英陽	寧海都護府	才山	秦陽	秦城	甘泉	吉安	一山	豐山	臨河	安東大都護府	清河縣	迎日縣	玄風縣
-----	----	-----	-------	----	----	-------	----	----	----	----	----	----	----	----	--------	-----	-----	-----

三七七	三二一	七八一	二八四	二九	四〇	二五	三三	四二	八三	二六二	四四	七二	二八二	三三三	八四七	二三五	四七	四七七
三〇八七	一,四三七	三,八〇〇	一,六七九	三三四	四八一	一,五三八	一五七	一〇〇	三七一	五四	一六三	八三	一,三〇九	一,九〇〇	三,三三〇	五四	一,七四一	一,八七一

朝鮮の人口現象

比安縣	眞寶縣	新梨旨縣	新寧縣	義興縣	奉化縣	奉化縣	仁同縣	仁同縣	股豐縣	基川縣	河陽縣	禮安縣	盈德縣	義城縣	安德縣	青松郡	青松郡	永川郡
二六六	七八	八八	三八二	三〇〇	二四三	三三七	三三〇	一〇八六	七五	一六〇	一七七	一七四	二六	六三七	四八	五〇	三三	八三三
一一〇〇	五三六	一九八	一三〇〇	四七九	九五五	一〇二	一〇八六	三〇〇	七〇〇	一〇六七	七九	一一〇〇	一九五五	二五五	三三三	二二七	三六七二	
金山郡	草溪郡	治瀘郡	陝川郡	海平郡	善山都護府	八葛	花崗	加利	星州牧	永順	功成	山陽	丹密	中牟	化寧	青理	尙州牧	安貞
五三三	四六三	二三七	四六四	一九六	八〇九	三四七	三三〇	二九九	一、四七九	二二	一一〇	一一二	一四〇	一九九	二一九	五四	一、八四五	一九七
三、〇六四	二、五三七	八四四	一、五二七	一、三八九	四、二二八	一、四八〇	一、三三〇	九三四	五、八〇七	一、三三	六三〇	六六七	七〇〇	一、五〇	五五七	三〇七	三、三三二	八七〇

第一章 戸口の變遷

高 靈 縣	二八七	一七三三
開 寧 縣	五三〇	二三五九
成 昌 縣	三六八	二二四〇
龍 宮 縣	三九六	二二二五
開 慶 縣	二六〇	一〇六五
加 恩 縣	一〇五	七二〇
軍 威 縣	二八四	六七七
孝 靈 縣	一〇六	三七五
知 禮 縣	二二〇	一一〇〇
晉 州 牧	一六二八	五、九〇六
班 城	二七七	六八七
永 善	二五四	七四八
岳 陽	六〇	一八〇
金海都護府	二、二九〇	六、六四三
熊 神	六三	三三八
莞 浦	三七	一〇七九
昌原都護府	一、〇九四	四、九五五
咸 安 郡	七三三	三、三六六
咸 陽 郡	四八	一、九四八

黃海道

昆 南 郡	二〇	一、二〇〇
固 城 縣	五〇	二、八八五
巨 濟 縣	一五三	四三三
泗 川 縣	三七〇	一、八一七
居 昌 縣	五〇五	一、六四〇
河 東 縣	三四〇	一、二〇八
珍 城 縣	二三四	八七二
丹 溪 縣	一三九	四九六
漆 原 縣	三三七	一、三三〇
龜 山 縣	一〇四	三〇〇
山 陰 縣	二五七	一、二三八
安 陰 縣	四八一	七九三
三 嘉 縣	三〇七	二、〇二七
宜 寧 縣	五〇四	一、六二九
新 繁 縣	五五五	九八二
鎮 海 縣	二〇一	九五三
黃 州 牧	二、〇四四	七、二八九七
	二、三五一	五、二九一

朝鮮の人口現象

文 化 縣	豐 川 郡	江 陰 縣	兵 山 縣	牛 峯 縣	白 川 郡	平 山 都 護 府	延 安 都 護 府	康 翎 縣	長 湍 縣	瓮 津 縣	載 寧 郡	海 州 牧	新 恩 縣	谷 山 郡	遂 安 郡	安 岳 郡	鳳 山 郡	瑞 興 都 護 府	
九五〇	三三九	三七四	三七六	七七八	九九六	二,二三〇	一,五八三	三六九	九六四	三三七	一,二九三	一,九二六	八〇〇	八二六	一,〇八五	九八一	一,五六四	一,四四六	
二,一三六	九九二	九六四	一,一八六	二,一八〇	三,一六七	六,三三三	三,七七八	一,〇六八	二,一〇〇	九八五	三,八八五	六,八二四	三,一八九	二,八八八	三,七八六	三,七〇三	六,二〇〇	四,三三七	
平 安 道																			
慈 山 郡	福 川 都 護 府	成 川 都 護 府	安 州 牧	龍 岡 縣	江 西 縣	三 和 縣	咸 從 縣	甑 山 縣	順 安 縣	江 東 縣	三 登 縣	祥 原 郡	平 壤 府				長 連 縣	股 栗 縣	松 禾 縣
五九一	一,三三八	一,〇六八	二,六九〇	一,七二四	九八六	四一〇	八〇七	三〇〇	六六四	八九四	三七五	七〇〇	八二五	四一,二六七		三三〇	三九二	六八五	
一,二八一	一,八五五	二,九九九	八,五六七	二,六四三	一,六九九	三,一〇〇	一,五三九	八三五	一,七五一	一,八三三	七四二	一,八九九	一,四四〇	一〇五,四四四		八七四	一,二四三	一,九四五	

第一章 戸口の變遷

順川郡	六〇〇	一,七四一	三,五〇一
价川郡	一,二〇〇	五,四三九	二,二〇〇
徳川郡	八八一	三,七二六	二,七六三
永柔縣	八二六	二,二七一	一〇,三五五
孟山縣	三,五四	九〇〇	六二五
殷山縣	六二二	一,一〇〇	四,二四八
陽徳縣	三三五	九五二	一,六六六
義州牧	五三二	一,四九八	一,〇六〇
定州牧	一,〇三三	五,四六六	一,五七三
麟山郡	一三八	三三三	二,五七三
龍川郡	三七九	一,一三二	二,五七六
鐵山郡	二三四	六五九	二,九二
郭山郡	三〇〇	二,四八一	三三一
隨川郡	五三七	三,一〇〇	一,五四四
宣川郡	五二八	四,四二七	一,五四四
嘉山郡	四七二	一,七五六	二,九〇〇
定寧縣	二九七	八三九	三,五三三
朔州都護府	二二二	三,九四	三,五三一
寧邊大都護府	一一二	二,九〇〇	七,七五
江原道			
昌城郡	三三五		二,二〇〇
碧瀨郡	四一六		二,七六
雲山郡	三三五		二,七六三
博川郡	五九九		一〇,三五五
泰川郡	二七八		六二五
江界都護府	六〇四		四,二四八
理山郡	五七七		一,六六六
熙川郡	三三九		一,〇六〇
閔延郡	二六一		一,五七三
慈城郡	四〇〇		二,五七六
茂昌郡	二二七		二,九二
虞茂郡	七七		三三一
渭原郡	二二七		一,五四四
江陵大都護府			
連谷	一〇五		三,五三三
羽溪	一〇〇		二,五三一
襄陽都護府	八五七		七,七五

朝鮮の人口現象

伊川縣	平康縣	金化縣	通溝縣	金城縣	長楊縣	鳳谷縣	文登縣	水入縣	和川縣	淮陽都護府	寺伊岩莊	洪川縣	橫城縣	寧越郡	酒泉縣	原州牧	平昌郡	旌善郡
三三三	二六三	一八一	七七一	三四〇	一〇〇	一一一	一四一	四一四	一九一	三三三	二四一	四〇〇	三三三	三三四	一六三	二,一四八	三三三	二〇三
五八二	二二二	五七	九六	七五九	二八	四六	二六	一五五	三九	五九三	五七	一,二五四	五九五	六一	二八〇	三,三三三	五〇〇	四五九

咸鏡道

歙谷縣	臨川郡	通川郡	安昌郡	高城郡	烈山郡	杆城郡	瑞和縣	麟蹄縣	方山郡	楊口郡	狼川郡	基麟	春川都護府	蔚珍縣	平海郡	三陟都護府
二二九	五四	二九〇	四六	三七五	一〇〇	二二七	七三	二二五	二〇	二九七	二六四	一〇〇	一一一九	二七〇	二四七	五八一
六七五	三二二	一,三六三	一四	八七一	二五四	三三三	一九一	二〇〇	五〇	六四一	七五〇	二五七	一九五〇	一,四八三	九二一	二,六三三

咸興府	三五八	八九三	端川郡	八三一	二七三
定平都護府	八一	三八九	甲山郡	三五六	八九一
北青都護府	一、五三九	四四五九	鏡城郡	四〇九	九〇三
永興大都護府	二、一九一	八、五四四	慶源都護府	一、六二	五、二七一
高原郡	六三五	一、二七八	會寧都護府	六二四	二、二五七
文川郡	四五〇	九五三	鏡城都護府	九〇〇	二、八二五
預原郡	四九五	二、六九八	穩城都護府	八〇〇	三、六三七
安邊都護府	一、〇三〇	三、九九七	慶興都護府	四〇一	五、〇五八
宣川郡	三〇三	八五〇	富寧都護府	二六二	二、二九四
龍津縣	一八七	八八二	三水郡	二二三	三、四八
吉州牧	一、六七三	一、四八一九			

### 第四節 正祖時代の戸口

今より約五百年前の世宗時代の戸口に關しては、前節に於て概説したから、茲には約百四五十年前の正祖時代の戸口に就いて説明して見やう。正祖元年丁酉(西曆一、七七七年、後桃園天皇の安永六年)即ち今を距る百五十年前の京外戸口は、總計百七十萬五千三百七十一戸、七百二十三萬八千五百二十二人であつたが、正祖時代の編纂に係る「戸口總數」の記録に據ると、正祖十三年己酉(西曆一、七八九年、光格天皇の寛政元年)即ち今を距る百三十

八年の京外戸口は、左表の如く、戸數一百七十五萬二千八百三十七、人口男三百六十萬七千三百七十六人、女三百七十九萬六千二百三十人、計七百四十萬三千六百六人となつて居る。

正祖十三年己酉式京外戸口 (西曆一、七八九年、光格天皇の寛政元年)

道 別	戸 數	人		計
		男	女	
漢城府	四三、九二九	九六、二六九	九三、九八四	一八九、二五三
京畿	一五九、二六〇	三三四、八八八	三二七、一八一	六四二、〇六九
原 春 道	八二、八七六	一六七、三八四	一六四、八七二	三三二、二五六
忠 清 道	二二二、六三五	四二七、八三一	四四〇、三八八	八六八、二一九
黃 海 道	一三七、〇四一	三〇四、九四七	二六二、八六六	五六七、八三三
全 羅 道	三九、一六〇	五七五、四八五	六四五、三二九	一二三〇、八四四
平 安 道	三〇〇、九四四	六三九、三二九	六五六、八二五	一二九六、〇四四
慶 尙 道	三三五、三二〇	七五〇、六二二	八六五、九二一	一、五九〇、九七三
咸 鏡 道	二二二、八八二	三四六、三八一	三四九、八九四	六九六、二七五
都 計	一、七五二、八三七	三、六〇七、三三六	三、七九六、三三〇	七、四〇三、六六六

右の人口記録を一瞥して感じたことは、當時の調査でも、尙ほ女の數が男の數よりも遙かに多く、また一戸當りの平均人口も、人口密度の高い慶尙道の如き地方でさへ僅に四人四分に過ぎないなど、

世宗時代の「慶尙道地理誌」の戸口數に對比して、どうしても全人口數が計上されて居るとは信ぜられず、多少内輪の計算と見る外ない。然しながら正祖十三年には、従前に比し最も精密なる戸口調査が行はれたものと見え、左表の如く漢城府五部及び各道の地方別戸數、並に男女別人口數が、極めて詳細に計上されて居るから、後世の人口研究を爲す者に取りては實に珍重なる文獻である。

正祖十三年己酉式年戸口數

地方別	戸數	人口		計
		男	女	
總計	一七五三、八三七	三六〇七、七七六	三七九、三三〇	七四〇、三六〇六
漢城府五部	四三、九二九	九六、一六九	九、九八四	一八九、一五三
京畿道				
合 計	一五九、一六〇	三三四、八八八	三七、一八一	六四二、〇六九
開城府	一一、五二五	二二、八七七	二五、七九六	四九、六三三
江華	九、八〇一	一八、八六六	一五、三六五	三四、二三二
廣州	一〇、五六八	二四、四〇一	二六、一〇六	五〇、五〇八
楊州	一二、四六五	三〇、二二〇	三〇、二二五	六〇、四四五
麗州	六、六五四	二二、一〇八	一〇、四六一	三二、五六八

朝鮮の人口現象

安	金	安	麻	朔	加	交	高	竹	利	仁	通	富	豊	長	喬	南	水	坡
山	浦	城	田	寧	平	河	陽	山	川	川	津	平	德	端	桐	陽	原	州
二,七五八	一,六七九	四,五八九	一,一〇一	二,七九二	一,九三三	二,四七四	三,三〇一	四,一三三	四,九六七	四,〇九六	三,三七三	三,二六九	三,一九三	五,三三三	一,八〇八	六,三二五	一五,三二一	三,三七七
六,四〇六	三,三三八	八,一七三	二,三〇七	五,八〇一	三,五八七	三,八七一	六,四〇一	一〇,三三四	一,一九九五	七,五〇五	六,二九九	六,一〇九	六,四七七	九,〇三五	三,七三二	八,四三六	二八,二四〇	五,四六五
五,五二〇	三,三三九	八,八五五	一,三九八	五,〇九五	二,八六六	四,二二六	六,六六二	一,二六五五	一,二三四三	七,〇六一	五,三三六	五,四八〇	四,五四五	一七,一〇八	三,八〇八	一四,九六二	一六,四三〇	一四,六六九
一,一九天	六,七七七	一七,〇二八	三,六〇五	一〇,八九六	六,四四三	七,九九七	三,〇三三	二,八八九	二五,三三六	一四,五六六	一一,四九五	一一,五八九	一一,〇三三	一六,二四三	七,五七〇	二,三四一八	五七,六六〇	一〇,一五四

	合	原	春	道		
楊	三,五六			五,九九一	六,三三六	三,三二七
龍	四,八五九			一〇,四七三	一〇,六四六	二,二一九
陽	八〇一			一,四一五	一,三七八	二,七五二
振	二,二三七			三,四八四	三,六〇九	七,〇五三
永	一,五四九			三,四三〇	三,四四一	六,八七一
陽	三,一〇四			三,九二四	三,五三三	七,四四六
袴	一,九三四			三,三六〇	三,八八五	七,二四五
果	三,二七三			五,九九一	八,二六〇	二,四一七九
積	一,六九八			三,一三三	二,七八六	五,九〇九
抱	二,五九八			四,九五五	五,四四三	一〇,三九八
澁	一,三四二			二,六三三	二,一五六	四,七七八
陽	一,六八五			四,二八八	五,二六九	九,五五七
砥	二,一六八			五,二一一	四,五二四	九,七七五
陰	二,〇六三			四,〇三二	三,八四四	七,八七五
竹						
平						
智						
川						
川						
城						
川						
川						
原						
合	八二,八七六			一六七,三六四	一六四,八七二	三三三,二五六
州	八,七九五			一五,四八六	一三,四三三	三七,九〇九
江	六,四六八			一七,〇六五	一七,二五九	三四,三四四

朝鮮の人口現象

三陟	三、八〇八	七、五七四	七、三五一	一、四九六六
伊川	四、三七一	九、七九四	九、〇三二	一、八八二六
鐵原	三、八七七	九、七八二	八、〇四一	一、七八三三
淮陽	四、四五〇	八、八五六	八、三八二	一、七三三八
襄陽	一、七四一	三、三三四	二、七七七	六、〇〇一
寧越	二、六三〇	四、三八二	四、五〇九	八、八九一
春川	六、〇九一	一〇、五七六	九、三二九	一、九八九五
通川	一、四二〇	二、七六四	三、一三七	五、九〇一
平昌	一、四三四	二、九六五	一、五八九	四、五九四
高城	一、五三二	二、八四四	二、三四三	五、一八七
平海	二、四六五	五、七七七	六、五四六	一、二三四三
杆城	一、八五六	四、〇二四	三、八七六	七、九〇〇
旌善	一、九五二	四、三五五	四、五五〇	八、九〇五
安峽	二、〇二〇	四、一六七	三、七八六	七、九五三
金化	三、一六五	六、九九八	七、二〇七	一、四、二〇五
洪川	三、二二二	五、四三九	四、一九四	九、七三三
歙谷	六〇九	一、四九八	一、二九一	二、七八九
麟蹄	一、二八九	三、〇七六	二、八五〇	五、九二六
蔚珍	三、二九四	六、七七九	六、七七七	一、三、五七六

合 公 忠 清 洪 清 舒 泰 大 韓 林 溫 金 橫 狼 平 楊

第一章 戸口の變遷

陽	川	山	興	安	川	風	州	州	州	州	計	城	城	川	康	口
二,八一六	四,八一七	三,二七九	三,三八八	四〇,九四	三,六四〇	二,五六八	二,六四八	一三,五五八	一七,八〇九	一六,四〇二	三二,六三五	三,五三四	三,三三二	二,三〇九	四,六七九	一,五五五

忠 清 道

六,七一九	八,八五三	六,三七八	五,四二二	七,七五〇	七,一八四	四,三〇八	二五,八〇二	二三,二七四	四二,九九四	一七,八七八	四二,七八三	六,四八八	六,三三一	四,五九七	九,三三八	三,一九九
八,七四四	九,六二六	五,四四七	八,二二七	六,八七〇	六,二〇八	三,三三〇	二六,九五九	二二,七七二	四四,三三七	一六,五六〇	四四,〇三八	六,八八六	四,四五八	三,九六一	八,五八二	三,五九九

一,五五〇	一,八四七	一,一八五	一,三六八	一,四六〇	一,三三九	七,六二八	五,二七一	四七,〇四六	八七,三三一	四四,四三八	六六,八三九	一,三三四	一,〇七九	八,五五八	一七,八二〇	六,八九〇
-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	--------	--------	-------	-------	-------	--------	-------

朝鮮の人口現象

鎮	懷	青	牙	德	海	恩	藍	稷	扶	禮	定	文	瑞	槐	沃	沔	天	丹
川	仁	陽	山	山	美	津	浦	山	餘	山	山	義	山	山	川	川	安	陽
五七七一	一一九〇	三三三三	三九五五	五三六一	二七六三	五〇六二	四二四六	三三四五	三四三六	二八三四	二二七五	三〇一三	六八二三	三二七五	五五二一	四六〇六	三六一五	二一〇一五
一三五五二	二二三三	五九六〇	七八〇四	八三二一	四四九四	九六五〇	七〇九五	六九九一	七二二五	四四四二	四〇三七	五〇四七	一三二七六	六三八七	一一九八二	八三三一	五九九九	三五九一
一六七四二	二二三六	六二七四	一〇五五〇	一〇六四九	五二〇四	九七三九	九三四四	七八八五	七九五二	四七八四	四二六六	四七五〇	一四九六一	五六〇八	一三、一九二	八八三二	六二五九	三六二二
三〇二九四	四四六八	二二三三	一八、三五四	一八九七〇	九六九九	一九三九九	一六四三九	一四八七六	一五〇七七	九二三六	八三〇三	九七七七	二八一三七	一一、九九五	二五、一七四	一七〇五三	一二、三五八	七二〇四

延 燕 青 木 陰 保 唐 黃 清 永 永 平 鴻 連 懷 石 結 新 尾

第一章 戸口の變遷

豐	岐	山	川	城	寧	津	澗	安	同	春	澤	山	山	德	城	城	昌	城
一,八一七	二,五〇二	二,四二一	三,三四四	一,八〇八	四,一〇六	三,七二四	一,九八一	二,六八一	二,五三五	一,四〇五	一,五二四	四,三九三	三,五三八	二,四九一	一,九九八	三,六五八	一,九四一	二,五二九
二,七六八	五,二四八	四,四八三	八,六四四	三,四六一	八,二二二	七,八〇六	三,五五六	四,九七一	五,七七一	二,八三三	二,八八四	七,四二二	七,四九二	五,二〇七	四,四四三	六,三三五	三,四三三	四,八二七
二,六九七	四,九二六	六,三三三	七,八八〇	三,四九〇	九,三三五	七,七三三	三,六三三	五,二五〇	五,〇六三	二,八三三	二,九七六	七,四一八	七,五七四	五,二二三	四,九六九	六,二六九	四,六九〇	四,八五六
五,四六五	一〇,一七四	一〇,七九六	一六,五〇四	六,九九一	一七,五三六	一五,五三八	七,一八九	一〇,三一一	一〇,八一五	五,六五四	五,八六〇	一四,八三九	一五,〇六六	一〇,三三〇	九,四二二	二,六〇四	八,二二二	九,六八三

朝鮮の人口現象

全	報	鎮	庇	堤	合	計	海	道
一、六〇八	四、七九	一、三八〇	三、三九一	二、八〇一	一三七〇四一	三〇四、九四七	二六二、八六六	五六七、八二三
三、〇三三	七、三七四	二、八七四	五、九二六	六、一〇二	三九、一二七	三九、一四四	二四、三三八	六三、四七二
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	一〇、七六八	二七、一三七	二六、九二四	五四、〇六一
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	八、九五二	一九、七七八	一八、〇三四	三七、八三二
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	六、一五二	二二、二八四	九、〇二五	二二、二九九
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	八、七八六	二〇、五三二	一三、七八二	三三、三三四
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	一四、五五九	二六、六一一	二六、二二八	五二、七九九
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	三、七三三	一四、三三八	二二、五一九	二六、八三七
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	三、九五三	九、五九二	九、六五五	一九、二四七
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	二、九九八	五、八〇八	四、〇五七	九、八六五
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	六、三二六	一三、九九四	一三、八六一	二七、八五五
三、六八九	七、四二七	二、二七六	五、一〇三	六、〇六九	七、四四二	一四、八九九	一六、五二六	三一、四一五



朝鮮の人口現象

綾	州	四,九一九	九,八五一	八,八七六	一八,七七七
南	原	一,一,一五七	三,三四八九	一九,九三三	四三,四一一
潭	陽	五,六八九	九,四四五	八,八三五	一八,二七〇
順	天	一三,六六九	三三,〇七五	二四,二五五	四六,三三〇
長	興	七,九六五	一,一〇七一	九,九二一	二〇,九九三
長	城	六,六〇九	一〇,四七四	一二,三二五	三二,七九九
茂	朱	五,四四八	七,三二五	六,七七七	一四,〇三二
礪	山	四,〇六三	七,六七七	一一,三四四	一九,〇一一
益	山	四,二二四	七,五二二	八,三〇一	一五,八三三
金	堤	五,九九八	一三,〇六八	一五,二二七	二七,五八五
古	阜	六,五三三	一一,七九八	一六,八七三	二八,六三二
錦	山	六,〇九二	九,五二八	一一,二七五	二〇,七九五
靈	巖	八,二二四	一三,九八五	一五,三〇三	二九,一八八
靈	光	一三,六九九	二二,二八一	二五,五〇三	四四,七八三
珍	島	六,六四六	一一,一五六	一三,六四七	二五,〇一三
淳	昌	六,八三五	一一,七四六	一五,一〇四	二六,八四九
寶	城	四,六五一	九,九四八	一二,三六天	二三,三七四
樂	安	二,七八〇	四,九九一	四,〇二七	九,〇一八
珍	山	一,九六一	三,七一九	四,二一一	七,九四〇

鎮長求務茂高成井興沃泰扶成高昌龍金萬臨

第一章 戸口の變遷

安水禮安長徹平邑德溝仁安悅山平潭溝頃坡

五七六五 四、一六六 一、七八八 六、四二一 六、八三九 二、〇三五 七、〇四八 二、四六六 二、八〇四 四、四四六 七、八四九 七、九三三 四、一三一 四、一五五 二、〇四一 三、一五五 二、五四四 二、六七二 四、四六九

一〇、六五八 七、八三三 四、六九二 一、二二五 二、二五五 三、六〇五 九、七五六 四、六六九 四、八二六 六、六〇二 一四、〇一〇 一九、〇九〇 七、七五三 七、五五〇 三、六一三 五、九二八 四、三〇三 六、六八九 八、七七一

一一、五五二 九、七二七 四、一三九 一一、四九六 一四、五九四 四、七七七 二、二六五 五、〇〇五 五、二八九 八、〇四七 一七、一八五 一九、三五八 八、一九〇 九、二二三 三、九八八 六、九三三 四、九九九 七、九九五 一、三三四

二、二二〇 二、七五三 八、八三一 一、三七一 二、七一九 八、四〇二 二、三三九 九、六七四 一〇、一一五 一四、六四九 三、二〇五 三、八四八 一、五九四 一、六七三 七、六〇一 二、八六〇 九、三四一 一四、六七四 二、一三三

朝鮮の人口現象

義州	平壤	合計	谷城	玉果	大靜	旌義	興陽	光陽	雲峯	同福	龍安	任實	和順	南平	海津	康津
一九,九九五	三二,五六六	三〇〇,九四四	三〇,五五四	二,四一〇	一,七二〇	二,三三五	一〇,〇一五	三,七〇六	二,一〇五	二,一五四	一,六八七	六,四〇八	一,七七五	五,三三七	五,九七四	八,一五八
四五,八八七	五八,三九七	六三九,三三九	四,五〇六	三,七四六	三,七四八	六,五三六	二二,四七〇	八,一〇二	三,七五四	三,三九一	二,六九二	一三,五七一	二,八九〇	九,二〇〇	八,九二二	一三,九三六
四四,〇八三	四九,一九五	六五六,八一五	三,九四七	五,五五三	四,九七七	八,二九三	二二,五七四	九,四八四	三,三〇一	四,三二九	二,九三三	一四,九四五	三,〇七七	一〇,九九一	九,九八五	一三,三二一
八九,九九〇	一〇七,五九二	一,二九六,〇四四	八,四五三	九,二九九	八,七二五	一四,八二九	四五,〇四四	一七,五六六	七,〇五五	七,七七〇	五,六二五	二七,五二六	五,九六七	二〇,一九一	一八,八九七	二七,〇五九

平安道

渭 碧 江 楚 慈 中 成 咸 三 肅 龜 寧 朔 龍 織 宜 昌 定 安

第一章 戶口の變遷

原 澗 界 山 山 和 川 從 和 川 城 邊 州 川 山 川 城 州 州

一〇,六七一	八,七七〇	二二,〇八〇	一一,四六一	二,八〇七	八,六五九	六,二八四	三,七二四	四,五六一	五,八一二	六,九〇五	七,四三六	六,六五一	九,五九六	七,二八六	一一,八四二	四,三四一	一〇,四九一	一三,二五六
二二,四九三	一七,八六六	三三,一八一	二二,四七〇	八,六一七	一七,六四四	二九,二五二	一〇,七五五	一〇,七六八	二二,七六一	一三,六四九	二二,七八四	一〇,九九七	一六,〇七七	一四,七七四	一七,三八五	一〇,七八一	二二,三九二	二二,六九〇
一四,〇五五	一九,〇一九	二八,二二六	二二,三三七	八,五九〇	二六,七四二	二九,七〇四	九,八一〇	八,八九七	一三,八四五	二二,六五九	二八,六九七	一三,八〇二	一七,八四〇	二二,三三〇	一八,八二〇	一〇,八七九	二八,四六四	二七,八九二
二六,五四八	三六,八八五	六〇,四一九	四四,八〇七	一七,二〇七	三四,三七六	五八,九五六	二〇,五二五	一九,六六五	二六,六七七	二六,三〇五	五一,四八一	二四,七九九	三三,九一七	二七,〇九四	三六,一九九	二二,六六〇	五〇,八五六	四九,五八一

朝鮮の人口現象

孟	陽	順	龍	甌	江	江	永	三	順	郭	祥	价	德	博	熙	雲	寧	嘉
山	德	安	岡	山	西	東	柔	登	川	山	原	川	川	川	川	山	遼	山
三,一一九	二,六一五	四,九五二	九,三三七	一,七四〇	四,九〇七	三,五〇四	七,七二一	一,二二八	五,九四八	六,七二五	三,七八	四,四四六	三,九七八	四,九七二	六,七六九	二,八〇一	六,六九三	四,六五七
五,三四二	一,一五五四	一,一五七六	一,七五二〇	四,三四四	一〇,九五四	一,一五二	一四,五八四	五,八一	二,九九四	九,〇七五	一〇,一七一	一,三四五九	九,八三	八,〇八九	一,三六三	六,〇三五	一,五四〇	八,六四二
八六二	一,一七八三	七,八七一	一,七四九四	三,四〇三	九,六五〇	七,九七一	一,三〇三七	七,五〇六	一四,九三二	二,一〇六	一,一〇,三六	一五,三三	一,二,四〇〇	八,九七二	九,六四一	六,五八八	一,一九四一	一四,七〇〇
一三,九六三	一,三,三三七	一,九四七	三,五,〇〇四	七,七,七	二〇,八〇一	一八,九二五	二,七六一	二,三三七	二,七,九八六	二,一,一八一	二,二,〇八	二,七,五八二	二,二,〇六一	一,七,〇六一	二,三,三七	一,二,六一三	二,三,四八一	二,三,三六一

第一章 戸口の變遷	金	善	漆	順	仁	密	青	寧	昌	安	星	晋	尙	慶	大	合	泰	
	海	山	谷	興	同	陽	松	海	原	東	州	州	州	州	邱	計	川	
	九,一〇七	八,八六三	三,三三三	二,四一一	四,一四九	一〇,二四七	三,二五九	二,四六六	七,二六四	二,六九六	一一,九五二	一五,〇二八	一八,六六七	一八,一五一	一三,四三三	三六五,三三〇	二,九七四	
	一五,一五〇	一九,八四一	七,一五八	五,二四一	七,八二七	一〇,四〇六	四,六七三	四,〇三六	一一,二一六	二,四〇九	二六,八六二	三三,四九八	三三,三九一	二九,五二五	二六,六六一	七五,〇六一	六,一五〇	
	一〇,〇六一	二二,一三一	七,五九九	六,四五六	九,三三一	三〇,四九五	六,七八五	四,四五二	一七,三三六	二九,一九四	二七,五〇三	三五,九九七	三七,二〇五	四二,四四一	三四,七八六	八六五,九一一	六,六三三	
	三三,八三三	四二,九七二	一四,六八七	一一,五九七	一七,〇四八	五〇,九〇一	一一,四五八	八,四八八	二九,四五二	五〇,六〇三	五四,三六五	六九,四九五	七〇,四九七	七一,九五六	六一,四七七	一,五九〇,九七三	二,二八七	
	六三																	

慶 道

朝鮮の人口現象

蔚	東	河	巨	永	興	醴	榮	豐	清	金	陝	咸	昆	咸	草	梁	盈	慶
山	萊	東	濟	川	海	泉	川	基	道	山	川	陽	陽	安	溪	山	德	山
八五八七	七〇〇七	四三二二	六九八一	七八五二	三五二〇	七三八三	三五七四	二四三八	七五二五	五、六五七	四、四〇〇	五、〇〇〇	三、八〇五	五、一八四	三、五四〇	二、一七九	三、七六三	三、四三二
一一四一九	一三六一三	一〇〇八四	一四、八三二	一五、三五八	五、六六九	一一六九五	六、三九三	四、六七五	一四、六四九	一一、二〇三	九、九九九	一一、六〇三	八、三二〇	一〇、八四三	七、〇九八	六、〇二四	六、五六一	七、三二五
二〇、九六三	一五、二五一	一〇、四六五	一五、二〇一	一九、三三八	七、三三二	一四、一四九	一五、九〇五	四、四九一	一九、五三七	一四、七一九	一一、二九一	一一、五九五	八、九九二	一一、九九八	八、二三五	六、〇八二	八、四五九	八、三三六
三三、三八一	二八、八六四	二〇、五四九	三〇、〇三三	三四、六九六	一一、九〇〇	二五、八四四	三二、一九八	九、一六六	三四、一八六	二五、九三二	三二、一九〇	二四、一九八	一七、三二二	三二、八四一	二五、三三三	二二、一〇七	一五、〇二〇	一五、五五一

南	海	四、九二一	二、四三一	二、三五六	二、五九四九
固	城	九、六九七	二〇、二六五	二、二六五八	四、一八三
義	城	八、四三六	一、五四二	一、五、九一四	三、一、三六
延	日	四、〇二五	八、二二六	一〇、三二八	一、八、五四四
長	警	二、二七四	四、二七〇	三、八六八	八、一三八
比	安	二、九五七	四、四一一	五、三九〇	九、八〇一
丹	城	三、〇二二	五、七七二	八、〇六七	二、三、八三九
軍	威	二、二五一	五、二九三	四、九二〇	一〇、二二三
機	張	三、二二三	六、四九九	六、四六三	二、二、九六二
開	慶	三、五五三	五、二九四	五、一五八	一〇、四五二
山	清	二、五四二	五、四六四	五、三二四	一〇、七七八
宜	寧	八、四一九	一、七、六五五	一、八、八八九	三、六、五四四
安	義	四、〇〇三	八、〇九一	八、五一一	二、六、六〇二
漆	原	二、九八一	五、四三〇	六、三六五	二、一、七八五
熊	川	三、二八一	六、三二五	九、四二七	一、五、七四一
昌	寧	六、四三二	一、五、二八八	一、九、四七九	三、四、七六七
新	寧	三、九七八	九、七〇四	一〇、五九六	二〇、三〇〇
龍	宮	二、八六四	六、二〇九	五、八四三	二、一〇、五一一
玄	風	三、四五六	七、二二八	六、一〇一	二、三、二八

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

三	嘉	三	三,一九四	六,九〇二	九,九七〇	一六,八七一
彦	陽	陽	一,一四四	四,三三三	五,〇五五	九,四一〇
河	陽	興	一,六九〇	三,二二八	三,九五二	七,〇七九
義	興	仁	三,五六四	八,七五一	一一,二九七	二〇,〇四九
慈	仁	昌	三,三三〇	五,九九九	六,三四三	一三,二六一
居	昌	昌	四,三〇三	九,四八六	一一,一四七	一〇,〇三三
眞	寶	寶	一,三三二	三,〇三七	三,二二三	六,一八〇
成	昌	昌	二,六三八	五,三四五	五,五四八	一〇,八九三
知	禮	禮	二,二一八	五,六一八	四,一八〇	九,七九八
清	河	河	一,六六五	三,二二〇	三,一九九	六,三三九
僕	海	海	二,〇三九	三,三五六	三,八二六	七,一七一
奉	化	化	八七七	二,二八二	二,六一八	四,九〇〇
高	靈	靈	二,五七七	四,四八七	六,五二七	一一,〇〇四
泗	川	川	三,九八一	八,〇〇九	九,五五三	一七,五六二
英	陽	陽	二,七七〇	五,六四〇	六,〇〇二	一一,六四二
禮	安	安	一,四七一	二,三四八	一,九四〇	四,一八八
開	寧	寧	四,一五七	八,四六六	九,〇七五	一七,五五四
兼	山	山	四,三六〇	一〇,二六七	一〇,二二五	二〇,四二二

第一章 戸口の變遷	咸鏡道																
	合	咸興	北青	甲山	三水	吉州	明川	鏡城	富寧	會寧	鍾城	茂山	慶源	穩城	慶興	長津	洪原
	一三,八八一	一三,〇七六	七,六七八	四,四〇六	一,八六一	九,二二三	八,一九四	六,七三三	二,六三三	七,五八一	五,九八二	六,四五二	三,八四四	三,三七三	二,五五三	四,一五一	三,九六六
	三四六,六一	三八,四〇九	二〇,八五五	一一,三一一	四,四五五	二八,二九三	二二,二九二	二二,八九〇	七,七三三	一七,三三六	一三,三三七	一九,三三四	一一,一七三	八,〇四六	七,二五二	七,五五五	一一,一〇〇
	三,四九,八五四	三三,七三三	二〇,四三三	一一,六八八	五,五二八	三六,九〇九	二二,三三九	二五,二二六	七,〇九八	一七,三三五	一三,六七六	一六,六四七	一〇,五四八	八,一六一	六,七五六	五,四三三	一〇,七〇一
	六九六,二七五	七二,二八二	四二,二七〇	二三,九一九	九,九四三	六五,二〇二	四八,一〇六	一四,八三三	三四,六三三	二七,〇〇三	二二,〇〇三	三五,九七一	二二,七一一	一六,二〇七	一四,〇〇八	一三,二七五	二四,五三二

利城	二,二四八	八,二四六	八,一七	一六,三三三
端川	四,七二〇	二〇,七四一	一五,二五九	三六,〇〇〇
安邊	五,七三五	一五,五七七	一五,六三三	三三,二一〇
徳源	二,二三八	五,三七	四,五三一	九,八四八
永興	一〇,五七四	二四,四五五	三三,三二五	五七,五八〇
定平	三,三〇八	一〇,二六八	八,三九〇	一八,五五八
文川	一,四八六	五,七〇三	五,一六〇	一八,〇六三
高原	二,六八六	五,四〇九	四,三七六	九,七八五

當時も今日と同じく、人口密度の高い地方は、慶尙道、全羅道、及び忠清道、京畿道の如き、中部以南の地方であり、西北鮮地方、及び原春道即ち現今の江原道は、人口密度が極めて低いことを示して居る。

李朝の戸口記録に據ると、正祖十三年を境として、朝鮮の戸口数はその後却つて減少を示して居る。即ち純祖七年丁卯(西曆一、八〇七年)（光緒天皇の文化四年）には戸數百七十六萬四千五百四戸、人口七百五十六萬一千四百三人といふ計數を示し、更に憲宗三年丁酉(西曆一、八三七年)（仁孝天皇の天保八年）には戸數百五十九萬一千九百六十三戸、人口六百七十萬八千五百二十九人となり、その後も大體に於て戸口數の減退を示して居る。是れ抑々國勢衰頽の結果か、或はまた正祖時代に比して、その後の戸口調査が粗漏になりたる爲めか、若

くは政治の紊亂が一層甚だしくなりたるに基くかは、容易に斷じ難いが、いづれにしても輕々に看過することの出来ない現象である。

## 第五節 李朝末葉の戸口

李朝時代を通じ、最も戸口調査の完備して居るのは正祖時代にして、その十三年には、各地方の詳細なる戸口記録を存して居るが、朝鮮と諸外國との交渉が次第に繁くなり、殊に國情漸く困難に傾いて來た李太王時代に於ける、朝鮮の各地方別の戸口數を知ることとは、その政治、經濟、社會狀態などを研究する上に於て極めて大切なるものである。哲宗三年壬子式京外戸口調(西曆一、八五二年)に據ると、朝鮮全土の戸口總數は、戸百五十八萬八千八百七十五戸、口六百八十一萬二百六人にして、それより十二年後の李太王元年甲子式京外戸口調(西曆一、八六四年)では、戸百七十萬三千四百五十戸、口六百八十二萬八千五百二十一人となつて居る。勿論當時の調査が何處まで正確であつたかは知ることが出来ないが、國力の疲弊し、政治の腐敗を極め、經濟の發達せず、國民生活の窮狀に陥り、且つ衛生狀態の幼稚であつた、當時の戸口増加率が遅々たるものであつたことは想像に難くない。左に引用した戸口記録は、李太王五年(西曆一、八六八年)乃至八年の編纂に係る、各地方の邑誌中より拔萃したも

ので、中にはこれに洩れたる地方もあり、また邑誌中に戸口記録を缺きたるものもあるので、同時代の編纂に係る「輿載撮要」中の戸数を以て補つてある。當時の各地方の戸口数と現在とを對比するときは、この間に於ける國勢の消長を推知するの資料ともなり、極めて興味ある事實を發見する。

各地方別戸口数 (×の印あるは「輿載撮要」中に記載の數字である。)

地方別	戸数	人口		計	備考
		男	女		
京城畿					
安城郡	四,四五九	八,八七三	八,八七三	一七,七四七	壯男 四,八六三 老男 二,七〇九
龍仁縣	四,三〇〇	二,二三九	一,四三〇	二,二六五九	壯女 五,四八六 老女 二,三三八 弱女 一,〇五〇
麗州牧	× 六,二〇〇				
陽智縣	一,六三八	一,八〇二	一,七九七	三,五九九	
砥平縣	二,二三三	五,二四四	四,五七五	九,八一九	
利川府	四,九六七	二,九九五	二,三四三	二五,三三八	
通津府	二,五二四	五,九〇七	四,六九〇	一〇,五九七	
楊根郡	四,四七八				
始興縣	一,五五七	二,七九二	二,八九七	五,六八九	
仁川府	二,七三三	四,三四三	四,九〇八	九,一五〇	

第一章	戶口の變遷	楊州牧	高陽郡	坡州牧	積城縣	麻田郡	朔寧郡	漣川縣	加平郡	安山郡	富平府	陽川縣	金浦郡	喬桐縣	陽城縣	陰竹縣	振威縣	竹山府	南陽府	果川縣
		二,二五二	二,八九〇	三,一〇九	一,四一八	九二〇	一,二四九	一,三三八	二,七四四	二,三二〇	二,七五七	一,〇三九	一,五六六	二,八八七	二,四六〇	二,二八〇	二,〇五一	三,七三三	六,三二天	二,四六〇
		三〇,三三六	六,六二七	五,三二六	三,六六九		二,三四八	三,六〇五	四,五七七	一,七七三	四,二五六	三,八〇〇	一,〇七〇七	三,八〇〇	一,〇七〇七	四,一三四	六,六八五	三,八〇〇		
		三〇,三三六	六,五四八	四,四七一	二,六四三		二,三三六	三,二〇九	三,四一九	一,八六九	三,八六三	三,一〇二	六,八五九	三,一〇二	六,八五九	四,三八五	九,八六四	三,一〇一		
		六〇,三六一	一三,一七五	九,七七七	五,三一一		四,六七四	六,八二四	七,九九六	三,六四二	八,一九	八,三二七	一七,五六六	六,九〇二	一七,五六六	八,五一九	一六,五四九	二二,一九四	六,九〇二	
					以庚午帖籍爲準						壯男二,三二九 老男一,〇三四 弱男一,〇二三	壯女一,九六九 老女一,〇七 庚午籍準 弱女八三三								

朝鮮の人口現象

抱川縣	二四,七〇〇	三四,〇〇九	三〇,八〇〇	六,四八九	辛卯帖籍爲準
永平郡	一四,〇〇八	九,〇二六	七,三〇三	一六,三三九	庚午式
長湍府	五,四一八	五,三七〇	六,一三〇	一一,五〇〇	
豐德郡	二,七四四	三,三七八	三,六五一	六,九九九	
交河郡	二,三六一	九六,三九二	九九,六八六	一九六,〇七八	
漢城府	× 四〇,五五五				
水原府	× 一四,五八八				
廣州牧	× 一六,〇五〇				
開城府	× 一,四五〇				
江華府	× 八,四九五				
除城縣	× 二,二四五				
清安縣	× 二,八〇五				
鎭川縣	五,七〇七	一三,五二二	一六,六九九	三〇,二二一	以丙午式爲準
木川縣	三,三四八	八,五五四	七,八九五	一六,四四九	壯男 四六,二七〇
燕岐縣	二,五〇一	五,二四六	四,九三五	一〇,一七一	老男 一九,二七〇
全義縣	一,六二五	二,七六五	三,五九三	六,三五八	英宗辛卯式
平澤縣	× 一,四〇八	二,九二八	三,七九七	六,七二五	壬子式
壯女					四,五三九
老女					一,五六九
弱女					一,七八七

湖西

牙	清	天	泰	溫	韓	槐	報	德	瑞	沃	魯	恩	懷	連	保	鎮	清
山	風	安	安	陽	山	山	恩	山	山	川	城	津	德	山	寧	岑	州
縣	府	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	郡	縣	縣	縣	縣	縣	縣	牧
三〇四五	二六六六	三六〇〇	四三七三	二,八一六	三,二六四	三,七八八	× 四,七四八	五〇四四	六〇六九	六〇二二	二,五二九	四,二四〇	二,四九〇	三,五二八	三,六九七	一,八七七	一,三〇九
								七,八〇八	一一,五九八	一三,六一五	四,八二七		五,二七八	八,二四	三,五五三	三,三八五	
	四,二五九		七,六七九	六,七二九	六,四〇一	八,五七四		一〇,五六四	一二,〇三三	一四,二三五	四,八五六		五,〇一七	八,三四四	三,四二〇	二,三五六	
	三,五五三	一,三〇〇	七,一九五	八,七二四	五,三五五	六,八一〇		一八,三七二	二二,六二〇	二七,七五〇	九,六八三		一〇,二九五	一四,九六八	六,九八三	四,六四三	
	七,八三三		一四,八七四	一五,四四三	一一,七五六	一五,三八四		以己卯帖籍爲率	每年戶口不同	以辛卯帖籍爲率			以丙午式爲準	己酉式年			
	準己卯式		己卯式	己酉式	丙午式帖籍爲率	庚午籍戶總											

朝鮮の人口現象

藍浦縣	結城縣	禮山縣	唐津縣	新昌縣	懷仁縣	青山縣	黃澗縣	永同縣	石城縣	定山縣	青陽縣	扶餘縣	鴻山縣	庇仁縣	公州牧	稷山縣	海美縣	洪州牧
四〇四三	七六一	二八二六	五六六	一九七一	二二八九	二二五〇	二二五五	二、四九二	一七六九	二、二四五	二、九五三	二、七七八	三、八九三	三、三三一	一六、三四九	三、三七一	二、六五九	一、七四五
七六八二	一、三四八	四四六三	一、〇九四	三、三六一	二、六九九	四、二四八					五六二四	六、四四六			七、一四八	四、二六〇		
八四六一	一、三六八	四、六二二	一、〇八二	四、五七六	二、一九三	六、七七七					六、七八九	六、七五九			八、二一〇	四、八八〇		
一六、一四三	二、七二六	九、〇八五	二、一七六	七、八三八	四、八六二	一〇、九七五	七、六一九		八、九九二	七、九三六	二、八二三	一、三、〇五	一、六四三	一〇、七〇四	一五、三五八	九、一四〇	五〇、二七一	
			庚午式元戶	庚午式	庚午式	庚午式帖籍爲率					以己卯帖籍爲率					壯男 三、三二一 老男 五、一八 弱男 四、一	壯女 三、六三二 老女 七、〇二 弱女 五、四六	

第一章 戸口の變遷	龍安縣	益山郡	礪山府	高山縣	珍山郡	錦山郡	全州府	沔川郡	大興郡	舒川郡	丹陽郡	延豐縣	永春縣	堤川縣	文義縣	林川郡	忠州牧	
	一、六八一	三、九八六	二、八六四	三、八二〇	二、一五九	六、八二八	二、一七六	三、四六六	三、三八〇	三、一三九	二、〇二六	一、六二七	二、三〇〇	二、八七一	三、〇〇九	三、六八四	一八、二四	
	二、六八六	七、〇四二	四、三七一	九、六〇五	五、五二五	一一、七七六	四、一六〇	五、四七二	三、〇七三	三、五八四	二、三七四	二、三九四	七、五九九	八、七二八	五、〇三三	八、七二八	二五、二九〇	
	二、九二六	七、八二四	四、五〇〇	九、九三五	五、四六七	一一、八二〇	三、八六三	三、〇七三	三、六三九	二、四七八	二、四七八	六、九九四	四、七六一	八、七二一	四、七六一	一九、八二二	一九、八二二	
	五、六二二	一四、八五六	八、八七一	二九、五四〇	一〇、九九二	二四、五九六	七、二七七	一一、九八六	一三、五四五	七、二二二	四、八五二	一四、五九二	九、七八四	一七、四四九	九、七八四	一七、四四九	四、五二〇	
				己酉式爲準	庚午式爲準				以丙午帖籍以率									庚午式爲準

湖 南

朝鮮の人口現象

扶安縣	七九三二	一九〇八六	一九三八二	三八四六八	丁卯式
古阜郡	六,五三六	一,七七七	二六八八八	二八,六六五	己卯帖籍爲率
玉果縣	二,三〇六	三,四七三	五,二七六	八,七四九	己卯帖籍爲率
昌平縣	七,六〇一	三,六一三	三,九八八	七,六〇一	己酉式帖籍爲率
同福縣	二,二五六	三,四〇七	四,三四五	七,七五二	壬子式
和順縣	一,七四一	二,六〇六	三,一六一	五,七六七	
綾州牧	四,九一九	九,八五一	八,八七六	一八,七二七	己酉帖籍爲率
南平縣	五,二五四	八,六六一	一一,八四一	二〇,五〇三	
康津縣	七,八五五	一三,四五四	二二,三三一	二六,六八五	
興德縣	一,九五八	四,六八四	三,七七三	八,四五七	
高敞縣	× 二,三二八				
靈光郡	一三,六八九	二二,二七八	三三,四九八	四四,七七六	丙午帖籍爲率
茂長縣	六,八三六			二七,五八五	
長興府	八,一〇三	一一,五九〇	九,一六七	二二,七五七	
寶城郡	四,六四六	九,九三三	二二,三一一	三三,二四四	
茂朱府	五,四〇五	七,三〇九	五,八六六	一三,一七五	己卯帖籍爲率
鎮安縣	五,七七七	一〇,七三三	一一,四四四	二二,一五六	同
龍潭縣	三,一五二	五,九三〇	六,九二二	二二,八四二	丙午帖籍爲率
長水縣	二,七二二				

雲	光	潭	淳	羅	長	井	順	樂	興	咸	務	靈	海	珍	南	任	谷	求
峰	州	陽	昌	州	城	邑	天	安	陽	平	安	岩	南	島	原	實	城	禮
縣	牧	府	郡	牧	府	縣	府	郡	縣	縣	縣	郡	縣	郡	府	縣	縣	縣
一、三六八	七、二四	五、五三三	四、二七三	一六、六九七	六、六〇三	二、四六八	一四、三三八	二、七七六	九、九七四	一、九二二	四、一〇三	八、二二六	五、九七八	五、八六〇	一〇、七八二	六、六七五	二、六三五	一、五三二
		九、五六六	八、六三六	一五、八〇六	九、五九六	四、六七五	二五、〇一九	四、九八六	一八、四七三		八、九三八	一四、二六三	八、九二二		一九、〇九五	一一、九八五	五、三三二	三、八三五
		八、六五五	七、九八九	三〇、〇八九	三、一六一	五、〇一〇	二〇、〇五一	四、〇二二	二二、五八〇		九、〇四五	一五、一九一	九、九八〇		一七、二一一	一二、七七七	三、三五二	三、四二二
		一八、二四一	一六、六二五	五五、八九五	二二、七五七	九、六八五	四五、〇七〇	八、九九八	四、一〇五三		一七、九八三	二九、四五四	一八、八九二		三六、三〇六	二四、七三二	八、五八四	七、二五六
		丙午帖籍爲率	庚午式年					丙午帖籍爲率							己卯式			

第一章 戸口の變遷



第一章 戸口の變遷	清	順	安	慶	昆	咸	咸	草	漆	東	青	仁	密	安	聞	柴	熊	三	酒
	道	興	東	州	陽	安	陽	溪	谷	萊	松	同	陽	義	慶	原	川	嘉	川
	郡	府	府	府	郡	郡	郡	郡	府	府	府	府	府	縣	縣	縣	縣	縣	縣
	八,二二二	三,三三〇	八,〇〇一	一八,六八五	四,一七七	四,七四六	四,九九九	三,四二一	三,八二〇	七,六六一	三,三三三	三,八二一	一〇,二三六	一,五〇九	三,五四八	二,七二九	三,一〇九	四,二〇七	四,〇三三
	一四,四一九	六,九五八	一六,六一九	三〇,〇六四	七,三九九	七,八一	一〇,二七二	五,六五六	七,〇八一	一四,六一七	五,四九九	九,三〇四	二〇,三六一	五,二八七	五,八六七	七,二七五	九,九四一	七,三六五	九,九五五
	一九,八二八	九,九〇六	二二,九九〇	四二,四三八	九,五三二	一三,三六六	一三,八九六	七,六四〇	七,八三三	二二,七二二	六,三三三	八,〇四八	三〇,五二五	五,一五二	五,六四九	八,四四三	一〇,六四〇	九,九三〇	一〇,六四〇
	三四,二四七	一六,八六四	四〇,六〇九	七二,五〇二	一六,九九〇	二一,一七七	二四,一六八	一三,一九六	一四,九〇四	二七,三三九	一一,八三一	一七,三五二	五〇,八七六	一〇,四三九	一一,五二六	一五,七二七	二〇,五八一	一七,三三〇	二〇,五八一
								庚午式	庚午式	庚午式		庚午式	丙午式	丙午式	同	庚午式	庚午式爲準	己酉式	庚午式爲準

朝鮮の人口現象

永川郡	八三三七	三,一九〇〇	一九,一二五	三三,〇二五	辛卯式
清河縣	一,七四五	三,四三三	三四,八五五	六,九〇七	丙午式
滌陽縣	一,二三四	四,三二一	四九,九五五	九,三〇七	從辛卯式
眞寶縣	一,三三七			六,三七一	庚午式
玄風縣	三,四八二	八,四五一	五二,八八	一三,七三九	庚午式爲率
軍威縣	二,四四一	五,二四三	五,五三三	一〇,七六五	庚午式爲率
義興縣	三,六四五	一〇,四五五	一〇,三四二	二〇,七九七	庚午式爲率
陝川郡	六,六一九	一五,七〇三	一三,七六八	二九,四七一	同
金山郡	五,七〇四	一三,四九六	一四,一六四	二七,六六〇	辛卯式
固城郡	九,九三三	二三,〇九〇	二三,一〇〇	四六,一九〇	庚午式
南海郡	三,九〇九	八,六八九	八,六四六	一七,三三五	甲子式
開寧縣	四,二三五	九,一四九	九,四四三	一八,五九二	己酉式
新寧縣	四,〇〇九	九,八七七	一〇,五七二	二〇,四四九	辛未式
禮安縣	一,三三三	二,二〇六	一,六八九	三,九九五	
延日縣	三,九八九	八,九九九	九,五六九	一八,五五八	
長鬐縣	二,二九二	五,一六一	四,三九九	九,五六〇	
靈山縣	三,五五六	八,〇四〇	九,三七四	一七,四一四	辛卯式
醴泉郡	六,二九六	九,八八一	二二,九九三	三二,八七四	庚子式
榮川郡	三,三三三	七,七三三	九,七〇六	一七,四二九	

第一章 戸口の變遷	興	豐	梁	昌	機	比	慈	英	晉	蔚	大	寧	宜	鎮	咸	知	高	山	昌	
	海	基	山	寧	張	安	仁	陽	州	山	邱	海	寧	海	昌	禮	靈	清	原	
	郡	郡	郡	縣	縣	縣	縣	縣	牧	府	府	府	縣	縣	縣	縣	縣	縣	府	府
	三,三九〇	二,四三九	二,〇七九	五,七七四	二,七七九	二,八八六	三,〇八一	一,八七〇	三,五二七	八,三三一	一三,一九四	一,五〇三	七,三二七	一,四一四	二,二七五	二,三二三	二,五六五	二,三二四	七,三〇一	×
	五,八五七	四,五三六	五,五五七	一三,七三五	六,三〇一	四,八六四	三,六〇九	八,二五六	一三,四七三	二四,七九四	四,〇三一	一五,〇〇五	三,〇五八	四,五五五	五,九四七	四,六五七	五,五三四	四,三三九		
	五,五〇〇	四,四六一	六,六二二	一七,四三三	四,三二二	四,四二七	四,八二四	八,五三三	一四,〇〇八	三三,一六八	四,六七七	一五,〇七五	二,二九〇	五,四三八	四,四〇五	六,三三八	四,三三九			
	一一,三五七	八,九九八	一一,二七八	三二,一六八	一〇,五三三	九,二九一	一一,六二二	八,四三三	一六,七八八	二七,四八一	八,六五八	三〇,〇八〇	五,三四八	九,九九三	一〇,三五二	一〇,九八五	九,八五三			
		庚午式	辛卯式	庚午式	庚午式	戊子式			庚午式	庚午式	庚午式	庚午式	同	同	同	甲午爲式準	庚午式			

朝鮮の人口、現象

尙州	×	一七八八					
星州	×	一九三三					
金海	×	六,九三五					
善山	×	七,五九〇					
巨濟	×	七,五九〇					
居昌	×	四,〇七〇					
河東	×	三,九〇九					
載寧		七,〇〇〇	一三八三二	二,一九二	二五,〇二四	丙僧戸六二	
鳳山		八,八七二	二,三四七六	二,二六九七	三六,一七三		
安岳		一四,五九八	二六,五二二	二四,一六五	五〇,六七七	辛卯式	
信川		四,三〇六	六,七五	八,二六七	一四,九九二	庚午式	
文化		七,三〇五	一三,〇三四	一三,三三八	二六,三五一		
長連		三,三三八	八,四〇八	七,八九三	一六,三〇一	庚午式	
豐川		四,〇一四					
松禾		三,三三六	七,三二四	七,八三八	一五,一五一		
長淵		五,九二四				庚午爲準	
殷栗		三,〇六二	五,三六〇	五,三九二	一〇,七五二	己卯帖籍	
		三,五三三	五,二七九	八,六五四	一五,九三三	庚午帖籍	

海西

第一章 戸口の變遷	三 陟 府	一、一四一	三、〇〇七	二、四七五	五、四八二	丙午戶籍
	平 珍 縣	三、三七四	七、〇二四	七、七〇一	一四、七二六	
	海 郡	二、四九五	四、九三五	六、八二〇	一、一七五五	
	杆 郡	二、五四二				
	關 東					
	康 翎 縣	二、五九八	四、六三六	三、四三三	八、〇六九	
	甕 津 縣	三、一五一	六、八三八	四、四二六	一、二二五四	
	新 溪 縣	× 三、〇〇〇				
	兔 山 縣	× 一、二四四				
	瑞 興 府	六、三八七	一、五、一六四	一、二、七五	二、七、八八九	
白 川 郡	五、一三九	七、六〇九	五、〇七一	一、二、六八一		
延 安 府	五、八一五	八、九九四	八、七〇八	一、七、七〇一		
平 山 府	八、五三〇	一、九、四一九	一、七、三三四	三、六、六五三		
金 川 郡	二、七〇九			一、一、三八〇		
海 州 牧	一、四、八三三	三、六、九九六	三、三、九七一	六、八、九六七	己卯式爲準	
谷 山 府	三、三七三	一、二、三四六	一、〇、〇一八	二、二、三六四		
黃 州 牧	八、四一九	一、一、四一一	二、二、〇四八	二、三、四五九		
遂 安 郡	三、五九九					



第一章 戸口の變遷	鏡	明	吉	慶	慶	穩	鍾	會	定	永	高	文	德	安	歙	襄	江	
	城	川	州	興	源	城	城	寧	平	興	原	川	源	邊	谷	陽	陵	
	府	府	牧	府	府	府	府	府	府	府	郡	郡	府	府	縣	府	府	
	七,五六六	八,四四七	六,八六八	二,三六八	三,三九四	三,三七三	六,〇四五	七,七三〇	三,四〇七	九,〇〇八	二,三三六	一,五二三	二,二〇六	五,二一六	七〇八	二,三三九	六,一一一	
	二五,八〇六	二四,一九七	一九,四七三		六,八三五		一〇,一二二	一七,六四九	一一,四九五	二六,〇九五	五,三六五	六,〇九一	一六,八〇一	一六,八〇一	四,三七四	一〇,三一一	一〇,三一一	
	二五,八六〇	二四,二〇三	二二,六三四		六,四〇七		一一,〇一六	一七,五八〇	八,九七三	三三,八九四	四,二二七	四,一三三	一五,三三七	一五,三三七	四,一八七	一六,三三六	一六,三三六	
	五一,六六六	四八,四〇〇	四二,一〇七		二,三三四		二,一二八	三五,二三九	二〇,四六七	五九,九八九	九,四八二	一〇,三三三	三三,〇三八	三三,〇三八	八,五六一	二六,五三七	二六,五三七	
				辛未式				庚午式	内僧三戸三口						庚午式	内僧五七戸一〇七口		
				男三,九七八														
				女三,九一九														
				老弱三,九七七														

北關

朝鮮の人口現象

富寧府 三、一〇〇 九〇五五 七三三七 一六、三九二  
 壯男 四、八九八  
 老男 二、四六九  
 弱男 一、六八八  
 壯女 四、四五三  
 老女 一、九三三  
 弱女 九五一

茂山府 四、七〇〇 一二、四九六 一三、二五五 二五、六二二  
 內僧 二月二八口

洪原縣 四、〇〇四 八、九三三 七、四四四 一六、三三七

北青府 七、五四四 一三、七二二 三七、八二二 三六、二三四

利原縣 二、二六四 一、六三三 一、〇一〇 一、四一七

端川府 四、五二八 一、三七一 一、六三八一 一、四一七

甲山府 三、七四五 一、三七一 一、六三八一 一、四一七

三水府 二、〇八一 一、三七一 一、六三八一 一、四一七

長湍府 二、二五四 一、三七一 一、六三八一 一、四一七

咸興府 × 二、六三四 一、三七一 一、六三八一 一、四一七

關西

永柔縣 自一等至十等戶 總四千十一戶 內一千二百八十五戶 兵擾時流散時存二千七百二十六戶

雲山郡 二、三四〇 九、五五七 六、四四五 一六、〇〇二

孟山縣 一、一一〇 二、五八〇 二、〇六八 四、六四八

三和府 四、〇二六 二、〇六八 二、〇六八 四、一六六

殷山縣 合籍戶二、〇五二戶 還戶一、〇九三戶 庚辰家坐 四、一六六

定州牧 一、〇三三 一、〇三三 一、〇三三 一、〇三三

渭原郡 七、六六四 一、〇三三 一、〇三三 一、〇三三

第一章 戸口の變遷	江	州	府	籍戸一〇,三三四戸	内六,三三三戸 三,九〇戸	本府	實數三,六三三戸	
	朝	城	府	三,七三三		各鎮	一一,九六八	
	龜	府	一,九〇七					
	平	壤	府	實戸八,二六五	雜頃	三,〇四六	都計二,三二一	
	龍	川	府	五,九四三	一五,四八八	一五,六三八	三,二二六	
	順	安	縣	四,三三〇	一〇,四五八	七,四三三	一七,八九一	
	成	川	府	六,五〇七			四八,一七一	
	泰	川	縣	三,〇五七	六,三二一	四,九二四	一一,二四五	
	江	東	縣	三,五二二				
	德	川	郡	一,〇一七				
	照	川	郡	籍戸四,五〇五戸	遺戸一,六九〇戸			
	楚	山	府	七,一〇〇	一七,九三九	六,五六七	二四,五〇六	
	安	州	牧	× 七,七九六				
	慈	城	郡	四,八三一	八,一六五	四,四〇五	一一,五七〇	戸丁凡 應戸 八五
	厚	昌	郡	籍戸二,三五五	丁民五,四六一名	應役戸六五〇		壯計幕戸 丁 八五三
宣	川	府	八,三四六	一八,八四九	一三,五三九	三三,三八八		
碧	潼	郡	六,四九六	九,六九六	四,一五六	一一,三八五二	辛卯式籍總	
龍	岡	縣	× 八,〇一〇					
成	從	府	三,四四三					

朝鮮の人口現象

義州府	寧邊府	慈山府	順川郡	价川郡	中和府	泰川縣	陽德縣	江西縣	肅川府	鐵山府	郭山郡	甑山縣	三登縣	寧遠郡	嘉山郡	昌城府	祥原郡	博川郡
×						×			×				×					×
一二,六六八	五,三七九	二,〇四〇	四,六八九	四,一七七	七,七八七	二,二二五	二,六一五	四,二七一	六,五〇〇	七,二六六	一,五八二	二,二七八	二,二二八	一,八六四	四,五四五	三,〇八九	三,二五六	
	二,八五〇	四,五〇九	八,三六一	九,三三一					一,五三三				三,三三六		七,六九八			
	二六,二八四	三,〇一七	六,六二九	六,一九一					一四,五二七				二,二〇四		五,四五七			
	五五,一三四	七,五二六	一四,九九〇	一五,四二三					二九,八三〇				五,五四〇		一五,九五七			六一四

丙午帖籍爲率

李朝の戸口記録

慶 尙 道 地 理 誌

本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌...

本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌...

本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌... 本道地... 地理誌...

世宗實錄地理誌



以制于... 驛一泉... 長... 西... 軍... 堅... 嶺... 津... 范... 隸... 東... 十二... 廠... 真... 海... 奇... 知... 水... 丙... 以... 十... 簡... 山...



松都誌

松都誌

松都誌

松都誌

之於 國家者是其會之人與得土服之於是

記其見在云

實戶八千二百六十五

總戶三十一百十六

都合一萬一千三百十一戶

官銀一百二十一

官銀五十九

善人天地之記江山軍復之善平壤山明水秀

人才之出其後若地邑無莊也始即縣置所設

以及海傳聞而錄之以為高山景行之助云

高麗麗澤運使魯暉可錄人謂之愚澤連陽同王

次女白蟻為後漢復國歌辭代逸東為絕降疾國

新數十餘級軍車車帶香學大克王加款曰是春

將也賜爵大兄及平國王所使使連秦曰新羅制

魂氣之地為韓百姓高根未嘗忘父母之同胞

大王不以道不肖自處兵以壯必復各地玉許之運

駭行誓曰雖立規竹機以而不歸於我則不廷也

幾義羅人戰者阿且誠軍高烈夫而中而死

生

高命王慶田 李

戶口

將則今處時為氣之門胡爾痛比牛孟門外至後西

江星幾相接 皇運之役日款消耗昔則一隊為

二萬餘戶今通四部七面僅六千餘戶

若爾內子或戶九千四百〇三日三萬四千二百八十

今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

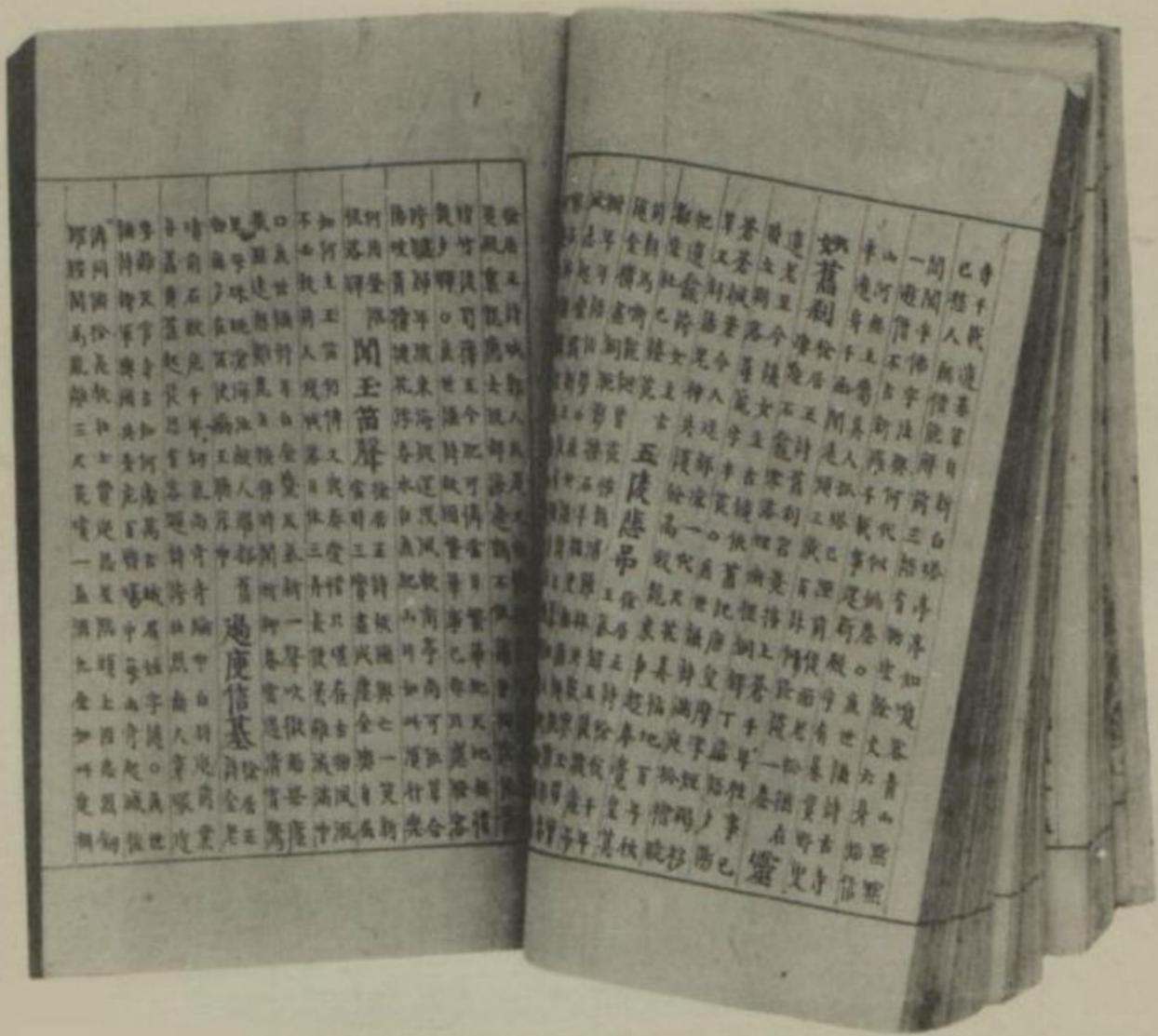
今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

今上庚子式戶一萬一千四百五十五

戶口

今上庚子式戶一萬一千四百五十五



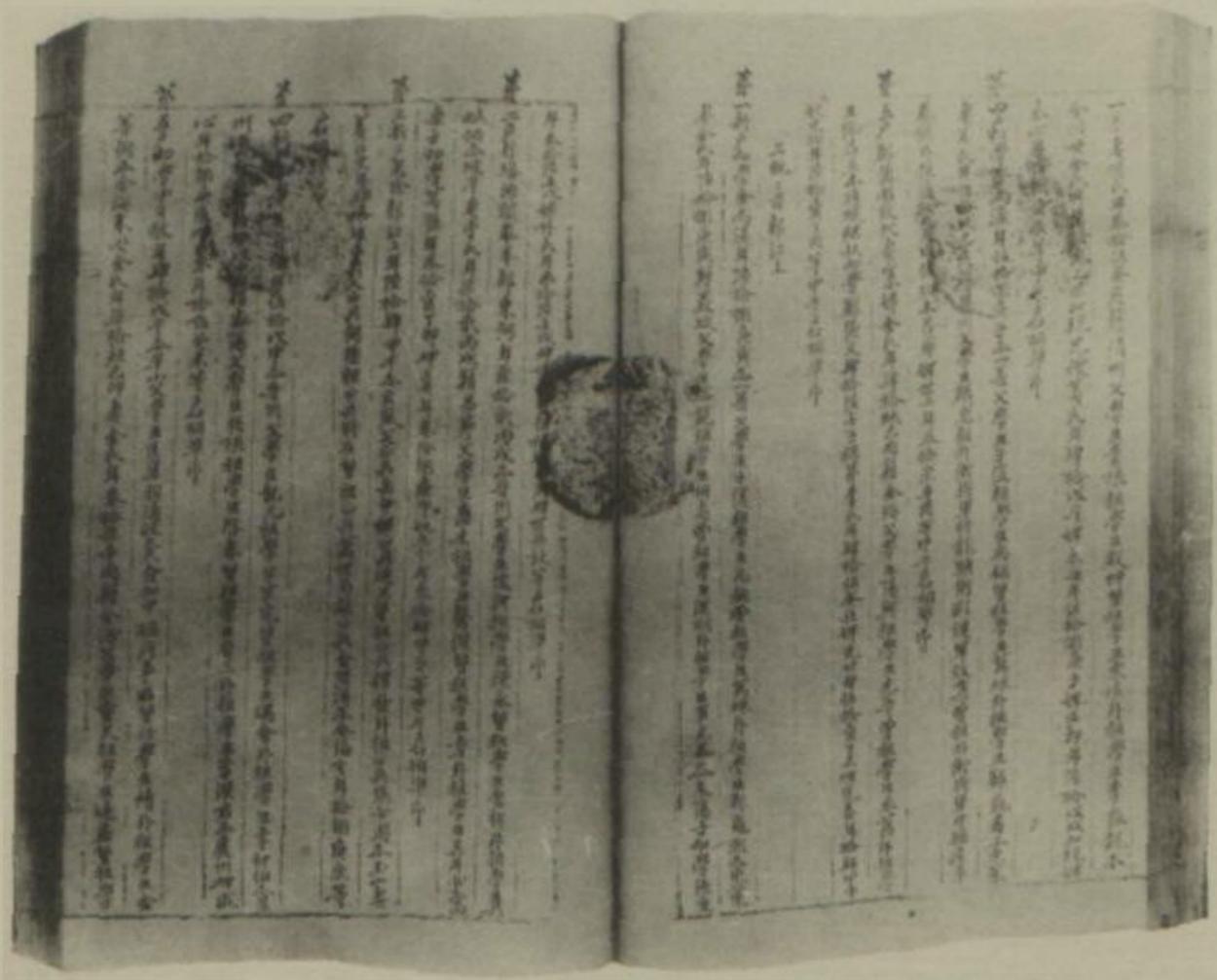
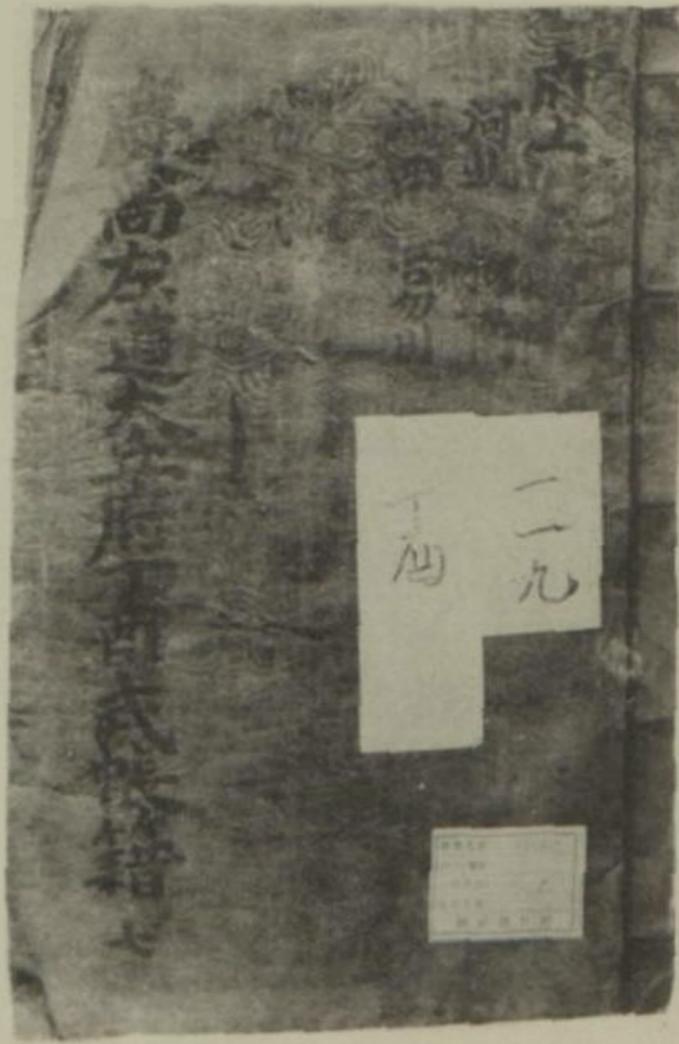
嶺南邑誌



光  
州  
牧  
志

<p>城池 巴城石華周八十二百五十三步高九尺門四</p> <p>形勝 全羅日邑 街 城俗 註 山川</p>	<p>戶口 元戶八十三百八十三戶 七口 田結 光州一萬九百七十結四十六員四乘</p>	<p>東面 西面 南面 北面 古内城 船道</p>
---	--	---

大丘府丁酉式帳籍





各地方の邑誌に現はれたる李太王時代の戸口數は大略右の通りであるが、更に李朝末葉の戸口に關しては、信夫淳平氏著「韓半島」中に、韓國戸口及び京城五署の戸口表を掲げてあるから、參考の爲めこれを茲に引用して置く。

明治三十三年初韓國戸口表

地方別	人口	戸數	今より五十年前の調査といへる戸數
漢城府	一九六、八九八	四二、四五四	一六六、九一五
京畿道	六六九、七九八	一七二、七六三	
忠清北道	二七五、八八二	七三、八三四	二二九、七六八
忠清南道	四三二、六〇一	一一九、三三三	
全羅北道	三八六、一三三	一〇七、一四六	二八六、五九八
全羅南道	四三七、六六〇	一一八、一三九	
慶尙北道	五九〇、六〇二	一五八、八七九	三八八、六二九
慶尙南道	四八三、六一六	一三〇、七四四	
黃海道	三六一、九〇七	九五、三二二	一一六、一五一
平安北道	三九三、九七三	九五、五八三	
平安南道	三九〇、二九九	一〇一、二一一	二二八、〇二九
江原道	二七六、七三六	七九、八三七	六七、〇二二

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

九〇

咸鏡北道	二〇五〇八	四四、五九一
咸鏡南道	四三七〇一九	五九、二七四
合計	五六〇八一五	一、三九七、六三〇
		一、五五六、六六五

右の統計表中、明治三十三年の戸口數は、當時の漢城新報の記事を基礎とし、五十年前(今日より七十餘年前に當る)の戸數は、菊池謙讓氏の「朝鮮王國」に據つて作製したものださうである。惟ふにこの五十年間の朝鮮は、國礎動搖し、内憂外患相亞ぎたる時代で、止むを得ず安住の地を國外に求め、邊疆を出で、滿洲及び西比利亞方面等へ、移住した朝鮮人の數は頗る多かつたと思ふ。また内に在つても國民の流離荒亡せる者が尠くなかつたから、戸口數の減少を見たのも當然であつたらうと信ずる。「惡政は虎よりも猛し」と云ふ諺があるが、國力の萎微が人口の消長に影響することの大なるは、これに依りても知ることが出來やう。

明治三十二年七月京城五署戸口明細表

署名	戸數				人口	
	瓦屋	草屋	半瓦屋	計	男	女
中署	二、一〇六	一、三三〇	五二〇	四、〇四六	二、二二二	一、八二四
東署	七六九	六、六四五	五〇一	七、九一五	一、八四六	一、五八〇
西署	二、四八一	一〇、二七七	一、五〇〇	一四、一〇八	三、三九〇	二、〇六三
合計						

南	署	二二七〇	六九五六	一三四八	一〇六七四	二六三〇〇	二二、六九〇	四九、九九〇
北	署	七六	四、八七三	五三四	六、一三三	一五、六七二	二二、七八二	三九、四五四
合	計	八六五二	二九、八三一	四、三九八	四三、八七〇	一〇五、五三〇	九五、三九三	二〇〇、九三一
三十一年末		?	?	?	四四、〇六一	?	?	二二、〇五二

この調査では、明治三十二年七月の京城の戸数は四萬二千八百七十戸、人口二十萬九百二十二にして殊に戸數を、瓦屋、草屋、半瓦屋に區別して計上した所は頗る面白く、瓦屋の僅に八千六百五十二戸なるに對し、草屋の二萬九千八百三十一戸、半瓦屋の四千三百九十八戸あるは、當時の都市の經濟事情と、市民の生活狀態とを窺知するに足るものであつて、今日と比較するときは實に今昔の感に堪へなす。

李朝末葉の戸口に就いての記録は區々にして、いづれを正しいと斷じ難いが、光武八年の調査では百四十一萬九千八百九十九戸、五百九十二萬八千八百二人となつて居る。然るに財務顧問部編輯の「韓國戸口表」に據ると左の如くなつて居り、光武十年の内務部調査の戸口は光武八年の調査に比して減少して居るが、明治四十年五月に行つた警務顧問部の調査は、戸數に於ても人口に於ても從來の記録を遙かに突破し、戸數二百三十三萬三千八十七戸、人口九百七十八萬一千六百七十一人を算するに至つたのである。

韓國戶口表

光武十年度(明治三十)内務部調査

明治四十年五月二十日  
警務顧問部調査

戸	口
一、三八四、四九三	二、三三三、〇八七
五、七九三、九七六	九、七八一、六七一

右の如く内務部の調査と警務顧問部の調査とは、戸數に於て約百萬、人口に於て約四百萬の大差あり、後者を比較的正確とすると、從來の戸口調査の杜撰であつたことに驚かされるが、この警務顧問部の調査も、その後の戸口調査より推測して、實數より遙かに過小に計上されて居るやうに思ふ。明治三十九年より同四十二年までの間に於ては、朝鮮人の戸口調査は一回しか行はれなかつたものと見え、同一の數字が擧つて居る。當時の國情より見て、その調査には尙ほ不正確なる點が尠くあるまいが、朝鮮總督府の古い統計年表には、左の戸口數が掲げてある。

明治四十二年以前の戸口數

年	内地		朝鮮		外國		合計	
	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口	戸數	人口
明治三十九年	二二,二三九	八三,三二五	二七,四二,三六三	二二,九四,二八二	二,四七六	五,四三三	二七,六五,八七八	一三,〇三三,〇一九
同四十年	二八,二七二	九八,〇〇一	二七,四二,三六三	二二,九四,二八二	一,九六八	八,四一八	二七,七九,〇〇一	一三,〇四〇,七〇一

同 四十一年	三七,三二	一六,二六八	二七四,二六三	一一,九四二,六一	二,三三二	一〇,七七七	二七八,二六六	二,三〇七,一七七
同 四十二年	四三,四〇五	一四六,四七七	二七四,二六三	二二,九四二,二八二	二,二三三	一〇,四三七	二七八,七八九	二,三〇九,八五六

これに據ると、明治四十二年の朝鮮の戸口は、戸數二百七十八萬七千八百九十一戸、人口千三百九萬八千五百十六人となり、これを内譯すると内地人四萬三千四百五戸、十四萬六千四百七十七人、朝鮮人二百七十四萬二千二百六十三戸、一千二百九十三萬四千二百八十二人、外國人二千二百二十三戸、一萬四百二十七人を算し、前の諸調査に比して戸口數の激増を示して居るが、先づこの邊が、當らずと雖も遠からざる所であるまいか。

更に日韓併合の行はれた直前の明治四十三年五月十日の調査に係る、朝鮮人の道別及び職業別戸數を示すと左表の如くにして、官公吏一萬五千七百五十八戸、兩班五萬四千二百十七戸、儒生一萬九千七十五戸、商業十七萬八千七百八十戸、農業二百四十三萬三千四百五十戸、漁業三萬三千六百四十六戸、工業二萬二千九百四十三戸、鑛業一千四百二十九戸、日稼六萬九千三百九十九戸、其他三萬四千九百五十七戸、無職三萬一千二百二十三戸となつて居る。これを見ると、當時の經濟狀態も略ぼ窺知し得られるであらう。

朝鮮人道別戸數 (明治四十三年五月十日調)

朝鮮の人口現象

道名	官公吏	兩班	儒生	商業	農業	漁業	工業	鑛業	日祿	其他	無職	合計
漢城府	2,290	1,162	1,221	1,353	2,424	27	2,310	20	2,282	2,222	3,222	10,110
京畿道	1,110	1,279	1,271	1,520	2,077	2,221	1,773	2	2,222	2,222	2,222	10,110
忠清北道	412	5,182	1,221	4,222	2,222	2	2,222	2	2,222	2,222	2,222	10,110
忠清南道	2,222	3,222	1,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	10,110
全羅北道	1,222	2,222	1,222	1,222	1,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	10,110
全羅南道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
慶尙北道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
慶尙南道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
黃海道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
平安南道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
平安北道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
江原道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
咸鏡南道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
咸鏡北道	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110
合計	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	10,110

朝鮮の社會組織は、日韓併合前までは、兩班、中人、常民、賤民の四階級より成つて居て、非常に門閥を尙ぶ風があつた。兩班とは文武の大官または學徳の高い學者を出した家柄の正しい一族で、名

門及び身分の高い官吏となるべき資格やその他の特権を有し、中人は或る限定せられた官職にあつたもの、一族で、門地や教育が常民よりは稍高いもの、常民は農工商を業とするもの、賤民は常民の班にも入り得ない最下層のもので、白丁、奴婢、倡優、僧侶の類はこれに屬する。尙ほ同一階級のうちでも、職業によつて高下があり、年齢の老若によつてもまた差別があつた。併合後右の如き區別は撤廢されたが、實際に於てはこの階級思想は今も尙ほ残つて居るのである。明治四十三年五月の調査に據ると、兩班の最も多い地方は忠清南道にして、その道内でも、木川郡の二千三百八十八人、公州郡の二千二百三十八人、定山郡の二千二百二十二人、連山郡の一千八百八十一人、洪州郡の一千八百二十八人、大興郡の一千七百四十七人、懷徳郡の一千五百四十人、燕岐郡の一千四百十八人、稷山郡の一千百九十七人、牙山郡の一千五十人等はその最も多い地方である。これに亞ぐは忠清北道で、その中でも多いのは、堤川郡の一千八百九十人、延豊郡の一千三百十八人、忠州郡の四百八十六人である。

この外、咸鏡南道では、咸興郡の六百四十三人、洪原郡の三百八十八人、定平郡の二百八十四人、京畿道では、楊平郡の六百四十六人、楊州郡の二百二十四人、慶尙北道では、醴泉郡の百七十五人、大邱郡の百三十八人、慶尙南道では河東郡の二百九十一人、晋州郡の百七十七人、全羅北道興徳郡の五百六十五人、全羅南道潭陽郡の三百二十二二人、黃海道平山郡の百七十七人、平安南道平壤郡の百二十三

人、平安北道義州郡の百五十五人、江原道通川郡の百九十九人、咸鏡北道鍾城郡の百三十八人等はいづれも兩班の多く任んで居る郡である。今日と當時とは多少事情を異にして居るが、それでもこれ等の地方は兩班の數が多いことは事實である。而して兩班中には、今尙ほ資産勢望隆々たるものあり、政府より優遇を受けて居る者も多いが、中には時勢の變遷に依りて、産を失ひ、または志を得ざる者も尠くない。兩班に次いで社會的地位の高い儒生は、儒教の信者にして經世濟民を任として居る者である。儒生の前身には別に資格と謂ふべきものなく、士農工商を問はず郷校または成均館に入りて孔孟の學を奉ずるに至れば儒生たるを得るのであるが、多くは兩班または儒生の子孫が儒生となるのである。儒生中才學優秀なる者は山林と稱し、儒生の團體たる儒林より當路に推薦してその登用を促すを例とし、往々儒生より一躍して顯官に陞ることあり、一度拔擢さるゝや社會はこれを最高の兩班として待遇する。これ朝鮮人が争ふて儒生を志願する所以で、階級制度の嚴重なる時代の唯一の人材登用機關となつて居る。然しながら儒生中には後世自ら政争の渦中に投ずる如き者を生じ、その多數は全く生業に指を染めず、成均館及び郷校に附屬せる學田によりて糊口を凌ぎ、徒らに文廟・書院を祭るに過ぎず、無爲に時事を談じて居る者もまた尠くなかつたやうである。

これを要するに、日韓併合前の朝鮮の職業別戸口状態は、未だ近代産業の影響を受ることが尠

く、謂はゞ舊朝鮮の經濟的色彩を多分に保存して居たが、併合以後は次第に内地の經濟勢力の支配を受けて、その産業組織も年と共に變遷を來しつゝあり、従つてその傾向が職業別戸口の上にも漸次現はれて居ることは、後に示す併合後に於ける職業別戸口數によりて、明瞭に看取されるのである。

## 第六節 併合以後の戸口

韓國政府時代の戸口調査は、概して不完全極まるものであるから多く信頼し難いが、日韓併合後に於ては、戸籍事務も次第に改善せられ、戸口調査も年と共に整頓して來たので、最近に至るに従ひ朝鮮の現住戸口數は先づ比較的實際に近いものとなり、殊に大正九年十月一日には臨時戸口調査が、大正十四年十月一日には簡易國勢調査が施行され、その結果戸口統計は餘程正確なものとなつて來た。今試みに日韓併合の行はれた明治四十三年より、大正十四年に至るまでの、年末現在の現住戸口數並に大正九年十月一日、及び大正十四年十月一日に於ける現在戸口數を示すと左表の通りである。

累年戸口表

年	住居	世帯	男	女	計	一世帯平均人口
明治四十三年末	1	116,010	70,575	75,818	136,393	47.5
大正十四年十月一日	1	116,010	70,575	75,818	136,393	47.5

朝鮮の人口現象

九八

果	年	比	較
明治四十四年末	—	—	—
大正元年末	二,八七九,八七〇	七,三九七,九九四	六,六五七,八七五
大正二年末	二,九五九,九六八	七,七三二,四〇四	七,〇九四,六九七
大正三年末	三,〇四五,五六六	八,〇三二,九八二	七,四二五,八八一
大正四年末	三,二二二,二八一	八,二五九,〇六三	七,六七〇,八九九
大正五年末	三,一七九,六六一	八,三七〇,九四〇	七,九〇七,四四九
大正六年末	三,一六七,三六二	八,五七五,一六五	八〇七二,九六四
大正七年末	三,二〇五,六七七	八,七四六,九二五	八,二三二,〇八二
大正八年末	三,二五五,五五一	八,八三五,七二七	八,三二四,一九二
大正九年十月一日	三,二九七,二二六	八,九〇三,〇〇〇	八,三六一,二一九
大正九年末	—	—	—
大正十年末	—	—	—
大正十一年末	三,三三〇,八六四	八,九〇九,一三三	八,三七九,八六六
大正十二年末	三,三五六,二九五	八,九九七,五八四	八,四五五,三三四
大正十三年末	三,三六五,九四三	九,〇八八,六八四	八,五三八,〇七七
大正十四年十月一日	三,三七七,一〇五	九,二四二,三二九	八,六七〇,六四四
大正十四年末	—	—	—
大正十四年十月一日	三,三七〇,七七三	一〇,〇二〇,九四三	九,五〇二,〇〇二
大正十四年末	三,四八六,六五八	九,七三九,三〇四	九,二八六,三三三

備考 現住人口数と國勢調査の現在人口数とを、各調査の時期及び方法を異にせるを以てその数に相當の開きあるは止むを得ず

また大正十四年末の現住人口數の前年に比し著しく増加せるは、同年十月一日施行の國勢調査の影響を受け、從來届出洩の人口が集計されたる結果と思料す。

即ち明治四十三年末の現住人口數は一千三百三十一萬三千十七人であつたものが、大正十四年末には一千九百一萬五千五百二十六人に増加し、この間の十五箇年間に於ける人口増加數は五百七十萬二千五百九人となり、一箇年平均の増加數は三十八萬百六十七人に達して居る。また大正九年十月一日に施行せられた、臨時戸口調査の現在人口數は一千七百二十六萬四千百十九人であつたものが、大正十四年に施行せられた簡易國勢調査では一千九百五十二萬二千九百四十五人に増加し、この間五箇年間に於ける人口増加數は二百二十五萬八千八百二十六人に達し、一箇年平均の人口増加數は四十五萬一千七百六十五人を示して居る。また一世帯平均の人口數も、明治四十三年には四人七分五厘であつたものが、大正十四年には五人二分七厘に高まつて居る。以上を綜合して見るに、併合後に於ける朝鮮の人口増加は相當に著しく、李朝時代に比較すると殆んど隔世の感がある。勿論併合後の朝鮮は國情も一變し、施政の改善が着々として行はれ、國民經濟の充實、文化の普及、衛生狀態の進歩等に依りて、人口増加に對する障害が次第に除去され、自然右の如き結果を招來したものと思はれる。尙ほ大正十四年末の各道別戸口、並に一世帯平均人口を示すと左の通りである。

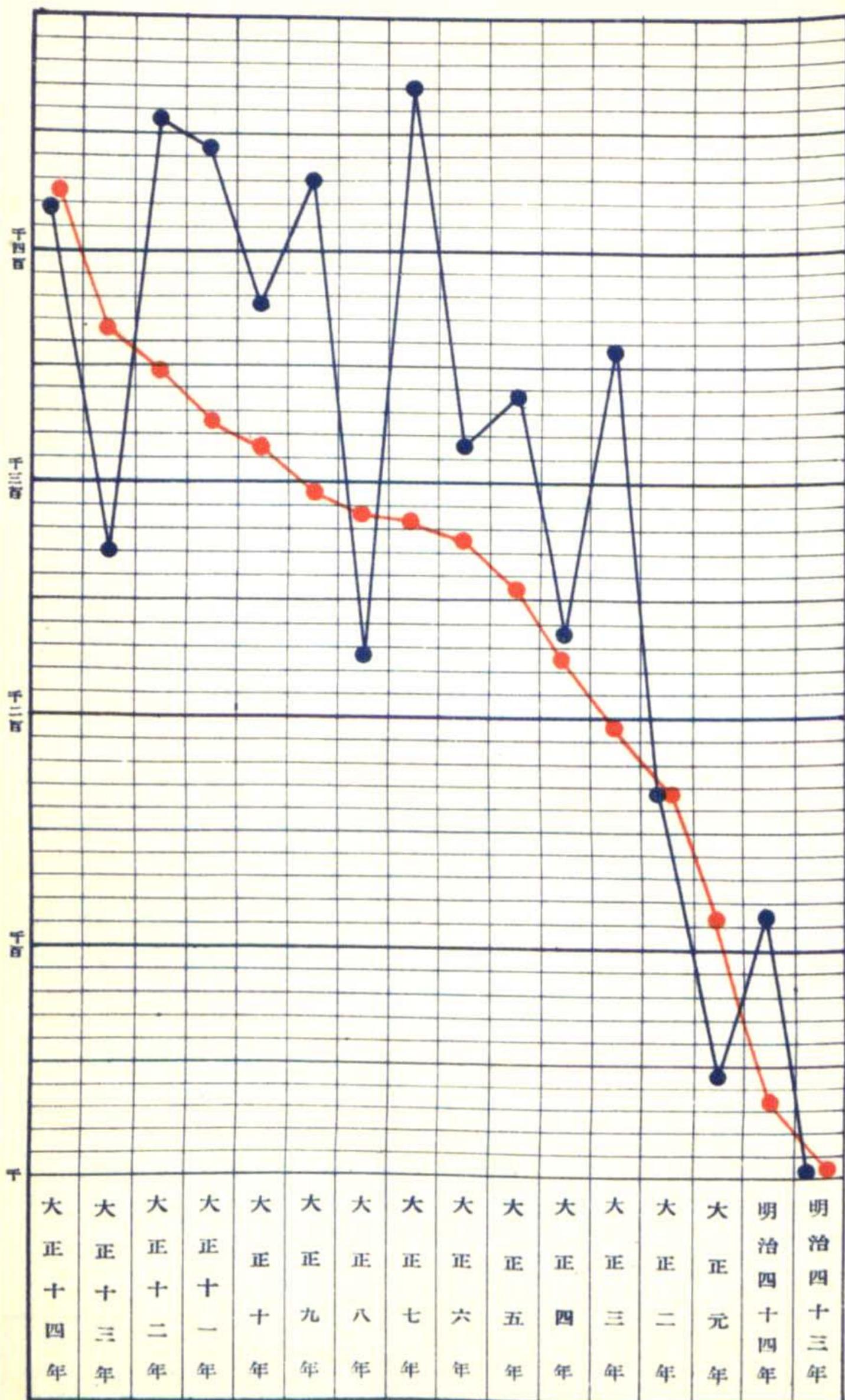
道別戸口表 (大正十四年末)

道名	世帯		人口		平均人口
	住居	世帯	男	女	
京畿道	362,456	380,835	995,619	948,906	1,944,525
忠清北道	149,104	156,643	427,715	401,514	829,229
忠清南道	221,291	233,454	641,538	602,279	1,243,817
全羅北道	254,453	263,451	693,042	647,552	1,340,594
全羅南道	396,905	435,607	1,070,275	1,046,101	2,116,376
慶尙北道	400,031	445,736	1,161,035	1,105,524	2,266,559
慶尙南道	373,829	385,827	997,990	963,941	1,961,931
黄海道	270,269	279,865	766,094	699,561	1,465,655
平安南道	328,235	338,972	729,794	627,035	1,356,829
平安北道	338,280	348,924	629,794	627,035	1,256,829
江原道	327,248	341,720	708,306	675,033	1,383,339
咸鏡南道	290,026	325,824	691,189	655,253	1,346,442
咸鏡北道	97,850	103,756	333,906	298,294	632,200
總計	3,438,658	3,609,624	9,793,044	9,286,233	19,079,277

# 併合以來の人口と米産額

(明治四十三年を千とせる指數)

● 米産額  
● 年末人口



## 内地人の戸口

古來我國と朝鮮との關係は極めて密接で、遠く神代の昔に於て、既に素盞鳴尊が半島を治め給ふた事蹟もあり、降つて崇神天皇の御代には任那が始めて日本に朝貢し、またその保護を仰ぎ、次いで新羅王子等の歸化した史實もある。神功皇后の御征韓以來、新羅、百濟の二國は長く日本朝廷の威勢に服し、高句麗もまた朝貢した。その後半島の諸國は、大陸に於ける民族消長の影響を受けて屢々動搖し、日本朝廷に於てもこれを制せんとして兵を出したことが一再でなかつた。足利時代になつては、兩國互ひに國書を齎らした使臣を送り善隣の交を厚くしたが、豊臣時代に入り、文祿、慶長の兩役があつてから、不幸にして兩國の間は一時疎隔するに至つた。徳川幕府に至りその修好を舊に復し、朝鮮の使節は第十一代將軍家齊の時代まで來聘し、その後暫く中絶した。然しながら對馬の大守宗氏と李朝との交渉は常に絶ゆることなく、日本と朝鮮との交易は盛んに行はれたのである。日鮮の歴史的關係は斯くの如く深くして、殊に支那の儒教や、印度の佛教、その他諸般の文物典章等も朝鮮を経て日本に傳はり、地理的關係から、彼我互ひに往來し、從つて内地人の朝鮮に移住した者は尠くかつたのである。李朝世宗二十五年(西曆一、四四三年)(後花園天皇の嘉吉三年)癸亥條約が結ばれ、これにより通商を許されて居

た齋浦(浦乃而)、富山浦(釜山港)、鹽浦の三浦の地を始め、南鮮地方の島嶼、沿岸より内陸に亘つて、入り込んで居た内地人は相當の數に達し、中には朝鮮に歸化したものもある。殊に巨濟島附近には最も多くの内地人が移住し、三浦の人口は何れも千人以上に達したことがある。また南鮮及び中鮮地方にかけて、海上には倭寇の勢力が頗る旺盛であつた。

その後和寇の跋扈や三浦の亂などありて、朝鮮在住の内地人數には絶えず消長があり、世宗十八年(西曆一、四三六年、後花園天皇の永享八年)には富山浦、齋浦、鹽浦の三居留地に在留せる内地人總數は六十人(朝鮮の記録には六十戸とあり)に減少し、遙かに降つて世祖十一年(西曆一、四六六年、後土御門天皇の文正元年)には、富山浦に百十戸、三百三十人、齋浦に三百戸、一千二百餘人、鹽浦に三十六戸、百二十人の内地人移住者を見たのであるが、それが宣祖二十五年(西曆一、五九二年、後陽成天皇の文祿元年)には僅に數十人を算したに過ぎず、宣祖二十九年(西曆一、五九六年、後陽成天皇の慶長十二年)には文祿役の影響を受けて全部の内地人は歸國した。宣祖四十年(西曆一、六〇七年、後陽成天皇の文祿六年)にはの移住は富山浦のみに限られ、肅宗四年(西曆一、六七八年、靈元天皇の延寶六年)の富山浦に於ける内地人數は六百内外に達し、豆毛館の草梁項(今の釜山)に移轉して、日本居留地の工事落成の年までは、普通商人等は南濱繩手(今の長手通り)に居住して居た。純祖三十四年(西曆一、八三四年、仁孝天皇の天保五年)の富山浦の内地人人口は三百乃至四百人で、哲宗十二年(西曆一、八六一年、孝明天皇の文久元年)には釜山居留の内地人は官民合せて六百人、明治

元年には二百五十人、明治九年一月には八十二人の内地人が住んで居たのである。その後開港場を設けらるゝに至りてよりは、次第に各地に定住者の増加を見、日清戦争後に於てはその數一萬二千人以上に激増したのである。それでも當時は尙ほ内地人の移住地は主として開港場に限られ、その勢力は未だ微弱であつた。然るに日露戦争前後より、帝國の朝鮮に對する勢力は頓に興隆し、鐵道の敷設、政治、經濟施設等の必要に應じ、内地人の朝鮮に移住する者は年と共に増加し、併合前の明治四十二年末には、男七萬九千九百四十七人、女六萬六千二百人、計十四萬六千四百四十七人を數へ、その分布も漸く各地方に及ぶに至つたのである。今試みに明治九年以降同四十二年までの年末現在内地人數を見たと左表のやうになつて居る。

併合前の内地人數累年調

年	次	男	女	計
明治九年末		五二	二	五四
明治十年末		三三〇	二五	三四五
明治十一年末		一八	九九	一二七
明治十二年末		一三九	三〇	一六九
明治十三年末		五九〇	二八五	八三五
明治十四年末		二、八三一	五八六	三四一七

朝鮮の人口現象

明治十五年末	三,九九九	六二二	三,六三三
明治十六年末	三,二八四	七一九	四,〇〇三
明治十七年末	三,五七四	七八二	四,三五六
明治十八年末	三,七二〇	八一二	四,五二二
明治十九年末	四,〇〇八	二〇一	六〇九
明治二十年末	四,六六八	一七三	六四一
明治二十一年末	九三四	二九七	一,三三三
明治二十二年末	三,四九四	二〇五五	五,五八九
明治二十三年末	四,五六四	二,六八一	七,二四五
明治二十四年末	五,六〇一	三,四二〇	九,〇三二
明治二十五年末	五,五三二	三,六〇五	九,一三七
明治二十六年末	五,一六八	三,七〇三	八,八七一
明治二十七年末	五,六二九	三,七二五	九,三五四
明治二十八年末	七,三二五	四,九八八	一二,〇三三
明治二十九年末	七,四〇一	五,一七〇	一二,五七一
明治三十年末	七,八七一	五,七四四	一三,六一五
明治三十一年末	八,六二〇	六,六八四	一五,三〇四
明治三十二年末	八,五〇七	六,五六一	一五,〇六八
明治三十三年末	八,七八	七,〇六一	一五,八二九

明治三十四年末	九九五七	七九七一	一七九二八
明治三十五年末	一二七八八	九六八五	三二四七一
明治三十六年末	一六八八八	一二三〇九	二九一九七
明治三十七年末	一九三三〇	一一七六三	三二〇九三
明治三十八年末	二六四八六	一五九七四	四二四六〇
明治三十九年末	四八〇二八	三五二八七	八三三二五
明治四十年末	五五六六九	四二三三一	九八〇〇一
明治四十一年末	七〇、一四五	五六、〇三三	一二六、一六八
明治四十二年末	七九、九四七	六六、二〇〇	一四六、一四七

日韓併合後は、諸般の施設に伴ひ、或は移民の獎勵に依り、内地人の數は年々多少の増加を示し、明治四十三年末には、五萬九百九十二世帯、十七萬一千五百四十三人に過ぎなかつたものが、大正十四年末には、十一萬三千二百五十四世帯、四十二萬四千七百四十人になつて居る。然しながら母國民の移住増加に依りて、新領土民の同化を計り、内鮮人の融和を企圖するものとせば、一千九百餘萬人の土着民に對し、僅に四十餘萬人の内地人を移植した如きは、大局より見て、殆んど云ふに足らざることで、所謂九牛の一毛に等しさものであるまいか。

#### 併合後の内地人戸口累年調

朝鮮の人口現象

年次	戸		世帯		人		平均人口
	住居	世帯	男	女	計		
明治四十三年末	—	五〇,九九二	九二,七五一	七八,七五二	一七〇,五四三	三五六	
明治四十四年末	—	六二,六三三	一一四,七五九	九五,九三〇	二二〇,六八九	三五八	
大正元年末	—	七〇,六八八	一三二,五二八	一一三,二一一	二四五,七三九	三五五	
大正二年末	—	七二,二二九	一四六,二二五	一二五,三七六	二七二,五九一	三五二	
大正三年末	—	八三,四〇六	一五六,二四九	一三六,〇六八	二九二,二一七	三五九	
大正四年末	—	八六,三〇九	一六三,〇二二	一四〇,六四七	三〇三,六五九	三五五	
大正五年末	—	九〇,三五〇	一七二,七二三	一四九,三三五	三二〇,九三八	三五五	
大正六年末	—	九三,三五七	一七七,六四六	一五四,八二〇	三三二,四五六	三五六	
大正七年末	—	九三,六二六	一七九,六八八	一五七,一八六	三三六,八七二	三五〇	
大正八年末	—	九七,六四四	一八五,五六〇	一六一,〇五九	三四六,六一九	三五五	
大正九年十月一日	—	九三,四八八	一八四,二〇〇	一六二,二九六	三四六,四九六	三五七	
大正九年末	—	九四,五二四	一八五,一九六	一六二,六五四	三四七,八五〇	三五八	
大正十年末	—	九九,九五五	一九六,四二二	一七一,四七六	三六七,六二八	三五八	
大正十一年末	九八,七三三	一〇六,九九一	二〇四,八八三	一八一,六一〇	三八六,四九三	三五八	
大正十二年末	一〇一,五三三	一一〇,四三九	二二二,八六七	一九〇,四四四	四一三,〇一一	三五八	
大正十三年末	一〇二,九八六	一一二,一九九	二二六,四二九	一九五,二六六	四二一,五九五	三五八	
大正十四年十月一日	—	—	二四二,二五八	二〇一,二四四	四四三,五〇二	—	
大正十四年末	一〇五,二八九	一一三,二五四	二三二,二六三	二〇三,五七七	四三四,七四〇	三七五	

大正十四年末現在の内地人數は、十一萬三千二百五十四世帯、男二十二萬一千百六十三人、女二十萬三千五百七十七人、計四十二萬四千七百四十人にして、一世帯平均人口は僅に三人七分五厘となつて居る。而して一人當平均人口の斯くの如く少いことは、内地人の中に未だ朝鮮に定住する覺悟のものが尠く、内地へ家族を残して居る假住者や、獨身の出稼人の多い證左である。

内地人戸口道別表 (大正十四年末)

道名	戸數		人口		一世帯平均人口	
	住居	世帯	男	女		
京畿道	二五,三三八	二六,一五七	五三,五三三	五〇,九四七	一〇四,四七九	三・九九
忠清北道	一,九五八	二,〇三九	三,七六五	三,五五二	七,三二七	三・五九
忠清南道	五,〇六一	五,三七五	一〇,一三三	九,四五三	一九,五六六	三・六四
全羅北道	六,六三一	六,九〇七	一三,八九九	一三,二六八	二七,一六七	三・九三
全羅南道	七,三三一	七,八六九	一六,三九五	一五,三三三	三二,六二八	四・〇七
慶尙北道	一〇,四三三	一〇,八五八	二二,四八四	一九,一八八	四一,六七二	三・八四
慶尙南道	一七,八五六	一八,九九一	三九,六七〇	三七,八七六	七七,五四八	四・〇八
黃海道	四,一〇四	四,四一〇	七,六四八	七,〇四八	一四,六九六	三・三三
平安南道	九,五三三	一〇,三六七	一八,五〇〇	一六,〇一〇	三四,五一〇	三・三三
平安北道	四,三七七	五,二一六	八,九五八	七,二八一	一六,二三九	三・二一

朝鮮の人口現象

104

江原道	二四一〇	二七九七	四六五三	三九七九	八六三二	三〇九
咸鏡南道	五二五二	五八二〇	一〇五九五	九七五四	二〇三三九	三〇九
咸鏡北道	五三二五	六四五二	一〇九五二	九九七六	二〇九二七	三二四
總計	一〇五、二八九	一三三、二五四	三三二、一六三	二一〇、五七九	四四七、四〇〇	三、七五

備考 本表は在朝鮮軍隊在營下士兵卒を包含せず

以下年末現在内地人に關する諸表皆同じ

内地人の分布狀況は右表の通りであるが、大體に於て京畿道以南の地に最も多數に分布し、江原道以北及び黃海道以西には、その分布が疎らである。更に大正十四年末の朝鮮在任内地人に就き、その本籍別を示し、これを明治四十三年と比較すると左の如くなつて居る。

現任内地人本籍別戸口表

府 縣	戸 數	大 正 十 四 年 末		計	明 治 四 十 三 年 末		計
		男	女		男	女	
山 口 縣	一〇、二四一	一〇、六〇九	一、九四六四	四〇、〇七三	一〇、八六三	一〇、二七	一〇、九九〇
福 岡 縣	八、二九一	一六、二三七	一五、〇六一	三二、一九九	七、二五	六、三八五	一三、五二〇
長 崎 縣	六、五八八	二二、九六五	二二、三四一	二五、三〇六	七、二四六	六、八四一	一四、〇八七
廣 島 縣	六、六八九	二二、三九四	二二、三六六	二五、七六〇	五、六六九	五、二六九	一〇、八三六

熊本縣	五,七九	一,一三三	一〇,六七二	二,八九五	四,四三九	三,八四四	八,二八三
大分縣	五,一一〇	九,七三四	九,一一九	一八,八五一	四,八六五	四,四三五	九,三〇〇
佐賀縣	四,五三八	八,七三三	八,四三九	一七,一五二	三,三〇三	二,七八〇	五,九八三
岡山縣	四,四三六	八,五六六	七,九三二	一六,四九七	三,四五〇	二,七八一	六,二三一
鹿兒島縣	四,一〇一	七,五六三	六,五五六	一四,一九	二,七三五	二,〇九一	四,八二六
愛媛縣	三,〇八五	六,二九九	五,八六八	一一,二六七	二,七二六	二,三五五	五,〇八一
東京府	三,一〇五	六,〇八四	五,五三三	一一,六一七	三,〇三二	二,六六八	五,六九〇
愛知縣	二,八八八	五,七三三	五,一八三	一〇,九二六	一,七五九	一,三七九	三,二一八
香川縣	二,八二六	五,五八五	五,一五三	一〇,七三八	一,八三七	一,五八四	三,四二二
島根縣	二,八四九	五,五九九	五,一七四	一〇,七二三	二,六二九	二,二六六	四,七九五
大阪府	二,五八五	五,〇七五	四,七九〇	九,八六五	三,三〇九	三,〇五五	六,五六四
兵庫縣	二,六〇九	四,八九七	四,七七四	九,六三一	二,六一五	二,二四一	四,八八八
高知縣	一,八七六	三,七三一	三,四七九	七,二二〇	九一六	七五四	一,六〇〇
德島縣	一,六九〇	三,三九九	三,三〇四	六,五七三	一,六四九	一,二二四	二,八六三
三重縣	一,六七〇	三,三三五	二,九五二	六,三〇七	一,四三五	一,〇三三	二,四八八
京都府	一,六四八	三,三三三	二,九一〇	六,三二一	一,五七三	一,二七四	二,八四七
新潟縣	一,六四三	三,二六〇	二,九〇六	六,二六六	九七八	六七八	一,六五六
静岡縣	一,六一五	三,〇八三	二,七三三	五,八三六	一,一六四	九七八	二,二四二
岐阜縣	一,五八九	三,一八八	二,八〇〇	五,九八八	一,二二〇	八一三	一,九三三

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

福井縣	一、六五〇	三、二四八	二、九三三	六、一八〇	一、二四四	九六一	二、一〇五
福島縣	一、五〇五	二、九七九	二、五六五	五、五四四	八九四	七六	一、六〇〇
石川縣	一、五四〇	三、〇五三	二、七七七	五、八三〇	一、一〇六	八一	一、九七
和歌山縣	一、五〇二	二、八六一	二、五八九	五、四五〇	一、一七〇	八七三	二、〇四三
長野縣	一、七九	三、一五〇	二、七五六	六、〇〇六	九三五	六〇六	一、五四一
宮城縣	一、六七七	三、二二七	二、九〇一	六、一一八	七九六	五九	一、三三五
滋賀縣	一、三四五	二、七三三	二、三六三	五、〇七六	一、三七一	九二六	二、二八七
鳥取縣	一、二七四	二、二七三	二、〇四九	四、三三三	一、〇三三	七五四	一、七八六
富山縣	一、二五五	二、二九八	二、〇三八	四、三三六	八二二	五六二	一、三七四
茨城縣	一、二八七	二、四二六	二、〇九一	四、五〇七	五二八	三三二	八六〇
宮崎縣	一、三三五	二、四一七	二、二二一	四、五三八	四六二	三三五	七九七
山形縣	一、〇八〇	二、〇九九	一、八五一	三、九五一	四五一	三三三	七八四
千葉縣	一、二〇六	二、二二二	一、八四四	三、九四七	七二〇	五四二	一、三六三
奈良縣	九二七	一、八二九	一、五六五	三、四一四	七六五	五五〇	一、三二五
神奈川縣	九二一	一、七〇八	一、六二〇	三、三二〇	七八六	七七	一、五〇二
山梨縣	九三〇	一、六四六	一、五二九	三、一七五	四四七	三〇二	七四九
群馬縣	七五三	一、五二二	一、二八四	二、七九六	四五四	三三七	七七
秋田縣	七七六	一、五〇六	一、三五一	二、八七七	三六八	一六五	六三三
栃木縣	七七七	一、四三二	一、二四八	二、六七九	四五四	三二七	七八一

埼玉縣	七四	一四四七	一、二四	二六八一	四八六	三七八	八六四
北海道	七二六	一四三三	一、三二五	二、七四八	五〇七	四〇七	九一四
岩手縣	六八七	一、三六一	一、二二	二、三六三	二七六	二二	四八七
青森縣	五七〇	一、四九九	九五九	二、〇〇八	二二九	一八七	四二六
沖繩縣	六五	二九	九二	二二	三五	一九	五四
合 計	一、三、二、五四	二、二、一、二、六三	二、〇、三、五、七七	四、四、二、七、四〇	九、二、七、五二	七、八、七、九二	一、七、二、五、四三

即ち朝鮮在住内地人の最も多い府縣は、山口縣の一萬百四十一戸、四萬七十三人を第一位とし、福岡、長崎、廣島、熊本、大分、佐賀、岡山、鹿児島、愛媛、東京、愛知、香川、島根等の順序である。これ等の府縣よりはいづれも一萬人以上の人口を朝鮮に送つて居るが、大體に於て地理的關係に依り、九州、中國、四國地方のものが大部分を占めて居る。

### 朝鮮人の戸口

併合當時の明治四十三年末の朝鮮人の戸口は、二百七十四萬九千九百五十六世帯、男六百九十五萬三千四百六十八人、女六百十七萬五千三百十二人、計一千三百十二萬八千七百八十人にして、一世帯當りの平均人口は四人七分七厘となつて居る。それが大正十四年末に於ては、三百四十八萬三千四百

八十一世帯、男九百四十六萬六千九百九十四人、女九百七萬六千三百三十二人、計一千八百五十四萬三千三百二十六人に増加し、一世帯當りの平均人口は五人六分二厘に達して居る。即ち併合後十七箇年間に、世帯數七十三萬三千五百二十五、人口數五百四十一萬四千五百四十六人を増加したことになる、この間に於ける國勢發展の著しきを示して居る。

朝鮮人口累年比較表

年次	戸		數		人		口計	一世帯平均人口
	住居	世帯	男	女	男	女		
明治四十三年末	—	二,七四九,九五六	六,九五三,四六八	六,一七五,三三二	一三,一二八,七八〇	—	四七七	
明治四十四年末	—	二,八三三,九三五	七,二七一,五二六	六,五六〇,八五〇	一三,八三二,三七六	—	四九一	
大正元年末	—	二,八八五,四〇四	七,五八五,六七四	六,九八一,一〇九	一四,五六六,七八三	—	五〇五	
大正二年末	—	二,九六四,一一三	七,八七〇,八七五	七,二九九,〇四八	一五,一六九,九二三	—	五一二	
大正三年末	—	三,〇三三,八二六	八,〇八六,五五四	七,五三四,一六六	一五,六四〇,七〇〇	—	五一五	
大正四年末	—	三,〇七七,四六三	八,一九三,六八四	七,七六五,〇二六	一五,九五七,六一〇	—	五二七	
大正五年末	—	三,〇七二,〇六一	八,三八七,三四三	七,九二一,八三六	一六,三〇九,一七九	—	五三二	
大正六年末	—	三,一〇七,二一九	八,五五二,三九二	八,〇六五,〇三九	一六,六一七,四三二	—	五三三	
大正七年末	—	三,三三九,一四〇	八,五八九,六六一	八,一〇七,三五八	一六,六九七,〇二七	—	五三三	
大正八年末	—	三,三五一,三三八	八,六三二,六〇五	八,一五〇,九〇五	一六,七八三,五〇〇	—	五三三	

年	比	較
大正九年十月一日	—	—
大正九年末	三、一九六、五五一	八、六五五、六三〇
大正十年末	—	八、七〇一、九八八
大正十年末	三、二〇一、二五五	八、七七八、八六二
大正十一年末	—	八、八五五、五四
大正十一年末	三、二九八、四九九	八、三五二、六一五
大正十二年末	—	八、四七六、一〇一
大正十二年末	三、一五六、〇三三	一、七四四、六九三
大正十三年末	—	一、七六六、九五四〇
大正十三年末	三、一六五、〇一〇	一、九〇四、五六一
大正十四年十月一日	—	一、九七三、八八九
大正十四年十月一日	—	一、九二九、三八〇
大正十四年末	三、三三三、〇五七	一、九〇七、六三三
大正十四年末	三、四八三、四八一	一、八五四三、三三

また各道別大正十四年末現在の戸口状態は左表の如くなつて居る。而して明治四十三年末現在の一世帯平均人口数は四人七分七厘であつたものが、大正十四年末現在では五人三分二厘となつて居る。朝鮮に於ては今尚ほ大家族制度に近い生活を營んで居るものがあり、大きな家庭になると、三夫婦も四夫婦もの大家族が、一世帯で暮して居る例は極めて多いのである。

朝鮮人戸口道別表 (大正十四年末)

道名	戸数		人口		一世帯當り人口
	住居	世帯	男	女	
京畿道	三三五、五八二	三五二、二六八	九三四、〇三七	八九四、三五九	一、八二八、六六六
忠清北道	一四六、九〇四	一五四、三三五	四三三、〇九八	三九七、八九四	八二〇、九九二

朝鮮の人口現象

一一四

忠清南道	二二五,五八三	二二六,二八八	六二八,九六五	五九二,六四六	一一三二,六二一	五四〇
全羅北道	二四七,二八六	二五五,九五六	六七七,二八七	六三四,二四四	一,三二一,四一一	五二二
全羅南道	三八九,二九二	四一七,一六一	一,〇五一,六九三	一,〇三〇,七四〇	二,〇八二,四三三	四九九
慶尙北道	二九九,一七三	四二四,三五五	一,一三六,九九九	一,〇八六,二〇八	二,二二二,一九七	五三七
慶尙南道	三五五,六〇三	三六六,四三三	九五六,八二七	九二五,九四四	一,八八二,七七一	五二四
黄海道	二六五,五七七	二七四,七四七	七〇六,二八二	六九二,一六二	一,三九八,四四四	五〇九
平安南道	二二七,六八二	二二七,五三四	六〇七,八九三	六〇〇,三三六	一,二〇八,二一九	五三一
平安北道	二二二,三四四	二四〇,五二九	六九〇,〇〇六	六六五,七〇四	一,三五五,七二〇	五六四
江原道	二三四,四五八	二三八,五六八	六七七,一八七	六三三,一〇三	一,三〇〇,二九〇	五四五
咸鏡南道	二二二,九一五	二二八,九三二	六七七,四六一	六四五,〇八七	一,三三二,五四八	六〇三
咸鏡北道	九二,六五八	九六,〇二五	二九八,九九九	二八八,〇三五	五八七,〇三四	六一一
總計	三,三三三,〇五七	三,四八三,四八一	九,四六六,九九四	九,〇七六,三三二	一八,五四三,三三六	五,三二一

外國人の戸口

朝鮮に於ける外國人は大部分支那人にして、その他の外國人は少數である。明治四十三年末の支那人は一萬一千八百十八人であつたものが、大正十四年末には四萬六千百九十六人に増加し、從來の傾向から推察すると將來益々その増加を來すものと思はれ、殊にその經濟的活動は大に注目に値する。

支那人戸口累年調

年次	戸数		人口		平均人口
	住居	世帯	男	女	
明治四十三年末	—	二,七九〇	一〇,七九	一〇,八九	四,三四
明治四十四年末	—	二,八八九	一一,二四五	六,九二	四,二〇
大正元年末	—	三,四二七	一四,五九三	九,二四	四,五三
大正二年末	—	三,八七五	一五,一三五	九,八七	四,二九
大正三年末	—	四,〇七六	一五,七四五	一,一三九	四,二四
大正四年末	—	三,八二二	一四,七二四	一,二五四	四,一八
大正五年末	—	四,四四八	一五,四九六	一,四〇八	三八〇
大正六年末	—	四,七三二	一六,二四一	一,七二六	三八〇
大正七年末	—	四,七二八	二〇,二六四	一,六三〇	四,六三
大正八年末	—	五,三二八	一六,八九七	一,六九一	三,五六
大正九年十月一日	—	六,九二二	二二,三八〇	二,六〇一	三,四五
大正九年末	—	六,九二五	二二,三八二	二,六〇七	三,四六
大正十年末	—	七,〇九三	二二,九二二	二,七八三	三,四八
大正十一年末	七,三六〇	九,六四七	二七,六三三	三,二〇一	三,二〇

第一章 戸口の變遷

朝鮮の人口現象

一一六

較	
大正十二年末	七九六
大正十三年末	八六八三
大正十四年十月一日	—
大正十四年末	九九〇二
大正十二年末	一〇四一九
大正十三年末	一一一三五
大正十四年十月一日	—
大正十四年末	一二四二八
大正十二年末	二九,九四七
大正十三年末	三二,一九四
大正十四年十月一日	五一,八八三
大正十四年末	四〇,五二七
大正十二年末	三七〇七
大正十三年末	四,四五九
大正十四年十月一日	六一七四
大正十四年末	五,六六九
大正十二年末	三,三六四
大正十三年末	三,五六三
大正十四年十月一日	—
大正十四年末	四,六一九
大正十二年末	三・三
大正十三年末	三・七
大正十四年十月一日	—
大正十四年末	三・七

支那人戸口道別調 (大正十四年末)

道名	戸		世帯	人		計	一世帯當平均人口
	住	居		男	女		
京畿道	一五〇九	一八八六	七五四二	一,三二一	八,八五三	四六九	
忠清北道	二二一	二六八	八四四	五七	九〇一	四・一	
忠清南道	六三二	七七四	二,四三六	一六六	二,六〇二	三・六	
全羅北道	五一九	五七〇	一,八三六	一四〇	一,九七六	三・四七	
全羅南道	三九七	五五一	二,二四四	八四	二,三二八	四・四	
慶尙北道	四〇七	四八九	一,五二一	九〇	一,六一一	三・九六	
慶尙南道	三五一	三九五	一,四七四	九五	一,五六九	三・九七	
黃海道	五六七	六九六	二,一五〇	三三九	二,四八九	三・五八	
平安南道	八六二	一,〇二五	三,三三六	六二三	三,九三九	三・八六	
平安北道	二,五〇三	三,一〇八	九,二六八	一,九八四	一一,二五二	三・六二	
江原道	二六八	三四九	九五五	四三	九九七	二・八六	

威鏡南道	八七	一〇四八	三〇九三	三八八	三四八一	三三三
威鏡北道	八六八	一二六八	三九三八	三六〇	四二九八	三三九
總計	九九〇二	二二四二八	四〇五七	五六六九	四六一九六	三三七一

支那人は開港場、その他の市街地に於て商業を営む者、農業に従事する者、及び労働者であるが、労働者の大部分は山東地方などより入り込み、例年十二月には、陰曆正月の爲め、その稼ぎ溜めた金を懐中して故郷に歸るので、右の年末現在數はその最も減少して居るときの計算と見ねばならぬ。

その他の外國人は、明治四十三年末には八百七十六人であつたが、大正十四年末には一千二百六十四人となり、餘りその數に大なる増加は認めないが、男女數の相匹敵して居ることが、支那人の男の數の著しく多いのと異なる所である。而してその他の外國人は、宣教師、教員、及び鑛山營業者が多いのである。

外國人(除支那人)戸口累年調

年次	戸數		人口		一世帯平均人口
	居世帯	數	男	女	
明治四十三年末	—	三六五	五〇	三六六	二四〇
明治四十四年末	—	四二三	五六四	四〇三	二二九
大正元年末	—	四四九	六一九	四五三	二二九

朝鮮の人口現象

道名	住居	世帯	年		比		較		平均人口
			大正十四年末	大正十四年十月一日	大正十四年末	大正十四年十月一日	大正十四年末	大正十四年十月一日	
京畿道	戸	數	五六九	四七〇	六五七	四七〇	四六一	六二〇	二七四
			四七三	四六九	六二五	四六九	七四三	六四四	二四七
			四七二	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
			四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一
四六九	四六九	六〇〇	四六九	七〇四	六四四	二四一			

外國人(除支那人)戸口道別調 (大正十四年末)

平均人口

忠清北道	一一	一一	八	二二	二〇	一一一
忠清南道	一六	一七	三三	二四	三六	一〇三
全羅北道	一七	一八	二〇	二二	四一	一〇二
全羅南道	二五	二五	四三	四四	八七	一七四
慶尙北道	二八	三四	三二	二八	五九	一七四
慶尙南道	一八	一八	一九	二四	四三	一七四
黃海道	二二	二三	一四	二二	二六	二二七
平安南道	四八	五〇	七五	六六	一四一	二八二
平安北道	五	六一	七四	六四	三六	二二六
江原道	三三	二六	一八	二二	三一	一五四
咸鏡南道	三三	二四	四〇	三三	七四	一〇八
咸鏡北道	九	一一	一八	三三	四一	三〇七
總計	四一〇	四六一	六二〇	六四四	一三六四	二七四

尙ほ大正十四年末現在の支那人以外の現住外國人國籍別を見るに左の如くなつて居る。

現住外國人(除支那人)國籍別 (大正十四年末現在)

國籍別	戸		人		計
	住居	世帯	男	女	
北米合衆國	二四一	二六三	三三三	四〇九	七四二
第一章 戸口の變遷					一一九

朝鮮の人口現象

英吉利	七三	八二	二五	二七	三三
佛蘭西	四七	五三	五五	三	八六
獨逸	一〇	二三	三三	一一	四三
露西亞	二九	三六	七三	六二	一四
諾威	二	二	四	一	五
土耳其	一	一	一	一	一
意大利	三	三	四	六	〇
希臘	一	一	一	一	一
白耳義	一	一	一	一	一
瑞西	一	一	一	一	一
伊太利	一	二	二	一	二
丁抹	一	一	一	一	一
其他の諸國	五	六	三	八	二

一一〇

即ち支那人以外の現任外國人としては、北米合衆國人が最も多數を占め、英吉利人第二位に在り、露西亞人及び佛蘭西人等これに亞いで居る。惟ふに李朝末葉に於ける朝鮮の外國人勢力は頗る旺盛を極め、利權獲得の爲め暗中飛躍を試むる者多く、殊に外國使臣と韓國宮廷との關係は紛糾錯綜し、中た外人宣教師等の活躍も實に眼覚ましいものであつたが、日露戦争後に於ては、我國が保護政治を行ひ、次いで日韓併合の鴻業成り、漸くこれ等の暗雲を一掃するに至つたのである。

朝鮮に於ける支那人



仁川の支那人街



京城の支那人街



支那苦力を満載して港に到着する寧丸



仁川に港に入中の支那ジャンヤク



冬期仁川よ郷へ揚げ支那人



山東地方よ仁川に支那人の港入

仁川の支那料理屋中華樓



支那人金物細工業



賣菜野人那支るけ於に場市門大南



工石人那支るな勉勤



支那人労働者の作業



支那人の小さな鳥商

## 第二章 人口の構成

### 第一節 内鮮外人別及び體性別人口

大正十四年十月一日現在の簡易國勢調査の結果に依ると、朝鮮の人口總數は、男一千二萬九百四十三人、女九百五十萬二千二人、計一千九百五十二萬二千九百四十五人にして、男一〇〇に對する女の割合は九四・八となつて居り、男女の總數には著しき差異を見ないのである。また全人口を内鮮外人別に別ちて見ると、内地人四十四萬三千四百二人、朝鮮人一千九百二萬三十人、外國人五萬九千五百四人となり、その割合は内地人二・三、朝鮮人九七・四、外國人〇・三を示し居り、政治及び經濟上の勢力は別として、人口上に於ては朝鮮は朝鮮人が大部分を占めて居り、内地人及び外國人の數は極めて微々たるものである。今試みに内鮮外人別及び體性別の全鮮並に各道に於ける人口數を見ると、左表の如くなつて居る。

#### 内鮮外人及び體性別人口數 (大正十四年十月一日現在)

全 鮮

朝鮮の人口現象

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
五 歲未滿	三,三三三	三,〇七四	一,六〇四	一,五九三	一,二二一	一,〇三三	六九	七〇	一,五九四	一,四六三
五 歲以上	三,三三四	三,六九八	一,〇〇〇	一,三三三	七三六	六六六	七〇	七〇	一,五九四	一,四六三
十 歲以上	一,九〇七	一,八五五	一,一七三	一,〇〇〇	一,五〇〇	一,五九	五〇	五〇	一,一七三	一,〇八八
十五 歲以上	一,七三三	一,七二二	九四四	九二八	七三三	四四三	三〇	三〇	九六八	九〇三
二十 歲以上	一,六六五	一,六〇六	七四四	七〇〇	九四九	六〇一	三六	三六	七三三	七〇〇
二十五 歲以上	一,三二七	一,三〇八	七四四	七〇〇	八九三	六二七	七〇	七〇	七三三	七〇〇
三十 歲以上	一,三三三	一,三三二	六四四	六〇一	七三三	六七〇	〇	〇	六三三	六〇〇
三十五 歲以上	一,二八七	一,二八〇	五九四	五九二	六三九	五三三	七九	七九	六三三	五三三
四十 歲以上	一,二三三	一,二六六	四九七	四七〇	四一七	四三三	七四	八二	五〇〇	四八八
四十五 歲以上	一,一七三	一,二一〇	四三三	四三三	三三三	三三三	六二	六二	四三三	四三三
五十 歲以上	八,四九三	五,一三六	三,七〇七	三,三三三	一,三三三	一,三三三	三三	三三	三,七〇七	三,三三三
五十五 歲以上	四,七〇〇	三,四一〇	二,九九九	二,六三三	六六二	一〇一	三三	三六	二,九九九	二,六三三
六十 歲以上	二,三三六	一,七〇七	一,三三三	一,〇〇〇	二六三	四三	三三	一六	一,三三三	一,〇〇〇
六十五 歲以上	一,三〇八	一,一六二	一,一六六	一,〇〇〇	一八一	三三	六	七	一,三〇八	一,一六二
七十 歲以上	六六六	一,〇三三	九四四	一,三三三	三三	一一	一	一	九四四	一,三三三
七十五 歲以上	三三三	四七三	四九八	五八七	一七	三〇	一	一	四七三	五八七

京畿道

年齢	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外国人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
八十歳以上	九	一六九	三、六四〇	一八、三三六	七	一	一	一	三、六五七	一八、三四八
八十五歳以上	三三	七〇	二、七三三	四、四三三	五	一	一	一	二、七四一	四、四七九
九十歳以上	四	二四	五七	一、〇六	四	二	一	一	五七	一、〇七
九十五歳以上	一	一	九	二二	二	一	一	一	九	二二
百歳以上	一	一	三	五	一	一	一	一	四	五
百五歳以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
百十歳以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
百十五歳以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	三三、二六三	三二、二四九	九七、六六一	一、〇九三、八〇〇	五、八八三	六、一七四	七四三	七四〇	一〇、〇〇三	九、五〇三、一〇一

備考 △印は植民地人とする。

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

一二四

二十五歳以上	五、六三三	五、五三六	七〇、六三三	六〇、〇六七	一、九四三	二七	一九	六	六、七〇〇	六、六八八	一四、二五八
三十歳以上	四、九六六	四、六七六	六八、三三三	六〇、二六三	一、六三三	一七	三	六	七、〇三三	六、九六六	一五、八六九
三十五歳以上	五、〇三三	四、三三三	六二、七〇一	五三、七三三	一、七一九	二五	三	三	六、七、六六	六、九、六六	一七、三三〇
四十歳以上	四、五〇七	三、三三三	五三、七三三	四八、六八二	七〇九	六	三	七	六、九、六六	六、九、六六	一三、三三〇
四十五歳以上	三、六三〇	二、三三三	四三、〇六九	四〇、七〇九	四三三	四	七	二	七、七、一七	七、七、一七	一〇、三三〇
五十歳以上	二、二六一	一、三三三	三〇、七三三	二八、三三三	一六三	二	四	九	九、九、九	九、九、九	七、七、七
五十五歳以上	一、三三三	一、〇三三	二〇、七三三	一八、三三三	九三	三	一〇	一	三、三、三	三、三、三	三、三、三
六十歳以上	六、七三三	五、三三三	三三、三三三	三〇、〇〇〇	三三	六	九	八	三、三、三	三、三、三	三、三、三
六十五歳以上	三、〇三三	二、七三三	一七、三三三	一六、〇〇〇	一八	二	二	四	三、七、三三	三、七、三三	三、七、三三
七十歳以上	一、三三三	二、三三三	九、〇三三	二、六六七	五	四	三	一	九、九、九	九、九、九	二、三、三
七十五歳以上	三、三三三	二、三三三	四、〇三三	六、三三三	四	一	一	一	三、三、三	三、三、三	一〇、三三三
八十歳以上	三、三三三	三、三三三	一、三三三	一、三三三	三	一	一	一	一、三、三	一、三、三	一、三、三
八十五歳以上	三、三三三	二、三三三	一、三三三	一、三三三	三	一	一	一	一、三、三	一、三、三	一、三、三
九十歳以上	一、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	一	二	一	一	三、三、三	三、三、三	一〇、三三三
九十五歳以上	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	二	一	一	一	一、三、三	一、三、三	一、三、三
合計	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三	三、三三三

忠清北道

第二章 人口の構成

年齢	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
五 歲未滿	六三	五九	六、三三	六、七三	二	二	一	一	六、六八	六、三九	一三、〇七
五 歲以上	四二	三六	三、四四	四、七二	七	五	一	二	三、八三	四、三三	一〇、一六
十 歲以上	二九	二八	四、六〇	四、八九	三	二	一	一	四、九三	四、九一	九、八四
十五 歲以上	二二	二四	三、〇七	三、四四	三	一	一	一	三、三九	三、六七	七、〇六
二十 歲以上	一四	一七	三、四三	三、三三	〇	三	一	一	三、八〇	三、六九	七、四九
二十五 歲以上	七	一〇	三、六九	二、三三	二	二	一	二	三、三六	二、〇〇	五、三六
三十 歲以上	三	六	二、三三	二、八三	二	四	一	二	二、七三	二、三三	五、〇六
三十五 歲以上	一〇	七	一、六四	一、五一	六	五	一	三	二、〇九	二、四六	四、五五
四十 歲以上	六	九	一、〇〇	一、二九	三	二	一	一	一、三三	一、四七	二、八〇
四十五 歲以上	三	三	〇、二六	一、八八	六	二	一	一	〇、五二	一、九七	二、四九
五十 歲以上	一	一	一、七三	一、二二	三	二	一	一	一、七三	一、九七	三、七〇
五十五 歲以上	六	四	一、〇三	一、二九	〇	一	三	一	一、〇三	一、九〇	二、九三
六十 歲以上	三	二	一、〇九	一、四七	三	一	一	一	一、三三	一、五九	二、九二
六十五 歲以上	二	三	七、七一	八、四六	一	一	一	一	七、八二	八、五七	一六、三九
七十 歲以上	一	一	三、七六	四、四三	一	一	一	一	三、九二	四、五四	八、四六
七十五 歲以上	三	三	一、三三	二、一〇	一	一	一	一	一、四七	二、一〇	三、五七

朝鮮の人口現象

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
八十歳以上	一	二	三七	三六	一	一	一	一	三六	三六
八十五歳以上	一	一	五	三	一	一	一	一	五	三
九十歳以上	一	一	九	三	一	一	一	一	九	三
九十五歳以上	一	一	二	三	一	一	一	一	二	三
百 歳以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合 計	三、六六	三、四四	四三、三三	四六、一〇一	八、五	四、七	八	三	四七、七七一	四九、〇七六
五 歳未満	一、六一	一、五〇	一〇、三〇	九、三三	四	三	四	四	一四、一五	一四、一〇
五 歳以上	一、五七	一、一五	八、一〇	七、四八	二	一	五	一	八、三	七、六七
十 歳以上	九三	八二	七五、四三	六九、四四	一	一	二	一	六、一三	五、四四
十五歳以上	六七	七八	六三、四三	五九、三七	一	一	一	一	六、七三	五、九六
二十歳以上	一、〇〇	九七	五二、三〇	四八、八九	一	一	一	一	五、九六	四九、九六
二十五歳以上	九六	九七	四〇、〇七	四六、七一	一	一	二	二	五、一五	四七、六二
三十歳以上	九三	八五	三〇、四四	三〇、九〇	一	一	一	一	四、七九	四、八三
三十五歳以上	九六	七七	二四、〇九	三三、四九	一	一	一	一	四、三三	三、三三
四十歳以上	八七	八八	一七、七	三〇、九	一	一	一	一	三、八八	三、四六
合 計	三、六六	三、四四	四三、三三	四六、一〇一	八、五	四、七	八	三	四七、七七一	四九、〇七六

第二章 人口の構成

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
四十五歳以上	六八	五七	二六、六一	三六、〇九	一〇三	二	二	一	二九、六四	三六、四四
五十歳以上	六六	三三	三三、七〇	三三、六四	六五	五	—	—	二四、三六	三三、〇一
五十五歳以上	三三	一五	一八、八二	一九、五四	三三	—	—	—	一九、二九	一九、六六
六十歳以上	九	七	一三、〇七	一四、八三	一六	—	—	—	一三、一七	一四、九四
六十五歳以上	五	七	九、二七	一一、六七	一	—	—	—	九、二九	一一、五五
七十歳以上	三	四	四、四六	五、八六	三	—	—	—	四、四四	五、九三
七十五歳以上	一	一	一、七五	二、五三	—	—	—	—	一、七〇	二、六九
八十歳以上	三	二	三、〇〇	六、七	—	—	—	—	三、三	六、一
八十五歳以上	—	—	六	一三	—	—	—	—	六	一三
九十歳以上	—	—	一六	五〇	—	—	—	—	一六	五三
九十五歳以上	—	—	五	一四	—	—	—	—	五	一四
百歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	一〇、五六	九、八八	六四九、六〇	六〇九、四六	二、八四三	一五	一七	一五	六二、九九	六九、〇四
									一一、二〇	一二、二〇



全羅南道

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
百 歲以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	一三、五八五	一二、七五三	六九、八四〇	六六、六五九	二、〇七四	—	三	—	七九、五三三	六五、四八九
五 歲未滿	二、六八〇	二、六三三	一七、〇八五	一六、九四八	一四	—	—	—	一七、七六〇	一七、一四六
五 歲以上	一、八四四	一、六四四	一三、七七一	一三、五四一	八	—	—	—	一三、九五四	一三、三三一
十 歲以上	一、五二五	一、四三三	一〇、三三三	一〇、五七七	五〇	—	—	—	一〇、九七七	一〇、九六七
十五 歲以上	一、〇八四	一、〇八八	一〇、三二六	九、九七七	三三	—	—	—	一〇、五五九	一〇、二二九
二十 歲以上	一、二二二	一、五六五	八、三二〇	八、二八二	五九	—	—	—	八、四九三	八、四七六
二十五 歲以上	一、六九六	一、六九七	八、四四五	八、五四〇	四四	—	—	—	九、〇五八	九、〇五七
三十 歲以上	一、六九一	一、四六三	八、〇九二	七、七九九	三六	—	—	—	八、二四六	七、八七五
三十五 歲以上	一、六三三	一、一五六	六、七七一	六、三三三	三〇	—	—	—	六、七五八	六、四〇七
四十 歲以上	一、五〇〇	九一〇	五、〇〇四	五、〇三九	二二	—	—	—	五、二六四	五、一五九
四十五 歲以上	一、〇八五	五九三	四、七四九	四、二二三	—	—	—	—	四、八八八	四、三〇五
五十 歲以上	六三三	三六一	三、四四五	三、〇五五	三	—	—	—	三、六〇三	三、三〇七
五十五 歲以上	三七〇	二二六	二、三九六	二、六三三	—	—	—	—	二、六七九	二、六五一
六十 歲以上	一六九	一四八	一、三三九	一、四八二	—	—	—	—	一、五〇八	一、五九〇

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

1310

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
六十歲以上	二五	一〇八	一九,〇〇〇	二二,九七〇	一	一	一	一	一九,〇〇〇	二二,九七〇
七十歲以上	七	七	九,五九七	一三,三三六	一	一	一	一	九,五九七	一三,三三六
七十五歲以上	〇	三	四,一七〇	六,二六八	一	一	一	一	四,一七〇	六,二六八
八十歲以上	二	三	一,四〇〇	三,四〇〇	一	一	一	一	一,四〇〇	三,四〇〇
八十五歲以上	一	一	二九	六〇	一	一	一	一	二九	六〇
九十歲以上	一	一	八	一九	一	一	一	一	八	一九
九十五歲以上	一	一	三	三	一	一	一	一	三	三
百 歲以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合 計	一七,三三三	一五,三〇〇	一,〇七〇,九七九	一,〇七〇,五六一	二,二三四	一〇〇	三	四	一,〇七〇,九八二	一,〇七〇,六〇六

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
五 歲未滿	二,〇〇九	二,七三三	一,九,〇三〇	一八,三三〇	一〇	三	三	六	一,九,〇三〇	一八,三三〇
五 歲以上	一,九四	一,九三三	一五,八三三	一四,〇八七	三	二	二	三	一五,八三〇	一四,〇七九
十 歲以上	一,七二	一,六三三	一四,五七三	一三,七九	八	一	一	一	一四,五七三	一三,七九
十五 歲以上	一,四〇	一,四〇	一三,三三	一二,一九	〇	七	一	一	一三,三三	一二,一九
二十 歲以上	一,三六	一,三七	一三,〇一	一二,六二	一	一	一	一	一,三六	一,三七
二十五歲以上	一,九	一,八	六,五三	八,〇二	二	六	六	六	六,八三	八,七三

第二章 人口の構成

慶尚南道

三十五歳以上	1,895,152	1,552,152	343,000	15.5	1,895,152	1,552,152	343,000	15.5
三十歳以上	1,895,152	1,552,152	343,000	15.5	1,895,152	1,552,152	343,000	15.5
四十五歳以上	1,157,152	1,157,152	0	0	1,157,152	1,157,152	0	0
四十歳以上	1,157,152	1,157,152	0	0	1,157,152	1,157,152	0	0
五十歳以上	777,152	777,152	0	0	777,152	777,152	0	0
五十五歳以上	375,152	375,152	0	0	375,152	375,152	0	0
六十歳以上	299,152	299,152	0	0	299,152	299,152	0	0
六十五歳以上	152,152	152,152	0	0	152,152	152,152	0	0
七十歳以上	62,152	62,152	0	0	62,152	62,152	0	0
七十五歳以上	26,152	26,152	0	0	26,152	26,152	0	0
八十歳以上	8,152	8,152	0	0	8,152	8,152	0	0
八十五歳以上	1,152	1,152	0	0	1,152	1,152	0	0
九十歳以上	1,152	1,152	0	0	1,152	1,152	0	0
九十五歳以上	1,152	1,152	0	0	1,152	1,152	0	0
百歳以上	1,152	1,152	0	0	1,152	1,152	0	0
百五歳以上	1,152	1,152	0	0	1,152	1,152	0	0
合計	10,152,152	10,152,152	0	0	10,152,152	10,152,152	0	0



年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
八十歳以上	一八	三三	一、四一八	二、三五五	—	—	—	—	一、四三六	二、四〇七
八十五歳以上	三	三	二六九	六二二	—	—	—	—	二七二	六三四
九十歳以上	—	—	七	一四〇	—	—	—	—	七九	一四四
九十五歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百十五歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	四三、四四元	八六、四三二	九六六、七九	九五、八三三	一、八六六	九四	二、三三〇	二、三三〇	一、〇三三、五〇〇	九九七、三七七

黄 海 道

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

年齢	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外国人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
三十歳以上	9,515	7,335	48,400	46,175	2,111	501	2	1	50,926	49,952
三十五歳以上	8,952	5,707	42,751	40,350	3,355	350	2	5	47,011	44,962
四十歳以上	7,351	5,610	35,202	33,162	3,311	261	1	2	38,776	37,097
四十五歳以上	4,800	3,226	25,702	23,923	1,324	121	1	1	27,750	26,170
五十歳以上	2,707	1,677	16,370	15,263	700	51	1	1	17,378	16,692
五十五歳以上	1,600	933	10,623	9,533	261	4	1	1	11,119	10,072
六十歳以上	626	397	7,127	6,102	161	5	1	1	7,415	6,306
六十五歳以上	401	248	5,101	4,400	3	1	1	1	5,106	4,406
七十歳以上	233	120	3,908	3,570	2	1	1	1	3,914	3,573
七十五歳以上	100	20	1,561	1,278	9	1	1	1	1,571	1,281
八十歳以上	1	1	97	1,266	1	1	1	1	99	1,270
八十五歳以上	1	1	17	300	1	1	1	1	19	303
九十歳以上	1	1	3	33	1	1	1	1	4	37
九十五歳以上	1	1	0	10	1	1	1	1	2	12
合計	81,561	57,355	330,062	312,881	30,073	3,929	23	22	441,228	413,617

平安南道

五 一歳未満 110,022 112,222 101,221 100,812 110 112 8 8 102,122 101,422 110,221



朝鮮の人口現象

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
百 歲以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	一七、五〇四	二二、三六六	六〇、〇三三	五七、七九五	四、四〇〇	七、〇七〇	一、四〇一	一、四〇一	六三、一〇〇	六〇、〇七七
五 一 歲未滿	一、三三三	一、三三三	二、五八八	二、三七五	一、四〇〇	一、三三三	—	—	一、七、一〇一	一、五、四八八
五 歲以上	七〇	七〇	八、九六六	七、八一九	二、六九九	二、七九九	七	七	八三、八八二	八〇、八七〇
十 歲以上	四六	四六	八、八八四	七、八九三	四九九	一九九	—	—	八三、六六一	七九、五九九
十 五 歲以上	四一	四一	六、九一九	六、四六四	一、三〇七	一、三三三	—	—	七〇、八二〇	六六、二六四
二 十 歲以上	一、四八一	一、四八一	五、五六一	五、〇〇八	一、九九九	一、三三三	五	五	五九、〇六六	五五、二六四
二 十 五 歲以上	一、六五五	一、六五五	五、八九〇	五、三一九	二、〇二五	一、五五五	七	七	五九、五七七	五五、七七一
三 十 歲以上	一、一〇七	一、一〇七	四、〇〇〇	三、一四〇	一、七〇七	一、七七七	一	一	四七、三六六	四三、〇三三
三 十 五 歲以上	六七	六七	三、九一四	三、七三三	一、三三三	一、二二二	—	—	四一、八八〇	三九、四三三
四 十 歲以上	六四	六四	三、六八九	三、五九九	一、二二六	一、〇六六	八	八	三六、四七七	三三、〇三三
四 十 五 歲以上	五三	五三	三、四二一	三、二三三	六〇〇	五七七	一	一	三三、九六九	三〇、〇〇〇
五 十 歲以上	三六	三六	三、一七三	三、〇三六	三六八	三六一	—	—	三〇、九七七	二九、二二二
五 十 五 歲以上	二二	二二	三、〇七〇	二、九三三	一九九	一九九	三	三	二八、八八八	二八、〇三三
六 十 歲以上	五	五	一、七三六	一、六五九	八六	三三	—	—	一、七、三六九	一、六、七〇〇

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
六十歲以上	七〇	三〇	一六、三六	一五、六三	三〇	二二	一	一	一六、八六	一五、七三	三、一九八
七十歲以上	五五	二〇	八、五三	八、三九	一四	四	一	一	八、七三	八、四三	一、六二五
七十五歲以上	二七	五	三、九四	四、九一	一	五	一	一	五、〇〇	四、〇一	八、〇〇三
八十歲以上	二	一	九、五	一、二五六	一	一	一	一	九、八	一、二五七	二、二四五
八十五歲以上	一	一	一九	三〇	二	一	一	一	二〇	三〇	五〇
九十歲以上	一	一	三	六	一	一	一	一	三	六	九
九十五歲以上	一	一	三	一〇	一	一	一	一	三	一〇	一三
百 歲以上	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合 計	九、六〇〇	七、一六六	七、〇、六七七	六、九、三六三	二、〇、六二一	二、〇、八二一	七、六	六、六	七、八、三六四	六、八、七七七	一、四、七、〇、九一

江 原 道

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

三十歳以上	三三三	四三三	四六、五五〇	四、七五五	二八	六	八	三	四七、一九六	四、一八六	六、八六〇
三十五歳以上	六三	三三	四三、一七〇	三、七六五	二六	三	二	一	四三、八九〇	三、九四四	八、八八六
四十歳以上	四三	一九〇	三七、六六五	三、四三三	六	一	四	二	三六、三三〇	三、六八八	七、六八六
四十五歳以上	二九	一〇一	三三、二六二	二、八九三	五	二	一	二	三三、四四〇	三、〇七二	六、三三三
五十歳以上	一〇	五	二七、三三四	二、三六八	二	一	一	一	二七、五二〇	二、三三四	四、四四〇
五十五歳以上	六	七	二三、七七一	二、〇三三	一	二	一	一	二三、八五〇	二、〇四二	三、二九六
六十歳以上	三	七	二六、四〇二	一、五三一	二	一	三	一	二六、七三〇	一、五七九	三、〇八九
六十五歳以上	二	四	二三、四七二	一、二六四	一	一	一	一	二三、四七六	一、二七六	二、七六六
七十歳以上	一	〇	一九、七七一	九〇七	一	一	一	一	七、五八八	七、三三三	一、四〇一
七十五歳以上	四	四	三、七五二	三、八二二	一	一	一	一	三、七六二	三、八二六	七、六九五
八十歳以上	一	一	一、〇〇一	一、〇四〇	一	一	一	一	一、〇〇一	一、〇四一	二、〇三三
八十五歳以上	一	一	一三一	一九一	一	一	一	一	一三一	一九一	五〇三
九十歳以上	一	一	三	七	一	一	一	一	三	七	六
九十五歳以上	一	一	五	一〇	一	一	一	一	五	一〇	一八
百歳以上	一	一	一	二	一	一	一	一	一	二	三
合計	四、九四四	三、九九九	六九、一〇七	六、〇三、三三四	九四	四	二四	二七	六九七、九九九	六、〇三、七三三	一、三、三三三

咸鏡南道

年 齡	內地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
五 歲以上	1,756	1,733	2,616	2,463	76	68	12	1	2,991	2,634
五 歲以上	1,101	1,076	2,977	2,684	50	54	8	1	2,226	2,071
十 歲以上	885	860	2,463	2,166	81	86	6	4	1,652	1,473
十五 歲以上	701	759	2,911	2,541	140	156	4	1	2,197	1,954
二十 歲以上	3,307	3,257	5,507	5,256	540	514	1	4	4,391	4,131
二十五 歲以上	1,313	1,233	3,626	3,276	616	544	3	9	2,558	2,264
三十 歲以上	1,095	897	4,513	4,216	622	677	1	3	3,333	2,997
三十五 歲以上	1,000	766	3,970	3,598	552	444	2	5	3,074	2,712
四十 歲以上	968	662	3,102	2,807	364	286	4	3	2,474	2,101
四十五 歲以上	709	574	2,177	2,068	252	222	5	4	1,781	1,617
五十 歲以上	433	331	1,288	1,200	122	66	1	3	1,042	847
五十五 歲以上	199	133	585	506	62	5	1	1	407	347
六十 歲以上	106	77	274	266	22	2	3	3	206	196
六十五 歲以上	44	63	193	144	7	2	1	1	94	68
七十 歲以上	18	33	83	90	2	1	1	1	44	46
七十五 歲以上	5	14	26	33	1	1	1	1	17	22

朝鮮の人口現象

年 齡	内地人		朝鮮人		支那人		其他の外國人		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
八十歳以上	四	七	一、三三九	一、三三三	一	一	一	一	一、三四四	一、三四四
八十五歳以上	二	一	三三六	二九四	一	一	一	一	三三八	二九四
九十歳以上	一	一	六	八	一	一	一	一	六	八
九十五歳以上	一	一	九	一七	一	一	一	一	九	一七
合 計	三、三三三	九、八四七	七、八七九	六、三六三	三、三九五	四、七六	四	四	七、六七八	六、四一八
五 歳未満	一、七五七	一、七六九	五〇、三三三	四九、五〇一	六四	六九	二	三	五三、二二六	五二、四〇一
五 歳以上	一、〇三三	一、〇〇八	三九、三〇〇	三七、六六七	三七	三六	三	一	四〇、三三一	三九、七三三
十 歳以上	七四	七三	四、七六六	三、六六四	七六	七三	一	一	四、九四二	三、八〇一
十五歳以上	五九	七九	元、四三三	三、八六九	四七	三六	二	三	四、三九一	元、六六七
二十歳以上	六、六六九	一、〇〇〇	二四、六七一	三三、三三三	六九	四三	一	一	二九、三九一	二四、六六七
二十五歳以上	一、七四〇	一、三三六	三、九二四	三、三九〇	九〇	四三	三	五	三、九二四	三、三九〇
三十歳以上	一、三三三	一、〇三三	三、四二七	二、八九一	九七	四三	一	三	三、七三三	二、九三三
三十五歳以上	二、三九五	七九八	一、六六四	一、四九九	九七	三九	二	二	一、八九〇	一、五七六
四十歳以上	一、〇九九	五三三	一、四七三	一、三三九	六三	四三	一	二	一、六三六	一、四七三
四十五歳以上	六九六	三三〇	一、三六〇	一、二九三	三三	六	二	一	一、三六三	一、二九三

咸 鏡 北 道

五十歳以上	三九三	一六九	九、七〇八	九、三三一	一、八三三	八	一	九、五三三	九、五三〇	
五十五歳以上	一七四	九	六、一六	六、一五九	九	七	一	六、四三〇	六、四二五	
六十歳以上	七三	六	六、七三	六、六三〇	三七	三	一	六、八六	六、七四	
六十五歳以上	四〇	六	五、八七	五、九三三	一〇	一	一	五、九四	六、〇〇	
七十歳以上	一六	三	四、〇八	四、一〇九	一	一	一	四、〇九	四、一四	
七十五歳以上	八	一	二、七三	二、四七	一	一	一	一、六八	二、四六	
八十歳以上	一	六	八、六	九、八	一	一	一	八、六	九、四	
八十五歳以上	一	一	一、五四	三、六	一	一	一	二、四	三、七	
九十歳以上	一	一	六三	六	二	一	一	六	六	
九十五歳以上	一	一	七	二〇	一	一	一	七	一〇	
百歳以上	一	一	二	一	一	一	一	二	一	
合 計	一、七、四〇、一〇、一一、二	一、〇、一、七、四、四	二、二、〇、一、一、〇、二	五、四、四、四	三、四、四	一、八	三、六	三、三、三、三、三	三、〇、七、一、〇	六、三、六、三、三

人、朝鮮人は八八八・一人、支那人は一〇一・五人、其他の外國人は七一七・六人、平均八八七・九人であつたものが、大正十四年末に於ては、内地人は九二〇・五人、朝鮮人は九五八・七人、支那人は一三九・九人、其他の外國人は一、〇三八・七人、平均九五四・五人となり、大體に於て内鮮外人共に男に對する女の數の割合は年と共に次第に増加して居る。

文化の發達せず、經濟狀態の幼稚なる國では、男の數が女の數より多いが、文化が進み、經濟狀態が良好なるに従ひ、次第に女の數は増加して男女數が平均し行き、更に文明が高潮に達し、國富の増進を見るに於ては、女の數が男の數よりも超過するに至るのであるとは、人口論者の通説である。果して然らば朝鮮の過去及び現在は、文化と經濟に於て未だ多く恵まれて居らぬことを示して居る。

體性別累年比例表 (男千人に付女)

年	内鮮外人	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人	合計
明治四十三年末		八四九五	八八六一	一〇一五	七二七六	八六七九
同 四十四年末		八三五九	九〇二三	六三一	七四五五	九〇〇〇
大正元年末		八五三一	九二〇三	六三三	七三三八	九一七五
同 二年末		八五七五	九二七四	六四八	七二五四	九二四四
同 三年末		八六四九	九三・七	六二三	八五五三	九二八八

同	四年末	八六二・八	九四七・八	八五二	八六六七	九四四・六
同	五年末	八六九・〇	九四四・五	九〇・九	八〇七・五	九四一・四
同	六年末	八七一・五	九四三・〇	一〇六・二	七九七・二	九四〇・〇
同	七年末	八七四・七	九四三・八	八〇・四	八五三・一	九四〇・四
同	八年末	八六八・〇	九四四・二	一〇〇・一	八一九・八	九四一・〇
同	九年末	八七八・三	九四三・九	二二・九	九三四・六	九四〇・六
同	十年末	八七四・二	九四三・九	二七・〇	八六六・八	九三九・七
同	十一年末	八六六・四	九四三・二	二六・〇	九九二・四	九三九・四
同	十二年末	八九三・三	九四四・九	二二・八	九九八・六	九四一・〇
同	十三年末	九〇二・八	九四七・八	一四三・九	一〇一八・三	九四四・一
同	十四年末	九二〇・五	九五八・七	二二九・九	一〇三六・七	九五四・五

大正十四年末現在の男千人に付女の平均數は九百五十四人五分にして、これを内鮮外人別に就いて、男の數に對する女の數の割合を見ると、朝鮮人は平均の九百五十四人五分より稍高いが、内地人は平均より遙かに低く、西洋人は男の數よりも女の數が幾分多くなつて居り、支那人は殆んど大部分が男である。内地人の外國人に比して女の數の割合が多くないのは、一は往復に便利な地より、他は遠隔の地より移住せる關係にも因るが、内地人には未だ一戸を構へた定住者の比較的少くして獨身男の出稼者が多い證左であり、支那人に女の多くないのは、その移住者の大部分が男子勞働者である

關係に基くのである。また大正十四年十月一日施行の國勢調査の結果では、内地の人口は男一〇〇に對し女九九・〇三にして男女の數は殆んど均衡を保つて居るが、これに反して朝鮮は男一〇〇に對し女九四・八二に過ぎず、男女の數に相當多くの差があるのである。凡そ一國の人口が男の數の女の數に著しく超過するに於ては、社會上種々の弊害を醸す虞れがある。殊に妻帶者の少く獨身男子の多いことは、その生活を自然荒寥殺風景に陥らしめ人心を殺伐粗暴ならしむるもので、内地在住の朝鮮人及び朝鮮在住の支那人の集團地に於て、多くこの傾向を認むることが出来る。

朝鮮に於ては女の數は男の數より遙かに少く、大正十四年十月一日現在では、男一千二萬九百四十三人に對し、女九百五十萬二千二人にして、男の數よりも女の數が總計に於て五十一萬八千九百四十一人少いのである。従つて女の數が男の數に超過する地方は、僅に左の十二郡一島に過ぎず、その他の郡島竝に各府はいづれも男の數が女の數よりも多いのである。

女百人に對し男百人以下の郡島 (大正十四年十月一日現在)

府 郡	女百に對する男數	郡 島	女百に對する男數	郡 島	女百に對する男數
京畿道開城郡	九六・〇				
全羅南道康津郡	九八・二	莞島郡	九八・九	濟州島	八六・九
慶尙北道高靈郡	九九・九				

平安南道順川郡	九八・六	中和郡	九八・六	价川郡	九八・〇
平安北道泰川郡	九八・二	寧邊郡	九七・〇	博川郡	九八・七
定州郡	九九・二				
咸鏡北道吉州郡	九八・六				

また女の數の男の數より多い面としては左の諸面を算し、濟州島の諸面や、莞島郡青山面、富川郡德積面の如き、男の漁業、出稼等の多き島嶼、開城郡松都面及びその附近諸面の如き地方行商の盛んなる地方等には、男が多く外に出る結果、女の數が男の數よりも著しく多くなつて居るが、男の數が女の數に遙かに超過して居る朝鮮としては、斯かる地方は珍らしい現象である。

女百人に對し男百人以下の面

面	女百に對する男數	面	女百に對する男數	面	女百に對する男數
京畿道					
漣川郡 百鶴面	九九・三	龍仁郡 古三面	九八・九	富川郡 永宗面	九六・三
富川郡 龍游面	九八・八	富川郡 德積面	八六・七	富川郡 北島面	九八・〇
富川郡 靈興面	九七・〇	江華郡 府内面	九五・八	江華郡 佛恩面	九九・〇
江華郡 良道面	九八・一	開城郡 松都面	八八・六	開城郡 東面	九六・〇
開城郡 青郊面	九六・三	開城郡 南面	九二・八	開城郡 中西面	九九・五
開城郡 嶺北面	九九・一				

朝鮮の人口現象

忠清南道		全羅北道		全羅南道		光陽郡		麗水郡		高興郡		高興郡		長興郡		康津郡		康津郡		康津郡		海南郡		靈巖郡		務安郡		莞島郡		珍島郡		濟州島																																																																																	
扶餘郡	九龍面	九・九・四	扶餘郡	玉山面	九・九・〇	淳昌郡	金果面	九・八・一	麗水郡	華陽面	九・九・一	麗水郡	三山面	九・〇・四	高興郡	豆原面	九・七・〇	高興郡	古邑面	九・六・四	高興郡	道化面	九・九・一	長興郡	南下面	九・九・五	長興郡	府東面	九・七・七	康津郡	郡東面	九・六・九	康津郡	郡東面	九・六・九	康津郡	道岩面	九・九・八	康津郡	城田面	九・八・二	康津郡	七良面	九・八・九	康津郡	鴨川面	九・八・七	康津郡	古郡面	九・三・五	海南郡	馬山面	九・六・五	海南郡	山二面	九・八・七	海南郡	山二面	九・八・七	靈巖郡	昆一始面	九・八・九	靈巖郡	昆二終面	九・四・一	務安郡	清溪面	九・九・三	務安郡	長山面	九・八・四	務安郡	安佐面	九・九・一	務安郡	巖泰面	九・九・六	莞島郡	所安面	九・六・五	莞島郡	香山面	八・九・九	莞島郡	香山面	八・九・九	珍島郡	郡内面	九・九・六	珍島郡	古郡面	九・八・五	珍島郡	義新面	九・八・四	濟州島	濟州面	八・六・六	濟州島	新右面	八・六・四	濟州島	舊右面	八・七・〇	濟州島	大靜面	九・〇・八	濟州島	中面	九・二・七	濟州島	左面	八・八・一

蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
農所面	上南面	上南面	中南面
九五・一	九七・三	九七・三	九九・七
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
上西面	蔚山面	蔚山面	下廂面
九九・〇	九九・一	九九・一	九四・四
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
正谷面	遊魚面	遊魚面	梁山面
九九・二	九七・一	九七・一	九八・八
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
大谷面	七谷面	七谷面	非陽面
九九・六	九九・九	九九・九	九七・五
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
終道面	角北面	角北面	玉城面
九九・九	九九・七	九九・七	九八・五
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
茶山面	牛谷面	牛谷面	林泉面
九九・七	九五・九	九五・九	九六・四
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
聖巖面	龍頭面	龍頭面	德谷面
九七・二	九九・一	九九・一	九八・六
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
虎鳴面	豐壤面	豐壤面	虎溪面
九九・四	九九・三	九九・三	九九・七
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
谷松面	牙浦面	牙浦面	中東面
九九・二	九八・五	九八・五	九九・五
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
召保面	仁同面	仁同面	位良面
九七・八	九九・四	九九・四	九九・〇
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
丹北面	安溪面	安溪面	新平面
九七・一	九九・六	九九・六	九九・五
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
比安面	龜川面	龜川面	丹密面
九七・八	九九・四	九九・四	九七・三
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
點谷面	山雲面	山雲面	安平面
九七・九	九九・一	九九・一	九六・七
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
豐西面	春山面	春山面	佳音面
九八・〇	九九・八	九九・八	九九・二
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
玄風面	南川面	南川面	陽南面
九九・六	九九・七	九九・七	九九・八
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
多斯面	河濱面	河濱面	玉浦面
九六・一	九七・四	九七・四	九九・四
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
旌義面	舊左面	舊左面	新左面
八六・九	八一・九	八一・九	七九・五
蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡	蔚山郡
右面	西中面	西中面	東中面
八七・二	八四・二	八四・二	九二・八

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

蔚山郡	三同面	九八・六	東萊郡	東萊面	九四・八	東萊郡	龜浦面	九八・九
東萊郡	沙上面	九九・六	東萊郡	沙下面	九八・三	東萊郡	南面	九三・三
金海郡	鳴旨面	九〇・八	金海郡	菘山面	九七・二	昌原郡	天加面	九九・七
統營郡	長木面	九八・二	統營郡	屯德面	九八・七	南海郡	南面	九八・八
南海郡	古縣面	九七・八	南海郡	雪川面	九八・九	河東郡	金陽面	九六・三
居昌郡	熊陽面	九七・六	居昌郡	加東面	九八・九	居昌郡	涓川面	九六・〇
居昌郡	北上面	九九・一	陝川郡	鳳山面	九七・五	陝川郡	栗谷面	九八・五
陝川郡	草溪面	九八・〇	陝川郡	雙册面	九六・一	陝川郡	德谷面	九六・八
陝川郡	青德面	九七・五	陝川郡	赤中面	九九・四			
黃海道	青龍面	九八・一	海州郡	松林面	九四・六	海州郡	海南面	九八・九
海州郡	壯谷面	九九・七	海州郡	高山面	九九・一	延日郡	鳳西面	九七・七
延日郡	金山面	九七・九	金川郡	白馬面	九八・二	金川郡	冬火面	九八・五
金川郡	左面	九六・八	金川郡	西泉面	九九・九	金川郡	外柳面	九九・八
金川郡	月城面	九七・九	金川郡	合灘面	九八・二	金川郡	口耳面	九四・一
平山郡	西峰面	九九・七	平山郡	古之面	九七・六	平山郡	馬山面	九九・五
平山郡	新岩面	九九・一	平山郡	上月面	九九・三	平山郡	文武面	九九・九
平山郡	安城面	九九・五	新溪郡	多面	九九・一	新溪郡	美水面	九八・八
新溪郡	栗面	九八・五	新溪郡	赤余面	九九・二	龜津郡	東南面	九七・四

長瀨郡	薪花面	九九・八	松禾郡	蓮芳面	九七・二	松禾郡	蓬萊面	九九・七
松禾郡	雲遊面	九七・七	松禾郡	眞風面	九八・二	松禾郡	下黒面	九九・一
股栗郡	股栗面	九九・七	股栗郡	南部面	九七・八	股栗郡	西部面	九八・六
安岳郡	大沓面	九九・八	安岳郡	西河面	九七・四	安岳郡	龍門面	九八・七
信川郡	温泉面	九九・八	信川郡	加蓮面	九九・四	信川郡	文武面	九六・八
信川郡	山川面	九八・八	戴寧郡	龍山面	九八・二	戴寧郡	上方面	九七・一
戴寧郡	清水里面	九九・一	黃州郡	仁橋面	九五・三	黃州郡	龜洛面	九二・四
黃州郡	州南面	九九・三	黃州郡	三田面	九六・八	黃州郡	永豊面	九九・九
黃州郡	松林面	九九・八	黃州郡	黒橋面	九六・九	黃州郡	天柱面	九九・五
鳳山郡	徳在面	九九・五	瑞興郡	梅陽面	九七・九	瑞興郡	内徳面	九四・五
瑞興郡	所沙面	九六・七	瑞興郡	細坪面	九四・四	遂安郡	泉谷面	九九・八
遂安郡	公浦面	九九・〇	谷山郡	雲中面	九七・九	谷山郡	西村面	九七・八
谷山郡	清溪面	九八・一						
平安南道								
大同郡	青龍面	九九・〇	大同郡	南串面	九六・六	大同郡	南兄弟山面	九六・八
大同郡	金祭面	九九・九	大同郡	在京里面	九九・一	大同郡	斧山面	九五・七
順川郡	順川面	九七・三	順川郡	仙沼面	九四・九	順川郡	聖山面	九五・五
順川郡	新倉面	九七・六	順川郡	原灘面	九八・二	順川郡	慈山面	九八・七
順川郡	内南面	九七・四	順川郡	梧雲面	九八・〇	順川郡	北倉面	九七・〇

第二章 人口の辨成

朝鮮の人口現象

孟山郡	元南面	九六・五	孟山郡	智德面	九八・三	陽德郡	陽德面	九九・二
成川郡	靈泉面	九八・六	成川郡	雙龍面	九九・九	江東郡	元灘面	九七・二
江東郡	區池面	九八・五	中和郡	東頭面	九八・〇	中和郡	上道面	九五・八
中和郡	楓洞面	九八・四	中和郡	水山面	九七・四	中和郡	詳原面	九九・八
中和郡	天谷面	九八・一	中和郡	培和面	九七・〇	中和郡	看東面	九八・八
中和郡	古生陽面	九七・八	中和郡	新興面	九七・八	中和郡	海鴨面	九六・〇
中和郡	楊井面	九六・一	龍岡郡	池雲面	九八・五	龍岡郡	吾新面	九八・四
龍岡郡	多美面	九八・三	龍岡郡	陽谷面	九五・一	龍岡郡	三和面	九四・三
龍岡郡	新寧面	九九・九	龍岡郡	龍月面	九九・一	江西郡	枋次面	九六・八
江西郡	草里面	九五・八	江西郡	咸從面	九四・五	江西郡	觀山面	九九・五
平原郡	檢山面	九九・八	安州郡	安州面	九九・一	安州郡	東面	九七・九
安州郡	龍花面	九八・三	价川郡	价川面	九三・五	价川郡	中南面	九六・七
价川郡	外西面	九八・七	价川郡	北面	九六・一	德川郡	日下面	九五・七
德川郡	德安面	九九・八	德川郡	豐德面	九九・二	德川郡	城陽面	九九・三
德川郡	蠶上面	九八・一	寧遠郡	成龍面	九九・七	寧遠郡	德化面	九九・〇
平安北道			義州郡	枇峴面	九九・七	龜城郡	東山面	九九・二
義州郡	義州面	九八・九	龜城郡	方峴面	九八・四	龜城郡	西山面	九八・七
龜城郡	五峰面	九六・六	泰川郡	西面	九七・五	泰川郡	南面	九四・九
泰川郡	西邑内面	九九・四						

泰川郡 院 面	九八・三	泰川郡 東 面	九五・八	泰川郡 江東面	九八・七
雲山郡 雲山面	九八・〇	雲山郡 東新面	九八・五	熙川郡 東 面	九八・一
熙川郡 西 面	九七・七	寧邊郡 寧邊面	九八・五	寧邊郡 梧里面	九三・七
寧邊郡 延山面	九三・九	寧邊郡 獨山面	九五・八	寧邊郡 少林面	九七・一
寧邊郡 入院面	九五・八	寧邊郡 鳳山面	九七・四	寧邊郡 古城面	九五・六
寧邊郡南新峴面	九四・四	寧邊郡 南松面	九四・四	寧邊郡 泰平面	九四・六
寧邊郡北新峴面	九八・三	寧邊郡 龍山面	九七・〇	寧邊郡 百嶺面	九七・四
博川郡 博川面	九九・一	博川郡 北 面	九四・一	博川郡 嘉東面	九六・二
博川郡 南 面	九九・四	博川郡 東 面	九八・二	博川郡 青龍面	九二・六
博川郡 西 面	九四・四	定州郡 新安面	九三・六	定州郡 德達面	九八・〇
定州郡 靑舟面	九五・三	定州郡 安興面	九七・一	定州郡阿耳浦面	九八・八
定州郡 伊彦面	九四・四	定州郡 南 面	九八・六	定州郡 西 面	九三・一
定州郡 海山面	九四・九	定州郡 臨海面	九七・二	定州郡 郭山面	九八・九
定州郡 大田面	九九・一	鐵山郡 餘閑面	九七・九	龍川郡 內中面	九九・二
龍川郡 楊光面	九七・五	楚山郡 江 面	九九・五		
蔚珍郡 遠南面	九九・八	利川郡 東 面	九七・五	利川郡 西 面	九六・〇
咸鏡南道		咸興郡西退潮面	九九・〇	定平郡 文山面	九七・〇
咸興郡上朝陽面	九七・三	永興郡 順寧面	九六・七	永興郡 福興面	九七・五
永興郡 德興面	九七・五				

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

永興郡	仁興面	九九・四	洪原郡	州翼面	九八・八	洪原郡	景浦面	九六・一
洪原郡	龍源面	九九・三	洪原郡	鶴泉面	九九・二	洪原郡	龍雲面	九八・六
洪原郡	甯青面	九八・一	北青郡	北青面	九九・三	北青郡	楊川面	九二・五
北青郡	青海面	九五・〇	北青郡	坪山面	九二・五	北青郡	俗厚面	九五・七
北青郡	下車書面	九五・二	端川郡	福貴面	九八・二	端川郡	何多面	九九・一
端川郡	利中面	九九・一	新興郡	元平面	九八・五	新興郡	西古川面	九九・〇
甲山郡	長平面	九一・四						
咸鏡北道								
明川郡	上加面	九六・三	明川郡	下加面	九四・二	明川郡	下古面	九九・二
吉州郡	吉城面	九五・五	吉州郡	雄坪面	九五・四	吉州郡	東海面	九五・〇
吉州郡	德山面	九九・二	吉州郡	長白面	九九・一	吉州郡	英北面	九五・八
城津郡	鶴上面	九九・五	城津郡	鶴中面	九五・六	城津郡	鶴東面	九三・八
會寧郡	花豊面	九七・五	鎮城郡	古邑面	九九・三	稷城郡	訓茂面	九九・八
慶源郡	龍德面	九九・二						

繰つて府・郡中、女の數百人に對し男の數の百十人以上に達する府・郡、即ち男の數の女の數に著しく超過する地方を見ると、左の十府・二十五郡を算し、大體に於て府は男の數が女の數より遙かに超過して居り、郡に在りても山地帯の方にこの傾向が著しいやうである。新義州に甚だしく男の數の多いのは、住民の約半數を占むるものが支那人勞働者である關係に基く。

女百人に對し男百十人以上の府・郡

府	郡	女百に對する男數	府	郡	女百に對する男數	府	郡	女百に對する男數
京畿道	京城府	一一三・七	仁川府	仁川府	一一八・七	慶州府	慶州郡	一一〇・四
忠清北道	堤川郡	一一〇・〇						
全羅北道	群山府	一二九・三						
全羅南道	木浦府	一一八・〇	靈光郡	靈光郡	一一〇・二			
慶尙南道	釜山府	一一一・四						
平安南道	平壤府	一二四・八	鎭南浦府	鎭南浦府	一二〇・一			
平安北道	新義州府	一四九・九	渭原郡	渭原郡	一一〇・五	慈城郡	慈城郡	一三一・九
厚昌郡	厚昌郡	一四七・二						
江原道	麟蹄郡	一一三・六	淮陽郡	淮陽郡	一一一・九	通川郡	通川郡	一一〇・五
高城郡	高城郡	一一六・六	襄陽郡	襄陽郡	一一一・一	三陟郡	三陟郡	一一一・四
旌善郡	旌善郡	一一六・〇	平昌郡	平昌郡	一一五・八	寧越郡	寧越郡	一一一・五
華川郡	華川郡	一一〇・四	金化郡	金化郡	一一〇・二			
咸鏡南道	元山府	一一二・四	長津郡	長津郡	一二三・六	三水郡	三水郡	一一七・八
甲山郡	甲山郡	一一七・五						
咸鏡北道	清津府	一三一・六	鏡城郡	鏡城郡	一一六・〇	富寧郡	富寧郡	一一二・四
會寧郡	會寧郡	一一五・七	茂山郡	茂山郡	一一〇・〇	慶興郡	慶興郡	一一八・四

第二章

人口の構成

更に面の中で女百人に對し男百二十人以上ある地方を見ると左の諸面を算し、概觀して軍隊所在地、漁業地、または土木工事等の行はるゝ労働者の多く入り込んで居る地方などに、男の數の女の數より遙かに多い事實を認める。

女百人に對し男百二十人以上の面

面	女百に對する男數	面	女百に對する男數	面	女百に對する男數
京畿道漣川郡 嶺斤面	一一〇・四	舒川郡 鍾川面	一二七・二		
忠清南道大田郡 大田面	一二二・九				
全羅北道全州郡 上關面	一二三・四	濟州島 楸子面	一二八・五		
全羅南道靈光郡 佛甲面	一二五・八				
慶尙北道延日郡 浦項面	一二六・四	統營郡 二運面	一二三・〇		
慶尙南道蔚山郡 東面	一三〇・二				
黃海道載寧郡 三支江面	一二四・八	龜城郡 館西面	一二八・〇	龍川郡 薪島面	一二二・一
平安北道義州郡 光城面	一二六・三	渭原郡 渭原面	一二七・〇	慈城郡 慈城面	一二八・一
昌城郡 東倉面	一二九・一	慈城郡 三豐面	一二四・九	慈城郡 三興面	一二〇・四
慈城郡 梨坪面	一三三・三	慈城郡 長土面	一三〇・六	慈城面 閔延面	一四五・一
慈城郡 慈下面	一二四・三	厚昌郡 東新面	一五三・九	厚昌郡 東興面	一五八・四
厚昌郡 厚昌面	一五六・六				

厚昌郡 南新面	一三五・九	厚昌郡 七坪面	一二四・九		
江原道春川郡 春川面	一二〇・〇	高城郡 新北面	一二四・五	三陟郡 上長面	一二二・五
旌善郡 東面	一二二・九	平昌郡 珍富面	一二〇・八	平昌郡 美灘面	一二五・八
咸鏡南道咸興郡北州東面	一五二・六	長津郡 郡内面	一二二・八	長津郡 上南面	一二五・五
長津郡 中南面	一二二・四	長津郡 舊邑面	一二三・五	長津郡 北面	一二九・〇
長津郡 東下面	一二五・九	豐山郡 安山面	一三〇・六	三水郡 邑館面	一二六・七
三水郡 江鏡面	一二五・五	三水郡 自西面	一二一・一	三水郡 三西面	一四九・二
甲山郡 普慈面	一二九・一				
咸鏡北道鏡城郡 羅南面	一七八・六	富寧郡 三海面	一三一・〇	茂山郡 三社面	一三八・二
會寧郡 會寧面	一三九・〇	會寧郡 雲頭面	一二三・八	慶源郡 阿山面	一二〇・四
慶興郡 慶興面	一二一・八	慶興郡 憲西面	一三五・〇	慶興郡 雄基面	一二一・四

## 第二節 年齡及び配偶別人口

大正十四年十月一日現在簡易國勢調査の結果に依る朝鮮の人口總數は、男一千二萬九百四十三人、女九百五十萬二千二人、合計一千九百五十二萬二千九百四十五人であるが、その中で、未婚の者、男五百萬一千百五十二人、女三百九十五萬七千一人、有配偶の者、男四百四十一萬九千九百二十三人、女四百四十六萬三千五百十六人、配偶者に死別せる者、男五十一萬六千九百九十一人、女百一萬七千四

百九十八人、配偶者に離別せる者、男八萬三千六百七十七人、女六萬三千九百八十七人となつて居る。全鮮及び各道別に就いて、年齢別の男女人口數と、その配偶關係を示すと左表の通りである。

年齢及び配偶關係別人口數 (大正十四年十月一日現在)

年 齡	全 鮮		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一 歲 未 滿	三九,三六	三七,五八	—	—	—	—	—	—	三九,三六	三七,五八
一 歲	三九,六四〇	三九,二七	—	—	—	—	—	—	三九,六四〇	三九,二七
二 歲	二九,六四〇	二八,五七七	—	—	—	—	—	—	二九,六四〇	二八,五七七
三 歲	三九,三三七	三九,八六六	—	—	—	—	—	—	三九,三三七	三九,八六六
四 歲	二九,四九七	三〇,五〇〇	—	—	—	—	—	—	二九,四九七	三〇,五〇〇
一 歲 未 滿—四	一,五三三,四八四	一,五三三,四八四	—	—	—	—	—	—	一,五三三,四八四	一,五三三,四八四
五 歲	二六,五八一	二六,九六九	—	—	—	—	—	—	二六,五八一	二六,九六九
六 歲	二四,二七九	二四,〇三三	—	—	—	—	—	—	二四,二七九	二四,〇三三
七 歲	二四,〇六七	二四,八八二	—	—	—	—	—	—	二四,〇六七	二四,八八二
八 歲	二四,二七七	二四,七三三	—	—	—	—	—	—	二四,二七七	二四,七三三
九 歲	二四,三三三	二四,三三三	—	—	—	—	—	—	二四,三三三	二四,三三三

五	歲一	九	歲	1,330,000	1,180,000	15%	1,330,000	1,180,000	11%	1,330,000	1,180,000	11%	1,330,000	1,180,000	11%
十	歲		歲	1,180,000	1,030,000	8%	1,180,000	1,030,000	8%	1,180,000	1,030,000	8%	1,180,000	1,030,000	8%
十	一	歲	歲	1,030,000	880,000	7%	1,030,000	880,000	7%	1,030,000	880,000	7%	1,030,000	880,000	7%
十	二	歲	歲	880,000	730,000	6%	880,000	730,000	6%	880,000	730,000	6%	880,000	730,000	6%
十	三	歲	歲	730,000	580,000	5%	730,000	580,000	5%	730,000	580,000	5%	730,000	580,000	5%
十	四	歲	歲	580,000	430,000	4%	580,000	430,000	4%	580,000	430,000	4%	580,000	430,000	4%
十	歲一	十四	歲	430,000	280,000	3%	430,000	280,000	3%	430,000	280,000	3%	430,000	280,000	3%
十	五	歲	歲	280,000	130,000	2%	280,000	130,000	2%	280,000	130,000	2%	280,000	130,000	2%
十	六	歲	歲	130,000	80,000	1%	130,000	80,000	1%	130,000	80,000	1%	130,000	80,000	1%
十	七	歲	歲	80,000	30,000	0%	80,000	30,000	0%	80,000	30,000	0%	80,000	30,000	0%
十	八	歲	歲	30,000	0	0%	30,000	0	0%	30,000	0	0%	30,000	0	0%
十	九	歲	歲	0	0	0%	0	0	0%	0	0	0%	0	0	0%
十五	歲一	十九	歲	1,330,000	1,180,000	8%	1,330,000	1,180,000	8%	1,330,000	1,180,000	8%	1,330,000	1,180,000	8%
二	十	歲	歲	1,180,000	1,030,000	7%	1,180,000	1,030,000	7%	1,180,000	1,030,000	7%	1,180,000	1,030,000	7%
二	十	一	歲	1,030,000	880,000	6%	1,030,000	880,000	6%	1,030,000	880,000	6%	1,030,000	880,000	6%
二	十	二	歲	880,000	730,000	5%	880,000	730,000	5%	880,000	730,000	5%	880,000	730,000	5%
二	十	三	歲	730,000	580,000	4%	730,000	580,000	4%	730,000	580,000	4%	730,000	580,000	4%
二	十	四	歲	580,000	430,000	3%	580,000	430,000	3%	580,000	430,000	3%	580,000	430,000	3%

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

二十歳—二十四歳	二五八,五五五	一八,九七五	三三,三三三	六六,六六六	一一,一五九	一四,八四三	一〇,五三三	一一,三三八	七,九七九	七,九七九	一,三三三	七,九七九	一,三三三	七,九七九
二十一歳	二七,三三三	二,〇〇〇	二二,一四一	四六,六六六	三,六七一	四,六六〇	二,九七九	二,三三三	一六,九九三	一六,九九三	一,三三三	一六,九九三	一,三三三	一六,九九三
二十二歳	二〇,七六七	一,八七六	二九,六六六	三三,五五五	三,八六一	四,〇〇〇	二,八七一	二,三三三	一四,二二二	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二
二十三歳	一七,七七八	一,六六六	二四,〇〇〇	二五,五五五	三,八六一	四,〇〇〇	二,八七一	二,三三三	一四,二二二	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二
二十四歳	一三,八八八	一,三三三	二一,六六六	二二,九九九	三,八六一	四,〇〇〇	二,八七一	二,三三三	一四,二二二	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二
二十五歳—二十九歳	九,〇八七	八,四四四	六,九九九	三,六六六	三,三三三	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十歳	七,〇〇〇	九,九九九	二七,七七八	三〇,〇〇〇	三,八六一	四,〇〇〇	二,八七一	二,三三三	一四,二二二	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二	一,三三三	一四,二二二
三十一歳	六,八八八	二七,七七八	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十二歳	五,八八八	二七,七七八	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十三歳	五,〇〇〇	二七,七七八	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十四歳	四,五五五	二七,七七八	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十五歳—三十四歳	三,〇〇〇	三,九七九	二七,七七八	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十六歳	四,三三三	三,〇〇〇	二二,九九九	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十七歳	三,三三三	三,〇〇〇	二二,九九九	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十八歳	二,七七八	三,〇〇〇	二二,九九九	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八
三十九歳	二,三三三	二,〇〇〇	二二,九九九	二二,九九九	三,六六六	三,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八	二,八八八	二,三三三	二,七七八	二,八八八	二,七七八

第二章 人口の構成

五十四歳	二二	三七	五三,八四六	三,八七〇	一一,一〇〇	四,九七六	三三,二七三	一三,一七三	六三,七九八	一,一〇三,六〇〇
五十三歳	七	三三	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
五十二歳	七	三三	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
五十一歳	〇	〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
五十歳	六	二	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十五歳—四十九歳	九	二九	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十九歳	一,二二六	〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十八歳	一,一九七	〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十七歳	一,〇九〇	〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十六歳	二,四四七	一,〇七〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十五歳	二,五七七	一,一八三	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十歳—四十四歳	九,五七〇	三,〇三三	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十四歳	二,九七	一,一七七	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十三歳	一,〇九	一,〇〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十二歳	一,〇〇	一,〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十一歳	一,六八	一,〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
四十歳	一,〇	一,〇	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七
三十五歳—三十九歳	一,一〇	二,七九	五三,七六三	三,〇七〇	一〇,一八一	四,一七六	三三,一〇一	一三,〇三二	六三,七九八	一,〇二二,七〇七



第二章 人口の構成

一六一

六十五歳—六十九歳	五九	105,263,313	六三,121,111	四二,142,202	1,181	五九	1,131,961	105,263,313	五三,180
七十歳	133	二六,157,310	七,557,070	一八,590,240	一八	133	二七,748,111	二六,157,310	五六,738
七十一歳	110	三三,992,922	五,880,070	二八,112,852	110	110	三三,992,922	三三,992,922	五七,182
七十二歳	60	七,767,070	三,336,670	四,430,400	六	60	一四,876,740	七,767,070	五三,180
七十三歳	61	三三,336,670	三,336,670	三〇,000,000	七	61	一四,876,740	三三,336,670	五三,180
七十四歳	59	二七,177,177	二,927,177	二四,250,000	七	59	一四,876,740	二七,177,177	五三,180
七十五歳—七十四歳	133	二八,992,922	二,101,101	二六,891,821	七	133	二八,992,922	二八,992,922	五三,180
七十五歳	61	六,336,670	二,101,101	四,235,569	七	61	一三,791,821	六,336,670	五三,180
七十六歳	67	五,557,070	一,927,177	三,629,893	六	67	一三,791,821	五,557,070	五三,180
七十七歳	33	三,336,670	一,927,177	一,409,493	六	33	一三,791,821	三,336,670	五三,180
七十八歳	33	二,101,101	二,101,101	0	七	33	一三,791,821	二,101,101	五三,180
七十九歳	33	一,927,177	二,101,101	0	七	33	一三,791,821	一,927,177	五三,180
七十歳—七十九歳	114	一,927,177	七,511,711	一〇,438,888	100	114	一〇,438,888	一,927,177	一〇,438,888
八十歳	14	一,000,000	七,511,711	六,511,711	11	14	一〇,438,888	一,000,000	九,900
八十一歳	7	一,000,000	二,111,111	一,111,111	11	7	一〇,438,888	一,000,000	九,900
八十二歳	5	一,000,000	一,000,000	0	11	5	一〇,438,888	一,000,000	九,900
八十三歳	8	一,000,000	一,101,101	0	九	8	一〇,438,888	一,000,000	九,900
八十四歳	5	一,111,111	一,111,111	0	11	5	一〇,438,888	一,111,111	九,900

朝鮮の人口現象

八十歳—八十四歳	五	二	五、一五	一、二六三	八、一七二	一七、〇〇〇	六一	六一	三、七六一	一、六〇八	三、二六九
八十五歳	六	二	三、三六	六、六九	五、九六	一、一七〇	三	三	一、七〇七	一、三三三	一、〇九〇
八十六歳	三	一	一、九〇	〇	四、三三	一、〇一〇	三	三	一、七〇七	一、〇九〇	一、〇九〇
八十七歳	三	一	二、〇〇	〇	三、九〇	八、七八	三	七	四、四四	九、九六	一、五九四
八十八歳	三	一	七、七六	三	一、七六	四、〇一	二	一	二、七〇	四、四四	一、五九四
八十九歳	二	五	四、九〇	二	一、五三	三、九六	三	五	一、〇七	四、四四	一、五九四
八十五歳—八十九歳	二七	七	六、〇〇	三、三三	一、六八八	三、九六	一六	一九	二、二九一	四、七九	六、〇七〇
九十歳	一	一	三、三三	六	八、八九	三、五	一	一	三、三三	三、三三	三、三三
九十一歳	一	一	四、四四	三	七、七	一、四	一	一	三、三三	四、四四	四、四四
九十二歳	一	二	三、三三	三	六、六	一、〇	一	一	一、〇〇	三、三三	三、三三
九十三歳	一	二	二、二二	六	九、九	一、四	一	一	九、九	一、六	二、〇
九十四歳	三	一	三、三三	三	七、七	一、六	一	二	一、〇	一、〇	三、九
九十歳—九十四歳	六	四	一、四	八、九	五、八	九、九	二	四	四、四	一、〇	一、五
九十五歳	一	一	一、一	六	三、三	一、〇	一	一	一、〇	一、〇	一、〇
九十六歳	一	一	四、四	三	八、八	三、三	一	一	三、三	四、四	四、四
九十七歳	一	一	六、六	二	九、九	三、三	一	一	一、四	二、二	三、三
九十八歳	一	一	五、五	三	五、五	三、三	一	一	一、〇	一、〇	一、〇
九十九歳	一	一	一、一	二	四、四	一、七	一	一	六、六	一、七	一、七

	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	百	九十五歲—九十九歲
	十	十	十	十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	一							
	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲	歲
人口の構成																					二
																					一
						三		二	一		三	一		二		三					品
											三			一		二					元
						一		一			六	一	二	一	一	一	一	一	一	一	七
						五		一	一	一	二	七	二	四	三	三	三	三	三	三	一三
																					一
一六三						四		三	一		九	二	二	一	三	一	三	一	一	一	三
						五		一	一	一	二	三	四	四	三	三	三	三	三	三	三三
						九		一	四	二	二	元	四	六	五	六	八	八	八	八	三六

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

年齢	合計	男	女
百十歳—百十四歳	100,110	50,055	50,055
百十五歳	100,110	50,055	50,055
百十六歳	100,110	50,055	50,055
百十七歳	100,110	50,055	50,055
百十八歳	100,110	50,055	50,055
百十九歳	100,110	50,055	50,055
百十五歳以上	100,110	50,055	50,055
合計	100,110	50,055	50,055

京畿道

年齢	未婚		有配偶		死別		離別		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歳未満—四歳	13,869	14,899	—	—	—	—	—	—	13,869	14,899
五歳—九歳	29,899	23,510	—	—	—	—	—	—	29,899	23,510
十歳—十四歳	23,378	9,271	5,093	1,307	—	—	—	—	28,471	10,578
十五歳—十九歳	33,572	3,300	5,188	6,330	—	—	—	—	38,760	9,630
二十歳—二十四歳	28,299	3,593	6,683	6,993	—	—	—	—	34,982	10,586
二十五歳—二十九歳	8,840	1,023	6,300	6,831	—	—	—	—	15,171	13,661
三十歳—三十四歳	3,022	—	6,339	6,831	—	—	—	—	9,361	13,661

第二章 人口の構成

一歲未満—四歲 六六,九六八 六六,九三三 六六,九三九 三三,三三三 七

年 齡 未 婚 有 配 偶 死 別 離 別 合 計

年 齡	未 婚	有 配 偶	死 別	離 別	合 計
三十五歲—三十九歲	一,八二五	五,五四四	四,四三三	一,六三三	六,九六六
四十歲—四十四歲	八九七	三,三六一	三,三三三	一,一六七	六,九三三
四十五歲—四十九歲	七五五	三,九八六	三,七四四	七九三	七,二四七
五十歲—五十四歲	二九三	三,八七五	六,三三三	三三三	七,九三三
五十五歲—五十九歲	一六六	三,五〇七	六,九六六	三七五	三,三三三
六十歲—六十四歲	九六	一,五〇一	六,二二二	二〇〇	三,二七一
六十五歲—六十九歲	三三	一,一三三	六,〇〇〇	一〇〇	二,七七一
七十歲—七十四歲	三	四,七三三	四,四六六	九	一,九三三
七十五歲—七十九歲	一六	一,七〇〇	二,四二二	三三	四,一三三
八十歲—八十四歲	五	三,八五五	七,四二二	八	一,六三三
八十五歲—八十九歲	—	—	—	—	—
九十歲—九十四歲	—	—	—	—	—
九十五歲—九十九歲	—	—	—	—	—
合 計	三〇,三〇二	三〇,八〇七	三六,一三三	一〇,九七二	九七,二一四

忠 清 北 道





朝鮮の人口現象

一六八

年齢	未婚	有配偶	死別	離別	合計						
	男	女	男	女	男	女	合計				
六十歳—六十四歳	26	15	8,873	5,076	4,177	9,775	90	15	13,176	14,994	28,170
六十五歳—六十九歳	25	7	5,533	2,618	3,746	8,770	67	0	9,550	11,553	21,103
七十歳—七十四歳	8	3	2,023	856	2,334	3,006	19	1	2,042	2,991	5,033
七十五歳—七十九歳	5	1	622	332	1,277	2,080	6	3	1,770	2,669	4,439
八十歳—八十四歳	—	—	9	43	332	639	2	—	53	632	1,165
八十五歳—八十九歳	—	—	24	16	48	212	—	—	63	212	275
九十歳—九十四歳	—	—	7	3	9	49	—	—	6	55	61
九十五歳—九十九歳	—	—	—	—	4	24	—	—	5	24	29
百歳—百四歳	—	—	—	—	1	1	—	—	1	1	2
合計	33,552	22,646	29,679	22,626	25,566	67,366	7,536	3,565	62,992	69,041	132,033

全羅北道

年齢	未婚	有配偶	死別	離別	合計				
	男	女	男	女	男	女	合計		
一歳未満—四歳	110,561	103,826	—	—	—	—	110,561	103,826	214,387
五歳—九歳	89,527	81,461	—	—	—	—	89,527	81,461	170,988
十歳—十四歳	75,020	67,733	—	—	—	—	75,020	67,733	142,753
十五歳—十九歳	73,270	63,367	—	—	—	—	73,270	63,367	136,637
二十歳—二十四歳	19,627	14,001	10,733	9,914	17,131	13,826	30,957	26,727	57,684

第二章 人口の構成

二十五歳—二十九歳	六,七〇〇	四,四三〇	四,七三〇	四,六六一	一,六四七	二,三三〇	一,七三三	七,一〇〇	三,三三〇	三,七六九	二,二二九	一,一〇〇	二,一〇〇
三十歳—三十四歳	二,七三三	二,〇〇〇	四,八六二	四,七七一	二,三三三	三,七〇〇	一,〇二二	四,一七一	一,八七一	三,九一〇	一,〇七一	一,〇七一	一,〇七一
三十五歳—三十九歳	八,六一二	一,六〇〇	四,〇九四	四,〇九四	二,九二四	四,〇九四	〇,九二四	四,〇九四	〇,九二四	四,〇九四	〇,九二四	〇,九二四	〇,九二四
四十歳—四十四歳	四,四八〇	一,四三三	三,三三三	三,三三三	二,九二四	四,〇九四	〇,九二四	四,〇九四	〇,九二四	四,〇九四	〇,九二四	〇,九二四	〇,九二四
四十五歳—四十九歳	四,四七七	一,四二七	三,三二七	三,三二七	二,九一四	四,〇八四	〇,九一四	四,〇八四	〇,九一四	四,〇八四	〇,九一四	〇,九一四	〇,九一四
五十歳—五十四歳	一,一七二	〇,七〇〇	一,九六六	一,九六六	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
五十五歳—五十九歳	一,一六二	一,一六二	一,九七九	一,九七九	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
六十歳—六十四歳	三,七〇七	一,一七二	二,八〇〇	二,八〇〇	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
六十五歳—六十九歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
七十歳—七十四歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
七十五歳—七十九歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
八十歳—八十四歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
八十五歳—八十九歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
九十歳—九十四歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
九十五歳—九十九歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
百歳—百四歳	三,三三三	一,一〇〇	二,七三三	二,七三三	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇
合 計	三,六八四	一,一〇〇	二,六五七	二,六五七	一,三三三	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	三,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇	一,〇〇〇

全羅南道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歲未滿—四 歲	一七,七〇〇	一七,一四六	—	—	—	—	—	—	一七,七〇〇	一七,一四六
五 歲—九 歲	一三,五六九	一三,一三一	—	—	—	—	—	—	一三,五六九	一三,一三一
十 歲—十四 歲	二二,七七一	二〇,〇三二	—	—	—	—	—	—	二二,七七一	二〇,〇三二
十五 歲—十九 歲	二八,三三三	二六,四四九	—	—	—	—	—	—	二八,三三三	二六,四四九
二十 歲—二十四 歲	三三,七六一	二九,〇〇〇	—	—	—	—	—	—	三三,七六一	二九,〇〇〇
二十五 歲—二十九 歲	二二,九四四	二〇,〇〇〇	—	—	—	—	—	—	二二,九四四	二〇,〇〇〇
三十 歲—三十四 歲	三三,三七七	二九,一〇〇	—	—	—	—	—	—	三三,三七七	二九,一〇〇
三十五 歲—三十九 歲	一,三六六	三九	—	—	—	—	—	—	一,三六六	三九
四十 歲—四十四 歲	七四〇	三三	—	—	—	—	—	—	七四〇	三三
四十五 歲—四十九 歲	〇三〇	三	—	—	—	—	—	—	〇三〇	三
五十 歲—五十四 歲	二五九	一三	—	—	—	—	—	—	二五九	一三
五十五 歲—五十九 歲	一四一	七	—	—	—	—	—	—	一四一	七
六十 歲—六十四 歲	九四	五	—	—	—	—	—	—	九四	五
六十五 歲—六十九 歲	五九	三	—	—	—	—	—	—	五九	三
七十 歲—七十四 歲	七	〇	—	—	—	—	—	—	七	〇

七十五歳—七十九歳	三三	一	二,000	八四	二,二七	五,四三	一七	三	四,一六七	六,三〇	一〇,四七
八十歳—八十四歳	七	二	四八	一〇	八三	二,六一	七	三	一,三四	二,三三	三,七九
八十五歳—八十九歳	一	一	八	三	五九	一	一	八	二九九	六三	九四
九十歳—九十四歳	一	一	五	三	四	一六七	一	一	六	一九	二七
九十五歳—九十九歳	一	一	三	九	三	二	一	一	二	五	七
百歳—百四歳	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	六三,七〇	四三,八五	四七,六〇	四七,七六	四,三三	四,七	一〇,八三	一〇,四四	一〇,九〇	一〇,八五	一〇,六六

慶尚北道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歳未滿—四 歳	一五,〇三	一八,〇〇	—	—	—	—	—	—	一五,〇三	一八,〇〇
五 歳—九 歳	一五,八〇	一四,三三	一〇	四	—	—	—	—	一五,八〇	一四,三三
十 歳—十四歳	一七,七七	二二,七四	五,七三	一〇,八五	七	六	二七	三	二四,三七	三三,七四
十五歳—十九歳	八,三三	二九,三三	八,七	八,八七	七	七	三	六	一三,〇七	二四,〇一
二十歳—二十四歳	二七,六三	一,六八	五,四六	七,〇二	八	六	八九	一〇〇	八,三七	八,三四
二十五歳—二十九歳	一〇,八一	六二	七,八三	八,三三	一,七六	三,三三	一〇	一九	八,八七	八,七三
三十歳—三十四歳	三,四三	四五	五,三四	六,七三	二,四七	四,三六	一,三三	七〇	七,四八	六,三三
三十五歳—三十九歳	二,一八	三〇	六,四八	六,六五	三,四	七,〇	一,六八	〇	七,六三	七,四七

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歲未滿—四 歲	170,101	157,024	—	—	—	—	—	—	170,101	157,024
四 十 歲—四 十 四 歲	1,136	1,136	—	—	—	—	—	—	1,136	1,136
四 十 五 歲—四 十 九 歲	1,028	1,028	—	—	—	—	—	—	1,028	1,028
五 十 歲—五 十 四 歲	455	455	—	—	—	—	—	—	455	455
五 十 五 歲—五 十 九 歲	263	263	—	—	—	—	—	—	263	263
六 十 歲—六 十 四 歲	140	140	—	—	—	—	—	—	140	140
六 十 五 歲—六 十 九 歲	79	79	—	—	—	—	—	—	79	79
七 十 歲—七 十 四 歲	44	44	—	—	—	—	—	—	44	44
七 十 五 歲—七 十 九 歲	15	15	—	—	—	—	—	—	15	15
八 十 歲—八 十 四 歲	3	3	—	—	—	—	—	—	3	3
八 十 五 歲—八 十 九 歲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
九 十 歲—九 十 四 歲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
九 十 五 歲—九 十 九 歲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 歲—百 四 歲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百 五 歲—百 九 歲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	677,475	628,285	110,110	110,110	1,028	1,028	7,212	7,212	790,825	746,660

慶 尚 南 道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歲未滿—四 歲	101,170	101,170	—	—	—	—	—	—	101,170	101,170

五 歳—九 歳	13,910	11,108	—	—	—	—	—	—	—	13,910	11,108	1,802
十 歳—十四 歳	16,955	10,133	1,730	5,403	3	6	3	1	3	16,955	10,133	1,802
十五 歳—十九 歳	8,733	5,277	1,701	3,576	1,314	1,260	1,314	1,260	1,314	8,733	5,277	1,314
二十 歳—二十四 歳	5,433	3,170	1,001	2,169	1,002	950	1,002	950	1,002	5,433	3,170	1,002
二十五 歳—二十九 歳	14,032	1,710	6,730	7,302	1,036	3,273	1,036	1,242	1,242	14,032	1,710	1,242
三十 歳—三十四 歳	5,636	3	2,100	3,536	1,731	3,536	1,731	1,731	1,731	5,636	3	1,731
三十五 歳—三十九 歳	1,733	3,536	20,231	3,536	2,336	1,936	2,336	1,936	2,336	1,733	3,536	2,336
四十 歳—四十四 歳	1,033	310	3,536	3,536	2,336	2,336	2,336	2,336	2,336	1,033	310	2,336
四十五 歳—四十九 歳	1,271	6,601	2,700	3,901	3,100	2,100	3,100	2,100	3,100	1,271	6,601	3,100
五十 歳—五十四 歳	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333
五十五 歳—五十九 歳	2,277	3,333	1,636	2,277	1,636	1,636	1,636	1,636	1,636	2,277	3,333	1,636
六十 歳—六十四 歳	1,211	3,333	2,277	2,277	1,636	1,636	1,636	1,636	1,636	1,211	3,333	1,636
六十五 歳—六十九 歳	70	3,333	1,636	2,277	1,636	1,636	1,636	1,636	1,636	70	3,333	1,636
七十 歳—七十四 歳	30	3,333	1,636	2,277	1,636	1,636	1,636	1,636	1,636	30	3,333	1,636
七十五 歳—七十九 歳	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333
八十 歳—八十四 歳	8	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	8	3,333	3,333
八十五 歳—八十九 歳	3	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3	3,333	3,333
九十 歳—九十四 歳	1	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	3,333	1	3,333	3,333

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

年齢	未婚		有配偶		死別		離別		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歳未満—四歳	二一八、二二三	二二六、二六九	二	—	—	—	—	—	二一八、二三四	二二六、二六九
五歳—九歳	九〇、八六九	八六、六三九	五	—	—	—	—	九〇、九一六	八六、六八六	
十歳—十四歳	七六、八八九	七六、六四四	四、八七〇	七、三三三	四	七	三六	三	八二、八四三	七六、六八四
十五歳—十九歳	四四、四〇三	一七、九六六	二六、二七五	三〇、〇三三	三三	五三	三六	六六	七二、九一七	六九、四〇〇
二十歳—二十四歳	一五、七三七	一、一六三	四〇、四三七	三三、三三三	九二	一、三六一	七四	一、〇六	五七、八一九	五六、六九七
二十五歳—二十九歳	五、四三三	五〇九	四、〇六八	三、四三三	一、七六	二、四六九	一、四六	一、〇五九	五六、七五七	五〇、〇七
三十歳—三十四歳	二、四七	二四七	四、四九	四、四四	二、三九九	三、七九	一、〇七	八六〇	四九、九三三	四六、六八〇
三十五歳—三十九歳	九九四	一八九	五、三三三	三、五七七	二、七六六	四、九六一	九〇	五九〇	四九、一〇三	四〇、〇七
四十歳—四十四歳	六六七	三三	三、五〇〇	三、〇三九	三、三六三	六、四九七	七四	五二	四〇、三〇三	三七、七三七
四十五歳—四十九歳	七九	二六	三、五四	三、四三〇	三、八四六	八、二二七	五九	七六	三三、三六六	三三、一八八
合計	五五五、一五九	四三三、六一四	四三、三三三	四七、七四〇	三六、〇八三	一一〇、九一〇	六、七三三	六、五六一	二一〇、三三〇	一九七、七二二

黄 海 道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
五十歳—五十四歳	三三三	一〇三	三三、七〇〇	一七、〇四九	四、〇〇〇	九、九八一	三、七	三九	二六、七七	二七、八四〇
五十五歳—五十九歳	一四三	七	一九、三三〇	一三、一四八	五、〇九	二、二五二	二九八	三三	二四、八九〇	二五、五九
六十歳—六十四歳	四	〇	二、二九〇	七、〇六九	四、七三三	一〇、九六九	一六〇	二	一七、三三	一八、二四
六十五歳—六十九歳	三	〇	一、六七〇	四、三〇〇	五、〇〇〇	一、〇〇〇	一三	九	一三、九三三	一五、三三〇
七十歳—七十四歳	一六	六	三、五八三	一、五七六	三、二七	六、七四	四	四	六、九三	八、三三七
七十五歳—七十九歳	一八	六	一、三三三	三、三	二、〇〇	四、〇九	三	〇	三、五六〇	四、六〇一
八十歳—八十四歳	一	二	三、一	一〇	六、	一、二八	一	四	九、七	一、三八
八十五歳—八十九歳	一	一	四	一〇	九	三〇	一	一	一、三	三、
九十歳—九十四歳	一	一	一〇	一	三	六	一	一	四	七
九十五歳—九十九歳	一	一	四	四	一	一〇	一	一	四	一四
合 計	三、六、五〇	一、二、五〇	三、七、八三〇	三、三、八、六、七	四、〇、五、九、七	八、三、五、七	六、三、〇	五、八、九、〇	七、四、一、二、六	七、三、〇、五、九、七

平 安 南 道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歳未滿—四 歳	一〇三、一四	一〇一、四四	—	—	—	—	—	—	一〇三、一四	一〇一、四四
五 歳—九 歳	七、五〇	七、三、六	—	—	—	—	—	—	七、五〇	七、三、六
十 歳—十四歳	六、四三	六、二、七	六、〇〇〇	一、〇一	—	—	—	—	六、四三	六、二、七
十五歳—十九歳	五、〇八	五、一、七	三、三、七	三、二、	三、〇	二、六	三、	三、	六、〇、八	五、一、七

朝鮮の人口現象

二十歳—二十四歳	一六,九七五	九,七七一	三,四八六	四六,〇〇〇	六,九七五	六,九七五	九,七七一	三,四八六	四六,〇〇〇	一〇,〇〇〇
二十五歳—二十九歳	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五
三十歳—三十四歳	一,八九一	三二	三,五八六	三,五八六	一,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇
三十五歳—三十九歳	九,九七五	二九	三,九七五	三,九七五	一,九七五	三,九七五	三,九七五	三,九七五	三,九七五	三,九七五
四十歳—四十四歳	六,六八	一〇八	三,九七五	三,九七五	二,〇〇〇	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五
四十五歳—四十九歳	四,九七五	一三	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,七〇	五,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五	四,九七五
五十歳—五十四歳	三三	五	一,八八	一,八八	三,〇〇〇	六,八八	三,〇〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇	三,〇〇〇
五十五歳—五十九歳	一六	四	一,七〇七	一,七〇七	三,六七一	八,〇〇九	二,六七一	一,七〇七	一,七〇七	一,七〇七
六十歳—六十四歳	七三	一五	二,四四五	六,八八	三,六七一	八,〇〇九	一,七〇七	一,七〇七	一,七〇七	一,七〇七
六十五歳—六十九歳	四	一三	八,六〇〇	四,六〇〇	四,六〇〇	九,六〇〇	一,三	一,三	一,三	一,三
七十歳—七十四歳	三三	九	三,八八	一,八八	二,三〇〇	六,三〇〇	一,三	一,三	一,三	一,三
七十五歳—七十九歳	一五	四	一,七七一	五,七七一	二,〇〇〇	四,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇	二,〇〇〇
八十歳—八十四歳	二	一	一,四八	八	七〇七	一,七〇七	二	二	二	二
八十五歳—八十九歳	二	一	一	九	一〇〇	二,四	二	二	二	二
九十歳—九十四歳	一	一	三	一	二	六	一	一	一	一
九十五歳—九十九歳	一	一	一	一	四	六	一	一	一	一
百歳—百四歳	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	一〇〇,〇〇〇	二二,七七一	二,八八	二,七〇七	三,〇〇〇	六,九七五	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇	一〇,〇〇〇

平 安 北 道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
一歲未滿—四 歲	二七,101	二五,800	—	—	—	—	—	—	二七,101	二五,800	三三,600
五 歲—九 歲	八三,八七二	八〇,八四六	—	—	—	—	—	—	八三,八七二	八〇,八四六	一六〇,七一九
十 歲—十四 歲	六六,三七七	七〇,九〇〇	六二,五八	八,九三三	—	—	—	—	六六,三七七	七〇,九〇〇	一三三,一四〇
十五歲—十九 歲	四一,〇〇〇	四四,〇六六	三九,二三四	五〇,〇〇〇	—	—	—	—	四一,〇〇〇	四四,〇六六	一三九,九四〇
二十歲—二十四 歲	一四,四六五	一四,〇五〇	一四,三三九	一五,四七五	—	—	—	—	一四,四六五	一四,〇五〇	一三三,七七〇
二十五歲—二十九 歲	五,五六六	—	五,二二	五,四七五	—	—	—	—	五,五六六	—	一三,八八八
三十歲—三十四 歲	二,〇九一	—	三九	四二,三五五	—	—	—	—	二,〇九一	—	四三,〇六二
三十五歲—三十九 歲	一,二五三	—	一七五	三六,九三〇	—	—	—	—	一,二五三	—	三七,四三三
四十歲—四十四 歲	七九七	—	一七九	三三,四三三	—	—	—	—	七九七	—	三三,四三三
四十五歲—四十九 歲	六三三	—	二三四	二七,六六九	—	—	—	—	六三三	—	二九,〇〇〇
五十歲—五十四 歲	二九	—	九七	一九,六五三	—	—	—	—	二九	—	二二,六五三
五十五歲—五十九 歲	一五〇	—	六	一七,四九八	—	—	—	—	一五〇	—	一六,〇七六
六十歲—六十四 歲	九七	—	三	一三,〇〇〇	—	—	—	—	九七	—	一三,〇〇〇
六十五歲—六十九 歲	五四	—	一七	一〇,〇八七	—	—	—	—	五四	—	一〇,〇八七
七十歲—七十四 歲	一八	—	四	四,二七七	—	—	—	—	一八	—	四,二七七

朝鮮の人口現象

一七八

七十五歳—七十九歳	九	六	一、六〇〇	五四五	二、三六五	三、七三三	一八	一七	四、〇〇〇	四、〇〇〇	八、〇〇〇
八十歳—八十四歳	四	一	三三四	八七	六六六	一、二六四	四	五	九八	一、三三七	二、三三四
八十五歳—八十九歳	三	二	四〇〇	二六	一五五	三三三	二	—	一〇〇	三三〇	五三〇
九十歳—九十四歳	—	—	—	五	二六	九	—	—	—	—	九
九十五歳—九十九歳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
百歳—百四歳	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	三三、九四二	二六、八五三	三六、七三七	三、五四二	四、四七	六、六六三	三、六九	三、七二	七六、三三〇	六八、七七七	一、四七、〇九二

江原道

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歳未満—四 歳	二七、〇三二	二五、四〇八	—	—	—	—	—	—	二七、〇三二	二五、四〇八
五 歳—九 歳	八、六	七、八七八	—	—	—	—	—	—	八、六	七、八七八
十 歳—十四歳	七五、〇七	六五、九六	三、五四	六、五三	—	—	—	—	七五、〇七	六五、九六
十五歳—十九歳	四、一〇八	一七、六八	三、四三三	四、八〇〇	—	—	—	—	四、一〇八	一七、六八
二十歳—二十四歳	一三、六八	九四	三、七三三	四、四六七	—	—	—	—	一三、六八	九四
二十五歳—二十九歳	四、七四	五〇	四、四三三	四、四七	—	—	—	—	四、七四	五〇
三十歳—三十四歳	一、七三	一八〇	四、〇八	六、六八	—	—	—	—	一、七三	一八〇
三十五歳—三十九歳	九七	一四	七、九七七	三、五七	—	—	—	—	九七	一四

四十歲—四十四歲	六五四	一九三	三,五六三	二六,〇四三	四,三〇〇	三,九三二	六四四	四六六	六,三三〇	三,五六八	七,八八六
四十五歲—四十九歲	七五四	二七九	二七,五五七	三三,一九一	四,五八五	五,六三三	五五四	三九九	五,四〇〇	三九,〇七三	六三,五三三
五十歲—五十四歲	二九五	八三三	三三,〇三三	一六,六四五	四,八〇〇	六,五七六	三九三	三二八	三,七五〇	三三,三三四	五二,〇〇七
五十五歲—五十九歲	二九八	六二一	一七,一七〇	二,三二九	五,一八一	八,二一九	二八八	一八三	三,八四四	三〇,四九三	四三,三六六
六十歲—六十四歲	九〇	二六	一,〇〇三	七,四六六	五,〇六〇	七,九三三	一七七	一三四	二,六七〇	一五,三七八	三三,〇六八
六十五歲—六十九歲	空	三	七,八七	四,五〇七	五,四六四	八,一九三	一三三	六七	二,三四七	二二,七八八	三六,三五六
七十歲—七十四歲	元	四	三,六五	一,六八四	三,八七六	五,四八九	七	六	七,五八八	七,三三三	一四,八九一
七十五歲—七十九歲	六	六	一,四三三	五三	二,三九	三,二六三	〇	一七	三,七九九	三,八六六	七,五六五
八十歲—八十四歲	六	三	三六一	八〇	七六	九四二	八	七	一,〇〇一	一,〇三	三,〇三
八十五歲—八十九歲	一	一	三	一四	二〇	一七四	一	二	一五	一九	三四
九十歲—九十四歲	一	一	四	五	元	三	一	一	三	七	六
九十五歲—九十九歲	一	一	一	三	五	七	一	一	五	一〇	一五
百歲—百四歲	一	一	一	一	一	二	一	一	一	二	三
合計	三三,四三三	二六,三九七	三,〇,六四三	三〇,八,三六五	四八,〇七	五七,三三九	六,五三三	四,七三三	六九,九九九	六,四〇七,七三	一三,三三,三三三

咸鏡南道

年 齡	未 婚	有 配 偶	死 別	離 別	合 計
一歲未滿—四歲	男 二九,九六五 女 二六,四九九	男 — 女 —	男 — 女 —	男 — 女 —	男 二九,九六五 女 二六,四九九
五歲—九歲	男 九三,二〇八 女 八七,九三三	男 三 女 兜	男 — 女 —	男 — 女 —	男 九三,二二九 女 八七,九七一
合計	男 三三,四三三 女 二六,三九七	男 三,〇六四 女 三〇,八三六	男 四八,〇七 女 五七,三三九	男 六,五三三 女 四,七三三	男 六九,九九九 女 六四,〇七三

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

十 歳—十四 歳	八〇,七五九	七五,五三三	四,四四四	四,八七五	五三三	九〇九	一九	九	八五,三五五	八〇,四六六	二五,七三二
十五 歳—十九 歳	四四,八八一	二八,三二二	三三,七六六	四七,七二七	三三三	四九九	三〇三	一	七〇,一七〇	六六,一七〇	二六,四八八
二十 歳—二十四 歳	一八,九三三	一,三六七	六,六五〇	五二,〇四九	九三三	九八七	五二五	一	六六,六九九	五三,六九九	一三,三六八
二十五 歳—二十九 歳	六,六六二	六,六六二	四九,九五五	五〇,八五六	一,八二二	一,八二七	六四四	七四四	五八,三三三	五四,〇六三	二二,一九五
三十 歳—三十四 歳	二,五九八	三,四四四	四一,六〇五	五九,八二四	二,三三三	二,四七四	六四四	五四三	四六,八〇〇	四三,一三三	七〇,一〇五
三十五 歳—三十九 歳	一,三三〇	三〇八	三六,六七七	三三,一九三	二,八五二	三,三七三	五七二	四六〇	四一,三三三	三七,三三三	六,五五五
四十 歳—四十四 歳	九七七	二六七	三三,七〇〇	二七,三三七	三,三三〇	四,三七三	五七二	五六四	三六,五五五	三三,四〇一	六,九六六
四十五 歳—四十九 歳	九四四	三七五	二六,三三三	三三,三三三	三,六二二	六,〇七三	四四二	二七二	三三,一四八	二八,〇四九	五九,一九七
五十 歳—五十四 歳	四三三	一三三	一九,五五五	一四,七五五	三,六三〇	六,六三〇	二六七	一八〇	三三,七五五	二二,七三〇	四四,四四四
五十五 歳—五十九 歳	二三五	七〇	一四,六七七	九,八八八	三,七四一	七,〇三六	一八七	一〇一	一八,三三〇	一七,〇七七	三三,四七七
六十 歳—六十四 歳	二一七	一九	一一,三六六	六,八九九	四,四四九	七,六七九	一四三	六四	一一,九三三	一四,六六一	三〇,五六六
六十五 歳—六十九 歳	八五	一六	九,四四四	五,三三三	五,三三三	九,九九二	一一二	五三	一四,九六六	一四,九九二	二九,四六六
七十 歳—七十四 歳	六六	一〇	四,五七五	二,三三三	四,一八八	六,六七三	一五四	三三	八,八四一	九,四四一	一七,九六二
七十五 歳—七十九 歳	三三	七	二,〇〇〇	七七八	二,八二二	四,四四〇	三三	三三	五,〇〇一	五,三三七	一〇,〇〇一
八十 歳—八十四 歳	三三	三	三,三七三	九二	八九〇	一,二七二	七	四	一,三三三	一,三三三	二,六二四
八十五 歳—八十九 歳	四	一	六三	三三	一六九	二七二	二	一	三三八	二四四	五三三
九十 歳—九十四 歳	一	一	一九	一〇	七	七六	一	一	五	八八	一四四
九十五 歳—九十九 歳	一	一	四	三	三	七	一	一	九	九	二六
合 計	三七〇,五〇一	三三〇,四三三	三三,四七七	三三,五九三	四,〇,三九九	六三,〇一〇	四,四四二	三,八九四	七六,七四八	六四,三二八	一,四三三,九六六

咸 鏡 北 道

第二章 人口の構成

一八一

年 齡	未 婚		有 配 偶		死 別		離 別		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
一歲未滿—四 歲	五三,二六六	五二,四六一	—	—	—	—	—	—	五三,二六六	五二,四六一
五 歲—九 歲	四〇,四七七	四〇,四七七	—	—	—	—	—	—	四〇,四七七	四〇,四七七
十 歲—十四 歲	三三,三三三	三三,三三三	—	—	—	—	—	—	三三,三三三	三三,三三三
十五 歲—十九 歲	一九,七〇〇	一九,七〇〇	—	—	—	—	—	—	一九,七〇〇	一九,七〇〇
二十 歲—二十四 歲	一三,一八二	一三,一八二	—	—	—	—	—	—	一三,一八二	一三,一八二
二十五 歲—二十九 歲	三,八五八	三,八五八	—	—	—	—	—	—	三,八五八	三,八五八
三十 歲—三十四 歲	一,五〇〇	一,五〇〇	—	—	—	—	—	—	一,五〇〇	一,五〇〇
三十五 歲—三十九 歲	九七六	九七六	—	—	—	—	—	—	九七六	九七六
四十 歲—四十四 歲	六五五	六五五	—	—	—	—	—	—	六五五	六五五
四十五 歲—四十九 歲	四三三	四三三	—	—	—	—	—	—	四三三	四三三
五十 歲—五十四 歲	三三三	三三三	—	—	—	—	—	—	三三三	三三三
五十五 歲—五十九 歲	二二二	二二二	—	—	—	—	—	—	二二二	二二二
六十 歲—六十四 歲	七 七	七 七	—	—	—	—	—	—	七 七	七 七
六十五 歲—六十九 歲	五六	五六	—	—	—	—	—	—	五六	五六
七十 歲—七十四 歲	三三	三三	—	—	—	—	—	—	三三	三三
七十五 歲—七十九 歲	一八	一八	—	—	—	—	—	—	一八	一八
八十 歲—八十四 歲	三	三	—	—	—	—	—	—	三	三

一,八四四

朝鮮の人口現象

一八二

八十五歳—八十九歳	二	一	五	三	一七	二五	一	二	五	三	七
九十歳—九十四歳	一	一	七	六	四	〇	一	一	六	一	三
九十五歳—九十九歳	一	一	一	二	七	八	一	一	七	〇	七
百歳—百四歳	一	一	一	一	二	一	一	一	二	一	二
合 計	二七、五四	二九、〇七	二六、〇六	二八、五七	二七、五七	二八、三三	二六、	二七、	二六、	二七、	二六、

右の統計を見ると、未婚の者に於ては男の数が女の數に著しく超過して居るが、有配偶の者の男女數は略ぼ平均して居り、男の鮮外出稼などの關係か、僅かに女の數が多くなつて居る。配偶者に死別せる者は男よりも女の方が遙かに多く、今尙ほ儒教思想の影響を受けて寡婦の數の尠からざるを示して居る。また幼少年者に有配偶の者の多いことは驚くべきもので、四歳以下の有配偶者、男二人、女四人、五歳以上九歳以下の有配偶者、男二百七十六人、女六百九十四人、同死別せる男二人、女七人、同離別せる男二人、女二人、十歳以上十四歳以下の有配偶者、男四萬八千五百五十四人、女九萬二千二百八十四人、同死別せる男四百二十六人、女六百六人、同離別せる男二百四十四人、女三百五十七人に及んで居る。朝鮮に於ける婚姻に關しては後に詳しく論究したいが、今日に於ても早婚の弊の相當に大なることは、これによりても窺ひ得られるであらう。

以上に於て朝鮮の各年齢別男女數並にその配偶關係を明かにしたから、總人口に對し、人口研究上

普通行はるゝ方法によりて、統治上參考となるべき年齢別の各種の觀察を下して見やう。而して先づその成年者數を見ると、男五百七萬七千三百七十人、女四百八十二萬三千七百八十八人、計九百九十一萬一千五百八十八人あり、結婚年齢者數は、男五百六十五萬六千五百五人、女五百七十五萬四千二百六十四人、計一千百四十萬四千八百六十九人に達し、妊孕年齢の女は四百四十六萬五千四百六十八人ある。また勞働可能な年齢を男十五歳以上五十五歳未滿、女十五歳以上四十五歳未滿と假定するときは、その數男五百十九萬四千六百八十人、女四百六萬四千四百二十八人、計九百二十五萬九千八百八十八人あり、學齡兒童數は、男二百九萬九千七百七十二人、女百九十五萬八千三十二人、計四百五萬七千八百四十四人及ぶのである。朝鮮に内地同様の選舉法を施行し、又は朝鮮人に兵役を課するの可否及び時機は別問題として、試みに選舉年齢及び兵役義務年齢の者を計算して見ると、選舉年齢者數四百二十八萬三千七百三十二人、兵役義務年齢者數三百五十五萬六千四百二十四人を算する。更に犯罪年齢者數を見るに、男六百二十九萬二千九百四十人、女五百九十六萬三千七百九十四人、計一千二百二十五萬六千七百三十四人ある。今これ等各年齢者の各道に於ける分布數を見ると左の通りになつて居る。

成 年 者 數 (大正十四年十一月一日現在)

朝鮮の人口現象

道名	男(滿二十歲以上)		女(滿二十歲以上)		計
	結婚年齡者數	(大正十四年十月一日現在)	結婚年齡者數	(大正十四年十月一日現在)	
京畿道	五四,四七六	五〇四,六六九	一一〇,四七二	一,〇四七,一四五	
忠清北道	三三,四六三	二二二,二四五	四三,五六八	四三五,八六八	
忠清南道	三三,五八八	三二二,一五三	六四,七七二	六四七,七二一	
全羅北道	三六,八三三	三三六,九七四	六九,八七六	六九八,七九六	
全羅南道	五五,二七三	五六一,四三五	一一,二四一	一一,二四一,一九八	
慶尙北道	五七,八七〇	五五,六七〇	一一,四四四	一一,四四四,〇〇〇	
慶尙南道	五二,九五五	五〇九,三五四	一一,〇七三	一一,〇七三,四九九	
黃海道	三七,九〇〇	三七〇,一九七	七四,九二八	七四九,二八七	
平安南道	三二,三三九	三〇九,一六八	六三,〇三五	六三〇,三五七	
平安北道	三七,三〇〇	三四三,六九九	七二,四九九	七二七,四九九	
江原道	三六,〇九二	三九,五三三	六八,〇五四	六八〇,五四	
咸鏡南道	三六,二〇九	三三三,〇九四	六四,四三〇	六四四,三〇三	
咸鏡北道	一六,七一三	一四六,五六八	三三,三六八	三三,三六八	
總計	五〇七,七七〇	四八三,七八八	九,九〇二	九,九〇二,一五八	

道名 男(十七歲以上) 女(十五歲以上) 合計

京畿道 六〇六,五三〇 六〇二,八二九 一,二〇九,三五九

忠清北道	二四八,八六九	二五一,九三二	五〇〇,八〇一
忠清南道	三七一,七六九	三七二,一五一	七四三,九二〇
全羅北道	四〇一,一九六	四〇一,二〇七	八〇二,四〇三
全羅南道	六二二,三九九	六六一,五五四	一二七三,八五三
慶尙北道	六四九,〇四四	六八〇,二七一	一,三九三,二五
慶尙南道	五七六,三八六	六〇四,二三三	一一,八〇,六一八
黃海道	四二一,〇三五	四三九,六一七	八六〇,六五二
平安南道	三五七,一九四	三六八,五八五	七二五,七七九
平安北道	四一六,〇六六	四二二,八八三	八二八,九四九
江原道	四〇一,九九九	三八三,三九六	七八五,三九五
咸鏡南道	四〇三,二五一	三九九,三七二	八〇二,六二三
咸鏡北道	一八四,九六七	一七六,二三五	三六一,二〇一
總計	五,六五〇,六〇五	五,七五四,二六四	一一,四〇四,八六九

妊孕年齢者數 (大正十四年十月一日現在)

道名	女(十五歳以上) 五十歳未満	道名	女(十五歳以上) 五十歳未満
京畿道	四六四,一九四	忠清南道	二九四,二〇〇
忠清北道	一九四,三〇七	全羅北道	三七五,三三
			一八五

朝鮮の人口現象

一八六

全羅南道	五二,九九〇	平安北道	三三,三〇五
慶尙北道	五三,四一八	江原道	二九,八七四
慶尙南道	四六,五二六	咸鏡南道	三二,五二九
黃海道	三三,七八四	咸鏡北道	一三,九六四
平安南道	二八,七四七	總計	四四,五,四六八

勞働可能者數 (大正十四年十月一日現在)

道名

男 (十五歲以上 五十五歲未滿)	女 (十五歲以上 四十五歲未滿)	計
------------------	------------------	---

京畿道	五六五,七七八	四三〇,八七七	九八六,六三五
忠清北道	三三二,〇四七	一七五,三三四	四〇六,三八一
忠清南道	三五二,〇三二	二六七,六七七	六一九,六九九
全羅北道	三七七,七五〇	二九〇,一八八	六六六,九三八
全羅南道	五六七,三八六	四六九,五八五	一,〇三六,九七一
慶尙北道	五九五,六〇二	四七六,九五〇	一,〇七二,五五二
慶尙南道	五二四,五三三	四三三,五三三	九四八,〇五五
黃海道	三八二,七二六	三〇五,六五九	六八八,三七五
平安南道	三三二,〇三三	二五六,二三八	五七八,二六
平安北道	三七四,七四〇	二九四,二七五	六六九,〇一五

江原道	三六四,七〇一	二六九,六五三	六三四,三五三
咸鏡南道	三六六,七七〇	二八七,〇八〇	六五三,八五〇
咸鏡北道	一七〇,六三三	一七二,三九〇	三九八,〇三三
總計	五,一九四,六八〇	四,〇六四,四二八	九,二五九,一〇八

學齡兒童數 (大正十四年十月一日現在)

道名	男 (六歲以上 十四歲迄)		女 (六歲以上 十四歲迄)		計
	男	女	男	女	
京畿道	二二二,八一一	二〇〇,五〇五	四一四,三二六		
忠清北道	九二,一五六	八三,三九八	一七五,五五四		
忠清南道	一四一,四三五	一三〇,七二一	二七二,一四七		
全羅北道	一四六,九八六	一三四,三〇九	二八二,二九五		
全羅南道	三三,四八九	二〇五,七〇四	四八,一九三		
慶尙北道	二六六,一五〇	二四四,一一〇	五一〇,二六〇		
慶尙南道	二二二,八一五	一九四,五九七	四〇七,三七二		
黃海道	一五三,六七二	一四六,二四〇	二九九,九二二		
平安南道	二二九,六七四	二二四,九五五	二五四,五九九		
平安北道	一四八,〇〇六	一四二,五二二	二九〇,五二八		
江原道	一四六,九七九	一三五,七七八	二八二,七五七		

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

一八八

咸鏡南道	一五八〇九一	咸鏡北道	一五〇、二四六	咸鏡南道	三〇八、三七七
咸鏡北道	六七、五二八	咸鏡北道	六五、二二六	咸鏡北道	二二二、六四四
總計	二、〇九九、七七二	總計	一九五八、〇三二	總計	四、〇五七、八〇四

選舉資格年齢者數

(大正十四年十月一日現在)

道名	男(二十五歲以上)	道名	男(二十五歲以上)
京畿道	四五三、九二四	黃海道	三二二、二六一
忠清北道	一九〇、七八三	平安南道	三六七、五〇九
忠清南道	二八一、五七二	平安北道	三三四、七二四
全羅北道	三〇五、三七三	江原道	三〇八、五八八
全羅南道	四六七、八五一	咸鏡南道	三〇二、五一〇
慶尙北道	四九三、九七八	咸鏡北道	二二五、二六二
慶尙南道	四四〇、五二七	總計	四、二八三、七三三

兵役義務年齢者數

(大正十四年十月一日現在)

道名	男(十七歲以上)	道名	男(十七歲以上)
京畿道	三八五、八七九	全羅北道	二六、四四一
忠清北道	一五三、九五三	全羅南道	三九三、七八三
忠清南道	二四〇、二二二	慶尙北道	四〇二、六四九

慶尚南道	三六一三八六	江原道	二四四二九六
黃海道	二五八一八〇	咸鏡南道	二五四一九〇
平安南道	二二二,三六九	咸鏡北道	一二一,三四〇
平安北道	二五七,八六五	總計	三,五五六,四三四

犯罪年齢者數 (大正十四年十月一日現在)

道名	男(十四歳以上)	女(十四歳以上)	合計
京畿道	六七六,三三八	六五,一六三	一,三〇一,四〇一
忠清北道	二七七,八八九	二六〇,九九九	五三八,八八八
忠清南道	四一五,五一九	三六六,二二一	八〇一,七三〇
全羅北道	四四七,七九二	四一五,二九一	八六三,〇八三
全羅南道	六八一,九八八	六八三,九〇八	一,三六五,八九六
慶尙北道	七二七,七三〇	七〇六,二六五	一,四三三,九九五
慶尙南道	六四三,三二五	六四〇,六一三	一,二八七,九三八
黃海道	四六七,一九七	四五五,四二二	九三三,六一八
平安南道	三九六,五四三	三八二,七〇六	七七九,二四九
平安北道	四六一,二八四	四八七,七八〇	八九〇,〇六四
江原道	四四五,四三二	三九六,九六三	八四二,三九五
咸鏡南道	四四七,九二八	四一五,〇九〇	八六三,〇一八

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

一九〇

咸鏡北道

三〇四、〇七六

一八二、三八四

三六、四六〇

總計

六二九、二九〇

五九六、三九四

三二、五六、七四

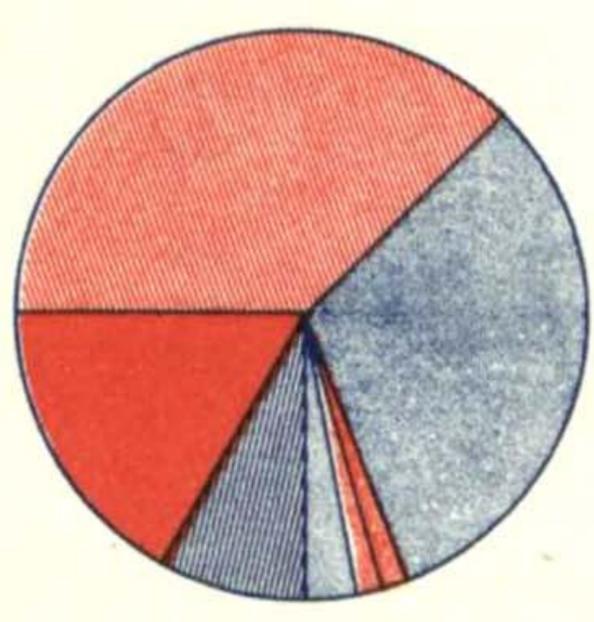
第三節 職業別人口

大正十四年末現在の朝鮮に於ける現住人口一千九百一萬五千五百二十六人を職業別に分類すると、農林及牧畜業等一千五百四十八萬九千五百四十二人、漁業及製鹽業二十六萬四千三百九十三人、工業四十九萬四千八百九十四人、商業及交通等百三十一萬一千七十二人、公務及自由等五十六萬四千八百二十五人、其他の有業者六十四萬二千四百八十一人、無職及不詳二十四萬二千四百八十一人となつて居るが、試みに總人口に對する職業別割合を見ると次の如くなつて居る。

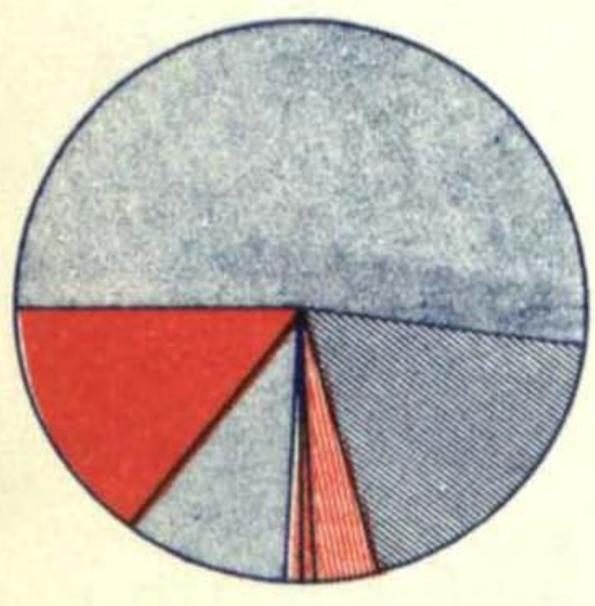
總人口に對する職業別割合

農林牧畜業等	八一・五
漁業及製鹽業	一・四
工業	二・六
商業及交通業	六・九

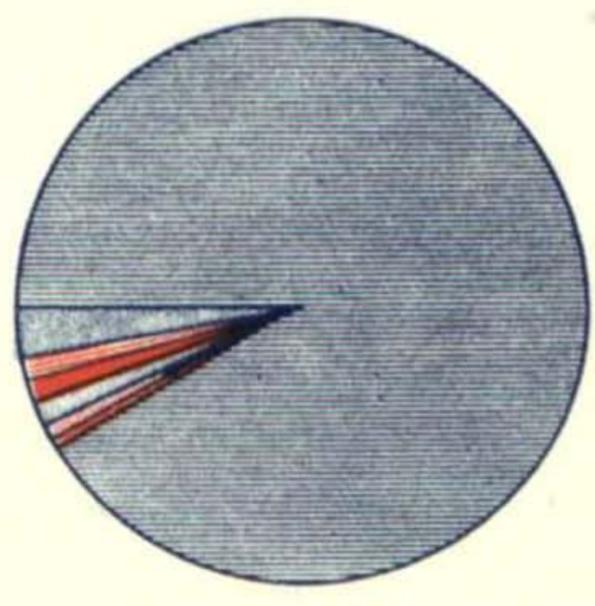
職業別人口百分比 (大正十四年末)



內地人



外國人



朝鮮人

公務及自由業	二・九
其他の有業者	三・四
無職及不詳	一・三
合計	一〇〇・〇

これを見ると、朝鮮の人文及び經濟状態の一斑も略ぼ窺ひ知ることが出来るが、更に全鮮及び各道別の内鮮外人職業別人口數を示すと左表の通りである。

現住人口職業別 (大正十四年末)

全		鮮		韓		日		計	
道名	農業等	漁業及製鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	無職及不詳	合計	
京畿道	1,100,151	11,831	97,434	253,633	143,334	91,351	44,677	1,903,551	
忠清北道	740,640	87	2,777	5,550	16,197	14,840	9,270	829,300	
忠清南道	1,074,555	8,477	25,766	6,329	30,977	50,193	30,966	1,140,853	
全羅北道	1,135,900	8,054	48,130	7,221	30,201	33,006	19,331	1,200,555	
全羅南道	1,186,331	49,329	39,610	9,933	38,247	60,224	16,640	1,266,574	
慶尙北道	1,99,955	19,334	47,670	14,577	48,210	49,845	30,224	2,266,559	

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

慶尚南道	一,五三三,七七一	五三三,三三五	六二,八二二	一五一,五五四	五三,〇七七	二二,六九七	三〇,七五七	一,六二〇,九三二
慶尚北道	一,〇九七,七七七	一五,六〇〇	二八,三三六	九四,八六四	二八,二五七	三,〇〇〇	二七,九三九	一,四一五,六五五
平安南道	九四七,二七七	一三,四六九	七五,七七七	一一,四三二	四九,四六九	五,一七六	一六,六五三	一,四〇六,八三九
平安北道	一,一四四,七七三	八,六二四	二六,三三七	八九,四六一	五六,八八五	五九,〇七六	一七,一八三	一,一五三,三三九
江原道	一,一五二,九三六	一九,一五九	二〇,七二四	五六,〇〇〇	二九,九六二	三〇,八二二	七,三六六	一,〇五九,九〇〇
咸鏡南道	一,〇七七,五八八	三六,八〇八	二八,八二七	九四,八四〇	三五,六七五	五八,七三三	一三,九九二	一,三〇六,四四二
咸鏡北道	四六三,九六七	三三,四〇四	一四,八二八	四一,七〇九	三三,八〇三	三〇,八三三	六,六六九	六三三,〇〇〇
總計	一五,四九九,五四二	二六四,三九三	四四四,八九四	一,三三二,〇七二	五六四,八三五	六四三,四八八	二四六,三三九	一五,〇一五,三三六
1 南	一〇,六四三,三三五	一六五,四五六	三六,九七七	八六,七七七	三六,七七七	四七,〇六四	一八,七九三	一三,〇一〇,六六一
1 北	四,八四四,一〇七	九八,九三五	一五五,九七七	四三,三〇五	一七五,〇〇八	二二五,四七七	六,六五六	六,〇〇四,九六五
3 表	二,七六六,四〇九	一八三,〇三三	四〇〇,四五五	一一,二八,五三三	四七四,三六六	五三〇,二七七	三三〇,一九二	一五,七四六,八三四
3 裏	二,六三三,五三三	八二,七七二	四四,四九九	一九二,五四九	九〇,四三九	一一八,三三四	二八,二七七	三,三六八,九三三
2 南	八,一三二,九四六	一一四,四七七	三〇,七七九	五九六,三三四	三二,四四〇	三二,〇〇〇	一三三,七三〇	九,七五九,四六六
2 中	三,六六一,九九六	四六,六二二	一四四,三三六	四〇〇,四〇七	三〇,一五五	一七,一一五	五九,九三三	四,六六八,一四一
2 西	三,六三四,六〇〇	八三,三三五	一一七,七九九	三三三,四四一	一四六,八三三	三〇三,三六七	五九,五九七	四,五六八,九三〇
1 號	南	鮮	へは京畿、忠南北、慶南北、江原の八道を、北鮮には黃海、平南北、咸南北の五道を含む。					
2 號	表	朝鮮	へは平南北、黃海、京畿、忠南北、全南北、慶南北の十道を、裏朝鮮へは咸南北、江原の三道を含む。					
3 號	南	部	へは忠南北、全南北、慶南北の六道を、中部へは京畿、江原、黃海の三道を、西北部へは平南北、咸南北の					

四道を含む。

以下の諸表の地理的分類は皆この例に準ず。

内地人

道名	農林牧畜業等	漁業及製鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	無職及不詳	合計
京畿道	四、九六六	三〇九	一八、九一八	三三、四九九	三六、六三一	五、五五七	四、九八一	一〇二、四七九
忠清北道	七三一	一一	八、四四一	六、五〇〇	三、〇一六	一、四七	七〇	七、三二七
忠清南道	二、七六六	六二	一、九六一	五、七九八	七、一八四	一、三六六	五九	一九、五五八
全羅北道	五、三〇五	二四四	三、五五五	八、四八七	七、四九九	一、三三七	七一	二七、一七七
全羅南道	六、七七〇	一、五〇六	三、五六八	一〇、一九五	七、九三七	一、一三三	四六〇	三二、三六八
慶尙北道	五、〇四八	一、〇六一	七、一七二	一三、八三二	一三、〇三九	八八二	一八二	四一、六七三
慶尙南道	八、〇三八	七二六	二、四三三	二六、五七六	一八、四八〇	三、三三三	一、三三九	七七、四八八
黄海道	二、七九九	一一四	二、五九四	二、八三四	五、七七四	六二〇	六一	一四、〇九六
平安南道	八、九三三	三三三	八、六六六	一、一三四	二一、〇三八	一、三三一	九九三	三三、五三〇
平安北道	二、六一	六五	一、五二〇	三、三三〇	八、六九三	一、六四四	五七二	一六、三三九
江原道	四、五七六	三九一	八、四八六	二、〇三二	四、二六〇	七五七	七	二〇、六三三
咸鏡南道	四、六六	二五八	二、七九一	六、四九九	八、六六五	一、三三三	四六八	二〇、三三九
咸鏡北道	七七一	八〇八	二、一〇六	六、二九七	八、七三〇	二、五三四	二〇一	二〇、九七七

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

一九四

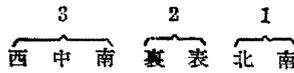
道名	朝鮮人		朝鮮人		朝鮮人		朝鮮人		合計
	農業、畜業、林業、牧業等	漁業、製鹽業、工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	無職及不詳	合計		
京畿道	1,235,696	112,811	2,352,711	104,211	625,004	25,771	1,126,224	4,446,717	
忠清北道	739,666	74	1,333,333	111,111	1,000,000	9,000	2,000,000	3,463,784	
忠清南道	1,000,121	4,330	1,800,000	111,111	1,000,000	10,000	1,111,111	3,922,562	
全羅北道	1,100,000	7,333	2,000,000	111,111	1,000,000	10,000	1,111,111	4,230,455	
全羅南道	1,000,000	7,333	1,800,000	111,111	1,000,000	10,000	1,111,111	3,928,655	
慶尙北道	1,200,000	17,333	2,000,000	111,111	1,000,000	10,000	1,111,111	4,338,555	
慶尙南道	1,200,000	17,333	2,000,000	111,111	1,000,000	10,000	1,111,111	4,338,555	
總計	8,000,000	112,811	14,666,666	666,666	10,000,000	66,666	11,111,111	26,555,555	
1 南鮮	4,000,000	56,405	7,333,333	333,333	5,000,000	33,333	5,666,666	13,333,333	
2 表鮮	3,700,000	56,405	6,666,666	333,333	4,666,666	33,333	5,000,000	12,666,666	
3 中南部	2,300,000	56,405	4,666,666	333,333	3,333,333	33,333	3,666,666	8,666,666	

第二章 人口の構成

一九五

道名	農業及畜業等	漁業及製鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	無職及不詳	合計
北海道	1,849,000	1,290,000	2,250,000	566,000	2,000,000	330,000	2,995,000	
東北道	3,270,000	2,176,000	1,101,000	2,276,000	1,000,000	1,240,000	11,063,000	
関東道	3,212,000	4,666,000	1,327,000	3,979,000	1,581,000	1,000,000	14,765,000	
中部道	2,212,000	2,200,000	1,677,000	2,233,000	1,990,000	1,000,000	10,342,000	
近畿道	2,200,000	2,791,000	2,775,000	2,733,000	2,200,000	1,100,000	12,000,000	
中国道	2,200,000	2,791,000	2,775,000	2,733,000	2,200,000	1,100,000	12,000,000	
四国道	2,200,000	2,791,000	2,775,000	2,733,000	2,200,000	1,100,000	12,000,000	
九州道	2,200,000	2,791,000	2,775,000	2,733,000	2,200,000	1,100,000	12,000,000	
合 計	18,800,000	22,100,000	13,200,000	18,000,000	7,000,000	4,000,000	77,300,000	
咸鏡北道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	
咸鏡南道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	
江原道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	
平安北道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	
平安南道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	
黄海道	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	1,000,000	7,000,000	

外国人



道名	1	2	3
咸鏡北道	10,200,000		
咸鏡南道	11,200,000		
江原道		2,200,000	
平安北道		10,100,000	
平安南道		11,700,000	
黄海道			2,200,000
			11,200,000
			12,400,000

朝鮮の人口現象

忠清北道	五	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
忠清南道	六	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
全羅北道	七	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
全羅南道	八	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
慶尙北道	九	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
慶尙南道	一〇	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
黄海北道	一一	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
黄海南道	一二	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
平安北道	一三	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
平安南道	一四	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
江原道	一五	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
咸鏡北道	一六	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
咸鏡南道	一七	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
合計	一八	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
南朝鮮	一	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
北朝鮮	二	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
表	三	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三
裏	四	一	三三	一〇六	一三	一	三	三三	一九三

3	中	二、四九八	八	二、三三三	六、八八八	六、五三三	九、七一	一、四三三	二、三三三
	西 北 部	五、五七五	八七	二、五三三	一〇、〇六六	七、三三三	五、一〇一	一、七	二、三三三

以上の諸表によりて、最近に於ける朝鮮の現住人口の職業別状態は明かになつて居るから、更に大正元年末以降に於ける内鮮人の現住人口職業別比較並に比例を示し、以てその職業の變遷を見やうと思ふ。

内地人現住人口職業別累年比較表

年 次	農林牧畜業	漁業及製鹽業	工 業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	不 詳	合 計
大正元年末	二七、四三〇	—	三、九九七	八〇、五八八	五、四〇一	七、九三三	七、七六一	二、四三三
同 二 年 末	三六、一〇八	—	三、五五五	八五、一九三	六、一〇六	四、四〇〇	一〇、一八九	二、七九一
同 三 年 末	四三、四二五	—	四、五三九	八六、〇八九	六、九四七	五、三三七	一、二七三	二、九一七
同 四 年 末	四三、六四九	—	四、五九八	八八、六三三	七、九一〇	四、七三〇	一、七三三	三、〇六九
同 五 年 末	四六、五四九	—	三、九九三	九二、六五一	九六、五八四	三、九〇六	一、三三三	三、〇九三
同 六 年 末	三七、六〇五	—	四、三三六	九六、三三九	八九、〇六四	四、一六九	一、三六九	三、三、四三六
同 七 年 末	三六、〇〇元	—	四、三九〇	九三、九六八	九一、六三二	四、四三七	一、〇二二	三、六、八七三
同 八 年 末	四〇、六九五	—	三、九四〇	九八、九三〇	九三、一三四	四、七三九	一、一三四	三、六、七二九
同 九 年 末	三九、八四四	—	三、九三三	一、七、二六九	一〇一、〇三三	一、二九六	四、九一〇	三、七、八〇〇

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

同	十年末	四、三三四	一、七三三	六、〇七〇	三、〇四三	二、〇三六	一、六五九	六、八八四	一〇、八八四	五七、六二八
同	十一年末	三八、七五五	一〇、七五五	六三、九九九	一六、八九五	二七、〇八〇	二〇、六四三	八、八三一	五六、四四四	四七、六二八
同	十二年末	三八、六四七	一、三三七	六三、〇四三	一七、五七九	二七、七三三	二〇、一六四	一三、四四三	四七、四四三	四七、六二八
同	十三年末	三七、四七七	三、三三四	六四、一七九	一五、五二一	一五、〇一六	二二、八七九	一〇、一八〇	四七、四四三	四七、六二八
同	十四年末	三〇、〇〇〇	三、八〇一	六六、八〇〇	一三、三三七	一四、〇九三	二二、三三三	一〇、八八四	四七、四四三	四七、六二八

備考 大正五年以前の農林牧畜業中には漁業及製鹽業をも含む。以下の諸表皆同じ。

内地人現任人口職業別累年比例表

年次	農林牧畜業	漁業及製鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	不詳	合計
大正元年末	二、二六六	—	一四、七七七	三三、〇三九	三三、一六六	一五、一六八	五、一八二	一〇〇、〇〇〇
同二年末	二、三二九	—	一三、〇三三	三二、四一一	三三、三七七	一五、〇九六	五、七九四	一〇〇、〇〇〇
同三年末	一、四九二	—	九、一八六	二九、二六六	三三、八八五	一八、〇〇一	一、八一	一〇〇、〇〇〇
同四年末	一、四三六	—	一〇、〇〇一	二九、一八九	三六、〇〇九	一四、〇七三	五、六四四	一〇〇、〇〇〇
同五年末	一、四〇六	—	一一、一八五	二八、八八七	三〇、〇九二	一〇、二六六	五、八八三	一〇〇、〇〇〇
同六年末	一一、一三三	—	一一、三三三	二六、〇六六	二六、七七九	一三、二八三	五、八一	一〇〇、〇〇〇
同七年末	一一、二一〇	—	一一、二七三	二六、四四三	二七、三三〇	一一、四四九	五、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇
同八年末	一一、二七三	—	一一、二八六	二六、八八四	二七、四四三	一一、三三七	五、三三三	一〇〇、〇〇〇
同九年年末	一一、四七七	—	一一、三三三	二七、三三三	二八、三三三	一一、三七七	五、三三三	一〇〇、〇〇〇

朝鮮人現住人口職業別累年比較表

年次	農林牧畜業	漁業及製鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	不詳	合計
同十年末	11,231	3,191	1,646	3,191	3,000	4,111	1,646	100,000
同十一年末	9,961	2,791	1,646	3,191	3,000	5,111	2,111	100,000
同十二年末	9,961	2,791	1,646	3,191	3,000	5,111	2,111	100,000
同十三年末	9,100	2,991	1,646	3,191	3,000	5,111	2,111	100,000
同十四年末	9,191	3,001	1,646	3,191	3,000	5,111	2,111	100,000
大正元年末	33,000	—	10,000	9,000	17,999	6,111	7,749	100,000
同二年末	32,977	—	10,000	9,889	10,870	6,000	1,646	100,000
同三年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同四年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同五年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同六年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同七年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同八年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同九年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000
同十年末	33,000	—	10,000	9,770	11,999	6,000	1,646	100,000

第二章 人口の構成

朝鮮の人口現象

二〇〇

同	十一年末	一四、七六、一三六	三三、三六六	三六、一〇五	九、四、四〇五	三、五、七三三	四、〇、一五二	一七、七、八四四	一七、三、三二八	一、七、一、三三九
同	十二年末	一四、八〇、一五九	三三、〇、三三三	三六、二、五〇	一、〇、三、三三三	三、一、七、七三	四、九、九、六六一	一六、九、六六一	一七、七、四四六	一、七、一、三三九
同	十三年末	一四、八三、三三三	三三、七、九八八	三六、二、三三三	一、〇、四、七、〇七	三、六、三、一五	五、二、七、七二	一七、〇、三、三三	一七、七、六、九七	一、七、一、三三九
同	十四年末	一五、四三、三九〇	三三、一、四六六	三六、三、三六六	一、一、三、三、三三	四、三、三、三六	六、五、八、二四	一七、七、八、六八	一八、三、四、四三	一、七、一、三三九

朝鮮人現任人口職業別累年比例表

年次	農林牧畜業	漁業及鹽業	工業	商業及交通業	公務及自由業	其他の有業者	不詳	合計
大正元年末	八二、九五	—	一、四三	六、八〇	一、三三	四、四三	三、〇七	一〇〇・〇〇
同二年末	八五、〇三	—	一、四八	六、四三	一、三六	四、三三	一、三三	一〇〇・〇〇
同三年末	八七、〇七	—	一、五七	六、六三	一、三三	四、〇〇	〇・七三	一〇〇・〇〇
同四年末	八七、九〇	—	一、五〇	六、一一	一、一一	三、三三	一、三七	一〇〇・〇〇
同五年末	八七、〇一	—	二、三三	六、六一	一、三三	二、六六	一、二六	一〇〇・〇〇
同六年末	八四、八三	—	一、五	五、八七	一、四三	二、三三	一、三三	一〇〇・〇〇
同七年末	八四、八二	一、一六	一、九七	五、九八	一、五一	二、九九	一、四七	一〇〇・〇〇
同八年末	八四、九三	一、一	二、〇	五、八七	一、三三	九、九三	一、四〇	一〇〇・〇〇
同九年末	八七、二六	一、一三	一、九一	五、七七	一、三六	一、六四	〇・九一	一〇〇・〇〇
同十年末	八六、四〇	一、一〇	一、九三	五、六九	一、八四	二、〇五	〇・九〇	一〇〇・〇〇
同十一年末	八五、六五	一、一四	二、〇八	五、七三	一、八九	二、一	一、〇三	一〇〇・〇〇



# 여 백

## 第三章 人口の分布

### 第一節 地方別人口密度

大正十四年十月一日現在、朝鮮に於ける一方里平均の人口密度は、一千三百六十四人であるから、これを内地の二千四百七十七人、臺灣の一千七百十三人に比較すると著しく人口密度が低いのである。この朝鮮内にありても人口密度は、概して平野の多い經濟狀態の發展した南鮮地方が高く、山地帯の多い産業の開發が遅れて居る西北鮮地方は低くなつて居る。即ち各道別に就いて見ると、一方里當二千五百人以上のものは慶尙南道のみで、二千人以上二千五百人以下のものに全羅北道、京畿道、全羅南道、忠清北道あり、一千五百人以上二千人以下のものに慶尙北道、忠清北道あり、一千人以上一千五百人以下のものに黃海道、平安南道あり、五百人以上一千人以下のものに江原道、平安北道、咸鏡南道あり、人口密度の最も稀薄なのは、五百人以下の咸鏡北道である。斯くの如く朝鮮の人口密度は現在に於ては、内地及び臺灣に比して遙かに低いのであるが、その人口收容力から云ふと、内地に較べて地勢上山地帯の面積が多くして耕作に適する部分が割合に少く、氣候も寒暑の差が甚だしく、冬

期酷寒の地方が多い上に、地質及び地味の點に於ても劣つて居る關係上、内地と同程度に人口を收容することは困難である。然るに既に今日に於ても朝鮮の人口は、年々約十三四萬人づつ増加して居るから、將來大に産業の開發を計らぬと、遠からずして朝鮮自體が内地と同様に、人口及び食糧問題の解決に苦む時代が來る虞れがある。

人口分布に伴ふ各種の現象に就いて根本的研究を行はんとせば、行政區劃の基礎單位たる府・面別の人口密度を觀察する必要があるので、十二府・二千五百三面に亘り、大正十四年十月一日現在に於ける、その一方里平均の人口密度を調査し、これを基礎として別紙の各道別人口密度圖を作製した。全國に亘る市・町・村の人口密度圖の作製の如きは、官廳に於ても學界に於ても未だ着手しない難事であるから、分類の方法等に關しては尙ほ研究の餘地があると思ふが、試みに各府・面の人口密度を便宜上二十階級に分つこととしたのである。即ちその結果、各階級に於ける府・面數は左の如くなつて居る。

## 一方里當人口數府面別分類表

(大正十四年十月一日現在)

一方里に付人口數	府面數	一方里に付人口數	府面數
百人以上	六	三百人以上	一一一
百人以上	一〇	五百人以上	一七九
未滿		未滿	

八百人以上—一千人未滿	一三八	二千八百人以上—三千人未滿	八二
一千人以上—一千二百人未滿	一六三	三千人以上—三千五百人未滿	一六一
一千二百人以上—一千四百人未滿	一六五	三千五百人以上—四千人未滿	一〇四
一千四百人以上—一千六百人未滿	一七六	四千人以上—四千五百人未滿	六〇
一千六百人以上—一千八百人未滿	二一〇	四千五百人以上—五千人未滿	四二
一千八百人以上—二千人未滿	一八二	五千人以上—一萬人未滿	六一
二千人以上—二千三百人未滿	二四一	一萬人以上—一萬五千人未滿	四一
二千三百人以上—二千五百人未滿	一五三	合計	二、五一五
二千五百人以上—二千八百人未滿	一九〇		

## 第二節 地勢別人口密度

### 都 市

人口分布の状態を精細に究めんとせば、地方的に人口密度の濃薄を観察すると共に、更に進んで地勢的に人口分布の特相を観察せねばならぬ。そこで私は、各府及びその接續地、平野、河川流域、沿海地方、島嶼、山地帯、鐵道沿線に於ける人口密度を調査して見た。現に朝鮮に於ては人口三千人以上の市街地百七十一箇所に及んで居るが、その中に在りて内地の市に匹敵する都市は僅に左の十二府

を算するのみである。各府及びその接續地の人口數、面積、竝に一方里平均の人口密度は左表の如くになつて居る。即ち各府中人口密度の最も高きは平壤の二十一萬一千九百三人にして、木浦、大邱、京城、仁川、群山等はこれに亞いで居る。また各府の接續地中人口密度の最も高きは京城府接續地の四千九百九十五人にして、以下群山、釜山、新義州、平壤、木浦等の順位になつて居る。

各府人口密度 (大正十四年十月一日現在)

府名	位置	人口數	面積	一方里平均人口
京城府	京城畿道	三四三、六二六	二、三四六	一四六、〇四七
仁川府	同	五六、二九五	〇、四三二	一三六、六三八
群山府	全羅北道	二二、五五九	〇、二〇一	一〇九、三五九
木浦府	全羅南道	二六、七八	〇、一五六	一七二、三六九
大邱府	慶尙北道	七六、五四	〇、四六九	一六三、一八六
釜山府	慶尙南道	一〇六、六四二	二、二七六	四九、九三三
馬山府	同	二二、八七四	〇、六三四	三六、〇七八
平壤府	平安南道	八九、四三三	〇、四三三	二二、一九三
鎮南府	同	二七、二四〇	〇、七〇四	三八、六八三
新義州府	平安北道	一三、一七六	〇、三三七	九七、七八九
元山府	咸鏡南道	三六、四二一	〇、四三七	八三、三四三

清 津 府 咸 鏡 北 道 二〇六四九 〇九三〇 三三三〇三

各府接續地の人口密度 (大正十四年十月一日現在)

府名	包含面積	人口數	面積	一平方里平均人口
京城府	一五	一八六、九六二	三七四	四九九五
仁川府	七	四一、三五八	一五六	二六四一
群山府	三三	一三、五九六	三〇	三六七
木浦府	七	六四、〇七八	三〇	二九〇八
大邱府	一四	三〇、一〇六	四八七	二六六九
釜山府	九	八七、六五九	二五〇	三、四九八
馬山府	一一	一〇一、〇七一	三四〇	三〇四
平壤府	二二	三三、五八一	四五七	二九一八
鎮南浦府	一〇	八二、一八	四五七	一七三
新義州府	八	七、二九七	二四・一	三、〇五
元山府	八	六、七〇三	四〇九	一六三六
清津府	四	二五、三五	五二・一	四八六

備考 各府の中心より三里に跨る面をその接續地とせり。  
 新義州府接續地の人口及び面積は支那側の分を除外す。

これを要するに、朝鮮の都市は、その面積と云ひ人口數と云ひ、いづれも大規模なものは少いので

ある。由來都市發達の第一要件は、物資の消費力が旺盛にして、且つ都市自體及びその背後に有力なる生産力を控へて居り、加ふるに交通機關の完備して居ることが必要である。朝鮮には舟運を利用すべき河川も多く、これに依つて發達した都市も少くないが、將來は港灣の改良を計り、鐵道の新設及び延長を行ひ、自動車運轉を一層敏活にし、水力電氣の利用を旺んならしめ、都市計畫の實行、金融機關の充實等に努め、以て商工業の發展を容易にすることが大切である。

## 平野

朝鮮の地勢は、蜿蜒たる長白山脈が、東北方より西南に連りて北方の國境を擁し、その一脈は南に延び、平安南北道及び咸鏡南北道の境を劃して江原道に入り、東海岸線に沿ひて南に走り、以て半島の脊梁を成して居る。この脊梁山脈以南の地は斜面急峻にして、大川平野に乏しいが、その以西は比較的傾斜緩慢で、處々に平野拓け、鴨綠江、洛東江、大同江、漢江、錦江、蟾津江の六大江を始め大小の河川多く。舟楫の便と灌漑の利に富んで居る。平野地方は概して耕地に富み、地味肥沃にして、交通の便開け、産業が發達して居るから、その間に大小の市街が點在し、他の地方よりは自然人口も稠密で、文化の進歩を來し、商取引も殷盛である。私は調査の便宜上、漢江、益山、全州、金海、沙

里院、延白、龍岡、平壤、安州、咸興、高原の十一平野に就き、その包含する府面數竝に面積、人口數、及び一方里平均人口を見ることとした。朝鮮の平野中最も面積の大なるものは沙里院平野の三二・九方里にして、益山平野の三一・七方里、平壤平野の二九・一方里、延白平野の二六・三方里等これに亞ぎ、一方里平均人口密度の最も高き地方は漢江平野の二萬八千五百五十五人第一位を占め、以下遙かに下つて平壤平野の六千八百七人、全州平野の六千百十七人、益山平野の五千四百九十四人、咸興平野の五千百五十九人等の順序になつて居る。右の十一平野中人口密度の最も低いのは延白平野の二千四百五十五人であるが、それでも朝鮮全土の平均人口密度一千三百六十四人に比較すると、遙かに多いことが認められる。

平野人口密度 (大正十四年十月一日現在)

區	城	所在道名	包含府面數	人口數	面積	一方里平均人口
漢江	平野	京畿道	九	四七八六二七	一七〇 <sup>方里</sup>	二八二五五
益山	平野	忠清南道	一八	一四四六三六	三二・七	五四九四
全州	平野	全羅北道	八	九一三六五	一四・九	六一二七
金海	平野	慶尙南道	六	六〇、九八五	一七・一	三五四七
沙里院	平野	黃海道	一三	一〇七、八六一	三二・九	三、二七二

朝鮮の人口現象

二一〇

延白	平野	同		一〇	六四六〇三	二六三	二四五五
龍岡	平野	平安南道		六	七二九九一	二二五	三四二七
平壤	平野	同		一一	一九八〇八七	二八一	六八〇七
安州	平野	平安南道		七	六一七五五	二〇六	二九八九
咸興	平野	咸鏡南道		八	八九五一	一七三	五、五九
高原	平野	同		五	四一、三三三	一三五	三〇四六

由來朝鮮は産業地であるから、その人口が最も多く平野に分布して居るのは當然である。將來産業の進歩發達し、交通機關の普及を見るに至り、住民の生活程度が向上するに於ては、物資の需給も自ら頻繁となり、平野地帯の人口は益々増加し、その間に點在する市街地の如きも或る程度まで膨脹發展することは疑ひを容れない。然しながら従來の例に徴するも、朝鮮の市街地は概してその膨脹力が緩漫であり、人口増加率も遅々たるものが多いが、これは農業地に於ける市街發達に免れ難き傾向で、産業組織が現狀を以て推移する以上、他の商工都市に見る如き、急激なる市街の發展を見ることは不可能である。而して小市街地の散布點在が朝鮮に於ける人口分布上の一特相であるとせば、特に小市街地の施設經營に就いて、考究企畫することが極めて大切である。

河川流域

河川は舟楫を通じ、その流域は概ね平坦にして、耕地に富み、土地肥沃にして水利灌漑の便あり、従つて河川の流域は、最も能く經濟の發達、文化の進歩を見て居り、大小の市街地も多く散布し、人口の分布もまた濃密である。河川は人文及び經濟の發達上最も密接なる關係あるのみならず、歴代の都城は多く河川の沿岸又は流域地方に置かれ、政治上に於ても河川が重要な關係にあつたことを物語つて居る。朝鮮の地勢は、脊梁山脈以東が急峻にして、以西が緩漫である關係上、國境の鴨綠江及び豆滿江を除けば、大河は西方に多いのである。試みに朝鮮の二十大河と稱するものを挙げると、鴨綠江、洛東江、豆滿江、漢江、大同江、錦江、臨津江、蟾津江、清川江、禮成江、南大川(咸鏡南道)、大寧江、龍興江、載寧江、北大川、榮山江、漁郎川、城川江、萬頃江、南大川(咸鏡北道)にして、いづれも流長二十五里以上のものであるが、これ等の諸河には、幾多の支流があり、中には支流の却つて本流より長いものもある。右の諸河中、十大河と稱せられるもの、流域に就いて、その本支流別、包含府面數、人口數、面積、一方里平均人口數を見ると左表の如くなつて居る。

河川流域人口密度 (大正十四年十月一日現在)

區 域	包含府面數	人口數	面積	一方里平均人口
本 流	三七	二九七、八四四	四、七〇六 <small>方里</small>	六八〇

朝鮮の人口現象

漢江流域				豆滿江流域		洛東江流域			鳴綠江流域				計			
照北	鎭	本	計	西本	計	密南	本	計	三	忠	禿	厚		長		
陽	漢	江	流	頭	水	陽	江	江	橋	溝	魯	州	津			
江	江	江	流	水	流	江	江	流	川	江	江	川	江			
九三	五	一五	一	七二	二五	二	二三	九八	一	一七	八一	五五	五	三	九	一
一〇、一八九八	三七、二二九	一〇六、九三〇	九、四四九	八六五、五〇〇	二二、一二七	六、八〇九	一〇四、三〇八	七八六、五五六	一〇四、〇七六	六八、四八〇	四三八、五一六	四八、六六四	一六、二七八	六六、〇〇二	九、七八	一
四三、六九	三三、六	一〇八、七	六六	二七八〇	四一、五五	三、四九	一九〇六	三、四七	三七八	二七、六八	六四〇、三	一七、三	三六、三	一三、九	一五、八	二二二
二、七九一				三、一三	二、六七		五、四七	二、四九九			六、八四					

流域	大同江流域		計	錦江流域	臨津江流域		計	蟾津江流域	清川江流域		計	禮成江流域
	南	沸			本	本			本	本		
流	江	江	江	流	流	流	流	流	流	流	流	流
	三	一〇	一〇	三〇	二四	二	二六	九	二二	一	二二	一一
	二五、三三六	六二、四一〇	六二、四一〇	五四〇、二四八	二九二、六七六	一三、六六六	一四七、一〇二	六九、六九二	一八九、二二八	一	一八九、二二八	六八、一三六
	二、五	六、三	六、三	二八、五	九〇、一	八、七	九、一	三、八九	一六、〇	一	一六、〇	四四、三
	—	—	—	一、九〇五	三、二四七	—	—	一、七八八	—	—	—	一、五三五

備考 一、本表は舟筏を通ずる上端地を有する面の内より本流及び支流に分ちて作りたり。

二、國境河川たる鴨綠豆滿兩江流域には外國の面積人口を含まず。

右の十大河流域中、人口密度の最も高いのは、水流の勾配極めて緩かなる錦江流域の三千二百四十七人にして、漢江流域の二千九百九十一人、洛東江流域の二千四百九十九人、大同江流域の一千九百五人等これに亞ぎ、國境の山地帯を流る、鴨綠江及び豆滿江沿岸の人口密度は、地勢の關係上自然低

くなつて居る。

## 沿海地方

朝鮮は三面海を以て圍まれ、本土及び島嶼を合せて海岸線の延長四千三百九十五里に達し、日本海方面以外は概ね港灣多く、船舶の出入に便なる爲め、沿海地方は夙に開けて人口集中の形勢を作り、都邑及び部落の發達を來して居る。沿海地方には貿易竝に商業を以て繁榮せる市街地もあり、また農業若しくは半農半漁の生活を營む所も多いが、由來朝鮮の地たる、地勢、氣候、海深、潮流等の關係上水産物豊饒にして、有利の漁場到る所に多く、大小の漁港約三百を算し、鯖、鱈、石首魚、明太魚、鰈、鱈、鯛、太刀魚、鱒、蝶、鯢、鰻、鰻、和布、鱒、海羅、海鼠、鱧、鱧、鮑、鱈、鱈、石花菜を首め、その他既知の重要水産物のみにても凡そ百種に及び、魚類六十二、貝類十六、藻類十七、海獸その他十餘種ありて、水産業の將來は頗る有望であるから、沿海地方の交通機關の普及に伴ひ、産業も發展し、人口も著しく増加することゝ思はれる。試みに朝鮮の沿海地方を黃海方面北部、黃海方面南部、多島海方面、對馬海峽方面、日本海方面南部、日本海方面北部に分ちて見ると、その包含府面數、人口數、面積、一方里平均人口密度は左の如くなつて居る。

沿海地方人口密度 (大正十四年十月一日現在)

區域	所在道名	包含府面數	人口數	面積	一方里平均人口
黃海方面(北部)	平安南道 黃海北道	九六	六八二八二	三、五五・一	一、八八八
黃海方面(南部)	京畿道 忠清南道 忠清北道	一〇二	七二、五五五	二、八〇・一	二、五八〇
多島海方面	全羅南道	八二	六九〇、一〇	二、五七・三	二、七五
對馬海方面	慶尙南道 慶尙北道	七四	七四九、九四七	二、二九・一	三、四二三
日本海方面(南部)	江原道	四〇	二九〇、七〇二	二、五六・〇	一、二三五
日本海方面(北部)	咸鏡南道 咸鏡北道	六二	六四〇、一八三	五〇、五五	一、二六六

即ち沿海地方中、人口密度の最も高きは、對馬海峽方面の一方里平均三千四百二十三人にして、金海平野と沙里院平野の中間に在る。これに亞ぐは黃海方面南部の二千七百三十五人で、安州平野と延白平野の人口密度の中間になつて居る。沿海地方中最も人口密度の低いのは日本海方面南部即ち江原道一帶の一千百三十五人にして、朝鮮全土の平均人口密度一千三百六十四人よりも遙かに低いのである。對馬海峽方面に人口分布の多きは、海岸線の屈曲に富み、良灣漁港の尠からず、海陸の物産に富み、交通の便も良く、大小の市街地が各所に散在して居る爲めである。黃海方面北部及び日本海方面

は、黃海方面南部や多島海方面に比して岬灣の出入に乏しい爲め、従つて良港少く、交通の便も宜しからず、産業の發達も充分でない上に、氣候も亦冬期酷寒の地方が多き結果、市街地の分布も少いなど、種々の原因に依りて人口の密度が低く、人文の進歩、經濟の發達が遙かに劣つて居るのである。沿海地方發達の第一要件は、港灣の施設を定備し、以て外國貿易及び沿岸貿易船の出入を自由ならしめ、漁船の荷揚並に避難に便ならしむると共に、港灣と背後の交通機關との聯絡を充分に計るなど、幾多着手すべきことがあるが、就中最も急務なるは、港灣の施設改良と水産業の保護獎勵にして、各種漁獲物及びその製造品の増産は、帝國食糧問題の解決上より見るも極めて重要なるものである。

## 山地帯

朝鮮の地勢は、北境の長白山脈が蜿蜒として東方より西南に沿ひ、その一支脈南に延び、平安、咸鏡兩道の境を劃して江原道に入り、東海岸に沿ひて南方に駛走し、以て朝鮮半島の脊梁骨を爲して居る。而して大山脈の東方に偏在する關係上、山脈以東の地即ち裏朝鮮地方は斜面急峻にして、往々六七千尺に達する高嶺あり、咸興平野以外には殆んど平野と稱すべきものなく、従つて江河の大なるものなき爲め舟運の便に乏しい。これに反して南方黃海に面する地方及び西方の一帯は、地勢漸く低下

し三千尺を超ゆる山地稀れにして、多くは緩傾斜の丘陵縦横に起伏し、その間に江河の長流せるもの尠からず、流域には所々に平野の點在を見るのである。山地帯は交通不便にして、農耕その他の生産に有利でない爲め、人口の密度も他に比して著しく低くなつて居る。今試みに長白山地帯、妙高山地帯、狹隘山地帯、太白山地帯、馬息山地帯、彥真山地帯、小白山地帯に就いて、その包含面數、人口數、面積、一方里平均人口數を示せば即ち左の通りである。

山地帯人口密度 (大正十四年十月一日現在)

區	域	所在道名	包含面數	人口數	面積數	一方里平均人口
長白山地帯	咸鏡北道	咸鏡北道	四	四四〇三二	三七七一	一一七
妙高山地帯	咸鏡北道	咸鏡北道	二八	二七九〇五六	九七〇二	二八八
狹隘山地帯	平安北道	平安北道	二六	一一一、二三	二八〇八	三九六
太白山地帯	慶尙北道	慶尙北道	一九	一五九、九二八	三三〇二	四八四
馬息山地帯	平安南道	平安南道	二三	一三三、三六〇	二四〇八	五五四
彥真山地帯	平安南道	平安南道	一〇	五六七〇〇	九五、四	五五四
第三章 人口の分布					二一七	

小白山地帯	江原道			
	忠清北道	忠清南道	全羅北道	全羅南道
	慶尚北道	慶尚南道	慶尚道	慶尚道

五三

三六、六三

三七九

二四四

右の七山地帯中、人口密度の最も低きは山勢最も急峻なる長白山地帯の百十七人にして、妙高山地帯の二百八十八人、狄隴山地帯の三百九十六人の如き、北部地方の高山地帯はいづれも人口密度が稀薄である。太白山地帯、馬息山地帯、彦真山地帯の如き中部及びその附近に跨る山地帯は北部及び西部の高山地帯に比し稍人口密度が高く、南部に至るに従ひ山勢緩漫となる結果、小白山地帯の如き南部の山地帯は一方里平均の人口密度一千百四十四人に達し、河川流域の人口に比すると禮成江流域の一千五百三十五人と清川江流域の一千百三十九人の中間に在り、また沿海地方の人口に比すると日本海方面南部の一千百三十五人より稍高くなつて居る。而してこれ等山地帯は人口稀薄なるを以て、その行政区劃の面積は廣大なるものあり、道の最大なる咸鏡南道は二千七十三方里にして、樺太や臺灣よりも稍小さく、關東區（東京、神奈川、千、埼、玉、群馬、栃木、茨城）、または九州一圓より鹿児島縣を除いた面積に匹敵し、郡の最大なる咸鏡北道茂山郡は三百九十九方里にして、群馬縣や大分縣と略ぼ同じき面積を有し、而の最大なる咸鏡北道茂山郡三社面は百四十六方里にして、神奈川縣や沖繩縣よりも稍小さい面積である。試みに地域廣大なる面積三十方里以上ある面に就き、その人口密度を見ると、山地帯に於ける人

家の稀少なる事實が一目して判るであらう。

面積三十方里以上ある面の人口密度 (大正十四年十月一日現在)

面名	道名	郡名	人口	面積	一方里平均人口
新豊面	平安北道	熙川郡	一〇,〇八九	三〇.〇 <sup>方里</sup>	三三六
松面	同	楚山郡	八,〇四九	三〇.六	二六三
龍林面	同	江界郡	一一,七四五	五六.〇	二一〇
千北面	同	同	四,三〇九	三四.四	一二五
化京面	同	同	一〇,五六四	四三.三	二四四
梨坪面	同	慈城郡	四,〇九六	三三.三	一二三
厚昌面	同	厚昌郡	七,八七九	三二.九	二三九
東興面	同	同	七,一七〇	五三.四	一三四
南新面	同	同	五,〇四二	三〇.〇	一六八
長楊面	江原道	淮陽郡	一七,八八九	三二.五	五五〇
高山面	咸鏡南道	定平郡	一三,八八四	三五.〇	三九七
宜興面	同	永興郡	一八,五四二	三六.四	四八三
横川面	同	同	一五,三二九	三三.七	四六〇
泥谷面	同	北青郡	一七,七三九	三四.七	五一一

第三章 人口の分

二一九

朝鮮の人口現象

朱乙温面	雲興面	普惠面	三西面	天南面	安山面	安水面	熊耳面	里仁面	東下面	北下面	舊邑面	中南面	上南面	郡内面	東上面	北斗日面	水下面
咸鏡北道	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
鏡城郡	同	甲山郡	三水郡	同	同	同	同	豐山郡	同	同	同	同	同	長津郡	新興郡	同	端川郡
一七,三四六	一七,九七四	一九,二二九	三,七二〇	一六,四五〇	一七,四五九	一一,七五二	一四,六〇〇	一五,三三八	三八〇九	三,八七〇	五,五四一	五,一二五	九,四七四	四,二七五	二〇,一三七	一八,七五一	二七,一六二
五二〇	六三三	八九九	三六九	六三九	三三七	三四一	九二二	三・四	七四九	四八二	三・三	三八五	五六九	五二一	五四〇	四七〇	四六二
三三四	二八九	二二四	一〇一	二五七	五三四	三四五	一五八	四八八	五一	八〇	一七七	一三三	一六七	八二	三七三	三九九	五八八

朱南面	同								
鳴社面	同		吉州郡	一三、六九〇		五五〇		二四七	
西上面	同		富寧郡	八、六四八		三三五		二七五	
延社面	同		茂山郡	三、〇二六		三三三		九六	
三社面	同			一一、〇四七		六六八		一六五	
三長面	同			三、一九六		一四六・一		三三	
以上合計	同	三九面		四二七、四五八		一、八七一九		二三八	
全鮮		二、五〇三面		一九五三、九四五		一四、三一九		一三六四	
全鮮に對する 上記各面の割合		一六%		二二%		一三%		一	

これに據りて見ると、右の高山地帯諸面中に在りても、人口密度の最も稀薄なるは、咸鏡北道茂山郡の三社面二十二面、三長面四十六面にして、咸鏡南道長津郡の東下面五十一面、北面八十面、郡内面八十二面、咸鏡北道富寧郡の西上面九十六面の如き、いづれも一方里平均の人口密度が百人に達しない地方であり、これ等山地帯住民の大部分は、朝鮮特有の火田耕作に依りて生活を爲して居るのである。

山地帯に於ける人口密度の稀薄なることは前述の通りであるが、朝鮮には山地帯の多い爲めに、小市街の高地にあるものも尠くない。即ち真高二百メートル以上の位置に在る市街地は左の二十五箇所

朝鮮の人口現象

を算し、その最も高きは咸鏡南道豊山郡新豊里の一千百五十メートルにして、これに亞ぐは咸鏡南道三水郡仲坪場の一千二十五メートル、江原道平康郡平康の九百五十メートル、咸鏡南道甲山郡甲山の八百十メートル等である。尤も地勢の關係上、眞高の高いものでも、必ずしも山岳地とは稱し難い所もあり、中には平野若くは沿河地に屬して居るものもある。

眞高二百メートル以上の位置に在る市街地

市街地	道名	郡名	眞高
廣州	京畿道	廣州郡	三四〇〇 <small>米俵</small>
堤川	忠清北道	堤川郡	二五三九
鎮安	全羅北道	鎮安郡	二九〇〇
任實	同	任實郡	三三五〇
英陽	慶尙北道	英陽郡	三三五〇
孟山	平安南道	孟山郡	二二五〇
陽德	同	陽德郡	二五二〇
寧遠	同	寧遠郡	二〇〇〇
寧邊	平安北道	寧邊郡	二六〇〇
江界	同	江界郡	三一八〇
慈城	同	慈城郡	三三〇〇

會寧	茂山	甲山	仲坪	新豐	平康	鐵原	金化	寧越	平昌	旌善	淮陽	麟蹄	厚昌
同	咸鏡北道	同	同	咸鏡南道	同	同	同	同	同	同	同	江原道	同
會寧郡	茂山郡	甲山郡	三水郡	豐山郡	平康郡	鐵原郡	金化郡	寧越郡	平昌郡	旌善郡	淮陽郡	麟蹄郡	厚昌郡
二五二・〇	四七〇・〇	八一〇・〇	一〇二五・〇	一、一五〇・〇	九五〇・〇	三八二・〇	二二〇・〇	二二五・〇	三〇七・〇	二九五・〇	一、〇七〇	三四五・二	五二五・〇

島嶼

朝鮮に於ては、東部の日本海沿岸は概して海岸線の屈曲に乏しく、また島嶼の數も多くないが、慶尙南道より平安北道に至る朝鮮海峽、及び黃海方面は沿岸屈曲多く島嶼散在し、殊に釜山より珍島附

近に至る間の南海岸は、大小の島嶼無數に碁布し、所謂多島海の稱ある所にして、著名なる港灣、有望なる漁港が尠くない。沿海地方の状況は既に述べた通りであるが、島嶼は船舶の碇泊に便あり、漁業の根據地となり、また農耕に適する所もある爲め、人口の分布は沿海地方より却つて大なるものがある。朝鮮の島嶼は、周圍五百メートル以上のもの千九百三十、五百メートル以下のもの千三百七十五、合計三千三百五の多きに達して居るが、その中にて著名なる濟州島、巨濟島、珍島、江華島、南海島、莞島、安眠島、身彌島、鬱陵島、白翎島、椒島、慈恩島、荏子島、喬桐島、岩泰島、都草島、席毛島、永宗島の十八島を選びて、その人口分布状態を観察することとした。而してこれ等の諸島中には、古來内地と歴史的經濟的に交渉の深いものがあり、自然その島民中には内地人の血液の混つて居るものも尠くないのである。また近來は漁業の爲め内地人の居住し、季節的に通漁する者も頗る多くなつて居る。今これ等諸島の位置、人口數、面積、一方里平均人口數を示すと即ち左の通りである。

著名島嶼人口密度 (大正十四年十月一日現在)

島名	位置		人口數	面積	一方里平均人口
	道名	郡島名			
濟州島	全羅南道	濟州島	二〇一,四三六	一三〇.一 <sup>方里</sup>	一,六七六
巨濟島	慶尙南道	統營郡	七〇,二八二	二六.七	二,六三〇

珍島	全羅南道	珍島郡	四三、一六四	三三二	一九三七
江華島	京畿道	江華郡	五七、四九七	二〇・九	二七五〇
南海島	慶尙南道	南海郡	六七、六三〇	一九七	三三七八
莞島	全羅南道	莞島郡	一三、八六〇	六・〇	二二七八
安眠島	忠清南道	瑞山郡	八七、四五	五九	一、四七〇
身瀾島	平安北道	宜川郡	一〇、三〇一	五五	一、八五〇
鬱陵島	慶尙北道	鬱陵島	九、九九二	四・七	二、一四
白翎島	黃海道	長淵郡	六、一〇四	四・一	一、四六八
椒島	同	松禾郡	六、八三五	三七	一、八一
慈恩島	全羅南道	務安郡	六、〇四五	三四	二七六九
荏子島	同	同	五、七六八	三〇	一、八八一
喬桐島	京畿道	江華郡	七、六二五	二八	二、六四二
岩泰島	全羅南道	務安郡	六、七六九	二八	二、三五五
都草島	同	同	六、八六一	二七	二、五二八
席毛島	京畿道	江華郡	五、四二七	二六	二、〇三七
永宗島	同	富川郡	五、四二九	二六	二、〇七五

右の島嶼中人口密度の最も高いのは、南海島の三千三百七十八人にして、龍岡平野の三千四百三十七人と沙里院平野の三千三百七十二人の中間に位し、沿海地方中人口密度の最も高き對馬海峽方面の

三千四百二十三人に略ぼ匹敵して居る。これに亞ぐは江華島の二千七百五十人、喬桐島の二千六百四十二人、巨濟島の二千六百三十人等にして、島嶼中人口密度の最も低き白翎島の一千四百六十八人の如きも、沿海中の日本海方面などよりは遙かに人口密度が高く、河川流域の臨津江流域及び禮成江流域の人口密度と大差ないのである。斯くの如く島嶼の人口密度が高いのは、農業、漁業の發達し、交通上極めて有利なる爲め、市街地及び漁村部落の多くして自然人口集中の形勢を作り、殊に島嶼の多くが漁業の根據地となつて發展して居る結果である。

### 鐵道沿線

地勢に依りて人口の分布に粗密の別あることは既に説明した通りであるが、交通機關の普及に伴ひて、その地方がこの恩澤を蒙り、經濟の發達、文化の進歩を來し、自然人口集中の形勢を招き、舊市街の膨脹、新市街の現出を見ることあるはその例に乏しくない。多くの場合は、既に存在せる市街地を縫ひて、道路、鐵道、港灣等の連絡されるのであるが、時にはその新設延長に依りて、新に市街及び部落の發達し、却つて舊市街の衰微する如きこともある。各種交通機關中、鐵道に就いて見るに、その普及が地方の經濟状態を改善し、文化の進歩を來すことは云ふ迄もないが、就中これが人口増加に

影響する所は頗る大なるものがある。今試みに朝鮮の官私鐵道の京釜線、湖南線、京義線、京元線、咸鏡線に就いて、その幹支線沿線の人口數、面積、一方里平均人口を見ると左の如くなつて居る。

鐵道沿線人口密度 (大正十四年十月一日現在)

區域	幹支線別	包含府而數	人口數	面積	一方里平均人口
京釜沿線	幹線	七八	一,一五二,九二一	二,三六八	四八六四
	馬山線	七	八四,五六八	二・七	
	鎮海線	三	三三,七七一	九三	
	京仁線	五	八〇,六七五	九二	
	慶南線	一三	九九,六六九	三六三	
	慶東線	二二	二七三,三〇〇	八七八	
	慶北線	一〇	一〇一,七八七	三七九	
	忠北線	七	七四,八五七	二・五	
	忠南線	一四	一〇八,九〇三	三四六	
	安城線	五	三三,四八五	一〇六	
	計	一六三	二,〇〇七,一四六	四,九六二	三,三三五
幹線	五四	四八一,二三四	一〇九〇	四四一五	
群山線	六	七三,三二八	一一七		
第三章	人口の分布			二二七	

朝鮮の人口現象

咸鏡道		京元道		京義道							湖南道						
沿線		沿線		沿線							沿線						
咸鏡南線		金剛山線		价川線		黄海線		博川線		勝湖里線		平南線		兼二浦線		幹線	
部部部		計		計		計		計		計		計		計		計	
六	一四	九	三九	三	二五	二	一三	二	四	九	二	八	七	九	四		
四七,三六一	一五,三八六	一一,〇八〇	三六,四四二	三三,九〇四	二七,九二七	八四,〇七六	一八,三三六	三四,五九〇	九一,七五〇	一六,〇八七	八六,三一九	六八,九二三	七七,四三六	五七,三二五			
五六,一	二四,九六	九,九六	一六,一八	二二,三〇	一五,六四	三三,五	六,二	一六,二	二六,〇	四,二	三〇,八六	一四,〇七	一三,三	六,四	二二,八		
	六一六	一一,八三	二,三五三	一,四七五	一,七二三						二,七七七	四,八九八					

鐘 關 線	四	一六六七四	三三六
計	七二	六九五三四	五九九
			二二六七

これによりて見ると、鐵道沿線中人口密度の最も高きは、經濟狀態の能く發達せる湖南沿線の一方里平均四千八百九十八人にして、これに亞ぐは、京釜幹線の四千八百六十四人である。京義幹線は二千七百九十七人にして、京釜幹線に比し著しく人口密度が低いが、それでも京元線や咸鏡線に較べると遙かに高いことが認められるのである。朝鮮に於ける鐵道の根幹は、京釜線及び京義線であるから、その利用價値の他の支線に比して大なることは云ふ迄もないが、沿線地方の人口密度の高い京釜線とその人口密度の低い京義線とは、一哩平均の運輸收入に於て相當の差があり、他の支線中に在りても、沿線の人口密度の最も高い湖南線とその他とは著しき懸隔があることは、次の國有鐵道運輸收入額比較表で知ることが出來やう。

國有線運輸收入額比較表 (大正十四年度)

線 名	哩 程	旅客收入	貨物收入	合 計	一哩平均收入
京 釜 線	三四八 <sup>哩</sup>	七二五七三五八	五三三三四三三	一二四九〇七九一	三八、四五六 <sup>円</sup> ・六七
京 義 線	三六九・八	四二二、七六〇	七〇〇九、三三九	一一、三三、九八九	三〇、三四六、一〇
京 元 線	一三八・四	一一〇六、九二六	九六七〇、三一九	二、〇七三、九四五	一四、九八五、二五



動が容易に行はれ、以て國際的にも國內的にも、人口の調節が出来たことは、經濟的適應性に富んだ民族であることを示して居る。さればこの國民を統治するには、その個有の民族性を能く理解して居らねばならぬ。

### 第三節 市街地の分布

#### 市街地の分布

朝鮮は古來農業を以て國を立て、居た上に、概して經濟資源が貧弱である爲め、人口は多く地方農村に散在し、従つて大都會及び市街地少く、現在人口五萬人以上の市街地は京城、仁川、大邱、釜山、平壤の五箇所を算するのみにして、人口一萬人以上五萬人未満の市街地二十六箇所、人口五千人以上一萬人未満の市街地五十三箇所、人口三千人以上五千人未満の市街地八十七箇所、以上合計百七十一箇所である。これを國勢調査の行はれた大正十四年十月一日現在、内地に於ける市の數百一、人口一萬人以上の町の數三百四十七、合計四百四十八箇所の多きに對照すると、その懸隔の甚だしきことが認められる。然しながら併合當時と今日とを比較すると、各市街共に、人口數に於ても、街衢の體裁に於ても、商取引高に於ても、面目を一新して居るものが多いが、概して農業地である關係上、商工

業地の如く市街の發達は迅速とは云へない。試みに明治四十三年末と大正十四年末に於ける、人口三千人以上の市街地分布状態を比較すると左の如くなつて居る。

人口三千人以上の市街地分布表 (明治四十三年末)

道	別	五萬人以上	一萬人以上	五千人以上	計
京畿道	京城府	仁川府	安原郡	江華郡	七
忠清北道		開城郡	安原郡	江華郡	一
忠清南道		開城郡	安原郡	江華郡	四
全羅北道		全州郡	南原郡	南原府	三
全羅南道		光州郡	光州	濟州郡	九
慶尙北道		大邱府	尙州郡	慶安郡	五
			慶安郡	尙州郡	
			金山郡	金泉	
			靈光郡	靈光府	
			木浦郡	兵營府	
			令津郡	康兵營府	
			順天郡	順天府	
			潭陽郡	潭陽府	
			恩德郡	大江景	
			懷德郡	大江景	
			洪州郡	洪州	
			清州郡	清州	
			驪州郡	驪州	

第三章 人口の分布

合	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	黃海道	慶尙南道
計							釜
二							山
							府
二		元咸興郡 山咸興府			鎮平南壤浦府	海州郡 海州	龍釜南山府 統東營萊
二六	鏡會城郡 鏡會城寧	北青郡 北青		江宣義州郡 江宣義州	安州郡 安州	安岳郡 安岳	梁蔚咸馬咸密同 山山安陽郡府府 郡郡郡山郡郡郡 梁蔚漆咸密昌舊 山山原府安陽原山
二三三	鏡吉城州郡 羅吉南州	洪北永端 原青興川郡郡 洪新永端 原昌興川		義泰寧雲 州川邊山郡郡郡 新泰寧北 州川邊鎮		信長瑞鳳谷載黃 川淵興山山寧郡 郡郡郡郡郡郡 信長瑞沙谷載黃 川淵興院山寧州	晋彦靈 州陽山郡郡 晋上靈 州北山
七	四	七	一	七	三	九	一四

人口三千人以上の市街地分布表 (大正十四年末)

道別	人口五万人以上	人口一万人以上未滿	人口三千人以上未滿	計
京畿道	仁川府、京城府	高陽郡、陽德郡、開城郡	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	一五
忠清北道	清州郡、清州府	忠州郡、忠州府	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	一五
忠清南道	公州郡、公州府	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	一五
全羅北道	全州郡、全州府	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡、同陽郡	一三
				計

第三章 人口の分布

黄 海 道	慶 尙 南 道 釜 山 府	慶 尙 北 道 大 邱 府	全 羅 南 道
鳳海 山州 郡郡 沙海 里院 州	統密晉馬 營陽州 郡郡郡山 統密晉 營陽州府	尙金 州泉 郡郡 尙金 州泉	光木 州 郡浦 光 州府
同黃載信安長 州寧川岳淵 郡郡郡郡郡	金東同蔚 海萊山 郡郡郡郡	同永慶迎安 川州日東 郡郡郡郡	濟羅麗 州州水 島郡郡
兼黃載信安長 二浦州寧川岳淵	金東方蔚 海萊津山	新永慶浦安 寧川州項東	濟羅麗 州州水
谷同瑞殷平延 山興栗山白 郡郡郡郡郡	泗昌金 川原海 郡郡郡	同榮醴善同漆高詩同慶盈義達 州泉山 谷靈道 山德城城 郡郡郡郡郡郡郡郡郡	同同同濟珍同靈成羅靈 島島島郡郡郡郡郡
谷新瑞長南延 山幕興連川安	三鎮進 千浦海永	豐榮醴善若倭高華慈慶寧義玄 基州泉山木館靈陽仁山海城風	金咸朝禾珍法靈成榮靈 寧德天北 聖 山 里里里里島浦光平浦岩
二 四	三	三	二 五

二三五

朝鮮の人口現象

合計	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道	平安北道	平安南道	平壤府
	會鏡清 寧城郡 會羅會 寧南府	北咸元 青興郡 北咸會 青興府		義新 州義 郡義 州府	鎮南 浦府	
	慶城鏡 興津城 郡郡 雄城鏡 基津城	端利洪永 川原原興 郡郡郡 端遮洪永 川湖原興	江春鐵 陵川原 郡郡 江春鐵 陵川原	江宣定熙雲 界川州川山 郡郡郡郡 江宣定熙北 界川州川鎮	安大 州同 郡郡 安寺 州洞	
	穩鍾茂吉 城城山州 郡郡郡	三同北甲同定 水青山平 郡郡郡郡	平平金原 康昌化州 郡郡郡	楚昌同龍同鐵博寧龜同義 山城川山川邊城州 郡郡郡郡郡郡	价平中江同大 川原和東同 郡郡郡郡郡	二二六
	穩鍾茂吉 城城山州	新新惠新定 翌浦昌鎮上平	平大金原 康和化州	楚大楊龍車鐵博寧造替北 榆岩盤山洞市浦館山川邊洞馬洞	軍肅中勝箕船 隅川和里里 里里里	二二六
二六						
五三						
八七						
一七						
〇						
三						
七						
八						
〇						

## 市街地の地勢

右の人口三千人以上の市街地を地勢別に、平野地、臨海地、沿河地、山岳地に分類し、尙ほ鐵道の便ある市街地を示すと、平野地百七箇所、臨海地二十九箇所、沿河地二十四箇所、山岳地十一箇所に於て、その中で鐵道の便ある市街地は八十九箇所ある。而して市街の所在地が、平野地にして同時に沿河地に屬する論山及び惠山鎮の如きものは、地勢上比較的相近き方へ編入して置いた。朝鮮の市街地は概して消費的都邑にして、商工業の殷盛を極めて居る所は少數である。然しながら産業の發達、交通の進歩に伴ひ、地方都邑の經濟力も亦著しく膨脹しつゝある。市街地の主なるものに就いてその大體の分類をして見ると、李朝以來商業地として發達した都邑は、僅に開城のみである。未だ工業都市として認むべき程のものはないが、平壤及び大邱の如きは、近來製造工業の發展に稍見るべきものがある。政治的關係によりて發達したる都邑には、京城、水原、清州、公州、全州、光州、大邱、慶州、東萊、晋州、海州、平壤、義州、春川、咸興、會寧などがあり、邑内と稱する舊市街地の大部分は行政廳の在つた所である。貿易によりて發達した都邑としては、仁川、釜山、群山、木浦、馬山、鎮南浦、元山、城津、清津、雄基等を數へ、鐵道の開通によりて急速に發展したる都邑としては、永

登浦、天安、鳥致院、大田、金泉、裡里、松汀里、新幕、沙里院、新義州、鐵原などを算する。前記の貿易港以外に、舟運を利用しまたは漁業の根據地として發展した都邑として、江景、論山、浦項、方魚津、統營、麗水等があり、鎮海は要港、羅南は師團、兼二浦は製鐵所の所在地として遽かに發展した都邑である。

左の市街地に就いて見るに、各市街地とも朝鮮人は、内地人より多數在住して居るけれども、新市街地たる大田、及び軍港地たる鎮海は、内地人數が朝鮮人數よりも遙かに多いのである。外國人（主として支那人）は、京城、仁川、平壤、鎮南浦、新義州、北鎮、元山、清津等に多く居住し、その他の市街地に居住する者は極めて少數である。何れの市街地も、男子の數は女子の數より幾分多いが、江華、開城、兵營、高興、長輿、濟州、禾北里、朝天里、咸德里、金寧里、玄風、慶州、華陽、馬山、晋州、蔚山、東萊、鎮海、海州、延安、谷山、安州、義州、替馬、寧邊、宣川、吉州の二十七都市は、女子の數が男子の數を越えて居る。一世帯當りの人口數は大抵四人乃至五人であるが、寺洞の十人七分、遮湖の六人五分、鏡城の五人五分、江陵及び金化の如く五人五分に及ぶ所もある。また一世帯當りの人口數の少い處では兼二浦の三人五分、鎮海及び長淵の三人六分、潭陽の三人八分、平壤、博川、及び義城は三人九分となつて居る。

人口三千以上の市街地地勢別表 (大正十四年末)

道別	平野地	臨海地	沿河地	山地	岳地	計
京畿道	△高陽郡 △同安郡 △同德郡 △往觀里 △東慕里 △十里	△仁川府	△京畿府 △高陽郡 △同安郡 △同德郡 △往觀里 △東慕里 △十里	△驪州府 △驪州郡 △露梁郡 △露梁郡 △露梁郡		一五
忠清北道	△永同郡 △忠清郡 △清州郡		△槐山郡 △槐山郡			五
忠清南道	△大邱郡 △公田郡 △公田郡 △燕岐郡	△天安郡 △禮山郡 △瑞禮山	△天安郡 △禮山郡 △瑞禮山	△同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡		八
全羅北道	△全州郡 △南原郡 △淳昌郡 △益山郡 △扶安郡 △金堤郡	△井邑郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡	△井邑郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡	△群山府		三
全羅南道	△光州郡 △同陽郡 △潭陽郡 △靈光郡 △長興郡 △海平郡	△羅州郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡	△羅州郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡 △同安郡	△求禮郡 △求禮郡		二五

第三章 人口の分布





朝鮮の人口現象

清州	三六・三八	野	三六四〇	興	三九五五
仁川	三七・二八			龍岩浦	三九五六
京城	三七・三四	福島	三七四七	新義州	四〇〇六
春川	三七・五三	新湍	三七五五	羅南	四一四三
海州	三八〇二	相川	三八〇二	清津	四一四七
鎮南浦	三八四四	石卷	三八二六	中江鎮	四一四七
平壤	三九〇一			雄基	四二二〇
元山	三九一〇	水潭	三九〇八	會寧	四二二六
					函館
					四一四七
					三九四一

著名地の緯度を觀察した序に、主要市街地の眞高を示して見やう。眞高點の位置は大抵道府郡廳又は警察署の前庭若くは同地方水準點を採つて居る。これを前掲の市街地人口及び地勢別表と對照するとき、人口の集中と市街の發達が、如何なる地點に容易なるかを知ることが出來やう。平壤(十二米)、慶州(三十九米)、扶餘(四十米)、開城(三十九米)、京城(三十二米)の如き、古來都として永く續いた地が平地に在りたる如く、今日の經濟上に重要なる地位を占むる都會も、仁川(十三米)、大田(五十二米)、裡里(十三米)、群山(十二米)、木浦(十米)、大邱(三十八米)、釜山(二十米)、馬山(七米)、沙里院(十八米)、鎮南浦(八米八分)、新義州(五米)、元山(七米)、咸興(二十一米三分)、清津(八米五分)等を始め、多くは平地や沿海に分布し、その高地に在るもの、少いのは、人口の集中、物資の需給、交通の關係より見て當然である。

市街地眞高表

眞高

都

邑

名

十米未滿

平澤、永登浦、汝山、論山、大川里、唐津、群山(沃溝郡廳)、木浦、咸平、浦項、馬山(昌原郡廳)、金海、河東、鎮南浦、新義州、龍巖浦、杆城、三陟、蔚珍、元山、滄津、鏡城

京城、仁川、議政府、楊平、驪州、安城、水原、官廳里、金浦、江華、長湍、開城、清州、公州、烏致院、扶餘、舒川、洪城、禮山、瑞山、溫泉里、天安、全州、非邑、扶安、金堤、裡里、光州、溲陽、求禮、光陽、麗水、順天、

五十米以上

高興、長興、海南、靈巖、羅州、靈光、莞島、濟州、西歸浦、大邱、盈德、慶州、高靈、星州、倭館、尙州、道河、釜山、晉州、宜寧、咸安、密陽、梁山、蔚山、東萊、統營、固城、泗川、南海、金川、平山、馬山、長湍、殷栗、安岳、信川、載寧、黃州、沙里院、平壤、江東、中和、龍岡、江西、安州、義州、博川、定州、鐵山、通川、襄陽、江陵、咸興、定平、永興、高原、文川、德源、安邊、洪原、利原、端川、羅南、城津、鍾城、慶興

五十米以上

漣川、抱川、加平、利川、金良場、靈川、忠州、大田、香陽、南原、淳昌、高敞、谷城、和順、康津、長城、珍島、軍威、義城、安東、永川、慶山、金泉、善山、醴泉、昌寧、海州、新溪、松禾、瑞興、順川、成川、永柔、价川、泰川、宜川、昌城、碧潼、北青、穩城、慶源

百五十米以上

報恩、沃川、永同、槐山、陰城、丹陽、清道、榮州、山清、遂安、德川、龜城、雲山、熙川、朔州、春川、原州、橫城、洪川、華川、伊川、興京里、明川、吉州

百五十米以上

錦山、茂朱、寶城、青松、開慶、乃城、咸陽、居昌、陝川、谷山、寧遠、楚山、涓原、麟蹄、楊口、富寧

二百米以上

任實、英陽、孟山、寧越、金化、鐵原

第三章 人口の分布

朝鮮の人口現象

二百五十米以上 堤川、鎮安、陽德、寧邊、平昌、會寧  
 三百米未満 廣州、長水、江界、慈城、淮陽、旌善、平康、茂山  
 五百米以上 厚昌、長津、甲山  
 五百米未満 新豐里、仲坪場  
 一千米以上  
 一千五百米未満

内地人の多い市街地

朝鮮の市街地中、内地人の一千人以上居住する所を挙げると、京城、仁川、水原、開城、清州、公州、烏致院、大田、江景、群山、全州、裡里、金堤、井邑、木浦、光州、麗水、大邱、浦項、金泉、尙州、釜山、馬山、晋州、方魚津、鎮海、海州、兼二浦、沙里院、平壤、鎮南浦、新義州、春川、元山、咸興、清津、羅南、城津、會寧の三十九箇所に及んで居るが、その百人以上在住の市街地は左の如き多數に達するのである。

内地人百人以上在住の市街地 (大正十四年末現在)



第三章 人口の分布

忠清北道

鎮川郡 鎮川

三三

同郡 黃澗

四五

永同郡 永同

一三三

沃川郡 沃川驛前

八九

報恩郡 報恩

五一

清州郡 清州

六七六

開城郡 開城

三三六

坡州郡 汶山浦

四七

利川郡 利川

四一

江華郡 江華

三四

同郡 鷺梁津

五三

始興郡 永登浦

一八八

同郡 烏山

七五

水原郡 水原

三〇五

振威郡 平澤

七五

安城郡 安城

五九

驪州郡 驪州

三四

同郡 阿靛里

四二

同郡 往十里

八九

高陽郡 讎島里

四八

仁川府 一八八五九  
二,五七一

京城府 一九四四二  
二,五九六

三九,七二六  
五,九一〇

三八,〇九五  
五,七〇七

七,七八一  
二,六一七

京畿道

二四五

朝鮮の人口現象

忠清南道

全羅北道

同郡	同郡	井邑郡	淳昌郡	南原郡	茂朱郡	錦山郡	全州郡	群山	天安郡	牙山郡	瑞山郡	禮山郡	同郡	論山郡	大田郡	燕岐郡	公州郡	堤川郡	忠州郡	陰城郡	槐山郡
新泰仁	泰仁	井邑	淳昌	南原	茂朱	錦山	全州	府	天安	温泉里	瑞山	禮山	江景	論山	大田	鳥致院	公州	堤川	忠州	陰城	槐山
五五	三三	二八八	四九	一〇七	四一	六九	九〇四	一、六九二	三三八	九一	九四	八五	三八〇	一三五	一、三〇九	二八八	四八四	三三	二二三	三六	五〇
五三	三七	三〇七	四九	一三〇	四七	六九	九八八	一、七六七	二四二	一〇四	九四	一〇一	三九二	一三九	一、三八五	三二四	五一七	五〇	二四〇	三九	五二
二二〇	七五	五五八	八五	二三五	八二	一五八	一、七六六	三、五六〇	四七六	一七八	一九〇	一五〇	七七二	二八二	二、六七五	五七六	八六九	九六	四三九	六五	八八
二〇九	七五	五五一	五九	二二三	七九	二二七	一、七三〇	三、五二四	四九六	一四五	一四七	一五九	七八一	二七六	二、四二六	五八五	八三三	八九	四〇九	六一	八三
二二九	一五〇	一、一〇九	一四四	四六八	一六一	二七五	三、四九六	七、〇七四	九七二	三三三	三三七	三〇九	一、五五三	五五八	五〇九一	一、二六一	一、七〇二	一八五	八三八	二二六	一七一

全羅南道  
第三章 人口の分布

扶安郡	扶安	四八	四八	一〇六	一〇五	三二一
同郡	益浦	五九	五九	一〇五	一〇〇	二〇五
金堤郡	金堤	二六五	二七〇	五六二	四六七	一,〇四九
沃溝郡	新豐里	四四	四六	九三	九〇	一八三
同郡	屯栗里	四三	四三	九五	九四	一八九
益山郡	裡里	八五三	八五三	一九〇一	一九二四	三,八二五
同郡	黃登	五九	五九	三三	二四九	四六一
木浦府	府	一一九三	一一,三四七	三,四一八	二,四九	六,七〇九
光州郡	光州	八五七	九八〇	二,二二五	一,八九九	四,〇三四
同郡	松汀里	一九七	三三〇	四三	三八五	八二六
潭陽郡	潭陽	一一九	一三五	二四五	一八五	四三〇
谷城郡	谷城	三五	四一	六七	六四	一三一
求禮郡	求禮	五五	五九	一〇九	七五	一八四
光陽郡	光陽	七四	八四	一四五	一四四	二八九
順天郡	順天	一九八	二〇八	三七三	四二三	七八五
麗水郡	麗水	二七九	三六六	七六一	七〇九	一,四七一
高興郡	高興	六三	六四	一一三	一一三	二三五
寶城郡	寶城	四六	四六	八六	八九	一七五
同郡	筏橋	九六	九六	二〇七	一七九	三八六
和順郡	和順	三七	四三	六九	四八	二一七
長興郡	長興	一〇五	一一〇	二二一	二〇三	四二三
康津郡	康津	七九	八二	一四一	一五一	二九二

朝鮮の人口現象

同郡兵營	二六	二六	五〇	五〇
海南郡海南	八八	九四	一八九	二〇一
靈岩郡靈岩	八〇	八三	一四八	一四三
羅州郡羅州	一六四	一七七	四〇一	三七四
同郡榮山浦	一六三	一六九	三四一	三四六
羅州郡南下	五六	六〇	一三二	一一八
咸平郡咸平	四九	六二	一一七	二二八
靈光郡靈光	九六	一〇二	一六一	二二八
同郡法聖浦	六五	七七	一四六	五二
長城郡鈴泉里	七〇	七三	一四六	八七
莞島郡莞島	七四	八一	一五二	一五六
珍島郡珍島	三六	三九	一五一	一五二
濟州郡濟州	一四〇	一四八	七三	五九
同郡西歸浦	一一	三三	二三四	二三〇
大邱府	五五〇二	五五七	五三	四八
義城郡義城	五六	六〇	二二九四	九八四九
安東郡安東	一六八	一七七	一八	八五
青松郡青松	三四	三七	三三四	三三九
盈德郡盈德	四五	五三	六四	四八
同郡寧海	二五	二六	九七	九三
迎日郡浦項	四六一	五九	六三	四三
同郡九龍浦里	一九八	二〇〇	一一八三	一〇六八
			四三八	四三七
				二二五二
				八七五

慶尚北道

慶州郡	慶州	二三八	一三四	二九九	二五九	五五八
同郡	甘浦	二二九	三三三	四〇〇	四〇四	八〇四
永川郡	永川	七九	八九	一五三	一四六	三九九
慶山郡	慶山	一一七	一三三	一九四	一九四	三八八
阿郡	河陽	五一	五一	一〇〇	九六	一九六
星州郡	星州	四一	四三	八七	七七	一六四
漆谷郡	倭館	一〇二	一四	一八六	一八六	三七二
同郡	若木	三五	三八	七一	五七	一三八
金泉郡	金泉	四九五	五二〇	九四一	八九二	一八三三
善山郡	善山	四一	四九	八二	九三	一七四
尙州郡	尙州	二六四	二九四	五六二	五五四	一〇八六
開慶郡	開慶	四五	四五	八〇	八九	一六九
醴泉郡	醴泉	三六	五八	九〇	一〇一	一九一
榮州郡	榮州	三一	四〇	七一	五七	一三八
鬱陵島	道洞	一一九	一三八	二四三	二三九	四八三
釜山府	釜山府	八九一八	九三五四	二〇,一〇五	一九六五一	三九,七五六
馬山郡	馬山郡	二七六	一,二七七	二,四三〇	二,四〇四	四,八三四
晉州郡	晉州	四九九	五六四	九九八	九九八	一九六六
宜寧郡	宜寧	三三	三七	七一	六三	一三四
密陽郡	密陽	九七	九九	一六八	一八九	三三七
同郡	三浪津	一一四	一二七	一六八	一九〇	三五八
梁山郡	梁山	四四	五一	八〇	八三	一六三

第三章 人口の分布

朝鮮の人口現象

慶尙南道

黄海道

蔚山郡	東萊郡	同郡	金海郡	同郡	同郡	統營郡	固城郡	泗川郡	河東郡	咸陽郡	居昌郡	陝川郡	海州郡	延白郡	金川郡	平山郡	同郡	瓮津郡	長湍郡	同郡	松禾郡
方魚津	東萊	溫泉里	金海	進永	鎮海	統營	固城	泗川	河東	咸陽	居昌	陝川	海州	延安	金陵里	汗浦	南川	馬山	長湍	夢金浦	松禾
四六四	六六	七七	二九	一〇五	一〇九八	四六	七二	四三	一〇四	四三	四三	三七	五五五	四九	五二	三三	七九	四五	三五	三三	三二
四八一	六八	七六	三三	一一三	一、一〇四	五三	五二	四八	一九	四三	四三	三七	五八三	六五	六〇	三三	九	四八	四四	三三	四
一、二六一	一三九	二二八	六七	三三一	二、〇八七	一九	一五一	一〇二	二五二	七八	八九	七七	一、〇四四	一〇三	一一〇	六八	一五九	八四	八六	七三	六九
九八五	一三三	二二八	六五	二〇九	二、一四〇	一〇五	一五〇	八三	二二七	七五	七五	六三	九三三	一〇六	八六	七〇	一五四	七二	六二	八二	四八
二、四八	一七一	三〇六	一三三	四〇〇	四、三三七	二三四	三〇二	一八六	四八八	一五三	一六四	一四〇	一、九七七	二〇九	一九六	一三八	三三三	一五五	一四八	一五四	二七

平安南道

第三章 人口の分布

安岳郡	安岳	四三	五一	八六	九〇	一七六
信川郡	信川	三七	四五	六六	五三	一一九
載寧郡	載寧	六一	七六	一一三	一一五	二三八
黃州郡	黃州	一三五	一三五	二五七	三三一	四八八
同郡	兼二浦	六五一	六八四	一,二〇〇	一,二二六	二,四二六
鳳山郡	沙里院	二九二	三九七	六三八	一,二二六	二,四二六
瑞興郡	瑞興	五五	五七	九三	九三	一八六
同郡	新幕	一五三	一八九	三四三	三三三	六六六
平壤府		六,五五七	六,八二二	一三,二一一	一〇,三三六	二三,五七七
鎮南浦府		九二七	一,二〇〇	二,三五九	二,二七五	四,六三四
大同郡	船橋里	一九七	二〇七	四〇二	三八八	七九〇
同郡	寺洞	二〇八	二三〇	三九一	三六八	七九九
成川郡	成川	五〇	五〇	八四	六六	一五〇
江東郡	勝湖里	一一九	一七九	三〇〇	二九九	五九九
中和郡	中和	三七	三九	七二	六〇	一三三
江西郡	江西	四一	四一	六三	六〇	一三三
平原郡	永柔	三七	三七	六四	五一	一一五
同郡	肅川	三三	三四	五八	五二	一一〇
安州郡	安州	九〇	一〇三	一六一	一三六	二八八
同郡	新安州	七一	八八	一四二	一五二	二九三
价川郡	軍隅里	七五	九四	一六九	一三三	三〇〇
新義州府		一,一九一	一,四〇一	三,一六二	二,七八二	五,九四四

朝鮮の人口現象

平安北道

義州郡	義州	一五三	一六五	二七三	二六二	五三五
同郡	北下洞	四〇	五〇	七〇	五〇	一三〇
泰川郡	泰川	二五	三四	五九	四八	一〇七
雲山郡	北鎮	四五	五四	九八	七六	一七六
熙川郡	熙川	四六	六六	一四	八二	一九六
寧邊郡	寧邊	四九	六三	八八	一〇三	一九一
博川郡	博川	六一	六四	一一三	九二	二〇五
定州郡	定州	二二六	二五一	三九三	四二一	八二四
同郡	郭山	二七	二七	四八	五五	一〇三
宣川郡	宣川	一一六	一三七	一九七	一八六	三八三
龍川郡	龍岩浦	一一六	一三九	二四七	二六一	五〇八
朔州郡	朔州	三五	四〇	六三	六八	一三〇
昌城郡	昌城	三四	五五	一一〇	八三	一九三
碧潼郡	碧潼	一九	四八	六四	四九	一一三
楚山郡	楚山	九六	一〇一	一三一	一一八	二四九
同郡	舊邑洞	三六	五三	八四	七三	一五七
江界郡	江界	一一三	一六〇	三〇〇	二二五	五三五
同郡	滿浦鎮	三八	五一	一一八	二〇	一三八
慈城郡	慈城	二二	四七	五九	四五	一〇四
同郡	中江鎮	九〇	一二六	一六九	一五三	三三三
厚昌郡	厚昌	四八	七二	一〇一	七六	一七七
鐵原郡	鐵原	一三三	二六一	四一八	三七八	七九六



朝鮮の人口現象

咸鏡北道

同郡 新斐城	一六六	一七八	二四五	二二三	四七七
甲山郡 甲山	三三	四一	六一	五七	二一八
同郡 惠山鎮	一四二	一九七	三三三	二九七	六二〇
清津府	一〇七六	一六三九	三三三三	二八九四	六二二六
鏡城郡 羅南	一四三〇	一五三五	二六四〇	二六九三	五三三三
同郡 鏡城	六三	六五	一四二	一〇八	二五〇
同郡 漁大津	六〇	六〇	一三〇	七三	一九三
同郡 朱乙温場	四六	四八	七五	七三	一九八
明川郡 明川	四三	四二	七三	七三	一九八
吉州郡 吉州	四九	五三	七三	六〇	一三三
咸津郡 咸津	三九五	四一五	六九〇	六九一	一三六一
富寧郡 富寧	二二	二六	五八	四九	一〇七
茂山郡 茂山	九一	一一五	一八八	一五〇	三三八
會寧郡 會寧	五六七	七三三	一一五六	一一二〇	二二七六
鍾城郡 鍾城	六一	六九	九八	六三	一六一
穩城郡 穩城	五一	五八	八三	六三	一四五
慶源郡 慶源	七一	八三	一五三	一九	二七三
慶興郡 雄基	二四六	三五六	四三〇	四〇九	八二九
同郡 慶興	三	六四	六九	六一	一三〇

支那人の多い市街地

右の市街地に居住する内地人は三十三萬三千四百五十三人に達し、朝鮮在任の内地人總數四十二萬四千七百四十人に對し實に七割八分五厘を占め、その他の市街地及び地方に居住する者は僅に二割一分五厘に過ぎない。更に支那人二十人以上在任の市街地を示すと次の通りにして、その勢力の侮り難きことが判るであらう。由來支那人は忍耐力強く、勤勉にして貯蓄心に富み、粗衣粗食に甘んじて、低廉なる貸銀と、薄利の商賣を以て、一步一步競争に打ち克ち、鮮内到的所に根を卸して居るから、内鮮勞働者及び商人に取りては脅威を感じることが尠くない。

支那人二十人以上在任の市街地 (大正十四年末現在)

支那人二十人以上在任の市街地	支那人		人口	
	男	女	男	女
京城府	五五五	八四〇	五七二〇	五八九
仁川府	三八三	三六三	一六一五	四七〇
高陽郡 往十里	九	二	一三六	七
同郡 東幕里	一〇	一〇	三三	一
驪州郡 驪州	七	七	二六	一
安城郡 安城	二〇	二七	八六	八
振威郡 平澤	一七	三二	四七	一
水原郡 水原	一九	三〇	四六	四
計			四三〇九	二〇八五

朝鮮の人口現象

忠清南道										忠清北道												
天安郡	瑞山郡	禮山郡	同郡	論山郡	大田郡	燕岐郡	公州郡	堤川郡	忠州郡	陰城郡	槐山郡	鎮川郡	同郡	永同郡	報恩郡	清州郡	開城郡	利川郡	同郡	始興郡	同郡	
天安	瑞山	禮山	江景	論山	大田	烏致院	公州	堤川	忠州	陰城	槐山	鎮川	黃潤	永同	報恩	清州	開城	利川	鷲梁津	永登浦	烏山	
三	一七	三〇	五二	三三	二四	二七	三五	九	一五	八	一五	一六	四	五	一〇	五〇	四〇	五	八	八	一四	
三	三	三〇	五	四	三〇	三〇	五	九	一六	九	一六	一六	四	〇	一四	五〇	四〇	九	八	一三	一四	
一四	七〇	一三〇	一八五	八四	一六	一三	一三	三	七	三	五	八	一六	五	三九	一六	一七	三	三	五	六〇	四
一六	五	三	三	一	四	二	八	一	一	一	四	四	二	五	六	五	二	三	五	〇	三	
一四	七	一三	一九七	八五	一四〇	一四〇	三	三	七	三	六	三	三	三	四	一六	一四	六	四	七	〇	五



朝鮮の人口現象

慶尙北道

晉州郡	馬山府	釜山府	榮州郡	醴泉郡	尙州郡	金泉郡	漆谷郡	星州郡	慶山郡	永川郡	慶州郡	迎日郡	安東郡	義城郡	大邱府	濟州島	長城郡	靈光郡	同郡	羅州郡	海南郡
晉州	山府	山府	榮州	醴泉	尙州	金泉	倭館	星州	河陽	永川	慶州	浦項	安東	義城	府	濟州	鈴泉里	靈光	榮山浦	羅州	海南
一六三	二〇〇	三三七	二二四	九九九	九七七	六一	一三〇	七二四	八八二	二六六	九九										
七五	二〇	七二	三六	九九	七七	六二	三四	〇三	二〇	三〇	九八	二六	六九								
五八	一〇	四九	二九	二八	八五	二五	三一	三三	六八	二七	三三	五三	三〇	四七	二〇	二五	三三	二九	三三	三三	
二二	三	二二	三	一	二	一	一	三	一	四	一	五	一	二	二	一	五	一	二	二	
〇三	五	三	九	〇	七	一	三	三	〇	七	三	五	三	〇	四	二	六	三	〇	五	五

慶尚南道

黃海道

第三章 人口の分布

大同郡 船橋里	鎮南浦府	平壤府	同郡 新幕	瑞興郡 瑞興	同郡 銀波	鳳山郡 沙里院	同郡 兼二浦	黃州郡 黃州	載寧郡 載寧	信川郡 信川	安岳郡 安岳	松禾郡 松禾	同郡 苔灘	長湍郡 長湍	平山郡 南川	延白郡 延安	海州郡 海州	陝川郡 陝川	河東郡 河東	固城郡 固城	密陽郡 密陽
二八	一七六	三三五	二二	一〇	九	五五	七九	二二	一五	一九	二二	一〇	三	一七	二一	二二	三九	五	七	七	一六
三一	二〇九	二四七	二九	一〇	二二	八〇	七九	二二	一七	三三	三三	三三	五	三三	一四	一八	四三	五	八	七	一六
二六	八九三	六五〇	一〇一	一八	二四	二八五	二二	五二	四九	六一	四五	四三	一八	六九	三九	七〇	一四九	三三	三〇	二五	五〇
二五	二五	八九	一〇	四	五	四一	八〇	三	九	四	五	七	二	八	四	六	二九	一	一	一	一
一四二	一〇一七	九三九	一一一	三三	二九	三三六	二九一	五四	五八	六五	五〇	四九	二〇	七七	四三	六六	一七八	二五	三〇	二五	五二

二五九

朝鮮の人口現象

平安南道

宣川郡	同郡	定州郡	博川郡	熙川郡	雲山郡	泰川郡	同郡	同郡	義州郡	新義州府	价川郡	同郡	安州郡	平原郡	江西郡	龍岡郡	中和郡	江東郡	順川郡	同郡	同郡	
宣川	郭山	定州	博川	熙川	北鎮	泰川	替馬	北下洞	義州	州府	軍隅里	新安州	安州	肅川	江西	廣梁灣	中和	勝湖里	順川	箕林里	寺洞	
二七	二二	二七	二三	二二	八八	七	一四	三三	五二	一四四	八	六	二	五	七	八	四	一〇	二	一四	六	
三〇	三三	九	三三	三三	一六	七	一四	九	八	一四三	一五	八	二	五	七	一〇	四	二〇	四	一八	七	
一一一	二七	四	四〇	四〇	五四〇	三	四	一三	二五	三三二	三	三	六	三	二〇	二六	一七	六九	二六	二二	九	
三三	七	四	二	六	一五	二	九	二五	九	六〇六	七	〇	〇	一	六	七	六	七	一	二五	一	
一四	四	二六	四	四	六九	三	三	一五七	二六四	三九三	四	三	九	三	三	三	三	三	三	八	七	〇

平安北道

江原道

第三章 人口の分布

元山府	高城郡	通川郡	平康郡	金化郡	原州郡	江陵郡	春川郡	鐵原郡	厚昌郡	同郡	慈城郡	同郡	江界郡	渭原郡	楚山郡	同郡	昌城郡	同郡	龍川郡	同郡	鐵山郡
長笛	庫底	平康	金化	原州	江陵	春川	鐵原	厚昌	中江鎮	慈城	滿浦鎮	江界	舊邑洞	楚山	大檢洞	昌城	楊市	龍岩浦	車榮館	鐵山	
二四	一〇	四	五	八	二七	八	七	二七	一六	二四	七	二一	三九	九	一九	二四	三	二〇	九五	八	八
二七六	一〇	四	五	八	二〇	一〇	七	二七	二二	三〇	二一	五	五四	二〇	二四	五九	五	二二	三〇	二二	二九
六四〇	三三	三三	二四	九	五一	六	四三	九七	一〇三	九六	四	三八	一〇八	三	五三	二七四	二〇	五〇	三七四	五〇	二九
二六	一	一	一	四	一	四	八	五	二〇	三	〇	四	三	八	四九	四	四	一五六	一三	三	
七六八	三三	三三	三五	四〇	五五	三六	四	一〇五	一〇八	一六	七	四八	二二	四	六一	三三	二四	五四	五三	六三	三二

咸鏡南道

咸興郡	咸興	四二	六	二〇五	三	三六
定平郡	新上	二二	三三	五三	四	五七
永興郡	永興	一一	三三	六五	一九	七四
高原郡	高原	二一	九九	一五	一九	五七
文川郡	文川	八四	九九	一〇	一五	五七
洪原郡	洪原	二一	三三	六五	一九	五七
北青郡	北青	二四	六二	七四	一九	八三
同郡	新昌	九	一九	七	一	七
同郡	新浦	二	二	四	一	三
利原郡	遮湖	三	三	六	一	三
同郡	仙	八	九	二	四	三
端川郡	端川	三	三	六	二	三
三水郡	新岑坡	一九	一八	二七	二	一五
甲山郡	甲山	三	八	四	二	四
同郡	惠山鎮	九	九	一四	一	四
清津府	府	二二	二七	九二	二五	一六
鏡城郡	羅南	六五	一〇	三三	一五	一〇七
同郡	鏡城	一三	三	三	三	三六
同郡	獨津	五	五	五	一	三
同郡	朱乙溫場	七	三	六	一	二
明川郡	花台	三	九	二	四	〇
吉州郡	吉州	三	九	二	四	〇

成鏡北道		城津郡	同郡	富寧郡	同郡	茂山郡	會寧郡	鍾城郡	穩城郡	慶源郡	慶興郡	同郡
		城津	臨溪	富寧	古茂山	茂山	會寧	鍾城	穩城	慶源	雄基	慶興
	九七		五	五	三	二七	五〇	八	一三	二三	六八	八
	一〇九		五	七	四	二七	八五	八	一七	四一	七五	一三
	二四五		一九	五五	四三	七三	三二	二五	二八	四二	二八八	二七
	一六		二	一	一	一四	二六	一	二	一三	四三	五
	二六一		二二	五六	四三	八七	三三六	二六	三〇	五四	三三一	三三

### 西洋人の多い市街地

右の市街地に居住する支那人は二萬九千百十八人に達し、朝鮮在住支那人總數四萬六千百九十六人に對し六割三分に當り、その他の地方に居住する者は三割七分である。支那人以外の外國人即ち西洋人の地方在住者は多くないが、その十人以上在住の市街地を見ると左の通りにして、その居住外國人の大部分の者は宣教師及び教員などである。

外國人(除支那人)十人以上在住の市街地 (大正十四年末現在)

朝鮮の人口現象

市街地		住	世	男	女	計
		戸	帯	人	人	口
京畿道	京城府	105	131	199	26	45
	仁川府	3	3	9	19	28
忠清北道	開城府	8	8	3	2	5
	清州府	6	6	4	9	13
全羅南道	木浦府	4	4	1	1	2
	光州府	15	15	6	10	16
慶尙北道	大邱府	3	2	7	3	10
	順天府	6	6	7	3	10
慶尙南道	釜山府	8	8	2	9	11
	晉州府	4	4	5	7	12
黄海道	海州府	4	5	5	8	13
	平壤府	4	4	5	7	12
平安北道	雲山府	5	7	6	6	12
	宣川府	8	9	10	13	23
江原道	春川府	4	4	5	6	11
	大楡洞	2	4	6	3	9

二六四

咸鏡南道	元山府	三	一四	二三	一八	四〇
	咸興郡 咸興	六	六	一六	一三	二九
咸鏡北道	清津府	二	二	一〇	七	一七
	城津郡 城津	三	三	五	六	二一

### 市街地の發達

以上に於て朝鮮の主要市街地の分布、大小等は略ぼ明かにしたから、更に各市街地に就いて、併合後に於ける年々の人口消長を示し、以て市街地發達の狀況を知るに便したい。左の表を一瞥するとき、併せて各市街地の特色とその經濟勢力の一端も亦窺ふことが出來やうと思ふが、要するに朝鮮に於ける人口の都市集中傾向は、未だ極めて緩漫なりと稱せざるを得ない。

### 市街地人口數累年比較表

都邑名	高年 末	大正 七年 末	大正 八年 末	大正 九年 末	大正 十年 末	大正 十一年 末	大正 十二年 末	大正 十三年 末	大正 十四年 末	大正 十五年 末	大正 十六年 末	大正 十七年 末	大正 十八年 末	大正 十九年 末	大正 二十年 末	明治 四十四 年	明治 四十五 年	
京城	三〇、七二	三九、四五	四八、八〇	五七、四〇	六六、二〇	七五、一〇	八四、〇〇	九三、〇〇	一〇二、〇〇	一一一、〇〇	一二〇、〇〇	一二九、〇〇	一三八、〇〇	一四七、〇〇	一五六、〇〇	一六五、〇〇	一八四、〇〇	二〇三、〇〇
仁川府	三、五三	四、四三	五、三三	六、二三	七、一三	八、〇三	八、九三	九、八三	一〇、七三	一一、六三	一二、五三	一三、四三	一四、三三	一五、二三	一六、二三	一七、二三	一八、二三	一九、二三
高陽郡	六、三九	六、四八	六、五七	六、六六	六、七五	六、八四	六、九三	七、〇二	七、一一	七、二〇	七、二九	七、三八	七、四七	七、五六	七、六五	七、七四	七、八三	七、九二
蘇島里	六、三九	六、四八	六、五七	六、六六	六、七五	六、八四	六、九三	七、〇二	七、一一	七、二〇	七、二九	七、三八	七、四七	七、五六	七、六五	七、七四	七、八三	七、九二

### 第三章 人口の分布





朝鮮の人口現象

郡名	1910	1920	1925	1930	1935	1940	1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000
陰城郡	1,955	1,810	1,776	1,652	1,531	1,407	1,284	1,161	1,038	915	792	669	546	423	300	177	54	31
忠州郡	6,333	4,697	4,603	2,300	2,331	2,359	1,287	1,210	1,170	1,130	1,090	1,050	1,010	970	930	890	850	810
同政教溪郡	—	—	—	1,500	1,700	1,900	2,100	2,300	2,500	2,700	2,900	3,100	3,300	3,500	3,700	3,900	4,100	4,300
堤川郡	3,648	3,020	3,079	2,508	2,390	2,326	2,255	2,184	2,113	2,042	1,971	1,900	1,829	1,758	1,687	1,616	1,545	1,474
丹陽郡	1,556	4,823	1,215	1,177	1,077	1,027	1,077	1,127	1,177	1,227	1,277	1,327	1,377	1,427	1,477	1,527	1,577	1,627
同永春郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
公州郡	1,003	9,144	8,823	8,330	7,773	7,216	6,659	6,102	5,545	4,988	4,431	3,874	3,317	2,760	2,203	1,646	1,089	532
燕岐院郡	6,198	5,141	4,762	4,289	3,816	3,343	2,870	2,397	1,924	1,451	978	505	30	—	—	—	—	—
大田郡	9,100	7,825	7,104	6,378	5,652	4,926	4,200	3,474	2,748	2,022	1,296	60	—	—	—	—	—	—
論山郡	3,873	3,556	3,239	2,922	2,605	2,288	1,971	1,654	1,337	1,020	703	386	70	—	—	—	—	—
同江景郡	9,382	9,142	8,902	8,662	8,422	8,182	7,942	7,702	7,462	7,222	6,982	6,742	6,502	6,262	6,022	5,782	5,542	5,302
禮山郡	3,610	6,633	3,777	2,746	2,109	1,472	835	298	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
瑞山郡	3,033	2,621	2,596	2,571	2,546	2,521	2,496	2,471	2,446	2,421	2,396	2,371	2,346	2,321	2,296	2,271	2,246	2,221
温牙山郡	1,123	1,851	676	39	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

忠清南道

扶安郡	扶安郡	井邑郡	同仁郡	同仁郡	井邑郡	淳昌郡	南原郡	南原郡	茂朱郡	錦山郡	錦山郡	鎮安郡	鎮安郡	全州郡	群山府	洪州郡	洪州郡	郡司里	舒川郡	成徽郡	同安郡	天安郡	天安郡		
三、七四五	三、七四五	八、七三四	三、二四四	三、二四四	二、九五六	三、六二二	六、〇〇〇	六、〇〇〇	三、七四五	五、九三二	五、九三二	—	—	三〇、九七七	三三、〇三七	—	—	—	—	—	—	四、五六九	四、五六九	四、五六九	
三、五五六	三、五五六	七、四四四	三、一六七	三、一六七	—	三、七四四	五、五五五	五、五五五	三、七四九	五、七〇九	五、七〇九	—	—	一九、六六九	三二、六三三	—	—	—	—	—	—	四、〇七五	四、〇七五	四、〇七五	
—	—	三、二七七	三、〇八九	三、〇八九	一、五七七	三、六二二	五、五一一	五、五一一	三、一五三	五、四三七	五、四三七	—	—	二六、三六二	一九、九六四	—	—	—	—	—	—	三、九〇六	三、九〇六	三、九〇六	
—	—	三、九六六	二、九六四	二、九六四	一、四三三	三、三三六	五、三〇八	五、三〇八	—	四、七八〇	四、七八〇	一、九八八	一、九八八	一六、四八三	一七、六六六	—	—	—	—	一、〇三六	—	三、九七九	三、九七九	三、九七九	
—	—	四、一八四	三、八八六	三、八八六	一、六二五	三、三三六	五、三三九	五、三三九	二、九四六	四、六三六	四、六三六	—	—	一六、一三七	一五、一四一	—	—	—	—	—	—	二、七二〇	二、七二〇	二、七二〇	
—	—	三、〇〇三	二、七四六	二、七四六	一、九二〇	三、一八五	五、一三五	五、一三五	二、八六三	四、九九九	四、九九九	—	—	一三、八七七	一三、〇五二	—	—	—	—	—	—	三、一〇六	三、一〇六	三、一〇六	
—	—	三、四四五	二、八〇九	二、八〇九	一、三二〇	三、一四四	五、一七〇	五、一七〇	二、八四一	四、九五四	四、九五四	—	—	一四、三三〇	一三、三三六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	三、七六六	三、七四二	三、七四二	—	三、七七七	五、二六二	五、二六二	二、八四四	四、六〇九	四、六〇九	—	—	一四、三三〇	一四、三三〇	—	—	九、九三	—	—	—	二、七七一	二、七七一	二、七七一	
—	—	三、三三六	—	—	—	三、一六五	四、〇一三	四、〇一三	—	三、八八八	三、八八八	—	—	一三、六六二	一〇、九六五	—	—	—	—	—	—	二、六三三	二、六三三	二、六三三	
—	—	三、五九五	—	—	—	三、〇八一	四、九三三	四、九三三	—	三、五七六	三、五七六	—	—	一三、六六二	八、二六四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	五、一〇九	五、一〇九	—	三、四八八	三、四八八	—	—	一三、七六三	九、三三三	—	—	—	—	—	—	三、四六六	三、四六六	三、四六六	
—	—	三、三三〇	—	—	—	—	七、八〇九	七、八〇九	—	三、三六六	三、三六六	—	—	一四、四六八	八、二六一	—	—	—	—	—	—	一、七三九	一、七三九	一、七三九	
—	—	—	—	—	—	—	八、七〇四	八、七〇四	—	三、二六七	三、二六七	—	—	一三、八四四	八、三六六	—	—	—	—	—	—	一、〇三三	一、〇三三	一、〇三三	
—	—	—	—	—	—	—	五、〇三〇	五、〇三〇	—	—	—	—	—	一四、〇八九	七、三三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

全 羅 北 道

第三章 人口の分布





朝鮮の人口現象

靈岩郡	三,四三二	三,〇〇〇	三,八〇七	三,〇一六	二,九六六	二,九八八	二,八七六	二,八九七	二,九九三	三,〇四〇	?	三,三六〇	三,一三三	三,五六六	—	二,五三四	
羅州郡	六,六五七	五,五八三	五,三五〇	五,一八七	五,一三三	五,一五九	四,九九〇	四,八八八	四,九三七	四,九九九	四,三〇〇	五,五五九	四,〇七七	?	一七,五六一	—	
同浦郡	四,四三三	—	一,八〇〇	一,八五一	一,九六六	一,八六三	一,七九八	一,七九八	一,八八八	一,四七七	一,三九一	一,三三七	三,一〇三	二,六七七	二,三三三	一,七七八	九一〇
南平郡	二,三三〇	—	二,二五七	二,四九九	二,五三四	二,四七〇	二,五三四	二,六四四	二,七九七	二,六九四	二,六三四	二,五三三	—	—	三,六〇四	三,五九九	—
咸平郡	三,五三三	—	三,三七七	三,三三四	三,三五六	三,三九九	三,三九九	三,三〇四	三,三〇九	三,〇一九	二,七七一	二,五五一	—	—	—	—	—
靈光郡	四,三三三	—	四,二六八	四,一〇六	四,一七五	三,九四八	四,一七七	三,九三三	四,一七三	三,九三三	三,八八四	三,九三五	三,七九九	三,六二九	三,二六九	三,二七五	三,四〇〇
同聖郡	三,五四三	—	三,三三三	三,一四三	三,一〇七	二,九四一	二,九三三	二,九四〇	二,九四〇	二,六六九	二,七三三	二,六七七	二,六七七	二,六七七	二,六七七	二,六七七	二,六七七
法聖郡	二,四六三	—	二,〇四一	一,八八八	一,九九九	二,四三三	二,二七四	二,三三三	二,二七三	二,二六九	二,四三三	二,四三三	二,四三三	二,四三三	二,四三三	二,四三三	二,四三三
莞島郡	一,七九四	—	一,三六五	一,一七六	一,三〇九	一,三三九	一,一〇一	一,一三三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三	一,〇九三
莞島郡	三,七〇一	—	三,七九八	三,七五一	三,六六六	三,四六五	三,七七五	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九	三,四六九
珍島郡	六,四四四	—	八,一八二	八,三〇三	七,三〇九	八,七九八	八,一八二	七,四〇九	七,四四五	七,七七一	七,四七九	六,七七〇	九,二六九	九,三三三	八,四一九	八,三三〇	五,四〇八
濟州島	—	—	四,一四六	四,一四八	三,六三〇	三,六三四	三,六三四	三,六三四	三,六三四	—	—	—	—	—	—	—	—
同比里島	—	—	四,〇六二	三,九四九	三,五五九	三,六〇一	三,六五一	三,六五一	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同天里島	—	—	三,八三三	三,五三八	三,六三三	三,六三三	三,六三三	三,六三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同德里島	—	—	三,八三三	三,五三八	三,六三三	三,六三三	三,六三三	三,六三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同金寧里島	—	—	三,四四四	三,三六六	三,三〇七	三,三〇三	三,〇〇〇	三,六六九	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同西歸浦島	一,三二八	九六六	九六一	一,一三九	一,一〇八	—	一,一四三	一,一四一	一,一四一	一,一四一	—	—	—	—	—	—	—

慶州郡	九龍浦郡	同浦項郡	同海郡	同德郡	同盈陽郡	同英陽郡	同青松郡	同河回郡	同安東郡	安東郡	義城郡	軍威郡	軍威郡	玄風郡	達城郡	大邱府	同夢浦島	同山浦島	同城山浦島
六、九四	二、九四	七、二六	三、二九	二、五六	一、九七	一、三〇	一、三〇	一、三〇	七、三〇	四、一七	二、一三	二、一三	四、九七	七、二七	六、二六	一、五三	一、五三	一、五三	一、五三
六、九四	二、〇三	七、〇三	二、八三	二、五〇	一、九四	一、三〇	一、三〇	一、三〇	五、九七	三、八六	二、〇三	二、〇三	四、六〇	六、八五	六、八五	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇	五、〇〇
六、三六〇	一、九六	六、〇五	二、八四	二、四九	一、八四	一、七二	一、七二	一、七二	五、八七	三、八七	三、〇六	三、〇六	五、九三	五、九三	五、九三	三、六五	三、六五	三、六五	三、六五
七、二三	一、七四	五、八七	—	二、四四	一、五七	一、〇八	一、〇八	一、〇八	五、六六	三、七九	一、九五	一、九五	四、九七	四、九七	四、九七	—	—	—	—
五、八〇〇	—	五、二六	—	—	—	—	—	—	五、六四	三、七五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
五、九六	—	四、九七	—	—	—	—	—	—	五、三九	三、七五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六、三六	—	四、七四	—	—	—	—	—	—	六、〇五	四、二七	—	—	—	—	—	—	—	—	—
五、〇〇	—	四、六五	—	—	—	—	—	—	五、九四	四、〇六	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六、三七	—	四、〇六	—	—	—	—	—	—	六、〇五	三、七〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—
五、七七	—	四、〇七	—	—	—	—	—	—	六、〇〇	三、六四	—	—	—	—	—	—	—	—	—
五、五九	—	四、九八	—	—	—	—	—	—	六、〇〇	三、四八	—	—	—	—	—	—	—	—	—
七、二四	—	四、一五	—	—	—	—	—	—	六、二四	三、九八	—	—	—	—	—	—	—	—	—
七、〇九	—	三、二五	—	—	—	—	—	—	七、三六	三、七四	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六、三三	—	三、一三	—	—	—	—	—	—	七、六〇	三、八三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六、八四	—	—	—	—	—	—	—	—	七、一五	四、〇五	—	—	—	—	—	—	—	—	—
六、八七	—	—	—	—	—	—	—	—	八、四九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

慶尚北道

第三章 人口の分布







昌原郡	四、九六六	四、八六六	五、〇七五	五、一〇六	五、一七〇	四、三六七	四、三六九	四、四九三	四、九九九	四、四九〇	四、一〇六	四、一〇〇	四、〇九一	四、一六九	四、三七七	四、〇五七	四、九七九	四、四一〇	四、九〇一	四、八三三	五、七〇〇	五、〇〇九	二、〇三七	二、〇五三	
同慶和洞郡	—	四、七八五	四、六二二	四、四九〇	四、四三七	四、〇〇〇	四、〇九一	四、一六九	四、三七七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七	四、〇五七
同昌原郡	一、一八一	一、一五九	三、〇〇九	三、〇〇七	三、〇九三	三、九三三	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五	三、〇六五
同鎮東郡	—	—	二、二〇〇	二、二七二	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五	二、二二五
同司川郡	—	—	三、七〇七	三、五〇四	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六	三、五五六
統營郡	三、三三三	—	一、六二二	三、七六六	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三	一、四三三
同長承浦郡	—	一、四九九	一、六六一	一、八三三	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六	一、三三六
同舊助羅郡	—	—	一、二四四	—	一、一三五	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同巨濟郡	—	—	二、四八八	二、二二九	一、六五一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同固城郡	一、九九九	—	五、四八七	五、三三三	五、三三七	五、〇六六	四、九三二	五、〇三三	五、一三六	四、六九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九	四、五九九
同泗川郡	一、〇三三	—	三、九五四	三、七三二	三、七三六	三、六四一	三、四六八	三、五六八	三、七三三	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八	三、〇〇八
同三浦郡	一、六三六	—	四、九三三	四、五二四	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六	四、四六六
同南海郡	一、七〇四	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同河東郡	三、八九三	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同辰橋郡	—	—	一、七七一	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四	一、〇九四
同梁里郡	—	—	七三六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

第三章 人口の分布

朝鮮の人口現象

郡名	1911	1912	1913	1914	1915	1916	1917	1918	1919	1920	1921	1922	1923	1924	1925	1926	1927	1928	1929	1930
山清郡	1,076	1,337	2,776	2,222	2,300	2,326	2,076	1,911	1,920	1,929	1,866	—	—	—	—	—	—	—	—	—
咸陽郡	2,105	1,026	1,826	1,723	2,101	1,726	2,002	1,768	1,800	1,777	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同義郡	—	—	3,006	3,106	3,071	3,171	3,122	3,030	3,128	3,128	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
居昌郡	1,523	1,252	5,026	5,321	4,824	4,426	4,222	4,826	4,626	4,626	4,626	4,520	—	—	—	—	—	—	—	—
陝川郡	7,768	2,072	2,079	2,026	1,926	1,922	1,820	1,822	1,727	1,920	1,921	—	—	—	—	—	—	—	—	—
海州郡	17,269	16,427	25,927	25,722	24,820	24,427	24,529	23,927	24,620	24,025	25,523	25,123	25,328	26,026	26,222	25,521	—	—	—	—
同安郡	—	—	—	—	—	—	101	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
延白郡	4,628	4,422	4,327	4,222	4,222	3,928	4,022	4,222	3,828	3,828	3,722	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同川郡	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	2,222	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
金川郡	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同里郡	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	1,220	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
市邊里郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
平山郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同浦郡	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	1,020	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
汗浦郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同川郡	3,122	2,922	2,622	2,622	2,622	2,622	2,622	2,622	2,622	2,622	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
新溪郡	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	1,222	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

黄海道







朝鮮の人口現象

新義州府	三、一七三	三、三九九	一九、四三三	一八、六六六	一五、九三三	一三、七九八	九、五五二	九、三三三	八、〇一九	六、三九九	六、二〇〇	五、七九九	五、四八八	六、六〇八	四、三〇〇	三、四八八
無价盡臺郡	—	—	四四九	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
德川郡	二、五四六	—	—	二、三三三	二、〇七〇	二、〇一九	二、二二二	一、五九九	一、五五五	一、三三〇	一、三三〇	一、三三〇	一、三三〇	—	—	—
北倉郡	—	—	八九四	—	六六六	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同里郡	三、三四	三、〇八八	三、〇二八	一、二八四	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	一、三三三	—	—	—	—	—	—	—
价川郡	一、四六六	一、二七四	一、四三三	一、〇三三	一、四八四	一、四三三	一、四三三	—	—	—	—	—	—	—	—	—
新州郡	一、六六五	一、四三三	一、三九八	一、三三三	一、三九九	一、二九四	一、八三三	一、七二二	一、六〇五	一、五九九	八七九	—	—	—	—	一、七六六
同安州郡	九六六	九、〇九九	八、九四一	七、九七四	七、八七六	七、六六八	八、三六七	八、四三三	八、五七九	七、三三三	—	—	—	—	—	六、三九九
安州郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
石川郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同漢川郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同順安郡	二、二七四	一、七三〇	一、六九二	一、六五五	一、六九九	一、五九九	二、一八八	二、二九七	一、八〇三	一、六八九	—	—	—	—	—	—
同肅川郡	三、三二二	二、七三三	二、六五五	二、五五五	二、六三〇	二、三三三	二、五九九	二、二九九	二、三三三	二、三三三	—	—	—	—	—	—
永平郡	二、九〇〇	二、六七八	二、六〇八	二、五九九	二、五三三	二、三三三	二、九三三	二、八三三	二、五九九	二、五七四	—	—	—	—	—	—
沙川郡	—	—	五〇〇	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
同飯山郡	—	—	七六六	一、三七一	一、三七一	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

平安北道

清同	郭同	定定	博博	球球	寧寧	熙熙	北同	雲雲	泰泰	造同	龜龜	枇枇	替同	北同	義義
亭郡	山郡	州郡	川郡	揚郡	邊郡	川郡	鎮郡	山郡	川郡	洞郡	城郡	覬郡	馬郡	洞郡	州郡
一、八七	二、七四	六、五〇	四、三三	一、九七	四、三三	五、〇一	八、一〇	一、〇一	二、一九	四、八七	一、三三	—	三、〇三	三、五七	一、一三
二、三三	一、七六	五、九〇	三、八二	—	四、一六	三、三三	六、九六	—	二、九七	—	一、四三	一、七五	—	三、五七	一〇、七五
二、一三	一、六七	四、九七	三、三三	—	四、三三	三、一七	六、九七	八、五	二、八五	—	四、〇四	〇、八〇	—	三、四〇	八、七六
二、七〇	三、三三	五、〇〇	三、一〇	—	四、三三	四、三三	六、九六	八、四	二、六一	—	一、三三	三、三三	—	三、七八	九、三三
一、八七	二、七六	四、九七	三、二六	—	四、一三	—	六、四九	—	—	—	—	二、三三	—	三、一一	八、九七
—	—	四、一三	三、三三	—	四、三三	—	六、四七	—	—	—	—	二、七四	—	—	八、七五
二、〇八	三、〇七	三、九七	三、〇六	—	四、三三	—	八、八七	—	—	—	—	二、四〇	—	—	一〇、六八
—	三、〇三	三、八〇	三、〇三	—	四、三三	—	七、七六	—	—	—	—	—	—	—	四、五五
—	四、〇〇	三、八三	二、九〇	—	四、七三	—	七、四三	—	—	—	—	—	—	—	六、三三
—	—	三、七三	三、〇〇	—	三、六六	—	八、〇五	—	—	—	—	—	—	—	五、七五
—	—	三、三三	三、〇三	—	四、三六	—	八、八四	—	—	—	—	—	—	—	七、九三
—	—	三、三九	—	—	三、八八	—	八、三三	—	—	—	—	—	—	—	八、四八
—	四、七三	三、二八	—	—	四、一七	—	五、八三	—	—	—	—	—	—	—	八、三〇
—	四、七三	三、一〇	—	—	四、四八	—	五、〇四	—	三、八三	—	—	—	—	—	七、一三
—	—	三、八〇	—	—	三、九三	—	四、九二	—	三、七四	—	—	—	—	—	六、四九

第三章 人口の分布







郡名	1900	1905	1910	1915	1920	1925	1930	1935	1940	1945	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990
同浦郡	3,864	3,868	3,868	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104	3,104
新原郡	6,009	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388	5,388
同利郡	2,151	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
郡司郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
端川郡	1,768	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
邑内郡	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377	5,377
新興郡	1,988	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863	1,863
新水郡	3,426	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200	3,200
新堀郡	1,675	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200	1,200
同仲郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
甲山郡	1,821	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079	2,079
同邑郡	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567	4,567
同山郡	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
銅川郡	1,121	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288
文川郡	1,121	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288	1,288
長津郡	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
長津郡	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
豐山郡	1,668	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933	1,933
清津府	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350	10,350

咸鏡北道

第三章 人口の分布





す、商工業の不振であつた關係にも由るが、古來朝鮮の經濟的特相とも目すべき、原始時代の遺風たる市場取引が股賑を極め、現に朝鮮に約千三百の大小市場が散在し、百貨の需給取引が殆んど大部分この市場に於て行はれ、物々交換に近き自給自足經濟が、今日まで持續されて來たことにも尠からず原因して居ると思ふ。

## 第四章 婚 姻

### 第一節 結婚離婚數

古代野蠻の社會に於ては、婦女を略奪して妻と爲し、または婦女を賣買して妻と爲したる例あり、朝鮮にもこの風の行はれたものと見え、最近に於ても北鮮の一地方には、妻を娶るに錢を要する慣習が残つて居ると云ふ話であり、平安、黃海の或る地方では、今も奪略結婚の遺風が存して居ると説く者がある。結婚の年齢に就いては、經國大典に、『男年十五、女十四にして方に婚姻を許す、子女年十三に滿ちて婚を議するを許す、若し兩家の父母の中一人宿疾あり或は年五十に滿ちて而して子女の年十二以上の者は官に告げ婚嫁す』との規定あり、開國五百三年六月議案許婚年齢を定むる件に於ても、早婚を禁じ男子二十歳女子十六歳以後にして始めて婚娶するを許す規定を設けたが、實際に於てはこの規定は空文に終り、女子は十二三歳にて嫁し、男子は十歳前後にて娶ることが多く、大抵の地方では女は男より二三歳乃至四五歳年長なるを常として居た。併合以來文化の進歩と社會の發達に伴ひ、この早婚の弊風は幾分改まりつゝあるも、多年の慣習の力は容易に動かすことが出來ない。親

族間の結婚に關しては、高麗時代以前に於ては無制限であつたが、李朝になつてから、續大典に、『郷貫異ると雖姓字同じければ則ち婚娶するを得ず』との規定あり、儒教思想の同姓不婚の掟を守り、同族たること明白なる者は勿論、縱令その明白でない者でも、同一姓號を有する者は婚姻を爲さざることになつて居る。たゞ安東の金・權二姓は歴史上同祖の族であるけれども、偶々姓字の同じからざる爲めに婚姻を避けざる慣習になつて居るが、また異姓の間に於ても、延安の車氏と文化の柳氏の如きは、元來が男系の血族であり、賜姓によりて他姓を稱するに至つた關係上、婚姻を爲さないことになつて居る。婚姻は主婚者即ち本人の父、祖父、若くは父も祖父もなきときは兄(皆なきとは伯叔父その他の親族)が婚約を爲し、敢て本人の意思を問はざるの慣習あり、斯くの如き不自然なる強制結婚の結果は種々の弊害を醸成して居る。男子には往々再婚を爲すの事例あり、續大典に、『士太夫妻の死亡したる者は三年の後改娶す、若し父母の命により或は年四十を過ぎて子無き者は期年後改娶するを許す』との規定もあるが、朝鮮の社會では男子が蓄妾を爲すの風習多き爲め、他に比すると再婚は尠いやうである。然しながら女子は李朝世宗の時代に再嫁の禁あり、開國五百三年の議案に於ては、『寡女の再嫁は貴賤を論ぜずその自由に任す』と規定し、爾來女子の再嫁を許すことゝしたけれども、今尙ほ再嫁を賤む慣習あり、殊に中流以上の家庭に於てはこれを爲さざることになつて居る。

朝鮮の結婚慣習に就いては述ぶべきことが多いが、茲には統計的研究に止め、併合後に於ける結婚、離婚、配偶數を内鮮外人別に觀察し、その人口一萬人に對する結婚、離婚數を比較して見やう。

結婚離婚及び年末配偶數

年次	内地人			朝鮮人			外國人		
	結婚	離婚	年末配偶數	結婚	離婚	年末配偶數	結婚	離婚	年末配偶數
明治四十四年	七八〇	一三一	四二,三九一	八五,六三二	五,六三二	?	?	?	?
大正元年	八〇五	九五	五二,一三一	一一,一九三	九,〇九八	?	?	?	?
同二年	一二四六	一八二	六二,一六〇	一三一,四九五	九,九一五	三,八〇五,三六二	?	?	?
同三年	一二五	一五一	六六,三〇五	一一五,七三五	八,九七六	三,七四四,八〇三	?	?	?
同四年	一,五八四	二二四	六九,三四三	一〇二,三三七	七,九九五	三,七四九,八六八	一〇	二	六五六
同五年	一,八七六	二七六	七四,一六三	一二六,九一八	九,七六一	三,八一〇,八八四	四	三	八三三
同六年	一,七三三	二四五	七二,三〇二	一二六,四〇六	一〇,五四二	三,八九三,六七一	二二	二	九七六
同七年	二,二三〇	二四八	七三,三五三	一四三,九八〇	一〇,四九八	三,九一八,〇九〇	四	一	一,三七二
同八年	六六三	二〇七	七二,七五九	一四三,〇九八	九,七七七	四,三八〇,九九五	八	一	一,〇一四
同九年	六四三	七一	七二,三九七	一四一,二二二	七,九八二	四,三七七,二六四	五	二	一,二六〇
同十年	七四七	六九	七六,四三一	一五五,五九一	七,二二二	四,四四〇,二三八	五	一	一,四四九
同十一年	八七五	一〇四	七八,七九一	一九三,九一八	七,二八四	四,四七七,六三三	一	一	一,七〇九

朝鮮の人口現象

二九四

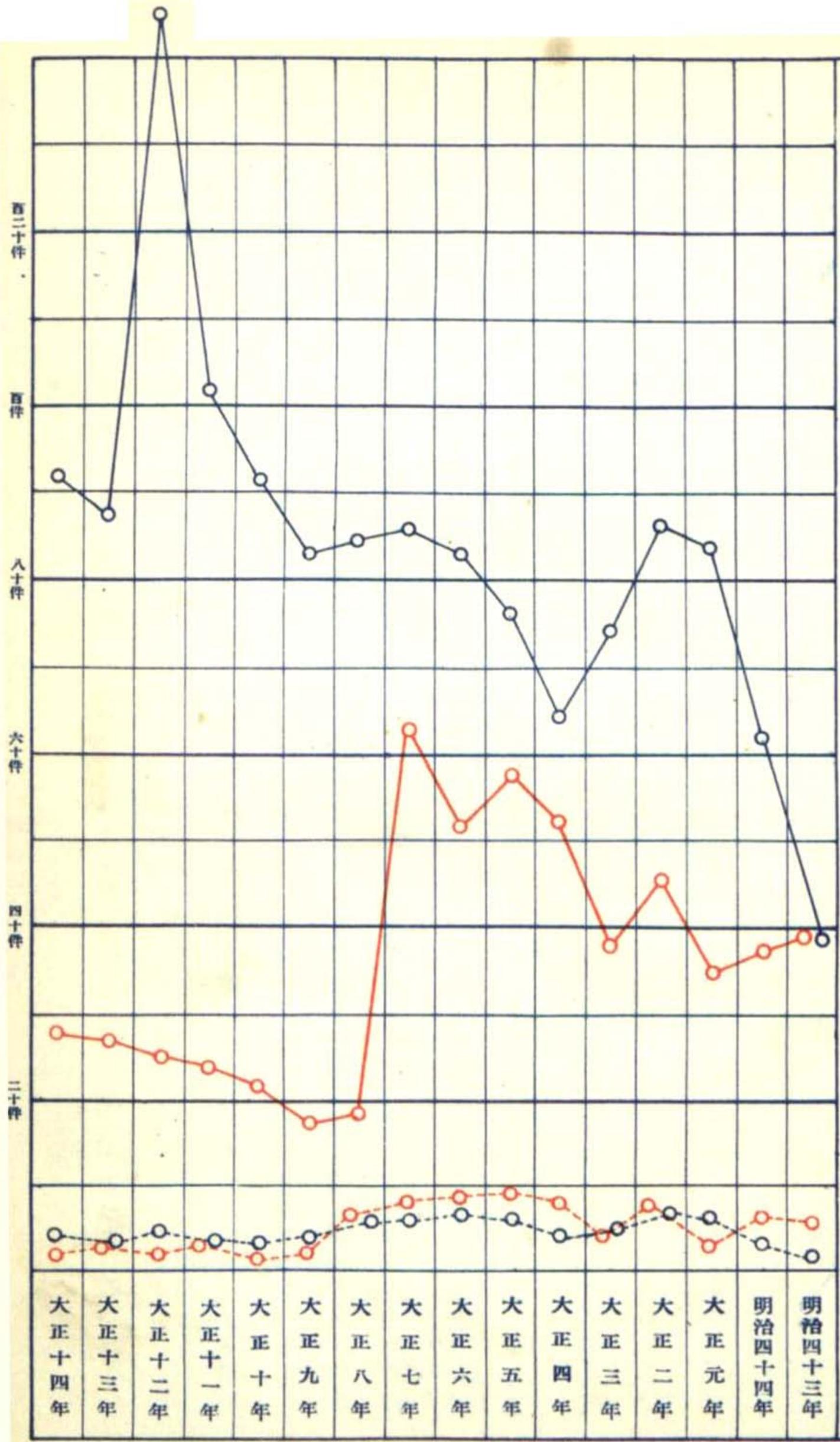
人口一萬に對する結婚及離婚婚數

年種別	内地人			朝鮮人			外國人		
	結婚	離婚	婚	結婚	離婚	婚	結婚	離婚	婚
明治四十四年	三七〇	六二	六一九	四二	?	?	?	?	?
大正元年	三三〇	三九	八三七	六二	?	?	?	?	?
同二年	四五九	六七	八六七	六五	?	?	?	?	?
同三年	三八七	五一	七四二	五七	?	?	?	?	?
同四年	五三二	七〇	六四〇	五〇	五八	一三	?	?	?
同五年	五八五	八六	七七八	六〇	三二	一七	?	?	?
同六年	五一八	七四	八二二	六三	二五	二	?	?	?
同七年	六三二	七三	八六二	六二	一七	一	?	?	?
同八年	一九一	六〇	八五三	五八	四〇	一	?	?	?
同九年	一八五	三〇	八三四	四七	二〇	〇八	?	?	?
同十年	三〇三	一九	九二二	四二	一九	一	?	?	?
同十一年	三二六	二七	一二七	四二	一九	一	?	?	?

同十二年	九八	九一	八二八六四	二五八一六七	八七九七	四、四五〇、八五九	一	一	一九二〇
同十三年	一二三	二九	八四、四六九	一五四、八〇九	七〇四一	四、四三二、五三四	三	三	一、六七八
同十四年	二一六	一〇一	九二、〇五三	一六九、九六四	七、六〇七	四、六五四、七三六	八	一	二、八七八

# 結婚及び離婚比率表

(人口一萬に付)



—○— 内地人結婚  
- - -○- - - 内地人離婚  
—○— 朝鮮人結婚  
- - -○- - - 朝鮮人離婚

同	十二年	三三〇	二・三	一四八・〇	五・〇	〇・三	一
同	十三年	二七三	三・一	八七九	四・〇	〇・八	〇・八
同	十四年	三七九	二・四	九一七	四・一	三・一	一

右の統計に據ると、人口數に對する結婚率は朝鮮人が内地人に對して遙かに多いが、これは土着人と移住者との境遇の相違に基くことが多いものと思はれる。人口數に對する離婚率は朝鮮人の方が稍高いが、一方結婚率と離婚率とを對比するに、内地人の方が朝鮮人より離婚の割合が遙かに高くなつて居る。朝鮮に於ては古來法律上及び慣習上離婚は容易でなかつたので、自然内地人よりは朝鮮人の方が離婚率は低いが、これを以て直ちに男女道德の標準と爲し、家庭圓滿の結果なり、と斷ずるは早計である。結婚に就いて當事者の意思を尊重せず、家長の專斷を以て強制結婚が行はれ、而して離婚を爲すの自由を殆んど與へられざりし累代の慣習の力は、司法制度の改正により妻に離婚の請求權を認めた今日と雖も、妻をして不利の地位に立たせて居る場合が多い。斯くの如き夫婦關係に於ては、表面同棲を餘儀なくして居ても、夫婦間に愛情なく、常に不和衝突を起し、或は年長の妻が夫の幼弱の爲め性慾の満足を得ずして、中には姦通を爲し、若くは煩悶の極遂ひに自殺する如きものあり、甚だしきは本夫殺しの慘虐を敢てし、この種の戦慄すべき事件が頻々として新聞紙上に現はれて居る。

朝鮮に於ける結婚及び離婚の趨勢は略ぼ説明したが、更に朝鮮人のみに就いて、各道別の結婚及び離婚狀況に關して考察して見たいと思ふ。大正十四年に於ける朝鮮の現住朝鮮人一萬人に對する結婚數は九一・七、離婚數は四・一にして、これを内地に於ける同年の現住人口一萬人に對する結婚數八七・三、離婚數八・七に比較するときは、結婚率に於て高く、離婚率に於て低くなつて居り、年に依りて多少の消長はあるが、この數年間大體に於てこの傾向を持續して居る。今試みに現住朝鮮人一萬人に對する各道別の最近五箇年に於ける結婚及び離婚數を見ると左の如くなつて居る。

現住朝鮮人一萬人に對する結婚及び離婚數五箇年對照

道名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年	
	結婚	離婚	結婚	離婚	結婚	離婚	結婚	離婚	結婚	離婚
京畿道	一〇一・八	五・七	一三六・五	五・六	一三四・五	五・五	八五・二	五・一	九三・三	五・〇
忠清北道	六九・三	二・一	二五・三	二・六	一九・七	五・九	六四・六	三・一	八三・八	二・一
忠清南道	七九・二	三・四	一三七・一	四・〇	一五〇・一	四・五	八五・四	三・一	九一・〇	二・八
全羅北道	五七・五	三・一	八七・六	一・七	一六〇・三	二・七	六七・九	二・二	六三・三	三・四
全羅南道	六五・九	四・六	九〇・八	五・〇	一七九・四	八・七	五四・三	三・四	六二・四	四・〇
慶尙北道	八六・三	二・三	一二三・三	二・七	一六五・四	三・二	一〇七・四	三・二	九八・七	三・三
慶尙南道	九六・九	四・六	一二三・五	四・九	一三五・四	四・八	八六・四	四・一	八三・九	四・一

黃海	道	八八九	七四	一五四	六八	一四・三	六七	九二八	七〇	九二七	六八
平安	南道	一三三一	一〇六	二六六	九一	一四・一	八七	一一〇八	八八	一一〇三	八五
平安	北道	一〇五四	三〇	二四四	三一	一六・三	三六	九六七	三七	一一〇・一	四二
江原	道	八九八	三一	二六〇	二八	一三・八	三九	九七三	三一	一〇一七	三三
咸鏡	南道	二二六	三四	一一四	三五	二九・〇	三九	一〇〇七	三六	一一四・二	四・〇
咸鏡	北道	一〇三七	一〇	八九六	〇九	九九七	〇八	九九八	〇九	九六六	〇・五
平	均	九二二	四・二	一一二・七	四三	一四八・〇	五・〇	八七九	四〇	九二七	四・一

大體に於て地理的に觀察すると、南鮮地方よりは西北鮮地方が結婚數が多くなつて居る。また結婚數の多い年は離婚數も多く、結婚數の多い地方は離婚數も多いのであるが、離婚の總數に於ても、結婚數に對する離婚數の割合に於ても、黃海道と平安南道は他の諸道に比して著しく離婚率が高くなつて居る。これが原因に關しては尙ほ研究の餘地があるが、これ等の地方が他道に比し、文化、經濟、人情、風儀、犯罪などに於て劣つた所が多い爲めであるまいか。或る人はこの地方の人心の殺伐を舉げ、或る人は賣買婚や奪略婚の遺風に囚るのでないかと説き、或る人は民族の見地より、この地方の住民の多數は他の朝鮮民族と異り、その祖先が遼東半島や中部支那地方の移住民であるに基くと述べて居るが、離婚率の多少は複雑なる原因に依るのであるから、斯くの如く端的に論斷することは妥當でないと思ふ。

翻つて結婚數の多少と經濟狀態の關係を見るに、大體に於て、經濟狀態の良好なる年には結婚數が多いやうである。朝鮮の經濟は農業が大部分を占め、人口の約八割が農民である關係上、經濟狀態の良否は農業の豊凶に依りて測定されるが、殊に農産物の大宗は米であり、朝鮮人の經濟力を最も明白に示すものは市場取引高であるから、この二者と結婚數の消長とを比較對照するときは、景氣不景氣と結婚の關係を自ら知ることが出來やう。一年を通じて見ても、米の收穫されたる秋季以後に於て、結婚の多いのは内地も朝鮮も同様であるが、内地の經濟は農業以外の産業が漸く發達して來たので、朝鮮の如く經濟力を簡單に測定することは困難である。右の如く朝鮮に於ける現任朝鮮人の結婚數は、米産額や市場取引高の多少と略ぼ消長を同うして居るが、離婚數の多少は、斯くの如き經濟原因には伴つて居らぬ。即ち離婚の多少は他の原因に基くことが多いことを認めねばならぬ。

現任朝鮮人結婚、離婚數と米産額、市場取引高比較 (大正五年を100とせる指數)

年次	米産額	市場取引高	結婚數	離婚數
大正五年	1000	1000	1000	1000
同六年	99	113	106	105
同七年	110	111	111	103

同	八	年	九一	三〇七	一一〇	九七
同	九	年	一〇七	二〇三	一〇七	七八
同	十	年	一〇三	二一九	一一七	七〇
同	十一	年	一〇八	二二二	一四五	七〇
同	十二	年	一〇九	二三五	一九〇	八三
同	十三	年	九五	二六四	一一三	六七
同	十四	年	一〇六	二八八	一一八	六八

備考 米産額は數量、市場取引高は金額を採りたり、従つて市場取引高は物價の高低に因り左右されたる所多く、必ずしも米産額の多少と一致せざることを示し居れるも、實際に於ては米産額と市場取引高は高低その軌を同うするを普通とす。

## 第二節 離婚の原因

朝鮮に於ては古來妻に對し七去三不去の制あり、一に子なきこと、二に淫佚なること、三に舅姑に事へざることを、四に多言なること、五に盜竊を爲したること、六に妬忌の癖あること、七に惡疾あることを、七去の原因とし、一に父母の喪を経たる場合娶るとき、二に娶るとき貧賤にして後に福貴となりたる場合、三に歸るに家なき場合を、三不去の原因とし、明律に於ては明かにこれを認め、刑法大全に於ては、子なきこと及び妬忌の癖あることを除きたる他の離出原因を認め、同時に三不去の原因

をも認めて居る。然るに朝鮮民事令改正前に於ける慣習としては、不品行なること、祖父母、父母等その家に在る夫の直系尊屬に従順ならざること、盜癖あることを以て、妻を離出する原因とし、夫の意思に依り妻を離出することを認めて居るが、妻の意思に依る離婚に就いては、従前に在りては妻は夫に對して離婚を求むることを得なかつたのである。然るに漸次止むを得ざる場合に於て妻の意思に基く離婚を認むるに至り、夫に遺棄せられたるとき、又は夫が自己の直系尊屬に對し甚だしき侮辱を與へたること等の原因あるときは、妻より離婚を求むることを得るに至つたが、官廳に願出で、離婚を求むるが如き方法は舊來の慣習には全く存しなかつたのである。それが時勢の變遷により民事令改正の行はるゝ數年前より、協議上の離婚は勿論、正當の理由あるときは、夫妻の一方より裁判所に對し離婚の請求を爲し得ることになつて來たのであるが、尙ほ何百年來の舊慣の力は依然として強く、民事令改正後の今日と雖も離婚を容易ならしめざる状態に在る。離婚の原因に就いて最近の調査資料を有しないことは遺憾であるが、朝鮮民事令改正案の參考資料として、舊慣調査委員會審査書に誌す所に據ると、明治四十一年より大正十年に至る十四箇年間の調査では左の如くなつて居る。

## 離婚原因種別件數表

(自明治四十一年  
至大正十年)

原因	事件数	原因	事件数
重婚	三九	交接不能	三九
妻の姦通	三七	性行不良	三九
夫の姦淫罪	五	盜癖	六
破廉恥罪	三六三	貧困	一四
虐待侮辱	一、一八八	氣質不合	四
惡意遺棄	四七一	破廉恥罪以外の犯罪	六
直系尊屬より虐待侮辱	四一	妻の實女と姦淫	一
直系尊屬に對し虐待侮辱	一〇三	夫か刑事被告人として拘留せらる	二
生死不明	二五三	夫の不具又は病氣	一一
精神病	一三	婚姻申告提出せず	二
癩病	一〇	連子の婚嫁を夫顧みず	一
夫の僻地移住に同行を欲せず	一	合計	二、六五〇
姦通罪の懲役満期出獄するに夫迎へず	一		

備考 一、本表は既済事件に付調査す。

右の統計に據ると、離婚原因中の最も多きは虐待侮辱の四割五分にして、これに亞ぐは惡意遺棄の一割八分、破廉恥罪の一割四分、生死不明の一割であるが、早婚に基く原因も亦尠くないやうであ

る。大正六年三月の「朝鮮彙報」に、時の朝鮮總督府司法部長官國分三亥氏が、「朝鮮婦人の本夫殺罪」と題して發表した論文は、朝鮮に於ける結婚制度の缺陷と、その因つて來る弊害、及び朝鮮婦人の性質等を最も明快に列舉論斷して居る。試みにその梗概を左に述べて見やう。

明治四十四年より大正四年に至る五年間に本夫殺の罪を犯し、これによりて處刑せられたる朝鮮婦人は全道を通じて百二十八名あり、これを年次別にして見ると、明治四十四年に二十五件、大正元年に二十五件、同二年に二十八件、同三年に二十五件、同四年に二十五件となつて居る。内地に在りては本夫殺犯罪の發生は極めて稀有のことに屬するが、朝鮮婦人の本夫殺犯罪は頗る多數に上つて居る。即ち朝鮮婦人の犯罪率を内地婦人に比較すると、一般刑法犯は五倍七分の多さに達し、殺人犯は一倍三分餘に當つて居る。また姦通罪に付朝鮮婦人の犯罪數を比較するに、朝鮮婦人の新犯數は内地婦人の犯したる總數の三倍以上に在り、これを既婚婦人の人口に比例して割合を算出せば七倍以上となり、驚くべき多數なることが發見される。

朝鮮婦人猥褻罪比較

朝鮮婦人の別		刑法犯總人員	猥褻罪總人員	刑法犯總人員に對する猥褻罪割合
内地	人	二〇、四七七	三、九四	〇・〇二
朝鮮	人	三、三六八	一、三四五	〇・〇四
自明治四十四年				
至大正四年				

備考 本表は禁錮以上の刑に處せられたる者のみを計上せり。

### 有夫の内鮮婦人猥褻犯比較

内鮮婦女の別	大正二年末現在 有夫の女子人口	大正二年中 猥褻犯總人員	有夫の女子十萬人に 對する猥褻犯の割合
内地人	九一四、七七	八二	〇・八九七
朝鮮人	三、八〇五、三六一	二五〇	六・五七〇

次に右の朝鮮婦人本夫殺犯罪者を各地方に分類し、且つ各道有夫婦女との比例を見ると左の如き結果を呈し、黃海道を最多とし、平安南道・江原道・京畿道・忠清北道これに亞ぎ、大體に於て文化未開の地方に多きことを斷定し得るであらう。

### 朝鮮婦人本夫殺地方別表

道別	有夫の(大正四年末) 朝鮮人數(現在)	自明治四十四年 至大正四年 犯罪數	有夫の朝鮮人十萬人 に對する犯罪割合
京畿道	三六一、八一	一三	三・五九
忠清北道	一五六、四六七	五	三・三〇
忠清南道	二三八、一〇	六	二・五二
全羅北道	二五七、八二四	五	一・九四
全羅南道	四〇八、六二四	六	一・四七

朝鮮の人口現象

慶尚北道	四四九,四二五	一〇	二,三三
慶尚南道	三五二,六八二	五	一,四一
黄海道	三九一,六六六	三三	一〇,三三
平安南道	二五六,四六八	一四	五,四六
平安北道	二九九,二〇四	八	二,六七
江原道	二六九,四六〇	一三	四,八一
咸鏡南道	二七二,二五四	八	二,九五
咸鏡北道	一〇七,八四三	二	一,八五
計	三,七四九,八六八	二二八	三,四二

右の犯罪が如何なる手段によりて行はれたるかを觀察するに、左記の如くにして、その方法甚だ幼稚なると同時に、頗る慘酷なることを認め得べく、以て朝鮮婦人の智能未だ發達せず、且つ殘忍の性を帶ぶることを斷定するの材料となると思ふ。

朝鮮婦人の本夫殺方法

手段區別	所犯數	所犯數内譯	
		既遂	未遂
毒殺	七二	一七	五五
斬殺	二八	一六	一二

絞殺	一八	一三	五
撲殺	四	三	一
燒殺	二	一	二
その他	四	一	四
計	一二八	四九	七九

前表に據れば、毒殺最も多數を占め、毒殺七十二中の三十五は洗濯用の苛性曹達を飲用せしめたもので、毒殺中苛性曹達に次ぐは亞砒酸の使用十六にして、この外にストリキニーネ使用七、阿片使用四あり、黃燐または毒草を用ゐたものも若干ある。絞殺、斬殺、撲殺、燒殺等に付實行の状況を見るに、手斧、棍棒等を以て無數の創傷を負はし、または温突内に閉ぢ込めて家屋と共にこれを燒殺せんとし、或は接吻を求めて舌根を嚙切らんとし、若くは煮沸したる油を耳孔に注ぎ入れんとしたる類あり、その心事慘酷殘猛を極め、これが手段は幼稚拙劣である。

右の本夫殺犯罪者百二十八人に付その犯罪原因の統計を示すと左の如くにして、本夫以外の男との性交に基因するもの最大多數を占め、姦通七十五、婚姻前の私通五、總計八十名に達し、實に犯人總數の六割二分五厘に當り、前に述べた姦通犯者の多數なること、併せ考ふるときは、朝鮮婦人間の風儀頹廢し放縱淫逸に流るゝ者の尠くないことが知られる。また本夫殺の犯罪原因中、夫の幼弱にして

情慾を満たす能はざるを慥たらずとせる者、若くは犯人自身の心神發達せずして實家に復歸せんと欲する者あるは、いづれも朝鮮人に早婚の風ある一例證となし得べく、夫の年齢、性質、健康等に不満を懐ける者の如きは、鮮人間の婚姻制度の未だ發達せず、婚姻が家長主宰の下に行はれ、當事者たる本人は配偶者の選擇に付殆んど無關係なる事實を裏書するものである。

朝鮮婦人本夫殺原因別 (自明治四十四年 至大正四年)

- 一、姦通の結果
  - 七〇 姦夫と同棲の目的を以て
  - 五 本夫と同棲を嫉忌し
- 二、婚姻前私通せる結果
  - 三 情夫と同棲の目的を以て
  - 二 本夫と同棲を嫉忌し
- 三、夫の虐待又は無情を恨み
  - 一九 他に改嫁せんと欲し
  - 四 容貌の醜惡なるを厭ひ
  - 九 離婚を求むるも得ず
- 四、夫の魯鈍、年長、貧賤、病弱又は容貌の醜惡なるを厭ひ
  - 二 且つその虐待を憤り
  - 三 他に改嫁せんと欲し
- 五、夫幼弱にして情慾を満たす能はず
  - 二 夫を殺害せば實家に歸り得べしと思惟し
  - 八 夫を殺害せば實家を慕ふの餘り夫を殺害せば實家に復歸し得べしと思惟し

七、夫の病毒を感染しその身の不幸を悲み夫を殺害し自己も亦自殺するに如かずと思惟し 一

備考 本表一、二の中、姦夫等と共謀して罪を犯したる者四十八名、單獨犯罪者三十二名なり。

本罪囚中現に監獄に拘禁せられて服役中の百四名に就いて見るに、犯人の性質は良好（温順又は伶俐）と認むべき者は總數の二割二分強に過ぎず、他は放縱、多情、怠惰等の不良者にしてその割合は七割八分弱を占む。

温順	三	伶俐	二	多情	三
放縱	三	疎放	六	怠惰	六
偏狹	四	猜惡	四	愚鈍	八
陰險	七	狡猾	二	強慾	一

また右の本夫殺刑囚百四名に就いて、その教育の程度を比較するに、殆んど全部無教育の者によりて犯さるゝことが窺はれる。

基督學校二年終了の者	一
僅に諺文を解し得る者	一七
全く教育なき者	八六

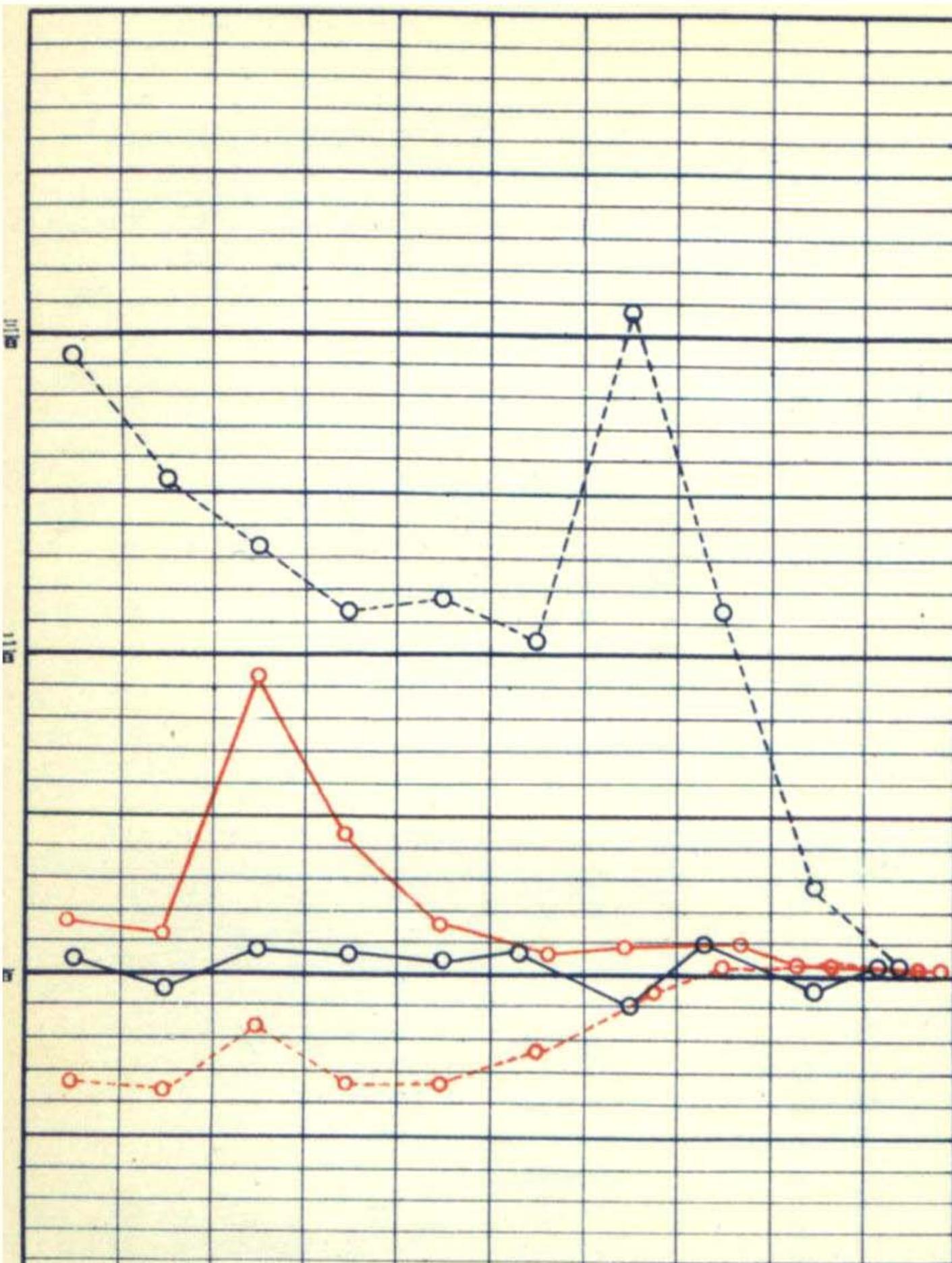
右の外、國分氏は犯人の年齢、生活状態、婚姻關係、本夫の性質素行等に亘り詳細に研究して、朝

鮮夫人の本夫殺犯罪に就き、左の結論を下して居るが、大體に於て正鵠を得た觀察と認められる。

- 一、内地婦人に比し犯罪率著しく高きこと
- 二、文化未開の地方に犯罪多きこと
- 三、犯罪の手段幼稚慘酷なること
- 四、犯罪者は下流貧賤者なること
- 五、犯罪者は無教育なること
- 六、犯罪者は概ね智能十分ならざること
- 七、犯罪者及びその夫は一般に性質不良の者多數なること
- 八、犯罪者の多數は性質殘忍癡猛なること
- 九、犯罪の原因には同情を寄すべきもの尠きこと
- 十、婦女子の間に淫風の盛んなること
- 十一、早婚の風あること
- 十二、婚姻は父兄の意思のみに依りて成立するもの多數なること
- 十三、離婚を許さざる慣習に伴ふ弊害の存すること

# 結婚、離婚數と米産額、市場取引額の比較

大正五年を百とせる指數を以つて表す  
 ○結婚 ○離婚 ○米産額 ○市場取引額



大正十四年	大正十三年	大正十二年	大正十一年	大正十年	大正九年	大正八年	大正七年	大正六年	大正五年
-------	-------	-------	-------	------	------	------	------	------	------

### 第三節 結婚年齢

朝鮮に於ける婚姻制度には幾多の缺陷があるが、就中その早婚の弊害は著しいものである。試みに男女の結婚年齢が如何になつて居るかを観察すると、併合後間もなき大正元年に於ては左の如くなつて居る。

朝鮮人結婚年齢別調 (大正元年)

妻の年齢	夫の年齢		計
	未滿	滿二十歲以上	
滿十五歲未滿	一四、二七九	五四、三七七	一四〇、九
滿十五歲以上	三〇、七〇一	二〇、一九六	七九、三六八
滿二十歲未滿	五、九一七	六三、九七七	四九、九五
滿二十歲以上	九四三	二、三三三	三、〇四一
滿廿五歲未滿	一一一	二四八	八〇二
滿廿五歲以上	一八	四六	一五七
滿卅五歲未滿	四	九	一七四
滿卅五歲以上			三五四
滿四十歲未滿			七二七
滿四十歲以上			四三三
滿五十歲未滿			一一六
滿五十歲以上			一八七五
計	一一、五七四	二二、五六四	三〇、九



滿廿五歲以上	一六七	一〇五一	一八八六	四〇三三	一七六〇	九三五	五〇八	九二	一三	一〇四三三
滿三十歲未滿										
滿卅五歲未滿	三三	一七〇	二七九	四九七	一、四〇〇	六四四	四七五	一三三	二〇	三六七八
滿卅五歲以上										
滿四十歲未滿	六	二九	五二	一〇四	二六六	六六一	三三六	二四	一九	一五九九
滿四十歲以上										
滿五十歲未滿	三	七	一二	二〇	四三	一〇八	三七九	一五三	五〇	七七五
滿五十歲以上										
滿六十歲未滿	一	一	一	四	二	九	四一	一〇三	二五	一八五
滿六十歲以上										
總計	一、三四五	六、三四九	四七、三二九	二七、〇三四	一、四〇一	四九、三一一	二、五六四	七二二	一九九	一七、〇六六

これを大正元年の事實と對比すると、近來時勢の變遷に伴ひて、早婚の風は多少改められたことは認められる。即ち大正十四年に於ては、結婚總數十七萬一千六十六中、妻の年齢十五歲未滿の者は一萬一千六百六十四にして、總數に對し六・八%となり、妻の年齢十五歲以上二十歲未滿の者は十萬二千五百三十八に達し、總數に對し五九・九%に當つて居る。また夫の年齢十七歲未滿の者は一萬三千四百十五にして、總數に對し七・八%となり、夫の年齢十七歲以上二十歲未滿の者は六萬三千五百四十九の多きを占め、總數に對し三七・一に當つて居る。これに據つて見ると、多少早婚の弊も改められつゝあり、夫の年齢より妻の年齢なる者の數も幾分少くなつて來て居る。社會の進歩に伴ひ、朝鮮人の結婚状態は次第に改良しつゝあることを看取されるが、尙ほ早婚と強制婚の事例は甚だ多く、依



## 第四節 内鮮人の通婚

以上は朝鮮に於ける結婚及び離婚に就いて述べたのであるが、茲には内鮮の結合上に最も力ある朝鮮人と内地人との配偶状況に關して調査した所を記して見たいと思ふ。内地と朝鮮とは歴史的にも地理的にも古來密接の關係があつたので、互ひに通婚した實例は尠くなかつたやうであるが、遠い過去のことはこれを明かにする資料を有しない。また日清戦争前後から日韓併合頃までの間に於ても、内地人と朝鮮人の内縁關係を結んだものが相當にあるやうである。また今日に於ても内地在住の朝鮮人男子や朝鮮在住の内地人男子が、或は内地女と或は朝鮮女と、一時的内縁生活して居る者も尠くないが、これに就いては正確な調査は出来ない。今試みに最近に於ける朝鮮人と内地人との配偶者數を見るに、大正十四年末現在に於て四百四組を算するが、この内三十三組は大正十四年中に結ばれたものである。而してその種類別は左の如くなつて居る。

内地人にして朝鮮婦人を娶つた者	一八七組
朝鮮人にして内地婦人を娶つた者	一九七組
内地人にして朝鮮人の家に入婚した者	一組
朝鮮人にして内地人の家に入婚した者	一九組

尙ほ調査開始の大正元年以來の累年狀況を觀るに、

大正元年末	一一六組	大正六年末	一一一組	大正十一年末	二二七組
同 二年末	一一四組	同 七年末	一一五組	同 十二年末	二四五組
同 三年末	七九組	同 八年末	六八組	同 十三年末	三六〇組
同 四年末	七六組	同 九年末	八五組	同 十四年末	四〇四組
同 五年末	一四九組	同 十年末	一二四組		

即ち大正元年に於て百十六組であつたものが、同三、四年には七、八十組臺に減少し、その翌五年には一躍百四十九組に激増し、またその翌年より漸減の歩を辿りて、大正八年には六十八組に激減したが、同九年には稍増加し、爾後逐年増加の趨勢を示し、大正十四年には四百四組といふ數字を示すに至り、これを調査開始の大正元年に比するとその數は殆んど四倍に近くに増加を見たのである。而して斯かる累年の増減狀態は、その時々々の社會事情殊に時代思想に密接なる關係を有し、その支配を受くることの少くないのは、推測するに難からざる所である。

更に大正十四年末の配偶狀況を地方別にして觀ると左表の如くである。

京畿道	八五組	全羅北道	二二組	慶尙南道	七三組
忠清北道	一一組	全羅南道	三三組	黃海道	一二組
忠清南道	二五組	慶尙北道	四一組	平安南道	二五組

平安北道	二七組	咸鏡南道	二五組	合計	四〇四組
江原道	一二組	咸鏡北道	一四組		

即ちその數は京畿道最も多く、慶尙南道が第二位、慶尙北道これに亞ぎ、最も少いのは忠清北道である。今これを内地人の各道別分布と對照して觀ると、大體に於て内地人の人口順位に準ずるもの、如くであるが、平安南道のみは必ずしもその例に従はず、該道人口順位は第四位に在るが、配偶數は第六位にある。また京畿道を界としてこれを分ちて觀れば、南方に多く、北方に少ないのである。

次に大正十四年末現在の配偶數に就き、これを職業別にして示すと、

農業、林業、牧畜業	三六組	公務及自由業	一一二組
漁業及製鹽業	一四組	其他の有業者	三三組
工業	五三組	無職及職業を申告せざる者	一一組
商業及交通業	一四六組	合計	四〇四組

となり、商業及び交通業に最も多く、公務及び自由業これに亞ぎ、その多きものは現任内地人の職業別に準じて居る。朝鮮人の人口職業別に於て最も多き農業・林業・牧畜業は第三位を占めて居る。尙内地人と朝鮮人の配偶者數及び其の職業別の詳細は左表の如くである。

#### 内地人と朝鮮人との配偶者數



末	年		
	咸鏡北道	咸鏡南道	江原道
合計	三七一	一七二	一八
	一四	二五	二二
	九	一八	七
	五	五	五
	一三	二	一
	一	一	一

内地人と朝鮮人との配偶者職業別 (大正十四年末現在)

總數 内地人にして朝鮮婦人を娶りたるもの 朝鮮人にして内地婦人を娶りたるもの 朝鮮人にして内地人の家に入婿したるもの 内地人にして朝鮮人の家に入婿したるもの

職業	總數	内地人にして朝鮮婦人を娶りたるもの	朝鮮人にして内地婦人を娶りたるもの	朝鮮人にして内地人の家に入婿したるもの	内地人にして朝鮮人の家に入婿したるもの
總數	三七一	一七二	一八	一三	一
農業林業牧畜業等	三五	一七	一八	一	一
漁業及製鹽業	一二	五	四	三	一
工業	五〇	三二	一四	四	一
商業及交通業	一三二	四三	八五	四	一

公務及自由業	一〇四	五九	四三	一	一
其の他の有業者	二八	一二	一五	一	一
無職業及職業を 申告せざるもの	一〇	三	七	一	一

云ふ迄もなく、内鮮人の通婚は民族的結合を鞏固ならしむるもので、内鮮融和の上に、これよりなる力となるものはない。血は水よりも濃しと云ふ諺の如く、兩者の血液が混合するに於ては、一切の境界は撤去される譯である。然しながら結婚のことは、決してこれを外部から獎勵しても好結果を得るものでない。兩者の接近と理解によりて自然にその機會を作り、社會状態、生活様式、思想傾向の相近づき、國語の普及するに従つて、内鮮人の通婚が將來増加することは當然である。今日の所は謂はば試験時代で、その成績は未だ不明であるが、内地人と外國人との結婚など、異り、人種を同し、風俗習慣や、生活方法も比較的接近し易い兩者の結婚が、不成績に終ることは先づあるまいと思ふ。要するに自然の作用と時の力によりて、徐ろに内鮮人の血液上の融合が濃密になつて行くことは疑ひを容れぬが、若し一派の論者の考へるが如く、内鮮人の通婚を以て、朝鮮人の同化政策を行はんとするなどは、遠き將來は知らぬが、先づ既往の事實に徴して、餘りに仰々しき夢想であるまいか。

## 第五章 出生

### 第一節 出生數及び出生率

凡そ人口の増減は、氣候風土の關係、衛生の施設、文化の程度、經濟の状態、宗教、道德、及び慣習の力等、極めて複雑なる原因に依つて異なり、人種により國土によりて各大小がある。されば同一國內に於ても出生死亡狀態には、時代に從ひ地方によりて差異を生ずるを普通とし、一時的原因としては、戰爭の勃發、疫病の流行、天災の慘禍、饑饉凶歲、失業、若くは物價騰貴等に基く生活困難の如き、いづれも出生率、死亡率に直接の影響を及ぼすものである。翻つて朝鮮の出生狀態を觀察するに、遠き過去のこととは正確なる記録を有しないから、これを知るに由ないが、併合當時の明治四十三年に於ける朝鮮在内地人の出生は出生五千三百八人、死産五百六十二人にして、同年の朝鮮人の出生は、出生十七萬五千二百二十一人、死産四千二百三十三人である。それが大正十四年には内地人の出生は男五千三百三十八人、女四千八百五十一人、計一萬百八十九人、死産男三百五十四人、女二百九十七人、計六百五十一人となり、朝鮮人の出生は男三十七萬六千六百二十人、女三十三萬五千六

百五十八人、計七十一萬二千二百七十八人、死産男一千五百七十九人、女一千二百十七人、計二千七百九十六人となつて居る。また外國人の出生は男十九人、女七人、計二十六人、死産男二人、女一人計三人である。明治四十三年以降の累年比較を示すと左表の通りである。

現住人口出産數表

年次	區分		出生計		死産計		
	男	女	男	女	男	女	
明治四十三年	内地人	二,八六三	二,四四五	五,三〇八	三〇八	二,五四	五,六一
	朝鮮人	九五,〇六六	八〇,一三五	一七五,三三一	二,二八七	一,九四六	四,二三三
	外國人	不詳					
同四十四年	内地人	九七,九四九	八二,五八〇	一八〇,五二九	二,五九五	二,二〇〇	四,七九五
	朝鮮人	二,七六五	二,六二九	五,三九四	三七二	三〇	六八二
	外國人	一四八,四四七	二九,〇二六	一七七,四七三	二,七八三	二,四六〇	五,二四三
大正元年	内地人	一五,一三二	一三,六五五	二八,二八七	三,一五五	二,七七〇	五,九一五
	朝鮮人	三,六三六	三,一五五	六,七八一	四〇九	三四八	七五七
	外國人	不詳					
大正元年	内地人	二,三三,五七	一,九七,九三	四,二五,〇〇	二,四七八	二,〇七九	四,五五七
	朝鮮人						
	外國人						

第五 章	同 五 年			同 四 年			同 三 年			同 二 年			外 計 國 人
	外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内	
	計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮	
出	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
生	二九六,七九一	二九一,三七七	四,三九五	二二七,二六九	二二一,三三〇	三,三三四	二二五,六三三	二二二,二九二	二,五二六	二四一,九五六	二二五,二〇三	三,七二七	二二七,二四七
	二六四,四七一	二六〇,四四三	四,〇〇九	二〇六,五八二	二〇一,〇八三	三,四七五	二二二,三六二	二〇八,三三一	四,〇三三	二二七,〇三二	二二五,五三三	三,四九三	二〇一,二六一
	五六二,二五四	五五三,八二〇	八,四〇四	四四三,八五一	四三六,四〇三	七,四〇九	四四七,九八五	四三六,六二三	八,三二八	四九九,九八八	四五二,七二五	七,三三〇	四二八,三〇八
	二四八六	二,〇五一	四二九	二,四三八	一,九七一	四六三	二,六九五	二,二七八	四二二	二,七〇二	二,三四八	三五三	二,八八七
	二,三三三	一,八四一	三七五	二,二一七	一,七三三	三六四	二,三二七	一,九八三	三三三	二,五八八	二,二八一	三〇七	二,四二七
	四,七二一	三八九二	八〇四	四,五五五	三七三四	八七	五,〇二一	四,三六一	七四五	五,二八九	四,六二八	六六〇	五,三三四

朝鮮の人口現象

同 十年	同 九年			同 八年			同 七年			同 六年		
	内 地 人	外 計 人	内 地 人	内 地 人	外 計 人	内 地 人	内 地 人	外 計 人	内 地 人	外 計 人	内 地 人	
二七四、四九八	二五五、六〇七	一〇	二五二、二八六	二五二、四四一	二〇	二四八、二三三	三〇四、〇六六	二九六、六五七	一五	三〇一、七四九	二九七、三〇四	
二三四、六二四	三三二、二二六	一五	二七四、三三三	三二一、九七六	二二	二二八、一五二	二七四、五五五	二七〇、五三八	九	二五〇、四三七	二六六、四六八	
五〇九、二二三	四七六、八三三	一五	四六八、七二二	四七四、四一七	四三	四六六、三七五	五七八、五九一	五七〇、一九五	二四	五二七、一七六	五八三、七七一	
一八三七	二〇二、五	二	一六〇、三	二二七、三	四	二〇四、三	二九四、五	二五〇、九	一	二七六、三	二二二、二	
一、五二四	一、七五一	三	一、四四三	一、九八三	一	一、七〇五	二、五七二	二、二二三	一	二、三四六	二、〇〇六	
三、七七一	三、七七六	五	三、〇四五	四、三五六	五	三、七四八	五、五七七	四、七二二	二	五、一〇九	四、三三八	
七〇四	七〇四	五	七〇四	七〇四	五	七〇四	七〇四	七〇四	二	七〇四	七〇四	



朝鮮の人口現象

備考 △印は體性不明のものにして外書とす。

朝鮮に於ける現住人口の出生、死産状態は右の如くであるが、更にその人口千人に對する比率を、内鮮外人別に示して見ると、累年の消長は即ち左表の通りである。

朝鮮現住人口出生率表 (人口千に付)

年次	區分		出生		死産		
	男	女	男	女	男	女	
明治四十三年	内地人	一六六九	一四・二五	三〇・九四	一・八〇	一・四八	三・二八
	朝鮮人	七二四	六・一〇	一三・三五	〇・一七	〇・一五	〇・三二
	計	不詳	六・二二	一三五七	〇・二〇	〇・一七	〇・三六
同四十四年	内地人	一三・三二	一三・四八	二五・六〇	一・七七	一・四七	三・二四
	朝鮮人	一〇・七三	九・三三	二〇・〇六	〇・三〇	〇・一八	〇・三八
	計	不詳	九・三八	二〇・一四	〇・三二	〇・一〇	〇・四一
大正元年	内地人	一四八八	一二・九四	二七・八一	一・六八	一・四三	三・一一
	朝鮮人	一五三四	一三・五九	二八九四	〇・一七	〇・一四	〇・三二
	計	一〇・七七	九・三八	二〇・一四	〇・三二	〇・一〇	〇・四一

第五章 出生	同 五年			同 四年			同 三年			同 二年			外 計 人			
	外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内				
	計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮				
一七八三	一七一	一七九三	一三六九	一四五六	〇八八	一四六一	一四七九	一六九	一四八一	一四七九	一五七二	一五〇	一五七七	一三七二	一五三二	〇八四
一五八九	一一一	一五九七	一三四九	一三六九	一四〇	一三七三	一三三三	一〇五	一三三四	一三八一	一四〇四	〇九八	一四〇八	一三六六	一三三七	〇七八
三三七一	二二三	三三九〇	二二一九	二七二七	二三八	二七三三	二八三三	二四四	二八二四	二八六〇	二九七六	二四八	二八八四	二六五八	二八八八	一六三
〇・二五	〇・五〇	〇・二三	一・三四	〇・二五	〇・三三	〇・二二	一・五二	〇・二七	〇・二五	一・四一	〇・二七	—	〇・二五	一・三〇	〇・一九	—
〇・三三	〇・三三	〇・一一	一・一七	〇・三三	—	〇・一一	一・三〇 (△十萬=付 〇・〇七)	〇・〇六	〇・三三	一・二四 (△十萬=付 〇・三四)	〇・二七	—	〇・二五	一・二三	〇・二六	—
〇・八	〇・八	〇・三四	二・五一	〇・八	〇・三三	〇・三三	二・七一	〇・三三	〇・二七	二・五八 (二・五四)	〇・三四	—	〇・三三	二・四三	〇・五六	—

朝鮮の人口現象

同 十年 朝鮮人	同 九年			同 八年			同 七年			同 六年				
	内 地 計	外 國 計	朝 鮮 人	内 地 計	外 國 計	朝 鮮 人	内 地 計	外 國 計	朝 鮮 人	内 地 計	外 國 計	朝 鮮 人		
													内 地 人	外 國 人
一六〇九	一三七五	一四七八	〇・四〇	二四七二	一〇一	一四七八	一七・八三	一三七八	〇・六五	一七九五	一七七八	〇・六三	一七八九	一三三三
一三七五	一・一五〇	二三八〇	〇・六〇	二・三九四	一・一六	一三〇〇	一六〇九	一・一八一	〇・三九	一六三〇	一五九四	〇・五八	一六〇四	一一八七
二九八四	二四二五	二七五八	一〇〇	二七六六	二二七	二七七八	三三・九二	二四・八五	一〇四	三四・一五	三三・七二	一一一	三三・九三	二五・二一
〇・二一	一・〇三	〇・三	〇・〇八	〇・二四	〇・二〇	〇・二二	〇・一七	一・二九	〇・〇四	〇・一五	〇・一六	—	〇・二四	一・三三
〇・〇九	〇・八九	〇・一〇	〇・二二	〇・二二	〇・〇五	〇・一〇	〇・一五	一・〇七	〇・〇四	〇・二三	〇・一四	—	〇・三	一・〇一
〇・二〇	一・九三	〇・三三	〇・三〇	〇・二五	〇・二五	〇・三三	〇・三三	二・六六	〇・〇九	〇・二八	〇・三〇	—	〇・三六	二・五五

十四年			十三年			十二年			十一年			外
外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内	外	朝	内	計
計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮	計	國	鮮	計
人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人	人
二〇九	〇四〇	二〇三二	二〇四〇	〇五四	二〇六三	二〇九八	〇四六	二二二三	一〇五〇	一七九五	二二九〇	一六〇〇
一七九	〇二五	一八一〇	一七八五	〇五一	一八〇一	一九二三	〇三七	一九四六	〇三四	二六〇七	二一八四	一三六九
三七九九	〇五五	三八四一	三八三三	一〇五	三八六四	四〇三一	〇八三	四〇六九	〇八四	三四〇二	二四七三	二九六九
〇一〇	〇〇四	〇〇九	〇二四	〇〇三	〇〇九	〇一三	〇〇三	〇一〇	〇〇九	〇一〇	一〇一	〇一三
〇〇八	〇〇一	〇〇七	〇一三	〇一	〇〇九	〇一〇	〇〇九	〇〇八	〇〇九	〇一〇	一〇六	〇一
〇一八	〇〇六	〇一五	〇三八	〇二四	〇一九	〇三三	〇一	〇一八	〇一九	〇二一	三二〇	〇三三

備考 一 △印は體性不明のものにして外書とす。

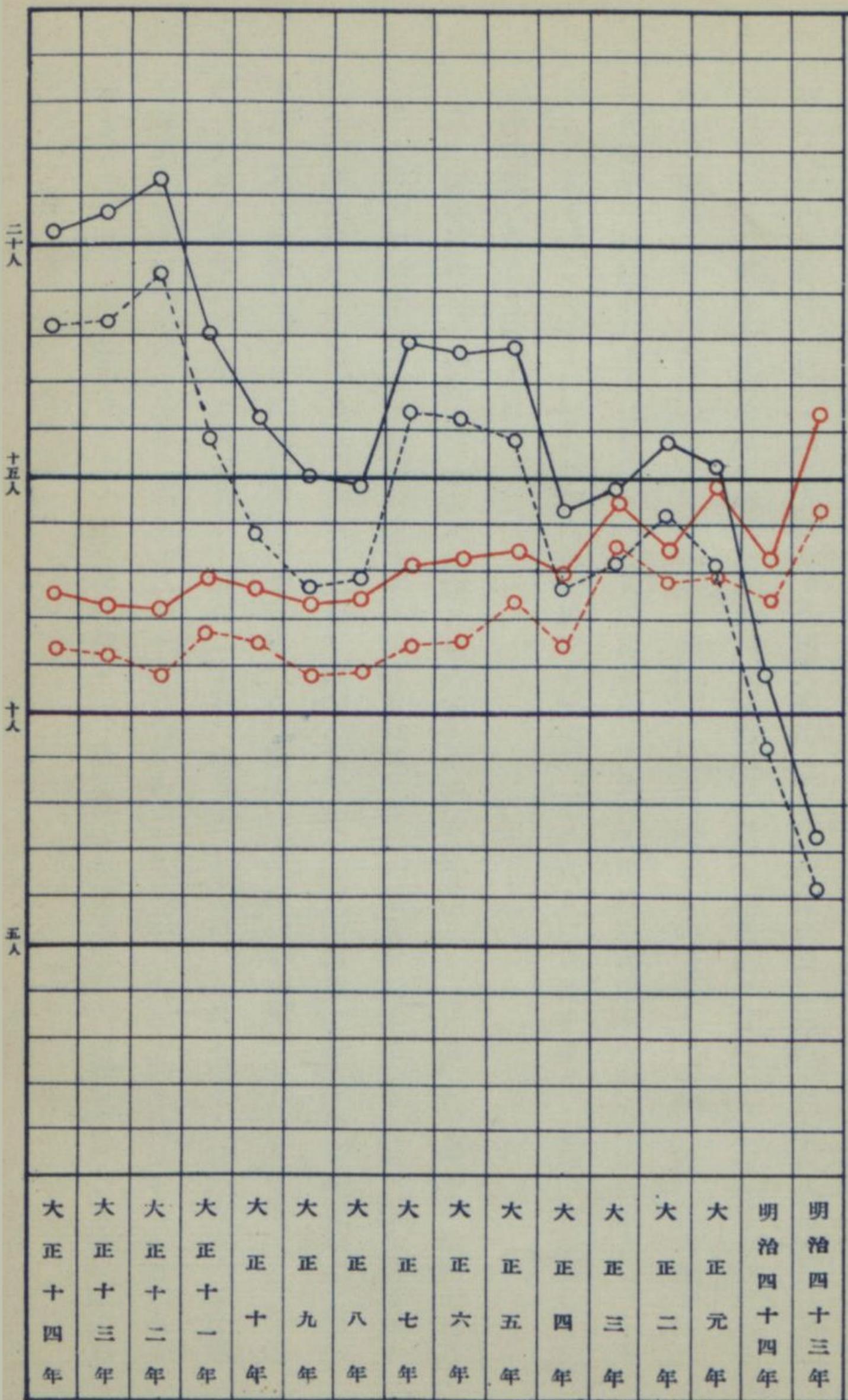
即ち明治四十三年の内地人出生率は、人口千人に付男一六・六九、女一四・二五、計三〇・九四、死産率男一・八〇、女一・四八、計三・二八、にして、朝鮮人の出生率は、男七・二四、女六・一〇、計一三・三五、死産率男〇・一七、女〇・一五、計〇・三二である。それが大正十四年には、内地人出生率男一二・五七、女一一・四二、計二三・九九、死産率男〇・八三、女〇・七〇、計一・五三、朝鮮人出生率、男二〇・三一、女一八・一〇、計三八・四一、死産率男〇・〇九、女〇・〇七、計〇・一五、外國人出生率、男〇・四〇、女〇・一五、計〇・五五、死産率男〇・〇四、女〇・〇二、計〇・〇六である。明治四十三年より大正十二年までは、大體に於て内地人の出生率は多少減退の傾向を示し、朝鮮人の出生率は著しく増加を來して居る。然るに大正十三年以後はそれと反對に、内地人の出生率は増加し、朝鮮人の出生率は減退を示して居るが、外國人の出生率は増減不同である。最も注目すべきは、各年を通じ出生率に於て内地人に比し朝鮮人の方が遙かに高いこと、死産率は内地人が最も高く、朝鮮人及び外國人は遙かに低いことであるが、概して死産率は近年漸減の傾向を辿つて居る。

内地に於ける大正十四年の出生率は人口千人に付三四・九二人であるから、朝鮮に於ける同年の出

# 出生率比較表

(人口千に付)

○ 内地人男 ○ 内地人女  
○ 朝鮮人男 ○ 朝鮮人女



二十人

十五人

十人

五人

大正十四年 大正十三年 大正十二年 大正十一年 大正十年 大正九年 大正八年 大正七年 大正六年 大正五年 大正四年 大正三年 大正二年 大正元年  
 明治四十四年 明治四十三年

生率に比較するに、内地人の二三・九九は内地に比して一〇・九三人低く、また朝鮮人の出生率三八・四一人は内地に比して三・四九人高く、外國人の〇・五五は内地に比し三四・三七人高くなつて居る。而して内鮮外人平均の出生率三七・九九人は内地の出生率に比し、實に三・七七人高いのであるから、朝鮮に於ける人口の將來を觀察する者は特に注意を要するのである。朝鮮に於ける大正十四年の死産率平均は人口千人に付〇・一八人であるが、内鮮外人中最も死産率の高いのは内地人の一・五三人である。さればこれを同年の内地に於ける死産率二・〇八人に比較すると、朝鮮の方が著しく死産率の低いことを認められる。

私は前章に於て、朝鮮に於ける米産額と結婚數との關係に就いて一言したが、累年の消長を見ると、人口の増加率もまた米産額の増加率と略ぼ並行又は雁行の趨勢を以て進んで居る。即ち明治四十四年の米産額は一千四十萬五千六百十三石であつたものが、大正十四年に於ては一千四百七十七萬三千百二石に増加し、これに對し明治四十三年の人口數は一千三百三十一萬三千七十七人であるが、大正十四年には一千九百一萬五千五百二十六人に増加して居る。これを以て人口一人當の米産額を算出すると、明治四十三年には七斗八升一合六勺であつたものが、大正十四年には七斗七升六合九勺となり、その差は僅少である。尤も年に依りて、米産額は旱害水害等の影響を受け、人口には傳染

病及び流行性感冒の如きもの、發生ありて、共に増減不動の事實あるも、大體に於て數年間の増加率は、別表「併合以來の人口と米産額」の示す如く略ぼ一致して居る。

## 第二節 地方別・男女別出生率

朝鮮に於ける累年の出生状態は前節に於て説明したから、こゝでは各地方別の出生率を男女別に就いて觀察して見やう。出生率の平均を算出するには成るべく十箇年位の統計を取りたかつたのであるが、それでは非常なる手数を要するので、大正十年より同十四年に至る五箇年平均を見ることゝした。而してこれが計算の基礎は、各道の調査に係る府・郡・島別の年々の人口總數を以て、その年々の男女別出生數を除して人口千に對する出生率を算出したものである。これに據るときは、最近五箇年間に於ける各地方の男女別出生率は略ぼ明瞭となり、地方地方の地勢、氣候、風土、衛生、文化、經濟などの出生率に影響を及ぼすことは勿論であるが、先づ試みに各道別の出生率を比較すると、平安北道の四五・七八(男二三・七八)(女二二・〇一)が最も出生率の高い地方で、内地に於ける最も出生率の高い青森縣の大正十四年の出生率四五・二四よりも〇・五四高いのである。朝鮮に於て最も出生率の低いのは全羅北道の二六・五〇(男二四・二七)(女二二・二三)で、これに亞ぐは全羅南道の二七・四二(男二四・八〇)(女二二・六二)であるから、

大正十四年の内地に於ける出生率の最も低い沖繩縣の二六・〇六、大阪府の二八・二七と相伯仲の間に在ることがわかる。概して文化と經濟の發達しない氣候も冬期酷寒の西北鮮地方に出生率が高く、文化と經濟の發達して氣候も溫暖の所が多い南鮮地方の却つて出生率の低いことは、輕々に看過してはならぬ事實である。

一箇年人口千人に付出生數道別調

道 別	出生數		計
	男	女	
京 畿 道	一九〇二	一七〇四	三六〇六
忠 清 北 道	一八三七	一五九一	三四二八
忠 清 南 道	一七六九	一五二二	三二九〇
全 羅 北 道	一四二七	一三三三	二六五〇
全 羅 南 道	一四八〇	一三六二	二七四二
慶 尙 北 道	一九七七	一七四七	三七二四
慶 尙 南 道	一七〇一	一四八七	三一八八
黃 海 道	二〇一九	一八四二	三九六一
平 安 南 道	二二三〇	二〇五五	四三八五
平 安 北 道	二二七八	二二〇一	四四七八
江 原 道	二〇二八	一七九六	三八二五

第五章 出生

朝鮮の人口現象

咸鏡南道	二二・三七	二〇・九四	四四・三一
咸鏡北道	三二・四	二〇・二九	四二・四三

備考 右は自大正十年五箇年間の平均なり  
至同十四年

各道別の出生率を見ても、府・郡・島別の出生率を見ても、出生に及ぼす地勢、氣候、衛生状態の影響は比較的微弱であつて、文化と經濟の影響が比較的濃厚であるやうに見ゆる。即ち文化の進み産業の發達した地方が出生率が低く、文化の劣つた産業の發達しない地方が出生率の高いことになつて居る。出生率の低い地方には、或は貧富の懸隔が漸く著しくなり生活難に苦む者の他の地方に比して多いことあり、或は有妻の男子にして他に出稼する者の多いこともあり、或は市街地や、漁業地、工業地、又は土地不便なる關係上、妻を同行せざるか若くは獨身の男子勞働者が多い等の原因に加ふるに、前述の地勢、氣候、衛生等の状態の影響を受けて出生率が低くなつて居るのであるまいか。

地方別出生率調 (人口千に付)

京畿道

府郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
京城府	一六・三三	一四・七六	一七・〇〇	一六・六四	一九・三六	一八・九三	一七・一七	一六・六三	一九・七五	一七・二五	一八・四八	一六・四九	一四・九七
	以上五箇年平均												

江華郡	一八·七九	一五·九八	三三·七〇	二二·〇四	一八·六〇	一八·六七	三三·三三	二〇·七三	一九·九六	一八·八六	二〇·六四	一九·〇六	三九·六九
金浦郡	一八·五五	一八·〇三	一八·六九	一六·九九	一九·六六	一九·〇〇	三三·七七	一九·七〇	三三·八三	三〇·三三	二〇·九三	一八·八二	三九·七四
富川郡	一六·五三	一五·四一	一八·八一	一七·〇五	一六·六〇	二〇·〇一	二〇·〇一	一七·九三	一八·九九	一六·三三	一八·六六	一六·六七	三三·二四
始興郡	一七·七七	一六·六六	一八·一九	一六·九九	一八·八一	二二·〇七	二二·〇七	一七·九三	一九·八五	一七·七五	一九·七七	二七·二四	三六·四一
水原郡	一四·九〇	一三·三六	一七·四七	一五·三六	一三·三七	三三·四四	三三·四四	一九·四八	一九·八七	一八·三六	一九·〇〇	一七·二八	三六·一八
振威郡	一三·六八	一一·三八	一七·五五	一四·四三	一九·一九	三三·〇〇	三三·〇〇	一九·三〇	三三·五五	一七·五五	一九·三三	一五·九三	三〇·一五
安城郡	一四·四六	一三·〇八	一四·三九	一三·〇〇	二〇·四九	一七·一八	一八·〇〇	一六·〇八	一九·八一	一五·二五	一七·五五	一四·七七	三三·三三
龍仁郡	二二·五二	一八·八七	三三·〇四	一九·九三	一八·九八	二〇·六六	一八·六六	一八·六六	二二·〇六	一八·七七	二二·六六	一八·九七	四〇·一三
利川郡	一五·三三	一三·八九	一七·九〇	一五·七七	一九·〇二	三三·四〇	三三·四〇	二〇·二八	三三·六三	一九·八七	一九·八七	一九·九七	三三·三三
驪州郡	一六·七〇	一四·六三	一七·九〇	一七·三三	二〇·六七	一八·六六	二〇·〇一	一六·〇一	一九·五五	一八·〇三	一九·〇一	一六·九七	三三·九八
楊平郡	一六·六〇	一四·〇三	一八·四一	一五·九二	一九·六八	一七·八七	一八·六九	一五·六五	一八·七〇	一七·二一	一八·四七	一六·二五	三三·六二
加平郡	一六·七九	二二·二六	一六·六九	一六·〇八	一九·五三	一八·四六	二二·〇〇	一八·〇三	二二·三三	一七·六六	一九·〇八	一六·三三	三三·三〇
抱川郡	一五·三六	二二·七八	一六·三三	一五·五二	二二·七六	一九·七四	二〇·六四	一八·二六	一九·五三	一六·五二	一八·六八	一六·九七	三三·六五
漣川郡	二〇·六八	一八·九三	三〇·三三	一七·八二	三三·一四	一七·四四	三三·四八	一九·一七	一八·九三	一七·九二	三〇·六四	一八·二五	三六·八九
楊州郡	一八·四二	一五·二九	一七·八四	一六·〇四	一九·九三	一九·七〇	一九·九六	一八·八五	二〇·三三	一六·八九	一九·三三	一七·三三	三三·六八
廣州郡	一七·三三	一三·六四	三三·〇四	一五·六〇	三〇·五九	一九·六四	一九·七五	一六·六六	一五·四四	一四·二〇	一八·〇一	一五·九三	三三·九三
高陽郡	一七·〇〇	一六·三〇	一七·八五	一六·六六	二六·六八	一五·七九	一六·三三	一六·二九	一六·一九	一四·四九	一七·三三	一五·八八	三三·二四
仁川府	一四·三三	一三·四八	一三·九八	一三·三三	一六·七〇	一五·一〇	一六·八五	一五·七三	一三·一四	一三·三六	一四·八一	一三·九三	二六·七三

第五章 出生



# 忠清南道

郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
公州郡	九・九三	七・四三	一八・四三	一五・六四	二二・九九	一九・五三	二六・七六	一五・〇〇	一七・七〇	一四・四三	一五・三三	二二・四三	二二・七七
燕岐郡	一五・三三	一三・〇〇	三三・九六	三〇・一一	一八・五五	一五・七四	三三・六九	一八・〇四	一九・六四	一七・九八	一九・八一	一六・八五	一六・六六
大田郡	一五・一八	一一・九七	三二・八四	一八・八四	一九・九九	一七・六六	三〇・八七	一七・四〇	一九・五三	一七・六六	一九・五三	一六・七五	一六・三七
論山郡	一四・一四	一〇・六五	二六・元	一四・一九	一四・九二	一〇・三三	一六・七三	一三・二八	一八・一六	一五・〇八	一六・〇八	一三・七一	一六・七九
扶餘郡	一三・八七	九・八八	二〇・四三	一九・三五	一六・九四	一四・一七	一九・〇四	一六・四四	一三・三四	一一・五二	一七・九二	一五・三五	一三・二七
舒川郡	一一・九三	八・九五	一八・三四	一五・八三	一四・六四	一三・三九	一三・七一	一九・三九	一五・九九	一三・九〇	一五・九九	一六・五五	一四・元
保寧郡	一三・四八	一〇・一一	二二・八〇	一八・八三	一三・四四	一四・七九	一七・〇〇	一四・四三	一八・一一	一四・九	一六・五八	一四・七二	一三・〇〇
青陽郡	一三・五一	一〇・八〇	一九・九六	一七・二三	一八・〇七	一四・九	一九・七	一七・二四	二二・九二	一八・三三	一八・六	一五・六三	一四・一九
洪城郡	一〇・八六	八・五五	一一・七三	一〇・七九	一〇・一〇	八・四九	一八・三	一六・四七	一八・六八	一五・三三	一三・五三	一一・九九	一〇・九三
禮山郡	一四・三三	一一・五六	一八・三	一七・〇〇	一六・七七	一四・四七	三三・七七	二六・六七	一九・三三	一六・七九	一八・〇七	一五・五三	一三・四三
瑞山郡	二二・八	八・七五	一六・四三	一四・四九	三三・六七	三〇・八〇	三二・四〇	一八・八三	一八・六四	一一・八一	一九・四〇	一七・九七	一七・三
唐津郡	九・四〇	七・七七	一一・五四	一一・三三	一一・〇〇	一〇・四	二〇・九〇	一七・六六	一八・七〇	一五・五六	一四・九九	一三・五〇	一三・一八
牙山郡	一三・九八	一一・五三	三三・六	三三・七六	二〇・〇	一八・六六	三〇・四	一八・九九	三三・六	一八・四	一九・七七	一八・一	一六・〇
天安郡	一七・三〇	一四・二八	三三・七一	三二・一八	二二・四	一七・七	三三・五七	三〇・九	二〇・三〇	一八・五	二二・五	一八・五	一六・九九
平均	一三・二六	一〇・六	一八・六	一六・七六	一七・六三	一五・四三	一九・九三	一七・二	一九・〇一	一六・六	一七・九	一五・三	一三・七〇

全羅北道

府郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
群山府	二一・八七	九・四〇	二一・一六	一〇・一九	二一・七二	二一・九一	二一・八〇	二二・三三	二一・四二	二一・〇六	二一・八九	二一・四三
全州郡	八・三四	七・六九	一〇・三三	八・八三	一四・八五	一三・三三	一四・七二	一三・七〇	一五・三三	一三・三三	一三・七九	一三・〇〇
鎭安郡	二二・五〇	一〇・五五	二二・一五	九・八〇	二四・五五	二二・八二	二七・八八	一四・九六	一七・二〇	二二・八七	一四・八三	二二・四二
錦山郡	二二・四九	一一・六八	二四・九一	二二・八三	三三・三六	三二・四一	二二・八三	一九・四四	一七・三六	二五・三二	二七・八三	二六・〇四
茂朱郡	一七・三三	一三・九八	一四・九一	一一・〇〇	一九・四五	一四・五三	一五・六六	一一・九一	一六・四五	一三・九二	一六・九六	一三・二七
長水郡	二二・三三	一〇・九三	二六・七〇	一四・八八	一九・六六	一六・五五	一六・〇九	一四・六三	一五・六五	二二・三三	一六・一一	二二・八六
任實郡	一一・八八	八・七三	一一・八九	一〇・七七	一九・九六	一八・九二	一八・三三	一八・八〇	一六・四〇	一六・三四	一五・八三	一四・七五
南原郡	一〇・五五	九・〇〇	一一・四六	一一・八八	二〇・六〇	一七・七九	一九・九〇	一六・六二	一五・六六	一三・三六	一六・四六	一四・〇〇
淳昌郡	二一・九八	一〇・四六	二二・三三	一〇・三三	三三・六六	二二・五三	二五・〇九	二二・五三	一〇・〇〇	九・一〇	一四・四八	二二・八二
井邑郡	八・〇九	六・九三	一一・〇八	九・八九	一八・一四	一六・六六	一五・六八	一二・七三	一三・三三	一一・七五	一三・〇〇	一一・五六
高敞郡	三・〇三	二・二三	五・八四	四・七七	七・七六	五・九六	九・〇五	五・六八	九・九九	六・八一	七・三三	五・〇九
扶安郡	七・七四	六・六七	七・七三	六・八二	一九・三九	一五・三六	一〇・二六	六・九九	一一・八九	一〇・四二	二・四三	九・二九
金堤郡	一四・三六	三・三三	一七・七〇	一六・一四	二三・七九	二二・三三	三三・〇〇	一六・三七	一六・三六	一三・六七	一八・六八	一六・二六
沃溝郡	六・七四	五・二三	一一・〇八	一〇・三三	一四・〇五	一四・〇一	一四・七七	一〇・九四	一三・七九	一一・三三	一一・三三	一〇・五六
益山郡	一〇・四九	八・五二	一一・四七	一〇・七三	一八・七一	一六・四〇	一七・六八	一四・六四	一六・二三	一三・八〇	一五・二六	二二・八七

計

平均 10.18 8.87 11.33 10.00 17.91 15.93 16.10 13.33 14.61 13.76 14.77 11.31 16.50

全羅南道

府郡島別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
木浦府	11.93	10.56	11.08	11.33	11.51	11.53	13.00	10.53	11.77	10.06	11.73	10.66	13.59
光州郡	8.53	6.71	10.27	8.43	7.28	16.40	15.41	13.25	15.14	13.98	13.44	11.47	14.93
潭陽郡	15.55	12.91	15.73	13.00	15.91	13.96	13.98	11.67	14.83	13.26	15.34	13.73	17.99
谷城郡	9.56	7.6	11.96	9.90	16.71	13.93	13.33	10.43	14.63	11.40	13.03	10.79	13.81
求禮郡	15.71	14.11	17.87	12.33	18.56	15.44	14.43	13.71	16.56	14.77	16.65	13.81	19.47
光陽郡	13.08	10.03	11.59	10.66	14.00	13.26	13.66	11.40	15.77	14.00	13.87	12.05	15.91
麗水郡	9.91	7.55	10.55	8.08	12.77	13.05	13.40	10.73	19.76	17.33	18.43	15.33	19.97
順天郡	11.90	10.06	14.68	11.10	13.17	18.70	13.71	11.11	15.03	13.41	13.93	11.11	16.61
高興郡	10.93	9.55	11.87	10.71	16.35	13.71	13.10	10.06	15.57	13.21	13.76	11.46	15.31
寶城郡	8.60	6.51	9.87	8.46	12.56	11.66	16.33	14.26	12.71	10.76	14.30	13.99	17.49
和順郡	14.66	13.00	13.33	11.79	13.06	19.46	15.18	13.41	17.39	15.33	16.33	14.40	19.73
長興郡	14.03	10.66	15.71	13.67	18.11	14.44	15.41	13.91	17.26	14.02	16.44	13.18	19.33
康津郡	14.66	13.33	17.63	15.73	18.30	17.90	17.63	15.95	17.76	16.33	17.66	15.80	19.46
海南郡	13.40	10.77	14.68	11.98	18.88	13.46	17.83	14.56	19.93	13.66	16.77	14.43	19.40

朝鮮の人口現象

府郡島別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
靈岩郡	10,923	7,661	10,652	9,322	15,811	8,361	15,181	11,200	13,500	11,011	15,333	10,633
務安郡	11,522	9,218	11,101	9,823	10,061	11,851	13,810	11,977	15,000	13,622	14,022	12,777
羅州郡	11,133	8,911	13,611	11,991	19,001	16,811	16,622	13,091	17,822	15,222	15,277	13,261
咸平郡	10,018	8,311	15,000	13,701	28,322	25,291	16,077	22,661	17,777	15,711	27,622	15,181
靈光郡	7,722	5,111	13,977	8,522	15,511	13,111	9,777	7,033	13,000	9,711	21,661	8,722
長城郡	12,622	9,091	14,800	12,651	20,991	18,111	17,077	14,922	17,000	14,022	16,661	13,961
莞島郡	10,077	9,322	12,591	10,000	13,711	11,811	15,222	13,311	11,000	11,077	14,077	12,722
珍島郡	8,311	7,101	10,211	8,300	13,900	10,900	16,622	13,061	17,311	11,311	14,077	10,661
濟州島	5,311	4,500	5,811	4,922	14,377	13,800	14,077	12,900	17,891	16,891	21,511	10,722
平均	10,922	8,811	12,000	10,000	19,022	17,091	15,122	12,691	16,000	13,800	14,000	12,611

慶尚北道

府郡島別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
大邱府	15,222	15,000	16,600	16,322	22,722	21,000	24,000	22,522	24,661	24,622	24,691	23,222
達城郡	8,661	17,911	13,000	14,077	24,922	33,661	8,111	15,661	33,000	19,922	17,622	16,111
軍威郡	10,000	19,711	18,977	18,077	22,161	18,977	22,111	23,077	33,000	22,011	22,000	19,722
義城郡	17,322	14,661	19,522	18,322	22,011	22,722	24,000	23,222	27,000	27,222	23,222	18,722
安東郡	11,111	16,000	13,611	19,000	22,000	10,101	22,000	22,722	22,000	27,000	22,000	19,611

計

青	松	郡	一八・四〇	三〇・七六	三〇・七六	一八・〇一	三〇・四六	三〇・七六	三〇・九六	三〇・九六	一九・〇一	四〇・〇〇					
英	陽	郡	一八・七七	一七・〇八	一九・五一	一六・三二	二二・七七	一九・五一	二二・三六	一九・八八	三二・四九	一八・七七	六・六六				
盈	德	郡	一四・九六	一一・五九	一八・七七	一五・八四	二〇・八九	一九・四一	一九・七三	一六・六二	三三・六八	三二・〇〇	一七・〇三	一・〇〇			
迎	日	郡	一〇・三三	八・七七	一三・五一	一〇・三三	三二・三〇	二二・一〇	一八・五九	一六・三二	一八・三三	一四・九一	一七・二二	三・五三			
慶	州	郡	六・四一	五・三三	一三・七七	二二・〇三	一四・九七	一三・〇九	一八・五九	一六・〇九	一八・三三	一四・四三	二二・六〇	一七・〇三			
永	川	郡	九・〇五	七・七七	一一・〇〇	九・三二	二六・〇四	二五・七七	二六・元	二二・〇八	一八・元	一九・六〇	一七・二二	六・八〇			
慶	山	郡	一八・一九	一四・五三	三三・二五	一九・〇二	二四・八四	二四・二二	二九・五三	二六・〇六	二四・七二	三〇・八〇	三三・九三	三二・〇七	四・〇三		
清	道	郡	一五・九一	一三・〇三	一八・三三	一六・七七	二六・七四	二四・五九	元・五九	二五・七七	二二・九〇	一九・八九	三三・四三	二〇・七七	四・七九		
高	靈	郡	三・五六	一〇・七七	九・二二	七・六二	八・三三	八・二二	一八・〇三	一七・二八	三〇・四一	一八・三三	一四・〇三	一三・六	三・三三		
星	州	郡	一五・〇一	一一・八四	二〇・七七	一七・三三	二四・二二	一九・元	二六・〇三	二五・二二	三三・六二	三三・三〇	三三・八三	一九・六	四二・〇九		
漆	谷	郡	一六・八三	一四・〇九	二〇・二六	一八・二六	二二・九六	一九・三三	二四・〇三	三三・六〇	三〇・九三	一九・元	三〇・八一	一八・七七	一八・七七	一八・七七	三・五三
金	泉	郡	九・四四	七・三二	一一・〇〇	八・七〇	二二・六一	二〇・九七	二〇・九	一七・四一	三三・八三	一九・四二	一七・七二	二四・八一	一八・七七	三・五三	三・五三
善	山	郡	二二・四三	九・三三	一八・三三	一六・六六	二二・八七	二二・六二	二二・六六	一八・五二	三〇・四九	一九・六六	二二・三六	一九・七七	四・四三	四・四三	四・四三
尙	州	郡	九・七〇	七・七七	一七・四七	一六・〇〇	元・三三	二二・三三	三三・一〇	一九・六八	三三・四四	三三・三二	三〇・四三	二〇・四三	一八・五三	六・九六	六・九六
安	慶	郡	一五・二七	一三・一八	一七・六二	一五・九三	二六・〇六	三三・三六	三二・四九	二七・七七	三二・一七	一八・四〇	二〇・三三	二〇・三三	一七・五三	七・八三	七・八三
醴	泉	郡	三三・〇〇	一九・八九	三二・七	一九・四三	二〇・一〇	二二・八八	二四・八八	一八・七七	二〇・六三	一八・四三	三二・六二	三二・六二	一八・七七	四〇・四一	四〇・四一
榮	州	郡	三三・八	三三・五九	一九・八一	一九・三三	三三・七七	一九・八四	二二・二二	一九・〇〇	三三・四三	三三・三三	三三・三三	三〇・三三	三〇・三三	四〇・四一	四〇・四一
奉	化	郡	三二・三三	一九・三三	一八・七六	一七・七七	一九・四九	一八・〇四	二二・一七	一八・元	三三・六四	三二・六六	三三・〇三	一八・七七	三九・七七	三九・七七	三九・七七



郡	別	大正十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	以上五箇年平均	計
固城郡	男	10,000	19,000	19,900	19,800	19,000	17,700	17,700
固城郡	女	8,700	19,000	19,800	18,300	17,000	17,700	17,700
酒川郡	男	15,900	14,000	13,000	15,000	17,000	15,000	15,000
酒川郡	女	11,100	12,000	12,000	15,000	13,000	15,000	15,000
南海郡	男	20,300	23,000	22,400	22,000	23,000	22,900	22,900
南海郡	女	18,000	23,000	22,400	22,000	23,000	22,900	22,900
海東郡	男	26,900	26,000	26,700	27,000	27,000	27,000	27,000
海東郡	女	24,000	25,000	25,000	27,000	28,000	27,000	27,000
山清郡	男	23,300	22,000	23,600	22,000	22,000	22,000	22,000
山清郡	女	23,300	22,000	23,600	22,000	22,000	22,000	22,000
咸陽郡	男	22,000	23,000	24,000	24,000	24,000	24,000	24,000
咸陽郡	女	22,000	23,000	24,000	24,000	24,000	24,000	24,000
居昌郡	男	23,000	20,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000
居昌郡	女	23,000	20,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000
陝川郡	男	8,800	16,600	16,700	16,000	19,800	17,500	17,500
陝川郡	女	7,000	13,900	16,700	16,000	17,500	16,000	16,000
平均	男	22,000	26,000	27,000	28,000	29,000	29,000	29,000
平均	女	22,000	26,000	27,000	28,000	29,000	29,000	29,000

黄海道

郡	別	大正十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	以上五箇年平均	計
海州郡	男	15,700	17,300	17,000	17,000	17,000	17,000	17,000
海州郡	女	13,000	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000	15,000
延白郡	男	13,000	11,000	10,000	13,000	13,000	13,000	13,000
延白郡	女	10,000	11,000	10,000	13,000	13,000	13,000	13,000
金川郡	男	19,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
金川郡	女	19,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
平山郡	男	17,000	18,000	19,000	19,000	19,000	19,000	19,000
平山郡	女	17,000	18,000	19,000	19,000	19,000	19,000	19,000
新溪郡	男	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000
新溪郡	女	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000
豊津郡	男	26,000	26,000	27,000	26,000	26,000	26,000	26,000
豊津郡	女	26,000	26,000	27,000	26,000	26,000	26,000	26,000

第五章 出生

朝鮮の人口現象

平安南道

府郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
松禾郡	19,010	16,086	19,999	17,056	20,066	18,011	20,455	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
殷栗郡	17,567	15,577	18,421	16,333	18,000	16,000	19,000	18,000	19,000	18,000	19,000	18,000
安岳郡	13,100	11,500	13,000	11,600	13,000	11,600	13,000	11,600	13,000	11,600	13,000	11,600
信川郡	19,333	17,333	18,666	17,000	18,900	17,000	19,000	17,000	19,000	17,000	19,000	17,000
載寧郡	18,333	17,111	18,000	16,000	18,000	16,000	18,000	16,000	18,000	16,000	18,000	16,000
黃州郡	19,033	16,111	19,000	15,500	19,000	15,500	19,000	15,500	19,000	15,500	19,000	15,500
鳳山郡	17,333	14,555	17,000	14,000	17,000	14,000	17,000	14,000	17,000	14,000	17,000	14,000
瑞興郡	20,800	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000	20,000
遂安郡	19,551	15,000	19,911	16,000	19,800	16,000	19,800	16,000	19,800	16,000	19,800	16,000
谷山郡	23,000	22,000	23,000	22,000	23,000	22,000	23,000	22,000	23,000	22,000	23,000	22,000
平均	17,600	15,600	19,333	17,000	19,000	17,000	19,000	17,000	19,000	17,000	19,000	17,000
平壤府	14,070	13,333	13,800	13,000	13,800	13,000	13,800	13,000	13,800	13,000	13,800	13,000
鎮南浦府	17,000	16,000	16,000	15,000	16,000	15,000	16,000	15,000	16,000	15,000	16,000	15,000
大同郡	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000	23,000
順川郡	19,000	17,000	20,000	18,000	20,000	18,000	20,000	18,000	20,000	18,000	20,000	18,000

平 安 北 道

府郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
五山郡	三,六六	三,三三	三,四九	三,六六	三,四七	三,八九	三,四九	三,七四	三,六三	三,五七	三,五二	三,六七
陽德郡	三,三九	一,九六	三,七四	三,四三	三,七一	三,三九	三,五七	三,四八	三,五八	三,四九	三,三七	四,〇五
成川郡	三,三三	一,九〇	三,四〇	三,三七	三,四六	三,四三	三,五八	三,四七	三,五七	三,四九	三,六七	四,六六
江東郡	三,〇三	三,三三	三,七六	三,九四	三,二五	三,四四	三,五九	三,四九	三,六五	三,三三	三,四一	三,一七
中和郡	三,三九	一,九四	三,〇五	三,一九	三,三三	三,三九	三,四七	三,二〇	三,八七	三,八九	三,八八	一,九七
龍岡郡	三,〇九	一,八六	三,一八	三,〇七	三,一八	三,五五	三,四五	三,六一	三,九三	三,八九	三,五八	三,三六
江西郡	三,八七	三,三七	三,八三	三,四四	三,〇六	三,一四	三,五七	三,六九	三,九一	三,三三	三,三三	三,九六
平原郡	三,〇四	一,六七	三,九四	三,七九	三,八〇	三,九六	三,六三	三,〇二	三,三三	三,九六	三,四三	一,九〇
安州郡	三,〇六	一,六八	三,三三	三,〇一	三,〇三	三,八〇	三,八〇	三,六六	三,五〇	三,五三	三,三三	三,〇三
价川郡	一,八六	一,五八	三,〇九	三,〇六	二,七三	三,三三	三,九三	三,〇〇	三,五三	三,三三	三,〇六	三,〇四
徳川郡	三,四三	三,四三	三,〇八	三,五七	三,二七	三,七三	三,九七	三,四六	三,五七	三,三三	三,〇〇	三,四三
寧遠郡	三,八三	三,七三	三,七三	三,九三	三,八七	三,四四	三,五二	三,八〇	三,二四	三,三三	三,七七	三,九三
平均	三,〇四	一,九三	三,〇八	二,九六	三,三三	三,〇六	三,三三	三,二〇	三,四三	三,〇八	三,三三	三,三三

朝鮮の人口現象

龜城郡	一四・七三	一・四四	二六・六	六・八	二六・四	三・三	二四・一〇	三・三	二一・五	二四・四	三・九	三二・四	三・四	三三・五
泰川郡	三三・九三	一九・四一	三三・四六	三・六七	三・四	三・六〇	二四・九	二四・三	二七・三	二六・九	三・七	三三・〇三	三・九	三二・八二
雲山郡	一六・九	一三・二	一六・五	一・七	三・〇	二・五	三・九	三・一	二・六	三・一	二・四	二・六	三・〇	二・〇
熙川郡	三三・七	三〇・九	二七・八	二四・四	二六・〇	三・六	三・七	三・九	二七・九	二四・七	二・七	二四・七	三・七	二四・〇七
寧邊郡	一八・五	一五・八	三・七〇	三・八	三・八	三・一	二六・九	二七・四	二七・四	二七・七	二・七	二六・九	二・六	二四・六
博川郡	二七・七	二・四	二四・六	三・四	三・〇	三・九	二六・八	二四・九	二六・四	二四・四	二・四	二二・八	二・四	二五・三
定州郡	一八・五	一四・七	二・五	二・九	六・八	二・七	二七・三	二四・四	二六・三	二四・四	二・九	二五・二	二・三	二四・〇
宜川郡	三三・七	一六・七	二七・四	三・七	三・〇	三・〇	二四・七	三・六	二六・三	二六・三	三・三	二六・八	二・九	二四・九
鐵山郡	三三・九	一六・七	二七・五	二・七	三・六	三・三	二七・四	二四・七	二五・七	二四・七	二・七	二七・〇	二・五	二五・六
龍川郡	三三・八	一八・四	二六・三	二四・七	二七・三	二・四	二六・三	二四・七	二六・三	二四・七	二・九	二四・三	二・四	二四・九
朔州郡	三三・六	一九・四	二四・七	三・〇	元・六	六・九	二五・四	二四・八	二五・〇	二五・〇	二・五	二五・六	三・六	二四・三
昌城郡	一九・九	一六・三	二六・六	二四・七	三・三	三・〇	一九・八	三・七	三・〇	三・九	三・七	二〇・九	二・〇	二四・六
碧潼郡	三三・七	一九・六	二五・六	三・三	三・六	三・三	二六・六	二四・七	二四・九	二四・九	二・四	二四・六	三・七	二四・〇
楚山郡	二〇・八	一八・九	二四・五	三・三	三・八	三・〇	二四・五	二四・四	二四・四	二四・七	三・三	二五・〇	三・六	二四・六
渭原郡	三三・九	三三・九	二五・六	三・三	二七・九	六・六	三三・三	三・七	三・九	三・九	三・九	二四・六	三・三	二四・四
江界郡	一四・六	二二・四	一八・六	一・八	一七・五	二・六	二〇・六	三・四	三・四	三・七	一八・九	一七・九	一・七	二四・〇
慈城郡	一六・三	二二・六	一六・四	一四・六	一八・〇	二・七	一九・七	一六・九	一九・八	一七・四	一八・〇	一七・七	一・七	二四・七
厚昌郡	一六・五	一五・三	一六・九	一六・〇	二〇・三	二・七	一八・九	一六・五	一六・〇	一四・六	一七・五	一七・六	一・七	二四・八





咸鏡北道

府郡別	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		以上五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
安邊郡	三三・〇	一九・八	三三・〇	一九・七	三三・七	一九・〇	三五・七	三三・九	三三・三	三三・四	三五・七	三〇・七
洪原郡	三三・九	一九・〇	三二・四	一七・四	三三・八	一九・九	二七・五	二六・三	三三・七	三三・五	三三・八	二二・三
北青郡	三三・六	一九・六	三三・九	二二・三	三三・三	三三・〇	三三・九	二二・三	三三・九	三〇・八	三三・三	三〇・八
利原郡	二二・七	一九・九	二〇・三	一八・六	二二・六	一九・七	二〇・八	二〇・七	二〇・八	一八・五	二二・五	一九・六
端川郡	三三・三	一八・三	三三・三	二〇・三	三三・九	二二・六	二六・九	二二・四	二〇・〇	一六・六	三三・九	二〇・六
新興郡	二〇・二	三三・三	三三・一	三三・三	三五・〇	二〇・三	三三・六	二二・五	三三・三	二二・四	三三・八	二二・六
長津郡	三三・九	二〇・二	三三・三	一九・七	二六・九	二〇・三	三五・七	二二・〇	三三・六	二二・三	二〇・六	二二・三
豐山郡	二六・七	三三・六	二六・九	二〇・三	二六・二	二二・四	二六・六	二〇・四	二六・九	二〇・四	二六・九	二二・九
三水郡	二六・〇	三三・七	二六・五	二二・六	二二・九	二二・四	二二・七	一九・三	二二・七	二二・六	二二・六	二二・九
甲山郡	三三・九	一七・四	三三・〇	二〇・三	三五・〇	三三・七	三五・〇	二二・八	三五・七	二〇・八	二二・〇	二〇・六
平均	三三・七	一九・七	三三・六	二〇・五	三三・三	二〇・七	三三・三	二二・八	三三・九	二二・八	三三・七	二〇・九

朝鮮の人口現象

城津郡	10.5	16.5	21.7	18.7	26.0	27.5	31.0	18.9	26.6	20.7	31.4	20.6	40.4
富寧郡	21.0	18.3	23.0	19.7	21.1	20.0	20.9	19.5	21.7	21.7	21.5	19.1	40.4
茂山郡	25.6	19.5	24.4	18.9	20.0	17.6	20.4	17.4	21.4	21.4	19.6	31.3	40.6
會寧郡	23.5	20.9	23.7	21.9	20.9	16.7	23.7	20.5	19.5	20.6	18.5	26.2	40.3
鍾城郡	27.7	25.0	23.6	23.0	27.7	23.5	26.3	21.4	20.4	19.5	23.8	23.7	40.3
穩城郡	26.7	26.0	26.6	26.5	26.7	23.5	26.3	21.4	20.4	19.5	23.8	23.7	40.3
慶源郡	26.0	24.0	23.5	20.3	27.0	23.7	24.8	21.5	21.6	21.6	21.6	21.6	40.3
慶興郡	26.1	20.1	20.7	19.6	20.3	16.1	21.7	20.4	21.4	20.5	21.0	19.1	41.1
平均	23.7	19.9	21.9	20.0	21.5	20.9	21.8	20.5	21.6	21.6	21.4	20.9	41.3

右の調査に基き、出生率の高い即ち一箇年人口千に付出生數三十五人以上の地方と、出生率の低い即ち一箇年人口千に付出生數三十人未滿の地方を區別して見ると、左の通りになつて居る。

一箇年人口千人に付出生數三十五人以上の地方

道名	府	郡	名
京畿道	楊州郡、漣川郡、抱川郡、加平郡、驪州郡、利川郡、龍仁郡、振威郡、水原郡、始興郡、富川郡、金浦郡、江華郡、坡州郡、長湍郡、開城郡		
忠清北道	報恩郡、沃川郡、鎮川郡、丹陽郡		
忠清南道	燕岐郡、大田郡、瑞山郡、牙山郡、天安郡		

全羅北道

全羅南道

慶尙北道

慶尙南道

黃海道

平安南道

平安北道

江原道

咸鏡南道

咸鏡北道

備考

右は大正十四年

五箇年間の平均調査なり

一箇年人口千人に付出生數三十人未滿の地方

——

——

軍威郡、義城郡、安東郡、青松郡、英陽郡、盈德郡、永川郡、慶山郡、清道郡、昆州郡、漆谷郡、善山郡、尙州郡、開慶郡、醴泉郡、榮州郡、奉化郡、鐵陵島

梁山郡、金海郡、南海郡

金川郡、平山郡、新溪郡、長淵郡、松禾郡、殷栗郡、安岳郡、信川郡、戴寧郡、黃州郡、鳳山郡、瑞興郡、遂安郡、谷山郡

大同郡、順川郡、孟山郡、陽德郡、成川郡、江東郡、中和郡、龍岡郡、江西郡、平原郡、安州郡、价川郡、徳川郡、寧遠郡

義州郡、龜城郡、泰川郡、雲山郡、熙川郡、寧邊郡、博川郡、定州郡、宣川郡、鐵山郡、龍川郡、朔州郡、昌城郡、碧潼郡、楚山郡、涓原郡、江界郡

春川郡、麟蹄郡、楊口郡、通川郡、高城郡、襄陽郡、江陵郡、三陟郡、蔚山郡、旌善郡、平昌郡、橫城郡、洪川郡、金化郡、鐵原郡、平康郡、伊川郡

咸興郡、定平郡、永興郡、高原郡、文川郡、徳源郡、安邊郡、洪原郡、北青郡、利原郡、端川郡、新興郡、長津郡、豐山郡、三水郡、甲山郡

鏡城郡、明川郡、吉州郡、城津郡、富寧郡、茂山郡、會寧郡、鍾城郡、穩城郡、慶源郡、

備考

右は大正十四年

五箇年間の平均調査なり

一箇年人口千人に付出生數三十人未滿の地方

鏡城郡、明川郡、吉州郡、城津郡、富寧郡、茂山郡、會寧郡、鍾城郡、穩城郡、慶源郡、

備考

右は大正十四年

五箇年間の平均調査なり

朝鮮の人口現象

道名	府	郡	名
京畿道	仁川府		
忠清北道	—		
忠清南道	公州郡、論山郡、洪城郡、唐津郡		
全羅北道	群山府、全州郡、鎮安郡、茂朱郡、長水郡、淳昌郡、井邑郡、高敞郡、扶安郡、沃溝郡、益山郡		
全羅南道	木浦府、光州郡、潭陽郡、谷城郡、光陽郡、順天郡、高興郡、寶城郡、長興郡、靈岩郡、務安郡、羅州郡、靈光郡、莞島郡、珍島郡、濟州島		
慶尙北道	大邱府、慶州郡、高靈郡		
慶尙南道	釜山府、馬山府、宜寧郡、昌寧郡、密陽郡、泗川郡、咸陽郡		
黃海道	延白郡		
平安南道	平壤府		
平安北道	新義州府		
江原道	—		
咸鏡南道	元山府		
咸鏡北道	清津府		

備考 右は自大正十年至大正十四年五箇年間の平均調査なり、

右の區分に從へば、出生率の高い府・郡は、全羅南道、全羅北道には一もなく、慶尙南道に三郡、忠清北道に四郡、忠清南道に五郡を算するのみで、京畿、江原兩道の以北以西に非常に多いのである。

また出生率の低い府・郡は、全羅北道、全羅南道、及び慶尙南道に最も多く、これに反して忠清北道、江原道には一箇所もなく、京畿、黄海、平南、平北、咸南、咸北の諸道には各僅に一箇所を數ふるのみであるが、その中で仁川、群山、木浦、大邱、釜山、馬山、平壤、新義州、元山、清津の十府が出生率の低い地方に入つて居ることを見落してはならない。

### 第三節 月別出生・死産状態

第二章人口の構成に於て説明したる如く、朝鮮の人口は男の數が女の數に著しく超過して居るが、またその出生數に於ても男の數は女の數より遙かに多いのである。即ち大正十四年に於ける出生兒の男百に對する女數は、内地人九〇・八八、朝鮮人八九・一二にして、これを同年の内地に於ける出生兒男百に付女九五・四二に比較すると、朝鮮に於ける出生兒の男數超過の大なることが明かとなり、また朝鮮内に於ても内地人よりは朝鮮人の方が幾分女の出生數の割合低きを示して居る。試みに明治四十二年以降の内鮮人出生兒の男百に對する女數を見ると左表の如くなつて居る。

#### 出生男百に對する女數

種次	年別	内地人		朝鮮人	
		内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
種次	年別	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
		内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
明治四十二年		九二九六	—	大正七年	九〇五三
明治四十三年		八五四〇	八四二八	大正八年	八八四四
明治四十四年		八五〇八	八六・九二	大正九年	八七五九
大正元年		八七〇二	八八・五八	大正十年	九〇二五
大正二年		九三七一	八九・二六	大正十一年	九一八九
大正三年		九三四九	九〇・〇六	大正十二年	八八六七
大正四年		八八三三	八七・〇四	大正十三年	九〇八六
大正五年		九二二三	八九・〇八	大正十四年	九〇八八
大正六年		八九〇六	八九・六三		八九・二二

出生の季節を見るに、内地に於ては、一月が最も多く、二月は稍少いが、三月は増加し、四月は急激に減少し、尙ほ五、六月と低下して最少季となり、七月から十一月まで順次増加するが、十二月に於て俄かに減少し、一月は急激に増加するのが従來の定型である。朝鮮に於ても大正十年より同十四年に至る五箇年間の平均を見るに、内地人に在りては略ぼこの定型に近く、一月は最も出生數多く、二月稍下るも、三月は増加し、この三箇月間が一年を通じ出生率の極めて高いことを示して居る。四

月に激減し、それから毎月漸次減少して六月には最下位に下ること、更に七、八、九月まで漸増することは、内地と同様であるが、十月より十二月まで順次減少するところは稍内地と趣きを異にして居る。朝鮮人の方は一年を通じて三月が最も出生数が多く、四月に激減し、五、六月と順次減少して、七月は最下位に落ち、八月から九月へ掛けて激増し、十月に再び減少し、十一月から順次翌年の三月まで増加する一方である。この出生季節と、地勢、氣候、衛生、文化、經濟状態との關係は研究すべきことが多いと思ふ。左に大正十四年中に於ける内鮮外人別の月別出生数を示して見やう。

出生月別表 (大正十四年)

月別	内地人		朝鮮人		外国人	
	男	女	男	女	男	女
一月	六〇九	五三〇	二七、〇五八	三二、九七四	二	一
二月	四九五	四五二	三六、四六八	三二、三七七	四	一
三月	五七四	五三三	三九、三〇六	三五、四八九	二	一
四月	四一〇	三八一	三三、五七六	二九、八〇九	二	一
五月	三六〇	三三六	二八、一八四	二四、九八三	一	一
六月	三三七	三三七	二二、四九九	一八、五三三	二	一
七月	四三四	三五八	二二、二七六	一八、四六八	二	一
第五五章 出生						
三五三						

朝鮮の人口現象

八	月	四三三	四〇六	三〇,四七三	二七,三七四	一	一
九	月	四三三	四五二	四六,〇五五	四三,八七六	二	三
十	月	四二七	三六八	二七,七六一	二四,九九四	一	一
十一	月	四四二	三八一	二五,七四四	二二,三八六	一	一
十二	月	三六四	三二八	二九,三三〇	二五,四四五	一	一
合	計	五,三三八	四,八五一	三七,六二〇	三五,六五八	一九	七

右の月別出生数の大小を見れば、大體朝鮮に於ける内鮮人特有の出生季節の定型に當て箝まつて居ることを、次の大正十年より同十四年に至る五箇年間の月別出生調と對照して窺ひ得るであらう。

自大正十年  
至大正十四年 内地人出生月別調

一	月	一,〇九六	一,二六三	一,〇五一	一,二一八	一,二九一
二	月	八五四	九三〇	八七三	九四四	九四七
三	月	一,〇四八	一,〇八二	一,〇一七	一,〇九二	一,一〇七
四	月	六二〇	六六八	六三九	七〇二	七九一
五	月	五七七	六四三	五六七	六八六	六九六
六	月	五五一	四八三	五六三	六四〇	六九四
大正十年						
大正十一年						
大正十二年						
大正十三年						
大正十四年						

自大正十年 至大正十四年 朝鮮人出生月別調

七	月	七〇〇	七二七	六五二	七三六	七九二
八	月	七二一	七七九	七八一	八二六	八二九
九	月	七四八	九〇九	八三六	七六四	九〇四
十	月	七五一	七九二	八二四	八四二	七八五
十一	月	七四二	七二五	七八七	七二八	八三三
十二	月	五二六	五六七	六四四	六四七	六八二
合 計		八九一四	九,五五九	九,九三三	九,七五五	一〇,一八九

一	月	四四七五二	五三,二二五	七一,七〇九	六九,六五六	六九,〇三二
二	月	四一,七九六	五八,五〇一	一二五,三三四	六三,二九七	六八,七九五
三	月	五五,七七二	六八,七五九	九六,四四五	七九,三五一	七四,七九五
四	月	四八,三二九	六〇,七二二	五六,四二二	六一,五四五	六三,三八五
五	月	四三,八九〇	五一,〇八二	四四,九八九	五三,〇四七	五三,一六七
六	月	三五,三〇九	三九,四九〇	四七,七〇〇	四〇,七二二	四〇,〇三二
七	月	三六,一七二	三五,八五三	二九,五八八	三八,三九六	三九,六四四
合 計		三,五五五	三,五五五	三,五五五	三,五五五	三,五五五

第五章 出生

朝鮮の人口現象

三五六

月	内地人	朝鮮人	外国人
八 月	四二、六二二	四一、三〇二	五二、五六二
九 月	四二、七七八	四三、三七七	五二、七五七
十 月	三七、二六一	四〇、七八八	四七、六九六
十一 月	三六、六〇〇	四八、六七一	五四、三七七
十二 月	四六、七九二	六三、五八八	六八、四三三
合 計	五〇九、二三三	七〇九、九〇八	六八〇、八二八

右は出生季節を示したものであるが、死産季節も内鮮人共略ぼ出生季節の定型に近いものとなつて居る。内地人に在りては一、二、十一、十二月の如き酷寒季節に死産率の多いのは、未だその生活が朝鮮の氣候風土に慣れず、醫師産婆などの設備が不充分なることを物語るものであるまいか。出産の場合に一月と三月の出産率の多いのは、學齡や年齢の關係上、十二月、四月の出生が、或は遅く或は早く届出られなどすることあるに反し、死産に於ては斯かる必要はないので、自然出生季節と死産季節には多少の相違が生ずることも考慮に入れねばならぬ。

死産月別表 (大正十四年)

月 別	内地人	朝鮮人	外国人
一 月	男 三四 女 二五	男 二八 女 二二	男 一 女 一

第五章 出生

年	月	出生
二	一	五七
二	二	七六
二	三	八七
二	四	八四
二	五	六四
二	六	四七
二	七	六二
二	八	五一
二	九	五九
二	十	五四
二	十一	三二
二	十二	三六
二	合計	三五七

年	月	出生	合計
二	一	三三	三三
二	二	二四	二四
二	三	二七	二七
二	四	一八	一八
二	五	二二	二二
二	六	一五	一五
二	七	二九	二九
二	八	三二	三二
二	九	二五	二五
二	十	三六	三六
二	十一	四三	四三
二	十二	三三	三三
二	合計	三五四	三五四

自大正十年  
至大正十四年  
內地人死産月別調

年	合計
二	一四三
三	一四三
四	一四三
五	一四三
六	一四三
七	一四三
八	一四三
九	一四三
十	一四三
十一	一四三
十二	一四三
合計	一四三

朝鮮の人口現象

三五八

三	三	二	一	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	合
月	月	月	月	月	月	月	日	月	月	月	月	月	計
三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇	七〇四
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	八五
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	六九
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七五
七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七五

自大正十年至大正十四年 朝鮮人死産月別調

一	二	三
月	月	月
二七六	二五六	二九八
二八八	二九八	四〇四
二九〇	二五三	二八九
三三七	二五八	三三三
二四〇	二五六	二六〇

大正十年 大正十一年 大正十二年 大正十三年 大正十四年

第五章 出生

合計	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月
三三七一	三三六	二八七	二五八	二七九	二八三	二七九	二六八	二八八	二六三
三六五六	三三三	二九八	二八八	二九四	二九三	二八一	二八八	三三三	二七九
三一六七	三三一	二八四	二四九	二二六	二五一	二三八	二二七	二七六	二六三
三四七三	三三三	三三〇	二七四	二八一	二九一	二七〇	二六六	二四九	二六一
二七九六	二五〇	二四〇	二三〇	二三〇	二二八	二四四	二三六	一八〇	二三三

## 第一節 死亡者數

一國一地方の死亡數及び死亡率は、地勢、氣候、水質、雨量、濕度、空氣等自然の影響を受くることも大であるが、文化、職業、住居、衛生、經濟、慣習等の力に依りて多少の差を生ずることも尠くない。而して死亡の直接原因となる傳染病の流行、地方病の傳播、流行性感冒等の發生の如きは、年により地方により、その死亡狀態を著しく變化せしめることがある。併合以來の朝鮮に於ける内地人、朝鮮人及び外國人の死亡狀態を觀察するに、明治四十三年に於ける死亡數は、内地人、男千七百十九人、女千五百四十二人、計三千二百六十一人、朝鮮人、男五萬七千九百九十五人、女四萬九千三百十三人、計十萬七千三百八人、總計男五萬九千七百十四人、女五萬八百五十五人、計十一萬五百六十九人であるが、大正十四年には、内地人、男四千八十八人、女三千六百七人、計七千六百十五人、朝鮮人、男二十萬五千四百四十八人、女十七萬九千二百二十五人、計三十八萬四千六百七十三人、外國人、男百五十九人、女、五十人、計二百九人總計男二十萬九千六百五十人、女十八萬二千八百八十二人、計三

十九萬二千四百九十七人になつて居る。

現住人口死亡數累年表

年次	男		女		計	人口千に對する死亡率	
	死	實數	死	實數		男	女
明治四十三年	内地人	1,729	3,361	1,542	1,853	1,957	1,901
	朝鮮人	5,795	10,738	4,933	8,34	799	817
	外國人	-	-	-	-	-	-
計	5,974	11,059	5,085	11,059	847	813	831
同四十四年	内地人	2,127	3,904	1,777	1,853	1,851	1,853
	朝鮮人	8,758	16,325	7,566	12,05	1,153	1,08
	外國人	-	-	-	-	-	-
計	8,974	16,715	7,743	16,715	-	-	-
大正元年	内地人	2,557	4,796	2,239	1,944	1,995	1,968
	朝鮮人	12,364	23,215	10,842	16,330	1,554	1,593
	外國人	69	90	22	454	1,525	1,543
計	13,300	23,701	11,071	23,701	1,633	1,560	1,598
内地人	2,677	5,047	2,370	5,047	1,831	1,890	1,858

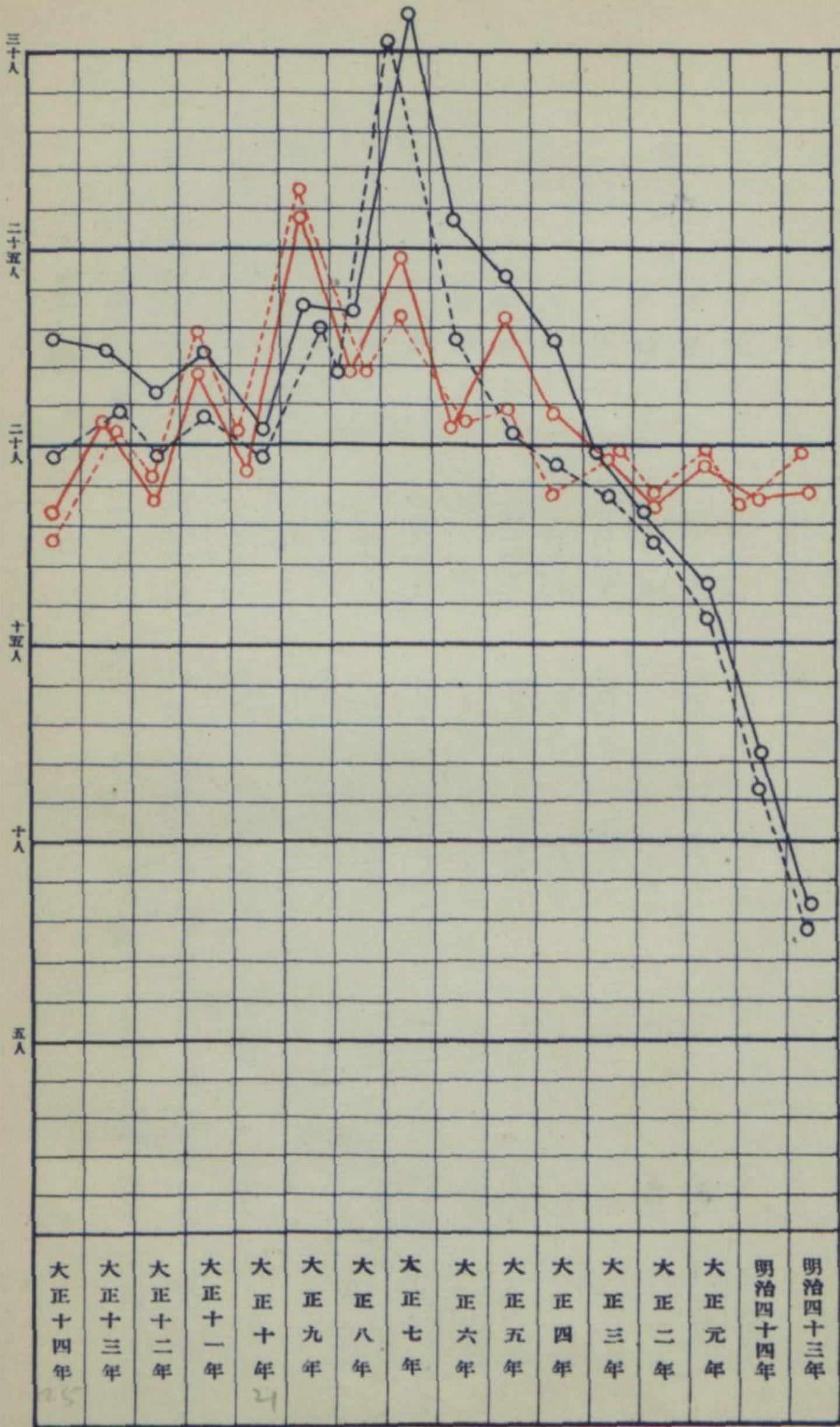
第六章 死	同			同			同			同			同		
	六年			五年			四年			三年			二年		
	外國人	朝鮮人	内地人	外國人	朝鮮人	内地人	外國人	朝鮮人	内地人	外國人	朝鮮人	内地人	外國人	朝鮮人	内地人
八八	二八,二五〇	三,六二九	二〇七,一四六	九九	二〇,三〇九〇	三,九五七	一八,八九四	九六	一八,五三〇	三,三五八	一六,三四一〇	九〇	一五九,三三六	三,〇四九	一四七,〇九九
二六	一八四,一六〇	三,一七七	一六三,六〇〇	一一	一六〇,四六六	三,一三三	一五四,〇四〇	八	一五二,四〇六	二,六二六	一四五,〇八一	一六	一四二,三八七	二,六七八	一三二,二六四
一一四	四〇,四一〇	六,八〇六	三三,七四六	二〇	三三,三,五五六	七,〇八〇	三四,三,〇四	一〇四	三三,九三六	五,九八四	三〇,七,四八二	一〇六	三〇,一,六四九	五,七七七	二七,八,三六三
五二二	二五,五一一	二〇,四三三	二四,一五	六一五	二四,一一	二,三〇四	二二,五八	六,六七	二二,六五	二〇,六〇	一九六五	五,五〇	一九六九	一九,五三	一八,三二
一一六四	二二,八三	二〇,五二	二〇,二七	五,七八	二〇,二六	二〇,九三	一九四八	四,四八	一九五〇	一八,六七	一八九一	九六一	一八九〇	一九八三	一七,六八
五九七	二四,三三	二〇,四七七	三三,三七	六,一一	三三,三九	三三,〇六	二二,〇一	六,〇八	二二,一一	一九七二	一九三〇	五,八八	一九三一	一九六七	一八,〇一



# 死亡率比較表

(人口男女各千口に付)

○ — — 内地人男 ○ - - - — 内地人女  
○ — — 朝鮮人男 ○ - - - — 朝鮮人女



同	十一年			同	十二年			同	十三年			同	十四年		
	朝鮮人	外國人	計		内地人	朝鮮人	外國人		計	内地人	朝鮮人		外國人	計	
	一九五四二	九六	二〇〇〇〇〇	三,九七八	一九〇三九二	一二三	一九四四九三	四,六二六	二〇一,〇九六	一五二	二〇五,八六四	四,〇〇八	二〇五,四四八	一九九	二〇九,六一五
	一七三,五六七	二四	一七三,七九〇	三,六三三	一六八,九六六	二九	一七二,六二七	三,九九〇	一七七,六八三	四九	一八一,七三二	三,六〇七	一七九,三三五	五〇	一八二,八八二
	三六八,九八八	一二〇	三七七,七九〇	七,六一〇	三九五,五五八	一五二	三六七,二二〇	八,六〇六	三七八,七七九	二〇一	三八七,五六六	七,六一五	三八四,六七三	二〇九	三九三,四九七
	三三〇七	三,九九	三三,〇一	一八六九	二二六〇	四〇一	二二,一一	二,一三三	三三,三四	四七七	三三,一五	一八二三	三三,五六八	三八六	三二,五四
	二〇七八	六二三	二〇,八三	一九二〇	一九九三	六,五九	一九九一	二〇,四四	二〇,七三	九,五五	二〇,七一	一七七三	一九七四	七,九二	一九,六九
	二,四四	三,七三	二,四三	一八八八	三〇六〇	四,三四	二〇,五三	二〇,九一	二一,五〇	五,四四	二一,四五	一七,九三	二〇,七四	四,四〇	二〇,六四

即ち明治四十三年に於ける死亡率は、人口千人に付、内地人、男一八・五三、女一九・五七、平均一九・〇一、朝鮮人、男八・三四、女七・九九、平均八・一七である。それが大正十四年には内地人、

男一八・一二、女一七・七二、平均一七・九三、朝鮮人、男二二・五八、女一九・七四、平均二〇・七四、外國人、男三・八六、女七・九二、平均四・四〇である。人口千人に對する死亡數に就いて内地と朝鮮とを比較するに、大正十四年に於ては、内地二〇・二七、朝鮮二〇・六四にして、幾分朝鮮の方が高いのである。死亡率は傳染病の流行等の影響で年に依りて高低あるも、大體より見て最近數年間の趨勢では、幾分内地人より朝鮮人の方が死亡率が高いやうである。外國人は内地人や朝鮮人よりは死亡率が甚だしく低いのを常として居る。また男女別に依りてその死亡率を見るに、内地人も朝鮮人も概して女の死亡率より男の死亡率の方が稍高く、外國人は男の死亡率よりも女の死亡率が著しく高くなつて居る。尙ほ出生百に對する死亡數を見ると内地人の方が朝鮮人より高いが、累年の消長は左表の如くなつて居る。

出生百に對する死亡數

年	種別		年	種別	
	次	別		次	別
明治四十二年	八〇・二八	内地人	大正元年	七〇・七三	内地人
明治四十三年	六二・四四	朝鮮人	大正二年	六九・九〇	朝鮮人
明治四十四年	七三・四五	内地人	大正三年	六八・七六	朝鮮人

大正四年	八〇・七七	七・七二	大正十年	八〇・七三	六六・三六
大正五年	八四・二七	六五・七六	大正十一年	九〇・四一	六三・〇三
大正六年	八一・二一	七一・三六	大正十二年	八二・五〇	五〇・六二
大正七年	九六・六五	九〇・三六	大正十三年	八八・三三	五五・六四
大正八年	九三・八四	八二・四六	大正十四年	七四・七四	五四・〇一
大正九年	一一三・〇九	八四・二七			

## 第二節 地方別死亡率

死亡率及び死亡率には年に依りて大小高低があるから、一箇年の總計を見て直ちに大勢を判ずることとは出来ない。そこで茲には最近五箇年間に於ける累年並に平均の死亡率を算出することにした。而してこれが計算の基礎は、各道の調査に係る府・郡・島別年末現在の現住人口男女數を以て、その年の男女死亡數を各別に除し、人口千に對する死亡數を算出し、更に總人口數を以て總死亡數を除し、平均死亡率を算出した。これが結果として、各道の男女別死亡率は左表の如く現はれたのである。

### 一箇年人口千人に對する死亡數

道名	男	女	平均	道名	男	女	平均
京畿道	二四・九八	二二・七五	二四・三六	忠清北道	三三・二五	二二・五九	二八・八

第六章 死 亡

三六七

朝鮮の人口現象

三六八

忠清南道	二〇〇九	一八九〇	一九五一	平安南道	二三八七	二二八	三三五
全羅北道	一七一九	二六二四	二六六九	平安北道	二四四一	二七七	三六一
全羅南道	一五七九	一四五〇	一五一六	江原道	二五六六	二五二六	二五四二
慶尙北道	二〇九四	二〇三三	二〇六四	咸鏡南道	二二六七	二三八〇	三二二五
慶尙南道	一八三三	一六八九	一七六三	咸鏡北道	三三八八	二二三	三二三
黃海道	二二七五	二二四九	二二三三				

備考 右は自大正十年の平均なり  
至大正十四年

朝鮮の各道中、死亡率の最も高いのは、江原道の二五・四二にして、京畿道の二四・三八これに亞ぎ、死亡率の最も低いのは、全羅北道の一五・一六で、その次ぎに位するのは全羅南道の一六・六九である。これを内地に於ける大正十四年の各府縣の死亡率と比較するに、江原道は内地の府縣中死亡率の最も高き福井縣の二五・四〇より稍高く、それに亞ぐ石川縣の二五・三九より京畿道の死亡率は少しく低いのである。内地に於て死亡率の最も低いのは宮崎縣の一七・二六、及び東京府の一八・八五であるから、全羅北道及び全羅南道の死亡率はそれよりも遙かに低いことを示して居るが、この二道はいづれも全鮮中出生率の低い地方である。多少の例外あるが、大體に於て、出生率の高い地方が死亡率も高く、出生率の低い地方が死亡率も低いやうである。

地方別死亡率調 (人口千に付)

京畿道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
京城府	三・四八	三・四四	三・三一	三・一八	六・七九	二七・二四	六・五一	五・五三	二九・七六	六・三三	六・六一	六・七三
仁川府	三九・〇五	二九・六八	三三・四一	四〇・三三	三〇・九七	三三・六一	三六・六六	三〇・三三	三三・八四	三三・九三	三〇・五五	三九・〇七
高陽郡	三〇・四九	三九・〇一	三三・三三	三三・〇七	三三・〇〇	三三・二七	三三・一〇	三〇・八八	三三・八八	三三・二八	三三・〇四	三三・五三
廣州郡	二六・六八	二五・一八	一九・六六	一九・四九	二四・九三	二六・八六	二四・三三	三三・一〇	二四・二二	二四・四七	三三・九一	三三・三三
楊州郡	三三・一〇	二七・九七	二二・七九	一九・六九	二二・六六	三三・二二	三三・四三	二二・五九	二四・七三	二四・九二	三三・六九	一九・七七
健川郡	三〇・六八	二七・九六	二六・〇三	三三・七一	三三・三三	三三・九三	三三・九七	三三・〇八	二六・九六	二六・一九	二七・六七	二五・九三
抱川郡	二九・七〇	二九・〇〇	三三・三三	三三・九三	二九・六九	二五・七六	三〇・三七	二九・三三	二七・四四	二七・〇三	二七・三三	二七・一一
加平郡	三三・六一	一九・九九	三三・三三	一九・九三	一八・〇一	一九・九三	二七・〇三	二五・五三	二五・六三	二五・〇三	三三・〇三	三三・七一
楊平郡	二五・三三	三三・三六	二六・〇三	三三・七三	三三・九三	三三・一一	三三・一一	三三・〇八	二四・三〇	三三・〇三	二四・六三	二四・六三
羅州郡	三三・三三	三〇・一〇	二六・七三	二五・六六	二五・七七	二四・一〇	二四・九三	三三・〇三	三三・〇三	三三・〇三	二四・六三	二四・〇三
利川郡	三三・三三	三三・一六	二九・六六	二六・二四	二四・六六	二四・〇一	二四・八七	三三・〇三	二六・〇三	二六・六六	二五・八八	二五・八八
龍仁郡	三九・三三	二九・四〇	三三・一七	二九・七三	二七・九三	二五・九三	二五・七三	二五・五三	二六・六三	二六・六三	二六・三三	二六・九三
安城郡	二五・六七	二六・九三	二四・三三	三三・九三	三三・〇七	一九・四三	三〇・七三	一九・五三	二四・三三	一九・五三	二二・六三	一九・六三
振威郡	二四・六六	二八・三三	三三・三三	三〇・三三	二四・〇一	二二・六六	三三・九三	一九・八七	三三・九三	三三・六三	二五・九三	二四・七七

朝鮮の人口現象

水原郡	三三・九四	三三・七〇	一四・五〇	一四・〇六	一五・〇三	一六・三三	一四・七八	一四・五三	一四・三三	一五・四一	一六・七七	一六・七九	一六・六九
始興郡	二六・六三	二七・一九	二六・六六	二七・七八	二七・六一	二九・七〇	二七・二二	二七・三三	二七・五〇	二九・六六	二八・四一	二八・九六	二八・八八
富川郡	二六・一八	二六・二四	二六・九三	二七・二五	二七・六七	二八・四四	二八・四四	二八・三六	二八・六六	二九・六六	二九・六六	二九・九四	二九・九四
金浦郡	二六・七九	二六・五五	二七・八一	二七・五五	二七・六八	二八・二二	二八・九三	二八・〇〇	二八・六六	二九・六六	二九・六六	二九・九四	二九・九四
江華郡	三三・八八	三三・〇四	二七・二六	二七・二一	二七・〇五	二七・一〇	二八・〇七	二七・三三	二七・六二	二八・六七	二八・九四	二八・九四	二八・九四
坡州郡	二六・三三	二六・九八	二六・九八	二七・〇五	二七・〇七	二七・三三	二七・三三	二七・三三	二七・六二	二八・六七	二八・九四	二八・九四	二八・九四
長湍郡	二九・八五	二六・六九	二七・五五	二七・六四	二七・三三	二七・七四	二七・九四	二七・六六	二八・二七	二八・九四	二八・九四	二八・九四	二八・九四
開城郡	二五・二九	二五・四〇	二五・三〇	二五・三三	二五・六七	二五・〇五	二五・六八	二五・四三	二五・五三	二六・二六	二六・二六	二六・二六	二六・二六
平壤均	二七・三三	二五・四三	二五・四三	二五・六六	二五・〇四	二五・七四	二五・七四	二五・八三	二五・四三	二五・五三	二五・五三	二五・五三	二五・五三

忠 清 北 道

府 郡 名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
清州郡	一八・〇〇	一八・三三	一九・七二	一八・七九	二〇・二〇	二〇・六九	二一・四四	一九・七九	一九・八八	一九・九三	一九・九三	一九・九三
報恩郡	二〇・七七	二〇・三三	二〇・五五	二〇・六八	二〇・七〇	二〇・六六	二〇・四七	二〇・二六	二〇・七〇	二〇・七〇	二〇・八〇	二〇・八〇
沃川郡	一八・三三	一八・五〇	二〇・三三	一九・九七	二〇・七〇	二〇・七〇	一九・八二	一九・八三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三
永同郡	一九・五三	一九・四〇	二〇・三三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三
鎮川郡	二五・三三	二四・九八	二六・九六	二八・九一	二七・六六	二七・六六	二七・三三	二七・六六	二七・三三	二七・三三	二七・三三	二七・三三
槐山郡	一九・九四	二〇・〇〇	二〇・三三	二〇・三三	二〇・三三	二〇・六六	二〇・三三	二〇・三三	二〇・三三	二〇・三三	二〇・三三	二〇・三三

忠清南道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
陰城郡	三,七〇	三,〇七	三,七〇	三,五七	三,六六	三,六八	三,六六	三,四七	三,九四	三,六六	三,五七	三,五七
忠州郡	一八,六四	三〇,九	三三,八二	三三,三三	三七,一四	二四,七三	三三,一五	二〇,五〇	二五,二六	二四,七	三三,〇一	三三,六
堤川郡	三,三四	三,七	一八,八	一九,七	一八,八	二〇,〇	二〇,六	一八,〇	三,三	三,〇	三,三	三,六
丹陽郡	二七,〇	元,七	三〇,一	三,七	三,八	三,三	二七,九	三,六	三,三	三,九	三,〇	三,六
平均	二〇,七	三〇,九	二四,八	三三,〇	三三,三	三,四	二〇,六	一九,七	三,七	三,八	三,一	三,八
公州郡	一九,二	一六,九	二七,〇	一四,四	二,五	一九,六	一六,九	一五,〇	一六,六	一五,七	一八,〇	一六,四
燕岐郡	三,八	二,九	三〇,三	二六,三	三,六	三,六	二,六	一九,八	三,九	二,九	三,三	三,九
大田郡	一九,六	一九,三	三,七	二〇,三	一九,七	一九,七	三,五	一九,一	三,四	一九,四	三,二	一九,四
論山郡	一六,五	一七,七	一六,〇	一四,六	三,七	三,四	三,三	一八,四	一七,六	一九,三	一八,九	一九,四
扶餘郡	一九,四	一八,八	一八,四	一七,七	七,三	六,四	三,八	二〇,一	二,六	三,四	三,六	二,六
舒川郡	一五,三	一四,六	一三,〇	一四,四	二,四	二,三	一六,三	一六,三	一四,九	七,六	一七,一	一七,六
保寧郡	一四,九	一五,六	一五,八	一五,七	三,四	三,九	一六,七	一六,〇	一四,〇	一七,三	一六,三	一六,九
青陽郡	二,三	二,六	一六,八	一七,六	三,三	三,四	一九,六	二〇,四	一九,七	二〇,六	二〇,六	二〇,一
洪城郡	一五,四	一三,七	一五,七	一五,八	三,〇	一八,〇	二〇,一	一八,四	一五,六	一八,六	一八,三	一七,六
禮山郡	三,元	二四,一	一九,七	二〇,四	三,〇	二〇,七	三,八	三,三	一九,五	三,八	三,八	三,元

朝鮮の人口現象

三三三

全羅北道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
瑞山郡	一五・八三	一四・四一	一九・七七	一七・四四	二四・八三	二一・六一	二一・五五	一九・六二	一八・五三	一七・五二	二〇・四三	一八・四八	一九・四四
唐津郡	一七・四三	一五・四三	二五・一九	二六・〇〇	二三・一九	二一・九七	一五・四六	二五・六六	一九・九九	一六・七七	二六・五五	二四・八七	一五・五九
牙山郡	三・六五	三・九四	三・四三	三・〇八	三・〇六	一九・八五	三・三六	三・三三	三・三三	一九・六一	三・四四	三・三六	三・九四
天安郡	三三・三四	三三・五六	三三・四四	三〇・一七	三三・四〇	三〇・六六	二六・〇〇	二四・一八	二五・五五	三三・〇一	三三・一五	三三・三二	三三・三三
平均	一八・七一	一八・〇九	一八・四五	一七・四五	三三・三七	三三・五〇	三〇・九八	一九・八八	一九・九一	一八・五五	二〇・〇三	一八・九〇	一九・五二
蔚山府	一五・七三	一七・七七	二四・九三	二四・一八	一九・〇七	三三・三三	一八・〇〇	一八・二三	一六・八八	一八・八八	一八・九〇	三〇・五九	一九・六八
全州郡	一七・七三	一四・六三	一七・四七	一七・〇〇	一六・一四	一五・三六	一七・五九	一六・五五	一七・六九	一五・五七	一六・五〇	一五・九四	一六・三三
鎮安郡	一七・三三	一六・四一	一九・九七	一九・九九	一七・五一	一六・三三	一・三六	三・一五	一九・三三	一八・〇〇	一五・〇九	一八・〇〇	一六・六一
錦山郡	二〇・八八	二〇・四四	三三・三三	三二・〇七	二二・八〇	三三・〇〇	一九・九一	三〇・四九	二〇・六七	一八・八八	二二・一〇	三〇・三三	三〇・七三
茂朱郡	二〇・一六	二〇・八九	二六・五三	二七・九三	一八・八一	一七・七三	一九・九七	一七・六三	一九・〇〇	一八・〇三	二〇・九二	二〇・三〇	二〇・六九
長水郡	一九・〇七	一六・四六	三三・三九	三三・五〇	一六・〇九	一七・七三	三三・七六	三三・六八	三三・四四	三三・五五	三〇・九一	三〇・六八	三〇・〇九
任實郡	二五・八四	二五・八四	一九・〇八	一六・九四	一四・四八	一五・八五	一九・〇七	一六・六三	一六・五九	一四・六三	一六・九四	一五・四三	一六・三三
南原郡	一八・四一	一八・四三	三三・三六	二七・八一	一八・四三	一六・〇四	三三・七七	三〇・五三	三三・一〇	一九・五一	二〇・三三	一八・四三	一九・三三
淳昌郡	一七・七一	一六・九三	一八・一一	一七・五三	一五・五三	一七・七三	三〇・七三	二二・七七	一九・九九	一七・七六	一八・九〇	一八・一三	一八・四三
井邑郡	九・三三	一〇・三三	一八・三〇	一七・五三	一四・六八	三三・六七	一七・四四	一五・五二	一五・五三	一六・六一	一四・〇〇	一四・〇〇	一四・三三

全羅南道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
高 敞 郡	八・八三	九・四四	一七・三三	一〇・三三	一一・三三	一三・四四	二二・六九	一〇・九三	一五・〇六	一三・〇一	一一・九三	一一・〇〇	一一・七六
扶 安 郡	七・六六	六・三三	一一・六三	九・二二	一三・三三	八・六七	一一・〇四	一〇・八五	一四・〇〇	一一・六三	一一・六八	九・四四	一〇・四四
金 堤 郡	二・四〇	一・四五	三・〇四	一・九一	一・八七	一・六六	一・五三	一・六七	一・八九	一・〇〇	一・七九	一・六九	一・七・四五
沃 溝 郡	二・二三	二・〇四	一・八七	一・八二	一・七三	一・四三	一・〇五	一・五〇	一・五七	一・二八	一・五五	一・三〇	一・四・〇〇
益 山 郡	一・四三	一・三六	一・〇四	一・九三	二・〇四	一・七・〇	一・六三	一・七六	一・八八	一・六八	一・七八	一・七二	一・七・六六
平 均	一・四三	一・四三	一・九三	一・七・九	一・六七	一・五・一	一・六〇	一・六八	一・七八	一・六二	一・七一	一・六二	一・六・九
木 浦 府	二・〇四	一・六五	一・六七	二・〇八	一・六六	一・四・三	一・七八	二・〇四	一・七三	一・六六	一・九三	一・七三	一・七・一〇
光 州 郡	一・五七	一・四九	一・七〇	一・八三	一・三七	一・三・九	一・五九	一・五八	一・四・三	一・九九	一・五九	一・四・三	一・四・四
潭 陽 郡	一・六六	一・五九	三・三九	一・九三	一・四・〇	一・三・九	一・〇一	一・三六	一・一〇	一一・八	一・五九	一・四・七	一・五・一四
谷 城 郡	一・七元	一・七二	一・八六	一・九三	一・五三	一・四・九	一・五九	一・六元	一・三三	一・八五	一・七七	一・七四	一・七・六六
求 禮 郡	一・七六	一・五三	一・八元	一・六三	一・四・九	一・四・三	一・五七	一・四・四	一・七・五	一・五四	一・八元	一・八三	一・八・四一
光 陽 郡	一・六一	一・一八	一・五三	一・二・四	一・二三	一・〇・七	一・二六	一・六〇	一・三三	一・三三	一・三六	一・三三	一・三・四七
麗 水 郡	一・五八	一・三七	一・六四	一・二・八	一・三三	一・〇・九	一・三三	一・一六	一・四・六	一・三三	一・四四	一・三〇	一・三・四
順 天 郡	一・六〇	一・六六	一・八八	一・三七	一・三四	一・四・三	一・八八	一・四・四	一・六三	一・四三	一・五〇	一・四三	一・四・七
高 興 郡	一・五三	一・三三	一・六四	一・三・九	一・六一	一・四・三	一・三三	一・二七	一・三三	一・〇・九	一・四四	一・三三	一・三・九

朝鮮人口の現象

府郡名	大正十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	五箇年平均
實城郡	二・三・二	一四・八	一三・五	一六・〇	一四・八	一五・三
和順郡	一八・五	一七・七	一九・九	一九・八	一七・九	一七・三
長興郡	二〇・六	三三・六	一九・四	一五・八	一六・四	一五・二
康津郡	三〇・六	一九・八	一五・八	三三・四	二〇・三	二二・〇
海南郡	二六・六	一五・七	一八・三	一七・〇	一七・四	一五・七
靈巖郡	三三・六	二二・六	一八・七	一六・〇	一七・〇	一七・六
務安郡	三三・八	二八・九	一四・九	一七・九	二二・九	二三・五
羅州郡	二二・五	二四・一	一四・六	一三・四	一九・四	一八・三
咸平郡	一三・八	一四・九	一八・七	一六・〇	二二・八	二二・六
靈光郡	二二・九	二二・九	二二・三	二二・八	二二・四	二二・四
長城郡	一七・六	一七・三	二二・三	三三・三	一七・三	一五・九
莞島郡	一五・四	一三・五	一四・〇	一四・二	二二・六	二二・六
珍島郡	三三・六	三三・〇	三三・〇	三三・〇	三三・六	三三・六
濟州島	二二・四	一〇・四	二二・九	九・四	一一・七	一〇・三
平均	一五・四	一四・〇	一六・八	一五・三	一五・四	一四・三

慶尚北道

府郡名	大正十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	五箇年平均
大邱府	男 一九・四 女 三〇・五	男 二四・八 女 二七・六	男 三三・九 女 三三・六	男 一七・三 女 一八・八	男 一七・九 女 一九・六	男 二〇・四 女 一九・六

平均

達城郡	一八・〇〇	一七・四一	一六・四八	一六・〇六	五・七五	六・五九	三・四六	三・二二	二〇・五九	一八・九六	一六・九四	一六・三三	一六・五四
軍威郡	一九・七〇	三・七〇	三・六三	三・七七	一九・四四	一八・〇〇	一九・四五	二〇・二四	三・三七	三・九六	三・四一	三・四四	三・四九
義城郡	二〇・五五	三・四〇	三・六四	三・四八	一八・七三	一八・八一	一九・四八	一九・三六	二七・〇三	三・六〇	三・四九	三・七五	三・二一
安東郡	三・五一	三・六三	二八・四七	二六・九六	三〇・一七	三〇・八三	二四・五四	二五・九一	二七・七二	二七・八五	二四・六九	二四・九三	二四・八〇
青松郡	二六・五五	二九・五五	二六・五五	二六・九五	三三・〇九	三三・五五	三三・八二	三〇・三三	二六・四七	二七・二〇	二五・八九	二五・五四	二五・七三
英陽郡	二八・九三	三・五五	三・五四	三・五三	二〇・三三	二二・四三	三三・五三	三三・三三	三三・五五	三三・五三	二四・一一	二四・七五	二四・四四
盈德郡	二七・二一	二六・四二	三・五〇	三・四四	一九・七四	一五・六七	三三・五九	一九・六〇	一八・八六	一六・六〇	一六・二五	三三・八八	三三・〇二
迎日郡	三三・四三	三三・三三	二六・七七	一八・〇八	二〇・三三	一八・六八	一八・六六	一六・五九	一六・四四	一六・〇六	一九・一一	一八・四七	一八・八一
慶州郡	二五・一一	二五・五〇	一五・七九	一五・三四	一六・七九	一五・〇三	一五・〇四	一三・五九	一四・八六	三・四六	二五・五一	一四・一四	一四・八七
永川郡	一六・九三	一六・五七	三〇・九三	一九・九九	一八・一八	一六・七三	一八・一三	一七・四三	一七・一〇	一六・三三	一八・三三	一七・五九	一七・八三
慶山郡	一八・〇〇	一七・六九	三三・七八	三三・四八	三三・五九	三〇・七七	一七・七七	二二・七七	二二・七七	一八・三三	二〇・三三	一九・五二	一九・九一
清道郡	一五・九三	一五・六七	二四・四三	二二・九八	二〇・七一	一九・〇三	二〇・四一	一八・七一	二二・二四	二二・九二	二〇・五四	一八・八八	一九・七四
高靈郡	一九・九三	一六・九七	三三・九三	三二・八八	一五・五〇	一五・一六	三三・六〇	三三・三三	二〇・五三	二七・九八	二〇・七七	一八・七八	一九・七〇
星州郡	一八・三七	一七・四〇	三三・一三	三三・六八	一八・九三	一五・三三	三三・〇〇	三三・八三	三三・五三	三三・三三	三三・四四	一九・六九	二〇・五九
漆谷郡	一七・八四	一七・五五	三三・八三	二七・五三	一七・一三	一六・一六	二二・九〇	三三・四三	二二・七七	一九・六四	二〇・八七	二〇・四〇	二〇・六四
金泉郡	一五・六三	一三・九三	一八・一三	一七・三三	一四・六三	一三・〇七	一六・三三	二六・三三	二二・四七	二二・四七	一八・五三	一六・四七	一七・五四
善山郡	一八・〇一	一五・三二	三三・一五	三三・〇〇	一七・八三	一七・五三	一九・六七	一八・三三	二六・四八	二二・一三	二二・〇七	一九・〇一	二〇・〇七
尙州郡	一一・四〇	一一・一一	三三・三〇	三三・五九	三三・〇〇	三三・七三	三三・五三	三三・二九	二七・三三	二六・五九	二〇・七九	三三・四九	三三・三三
開慶郡	二〇・三三	二〇・三三	二四・四七	二二・八七	一五・〇八	一六・八七	一九・三三	一九・三三	二二・六六	一九・五九	二〇・一八	一九・五二	一九・八六

第六章 死 亡

朝鮮の人口現象

慶尙南道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
醴泉郡	三・九	二・六	三・七	二・三	三・〇	三・九	三・〇	三・六	二・〇	二・七	三・七	三・〇	二・五
榮州郡	六・四	六・九	六・三	六・七	七・〇	六・六	六・八	六・五	六・六	六・三	六・八	六・〇	六・五
奉化郡	九・六	四・四	六・三	三・七	三・九	三・七	三・九	三・〇	三・一	三・六	三・三	三・七	三・五
鬱陵島	一・九	二・七	二・三	二・四	二・五	二・三	二・四	二・九	二・九	三・三	二・六	二・四	二・六
平均	二・九	二・九	三・三	三・〇	三・六	三・七	三・〇	三・六	三・七	三・六	三・九	三・〇	三・〇
釜山府	一・七	一・七	二・九	三・一	三・三	三・二	三・九	三・〇	二・九	三・六	二・六	二・七	二・六
馬山府	六・六	二・八	一・七	一・六	三・九	一・六	三・〇	二・六	二・九	一・九	一・八	一・九	一・六
晋州郡	三・三	二・五	三・六	三・六	二・九	二・五	三・九	二・四	二・四	二・六	二・九	二・四	二・七
宜寧郡	三・元	二・三	一・九	一・五	一・五	一・四	一・六	一・四	一・四	一・七	一・五	一・五	一・五
咸安郡	三・三	二・三	二・三	一・七	一・七	一・七	一・七	一・六	一・九	一・八	一・七	一・六	一・六
昌寧郡	三・七	二・〇	三・七	六・六	一・八	二・四	二・九	二・九	二・四	二・九	二・七	二・四	二・四
密陽郡	二・〇	二・二	二・八	二・三	二・元	二・六	一・八	一・六	一・九	一・七	一・四	一・四	一・四
梁山郡	一・六	一・七	三・三	九・四	三・〇	三・三	三・〇	三・〇	二・七	二・七	二・三	二・四	二・三
蔚山郡	一・六	一・七	二・四	三・三	一・六	一・五	一・七	一・六	一・九	一・七	一・八	一・七	一・六
東萊郡	一・四	一・五	二・三	一・九	二・〇	一・八	一・七	一・七	一・八	一・六	一・六	一・六	一・六

金海郡	三・七	二〇・九	三〇・一	一八・四	一六・六	一五・九	一四・九	一四・六	二・六	一八・九	一七・六	二五・七	一六・三
昌原郡	二・七	二〇・九	一七・九	一六・三	一六・〇	一五・九	一六・三	一五・七	一三・七	一四・九	一三・七	一七・六	一六・三
統營郡	一四・九	一・七	一四・三	一・〇	三・九	一・四	一・六	一・四	一・〇	一・三	一・三	一四・〇	一・七
固城郡	三・六	一・三	三・〇	三・七	一・七	一・九	一・七	一・七	一・九	一・七	三・〇	一・九	一・七
泗川郡	二・九	一・二	二・三	一・四	一・九	一・四	一・五	一・四	一・七	一・四	一・八	一・三	一・七
南海郡	三・四	三・〇	三・三	一・七	一・五	一・四	一・三	一・四	一・九	一・六	一・八	一・六	一・三
河東郡	三・七	三・八	三・九	三・〇	一・七	一・五	一・七	一・六	一・七	一・七	一・六	一・七	一・八
山清郡	二・九	一・三	二・九	三・二	一・六	一・三	一・四	一・七	一・九	一・六	一・九	一・八	一・七
咸陽郡	一・八	一・五	二・四	二・四	一・七	一・七	一・四	一・七	一・八	一・七	一・七	三・四	三・四
居昌郡	一・八	一・七	二・九	二・六	三・七	一・八	二・八	三・九	三・〇	二・六	二・九	三・六	三・六
陝川郡	一・三	一・六	二・三	三・三	一・七	一・九	二・〇	一・九	一・九	一・六	一・七	一・七	一・八
平均	一・四	一・六	二・七	一・九	一・九	一・七	一・八	一・八	一・三	一・八	一・三	一・六	一・七

黄 海 道

郡 名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
海州郡	一六・九	一四・六	一九・七	一七・九	二四・九	二四・〇	二〇・三	一九・四	三三・九	一九・六	二〇・三	一九・九
砥白郡	一九・九	一六・〇	一八・三	一七・三	二四・三	三三・六	二〇・七	三三・六	三〇・〇	一八・六	三三・七	二九・九
金川郡	二九・四	二六・三	二八・四	二七・七	二六・三	二二・三	二九・四	二四・四	二六・六	二二・八	二六・八	二四・七

朝鮮の人口現象

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
平山郡	三・七	一七・九	三・三	一九・七〇	三・三	三・三	三・三	一八・四	三・三	一八・五	三・三	三・三
新溪郡	二九・四	二四・四	二九・五	二五・九	二六・一	二〇・二	二〇・〇	二七・七	三・九	二〇・五	三・〇	二九・八
瓮津郡	三〇・九	一九・九	三・五	一九・八	三・三	一三・〇	一三・三	一三・〇	三・三	一八・四	三・〇	一九・四
長淵郡	一七・〇	一七・七	三・一	二〇・一	三・七	三・五	三・八	一九・七	二七・三	三・四	三・三	三・三
松禾郡	一六・四	一七・〇	一七・六	一八・五	三・三	三・九	三・九	二七・九	二六・五	三・八	二・六	三・七
殷栗郡	二四・四	二〇・八	一九・二	一九・八	二八・八	二四・六	二四・四	三・六	二八・九	二五・四	二・六	二・八
安岳郡	一六・三	一四・〇	三・五	一九・七	二七・六	三・九	二〇・九	二七・七	三・五	二〇・三	二・九	三・〇
信川郡	一九・四	一八・九	二〇・五	一九・三	一九・〇	二〇・五	二〇・九	二七・四	二七・四	二〇・三	一九・四	三・四
載寧郡	二六・六	二五・七	二二・八	二〇・七	二五・元	二二・六	二七・七	三・五	二〇・九	二〇・〇	三・三	三・九
鳳山郡	二〇・六	一七・二	二二・八	二二・六	二五・一	二四・六	二五・元	二六・元	二〇・四	一七・四	二・六	三・七
瑞興郡	二五・六	二五・四	二〇・四	二六・五	二七・一	二〇・七	二〇・四	二六・元	二〇・四	二七・四	二・六	三・五
遂安郡	二二・三	一七・七	二七・三	二二・三	二八・八	二二・七	二九・〇	二六・四	二五・〇	二五・三	二・六	三・三
谷山郡	二二・三	二二・三	二二・三	二二・三	二六・〇	二五・六	二九・七	二九・七	二九・七	二六・五	二・六	二・八
平均	二〇・三	一八・三	二二・五	二〇・〇	二二・七	二二・七	二五・七	二二・四	二二・八	二二・〇	二・七	三・六
平壤府	一五・六	九・六	三〇・九	一六・三	一五・六	一五・〇	一四・七	一四・七	一四・三	一三・三	一六・〇	一三・八

平安南道

鎮南浦府	八・一〇	一六・〇〇	三・九	一八・七	三・三	三・四	一九・九	一九・五	一九・九	一六・五〇	三〇・三	一八・五〇	一九・四
大同郡	三・七	三・六	三・四	一八・八	三・六〇	三〇・三	三・六〇	三・一〇	三・六〇	一九・五	一八・三	三〇・七	三・六
順川郡	元・六	三・六	六・七〇	六・七	元・三	三・四	三・七〇	三・八〇	三・七	三・七	三・〇	三・六	三・〇
孟山郡	三・四	八・二	元・九	三・〇	三・七	三・〇	三・八	三・九	三・九	三・六	三・六	三・六	三・六
陽德郡	三・〇	一・三	三・九	三・〇	三・一〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・〇	三・五	三・七	三・六	三・六
成川郡	三・〇	三・〇〇	三・三	三・八	三・九	三・〇	三・三	三・三	三・三	三・七	三・〇	三・六	三・九
江東郡	三・五	一・七	三・四	三・九	三・〇	三・〇	三・三	三・六	三・三	三・五	三・〇	三・六	三・九
中和郡	六・六	二・二	三・〇	三・七	二・四	一・八	三・三	三・二	三・二	三・九	三・〇	三・三	三・九
龍岡郡	三・六	一・九	三・四	二・四	三・八	三・〇	三・六	一九・六	三・六	一九・三	三・六	三・九	三・一
江西郡	三・七	二・二	三・二	一・六	三・七	三・五	三・三	三・〇	三・三	三・〇	三・〇	三・三	三・六
平原郡	三・七	一・七	三・九	三・六	三・七	三・二	三・八	三・〇	三・〇	三・二	三・〇	三・九	三・六
安州郡	九・〇	一・七	一・七	一・四	六・九	三・三	三・三	三・九	三・四	三・六	三・六	一・八	三・〇
价川郡	一・八	一・三	一・七	一・六	元・八	三・二	三・七	三・九	三・九	三・四	三・六	三・〇	三・〇
德川郡	三・五	三・七	三・九	三・七	三・〇	三・六	三・三	三・三	三・三	三・九	三・九	三・〇	三・〇
寧遠郡	三・四	三・四	六・三〇	三・七	三・六	三・三	三・七	三・七	三・〇	三・〇	三・三	三・七	三・六
平均	三・三	三・八	三・九	三・六	三・三	三・三	三・三	三・六	三・六	三・六	三・七	三・六	三・九

平安北道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	
新義州府	10,533	14,621	13,331	14,777	15,621	22,625	18,990	25,791	23,821	18,433	14,977	19,707	16,422
義州郡	17,730	16,000	16,440	14,891	18,440	16,911	16,771	13,730	13,640	19,941	20,011	16,111	15,001
龜城郡	16,331	13,441	14,851	13,331	10,011	10,011	13,661	11,711	13,661	17,811	11,711	11,911	10,311
泰川郡	18,331	14,641	10,311	18,661	16,771	13,811	16,111	15,811	15,111	14,011	15,811	13,811	14,611
雲山郡	17,331	14,011	16,661	15,771	15,661	14,311	14,991	15,771	16,011	13,111	15,311	13,011	13,811
熙川郡	16,331	15,211	13,661	11,661	12,661	10,911	11,111	12,711	16,401	15,911	13,311	12,911	13,311
寧邊郡	19,011	16,441	19,911	18,331	15,511	13,441	14,441	16,871	16,771	13,111	16,911	15,441	17,311
博川郡	16,411	15,311	15,311	13,011	19,811	10,811	16,011	15,911	19,871	19,871	13,011	10,311	13,311
定州郡	15,311	11,011	19,171	16,711	13,711	13,311	17,611	15,911	15,111	11,411	13,011	10,311	11,311
宜川郡	18,311	18,671	16,661	19,311	13,311	10,661	16,311	13,611	13,911	11,311	13,311	10,711	11,611
鐵山郡	19,111	15,911	19,441	19,311	13,311	18,111	13,411	10,411	16,711	10,411	10,411	18,011	19,011
龍川郡	18,411	16,711	13,311	18,661	16,661	14,911	13,311	10,611	13,311	13,911	13,711	13,611	13,611
朔州郡	13,311	10,311	14,011	13,711	13,311	13,311	16,911	13,911	13,311	13,711	13,311	13,311	13,311
昌城郡	11,011	12,011	13,811	11,311	16,611	12,611	14,611	13,611	14,111	11,611	13,711	13,311	13,311
碧潼郡	11,011	11,311	11,711	14,311	15,711	17,111	14,011	13,611	14,411	13,011	13,011	16,611	10,411

江 原 道

府 郡 名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
楚山郡	三〇・七	三〇・四	三六・五	三三・五	三三・〇	二六・六	四七・三	四三・四	二七・七	三三・〇	三〇・七	二七・七
渭原郡	二四・四	二四・〇	三〇・六	二七・〇	三九・七	三三・九	四八・八	四三・五	三〇・〇	三三・三	三〇・四	二九・五
江界郡	一八・六	二一・三	一九・九	三三・三	三三・八	二四・三	一七・九	一八・九	二四・八	二四・九	二〇・六	二一・四
慈城郡	三三・二	二五・〇	二七・三	二五・三	三三・六	一九・六	三三・六	三三・八	一九・四	二二・〇	二四・六	二四・四
厚昌郡	三三・三	三三・三	三〇・九	三三・六	四〇・四	三三・〇	三〇・三	三三・六	一六・五	一六・六	二五・八	二五・六
平均	一九・五	一七・九	二〇・七	一九・五	二七・六	二六・六	三〇・九	二六・九	二五・七	二二・五	二四・四	二三・六
春川郡	三三・四	三三・三	二七・九	二六・〇	二五・六	二五・〇	二六・六	二六・九	二五・七	二五・九	二七・〇	二七・三
麟蹄郡	二五・八	二六・四	三三・三	三三・四	三三・七	二二・六	三三・六	二〇・元	二六・六	二五・五	二四・四	二四・六
楊口郡	三三・二	三三・四	二七・一	二六・七	二四・三	二七・〇	二七・四	二七・五	二四・六	二五・七	二四・四	二四・六
淮陽郡	二〇・九	三三・七	二二・五	二〇・七	二二・八	二〇・四	二六・四	二二・三	二六・六	二二・七	二四・一	二四・八
通川郡	二二・五	二〇・七	二四・九	二二・五	二二・八	二二・八	一九・九	二二・三	二二・〇	二二・〇	二三・三	二二・七
高城郡	三三・六	二九・三	三三・八	二四・四	二〇・〇	一八・三	二四・六	二二・九	二四・九	二五・七	二四・六	二四・〇
襄陽郡	三三・〇	三三・六	二八・六	二〇・〇	三三・九	一八・五	三三・四	二〇・九	一九・六	二九・〇	二六・三	二六・七
江陵郡	二六・六	四三・七	二五・九	二六・三	一六・八	一七・八	一八・九	一八・八	二四・〇	二二・九	二四・六	二四・六
三陟郡	三三・八	三三・三	三三・〇	二四・六	一九・七	二〇・三	一八・七	三三・九	一六・七	一九・四	三三・九	二四・六

第六章 死 亡

朝鮮の人口現象

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
蔚珍郡	三七・九二	三〇・〇三	三五・〇五	二八・八一	一七・六九	一七・六八	一八・七三	一七・五一	二四・五七	二四・五五	二四・〇〇	二四・〇〇
旌善郡	二七・九八	二七・六六	二七・〇三	二七・〇〇	二七・六四	二六・九九	二七・〇八	二六・六六	二七・〇〇	二七・〇〇	二七・〇〇	二七・〇〇
平昌郡	二五・四四	二五・三〇	二六・五五	二五・五五	二〇・四四	二〇・四四	二〇・七七	二〇・四四	一九・九三	一九・九三	一九・九三	一九・九三
寧越郡	二二・八八	一九・六六	二二・三三	二二・四四	一九・五五	一九・〇〇	一九・九四	一九・六六	二二・四四	二二・四四	二二・四四	二二・四四
原州郡	二五・〇八	二五・六六	二五・六六	二六・五五	二七・〇三	二五・五五	二五・五五	二五・七七	二七・五五	二七・五五	二七・五五	二七・五五
横城郡	二〇・四四	二六・九四	二〇・六六	二七・〇〇	二四・九四	二三・九七	二五・五五	二五・七七	二七・五五	二七・五五	二七・五五	二七・五五
洪川郡	二七・三三	二六・八五	二〇・〇九	二二・五五	二〇・九六	二二・〇四	一九・五五	二一・四四	二六・六六	二七・〇六	二二・四四	二二・四四
華川郡	二五・五五	二〇・五五	二五・九九	二五・六六	二五・五五	二五・六六	二六・四四	二五・六六	二五・六六	二五・六六	二五・六六	二五・六六
金化郡	二五・〇九	二五・九三	二六・九九	二五・三三	二五・九九	二七・〇一	二七・五五	二七・〇一	二七・〇一	二七・〇一	二七・〇一	二七・〇一
鐵原郡	三〇・七七	二六・八八	二五・五五	二六・九三	二七・六六	二四・〇〇	二九・六六	二四・九一	二六・三三	二七・〇一	二六・七七	二六・七七
平康郡	二五・五五	二六・一一	二五・七七	二五・七七	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五
伊川郡	三三・八七	三三・三三	二四・三三	二二・五五	二五・五五	二五・五五	二六・四四	二六・三三	二五・五五	二五・五五	二五・五五	二五・五五
平均	二八・三〇	二六・三三	二六・四一	二六・三三	二五・九九	二五・五五	二五・四四	二五・〇八	二六・九九	二五・七七	二五・五五	二五・五五

咸鏡南道

定平郡	三六・七	三〇・七	三六・三	三六・六	三三・七	三五・三	三三・七	三五・九	三五・九	三五・九	三五・六	三五・八
永興郡	三三・三	三三・六	三三・七	三三・〇	三三・六	三三・五	三三・六	三三・三	三三・六	三三・三	三三・六	三三・六
高原郡	三三・七	三三・三	三三・一〇	三三・六	三三・七	三三・四	三三・六	三三・一	三三・一	三三・一	三三・六	三三・六
文川郡	一八・〇	一八・一	一〇・九	三三・三	三三・一	一七・七	一八・六	一七・四	三三・六	三三・三	三三・六	三三・〇
徳源郡	三三・〇	三三・三	三三・四	三三・四	三三・〇	三三・一	三三・〇	三三・七	一七・七	一八・三	三三・六	三三・〇
安邊郡	三三・七	三三・八	三三・〇	三三・四	三三・七	三三・四	三三・七	三三・〇	一八・六	三三・〇	三三・〇	三三・七
洪原郡	三三・四	三三・一	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二	三三・二
北青郡	三〇・九	二六・三	二六・〇	三三・〇	三三・三	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七
利原郡	一八・四	一八・一	一八・七	一八・三	一八・五	一八・七	一八・七	一八・七	一八・七	一八・七	一八・七	一八・七
端川郡	三〇・九	一八・六	一八・〇	一八・六	三三・四	三三・〇	三三・四	三三・四	三三・四	三三・四	三三・四	三三・四
新興郡	三六・〇	三三・〇	三三・〇	三三・六	三三・九	三三・〇	三三・九	三三・〇	三三・九	三三・九	三三・九	三三・九
長津郡	三三・三	三三・四	一八・六	一八・六	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七
豊山郡	二九・〇	三三・七	三三・〇	三三・四	三三・一	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六
三山郡	三九・七	三九・三	三三・一	三三・〇	三三・三	三三・八	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七	三三・七
甲山郡	三〇・三	三三・六	三六・三	三六・六	三三・八	三三・三	三三・三	三三・三	三三・三	三三・三	三三・三	三三・三
平均	三三・七	三三・三	三三・四	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六	三三・六

咸鏡北道

府郡名	大正十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		五箇年平均		
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女			
清津府	一四八二	一九九七	一七二七	二二六六	三〇〇六	三〇〇〇	一五二六	一六六七	一九七三	二〇八三	一八三三	三・三三	三〇〇〇
鏡城郡	三三・七〇	二六・三三	三〇・三三	二三・一〇	一八・九七	一八・九二	二五・七	二二・九七	三三・四四	一九・九三	三三・四四	三三・三九	三三・九
明川郡	三三・〇一	一九・九七	一九・二五	一六・五三	一八・五三	一八・〇三	三三・一五	三三・一〇	一六・七七	一五・四三	一九・九七	一八・一七	一八・八九
吉州郡	三三・四四	一七・二五	三〇・四八	一五・九七	二四・四四	三〇・一八	三三・一七	三三・一七	一九・四四	一六・六三	二四・一五	三〇・一七	三三・一七
城津郡	三三・四四	一〇・一六	一九・〇一	一七・六	二二・七	一八・八六	二七・七	二四・七一	三〇・四四	一五・六三	三三・一一	一九・三三	三〇・七〇
富寧郡	三三・八一	一九・〇三	一七・九八	一八・二五	一七・八一	一八・三三	二〇・八〇	二〇・〇五	二二・四四	一八・九	一九・九三	一八・八三	一九・九
茂山郡	二七・九	二七・九	二五・六六	二五・七四	三〇・二九	一八・三三	二七・六	一九・五三	二五・四	三三・六	二五・三三	二四・六四	二四・九三
會寧郡	二四・一五	二四・九	二二・〇八	二二・三	一九・四四	二二・六七	二二・三	二二・三	二二・九	三三・九	三三・八	三三・八一	三三・八
鍾城郡	三三・四	二四・三	三三・七	二七・七	二七・九	二四・九	三三・一〇	二四・九	三三・七	二七・三	三三・九	三三・九	三三・四
種城郡	三三・〇	二四・七	二九・五	二六・三	二四・六	二四・六	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九	二四・九
慶源郡	二九・八	二五・〇	二五・七	二五・六	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九
慶興郡	二五・五	二五・六	二五・七	二五・六	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九	二六・九
平均	二四・三	二四・〇一	二四・九	二四・四	二四・七	一九・五	二六・八	二五・〇	二四・〇	一九・六	三三・八	三三・三	三三・一

右の死亡率調を見るときは、最近五箇年間に於ける各地方の男女別死亡率を明瞭にすることが出来

るが、一體に朝鮮では女よりも男の死亡率が高くなつて居る。更に死亡率の高い地方、即ち一箇年人口千人に付死亡數二十五人以上の府・郡と、死亡率の低い地方、即ち一箇年人口千人に付死亡數二十人未滿の府・郡・島とを區別して見ると左の如くなつて居る。

一箇年人口千人に付死亡數二十五人以上の地方

道名	府	郡	名
京畿道	京城府、仁川府、漣川郡、抱川郡、利川郡、龍仁郡、金清郡、坡州郡、長湍郡		
忠清北道	鎭川郡、陰城郡、丹陽郡		
忠清南道			
全羅北道			
全羅南道			
慶尙北道	靑松郡、榮州郡、水化郡		
慶尙南道			
黃海道	金川郡、新溪郡、瑞興郡、谷山郡		
平安南道	順川郡、孟山郡、价川郡、徳川郡、寧邊郡		
平安北道	熙川郡、寧邊郡、朔州郡、昌城郡、碧濟郡、楚山郡、渭原郡、慈城郡、厚昌郡		
江原道	春川郡、楊口郡、高城郡、襄陽郡、旌善郡、平昌郡、原州郡、橫城郡、華川郡、金化郡、鐵原郡、平康郡、伊川郡		
咸鏡南道	元山府、定平郡、北青郡、豐山郡、三水郡、甲山郡		

朝鮮の人口現象

咸鏡北道 鍾城郡、穩城郡、慶源郡

備考 右は自大正十年至大正十四年五箇年間の平均調査なり

一箇年人口千人に付死亡數二十人未滿の地方

道名	府	郡
京畿道	水原郡	
忠清北道	清州郡、沃川郡、永同郡	
忠清南道	公州郡、論山郡、舒川郡、保寧郡、洪城郡、瑞山郡、唐津郡	
全羅北道	群山府、全州郡、鎮安郡、任實郡、南原郡、淳昌郡、井邑郡、高敞郡、扶安郡、金堤郡、沃溝郡、益山郡、	
全羅南道	木浦府、潭陽郡、求禮郡、麗水郡、高興郡、和順郡、康津郡、靈巖郡、羅州郡、靈光郡、莞島郡、濟州島、	
慶尙北道	光州郡、谷城郡、光陽郡、順天郡、寶城郡、長興郡、海南郡、務安郡、咸平郡、長城郡、珍島郡	
慶尙南道	達城郡、迎日郡、慶州郡、永川郡、慶山郡、淸道郡、高靈郡、金泉郡、閉慶郡、鬱陵島	
黃海道	馬山府、晉州郡、宜寧郡、咸安郡、昌寧郡、密陽郡、蔚山郡、東萊郡、金海郡、昌原郡、統營郡、固城郡、	
平安南道	海州郡	
平安北道	平壤府、鎮南浦府、中和郡	
江原道	新義州府、義州郡、鐵山郡	
咸鏡南道	咸興郡	

咸鏡 北 道 明川郡、富寧郡

備考 右は自大正十年五月間の平均調査なり  
至大正十四年

右に示す如く、死亡率の高い地方は、朝鮮の中部以北及び以西に多きも、南鮮には殆んどなく、僅に忠清北道に三郡、慶尙北道に三郡を算するに過ぎない。また死亡率の低い地方は南鮮地方に多く、京畿以北及び以西には死亡率の低い地方は稀れである。要するに朝鮮の出生死亡状態を地方別に觀察すると、大體に於て多産地方は多死地方であり、少産地方は少死地方であることを示して居る。

### 第三節 死亡の季節

内地に於ける死亡は夏季に最も多く、冬期これに亞ぎ、秋季は稍少く、春季に最も少いのを定型として居るが、朝鮮に於ては一月から三月までの間が最も死亡率が高く、四月より十二月まで漸減し、例外として夏季八九月に幾分その前後の月より高いことがある。斯くの如く内地と朝鮮との死亡定型に相違があるのは、その氣候、風土、住居等に基くことが多いのであるまいか。試みに大正十四年の内鮮外人男女別の毎月死亡數、及び各月平均一日の死亡數を示すと左の通りである。

死亡者月別表 (大正十四年)

朝鮮の人口現象

月別	内地人		朝鮮人		外国人		合計		一年平均一日の死亡千に付各月平均一日の死亡
	男	女	男	女	男	女	男	女	
一月	三三四	二九五	一七九四八	一五、一九六	一四	二	一八、二八六	一五、四九三	一〇、二〇四
二月	三四六	三〇〇	二二、七二四	一九、五九二	一二	一	二三、〇七二	一九、八五三	一三、五、四
三月	三六〇	三〇四	二五、九〇五	二三、〇〇〇	二〇	三	二六、三〇五	二二、三〇七	一四、八六二
四月	三〇九	二六八	一九、〇九一	一六、五〇〇	九	三	一九、四〇九	一六、七七一	一三、三、一
五月	三二二	二七七	一六、九一八	一四、五九五	一六	六	一七、四四六	一四、八七六	一三、二、四
六月	三四九	二九七	一六、三〇〇	一四、二〇五	一六	二	一六、六九五	一四、四一三	一三、一、〇八
七月	三一九	三〇七	一五、八七三	一三、七八三	二二	二	一六、三〇四	一四、〇九二	一〇、三、九六
八月	三六九	三九九	一六、〇二〇	一四、〇七四	一三	八	一六、四〇三	一四、四四一	一〇、八、四三
九月	三五七	三五四	一五、〇七七	一三、五〇一	一二	五	一五、四四六	一三、八六〇	九、五、五二
十月	三六〇	三三九	一三、五四二	一一、三八七	九	二	一三、九三一	一一、七八	七、六、九、四
十一月	三九一	二八〇	一三、一四一	一一、三〇〇	一二	四	一三、四四四	一一、五〇四	七、七、三、三
十二月	三七七	二七七	一三、八八九	一一、二九二	一四	三	一四、一七五	一二、五三三	八、〇、二
合計	四、〇〇八	三、六〇七	二〇、五四四八	一七、九二二五	一五九	五〇	二〇、九六二五	一八、二八八二	三、九、二、四、九七

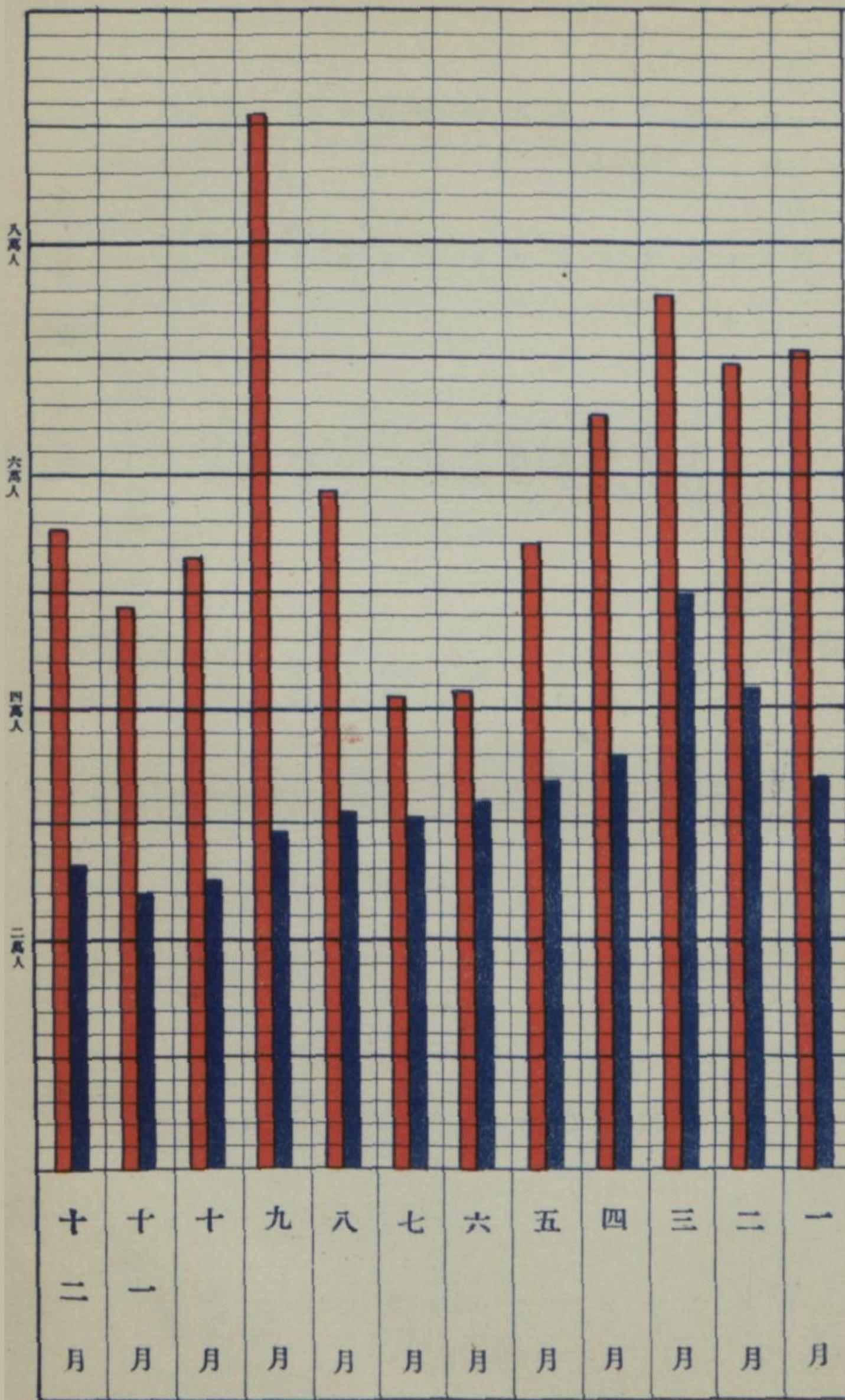
更に大正十年より大正十四年に至る五箇年間の死亡者月別調を示すと次の如くなつて居るが、これを見ると、内地人と朝鮮人とは多少月別の死亡状態を異にし、内地人は夏季の死亡が多く、朝鮮人は春季の死亡が多い定型を示して居る。

# 出生及び死亡者數月別表

(大正十四年)

■ 出生

■ 死亡



八萬人

六萬人

四萬人

二萬人

自大正十年  
至大正十四年 內地人死亡者月別調

月別 / 年次	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年
一月	五七二	七三〇	七〇九	七二二	六二九
二月	五九六	六八三	五五二	七三二	六四六
三月	五九〇	七〇八	六九五	八五六	六八四
四月	五八六	六六七	五九七	七四五	五七七
五月	五八七	六二四	六二四	六九四	五八九
六月	五六〇	六八五	六四三	七二四	六四六
七月	五九九	七四二	六七四	七二八	六二六
八月	六四四	八一六	六八六	七五三	七八
九月	六八五	八八〇	七六二	六九八	七二
十月	六四六	八五二	六三二	六九九	七〇九
十一月	五七四	六五六	五四〇	六八〇	五七一
十二月	五五七	五九九	五〇七	六〇六	五〇九
合計	七一九六	八六四二	七六一〇	八六〇六	七六一五

自大正十年  
至大正十四年 朝鮮人死亡者月別調

## 朝鮮の人口現象

三九〇

月別	年次	大正十年	大正十一年	大正十二年	大正十三年	大正十四年
一	月	三〇,九二一	三二,一四一	三三,二〇七	三四,三三〇	三三,一四四
二	月	二九,八九五	三三,四六一	三四,六七一	三四,七四四	四二,二六六
三	月	三七,九三七	四二,七九六	四三,〇四七	四五,一〇〇	四八,九〇五
四	月	三三,〇九七	三五,八八八	三四,四五二	三七,一六一	三五,六一一
五	月	二八,九四九	三〇,〇四〇	三一,〇八二	三二,八五六	三二,五二三
六	月	二六,三六〇	二八,七〇七	二九,八四九	二八,八六一	三〇,四三五
七	月	二五,一七一	二九,三七〇	二七,四四一	二八,九三七	二九,六五六
八	月	二七,二九七	三〇,二六八	二八,四二八	三〇,四五九	三〇,〇九四
九	月	二七,〇〇三	三二,三〇八	二五,五〇三	二八,一四〇	二八,五七八
十	月	二四,二五七	二五,六四三	三三,四〇二	二五,七七五	二四,九三九
十一	月	二三,二五一	二三,九五二	三二,七二三	二五,八三五	二四,三六一
十二	月	二四,四八六	二六,四一三	二六,五六三	二七,六二六	二六,一八一
合	計	三三七,九三四	三六八,九八八	三五九,三五八	三七八,七七九	三八四,六七三

尙ほ大正十四年に於ける死亡原因中、最も多數を占むる病類に就き、その月別死亡状態を觀察するに便せんが爲め、左に數種の統計を掲げて置く。

神經系病死亡者月別 (大正十四年)

月	內地人		朝鮮人		外國人	
	男	女	男	女	男	女
一	四三	三五	四〇〇九	三,一九九	一	一
二	三四	二五	四,三三七	四,〇〇九	一	一
三	三四	三五	五,〇三八	四,二〇三	三	一
四	三〇	二四	三,九一五	三,三三九	二	一
五	三四	二六	三,五七五	三,〇九一	二	三
六	三三	二五	三,六六一	二,九二八	三	二
七	三六	二七	三,三七四	二,八六一	一	一
八	四一	三一	三,三七八	二,九六九	二	一
九	四〇	三七	三,二七七	二,九八九	一	一
十	三一	二九	三,一六	二,四六五	一	一
十一	三三	三一	二,八四一	二,三九七	二	一
十二	二六	二三	三,〇六三	二,五八五	二	二
合計	四二二	三四八	四三,五八四	三七,三三五	二〇	一〇

消化器病死亡者月別 (大正十四年)

朝鮮の人口現象

月別	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	合計
内地人	男 41 女 51	男 68 女 46	男 60 女 41	男 58 女 33	男 68 女 58	男 95 女 94	男 95 女 87	男 97 女 104	男 82 女 85	男 76 女 71	男 50 女 65	男 48 女 43	男 838 女 777
朝鮮人	男 2,306 女 1,949	男 2,677 女 2,346	男 3,113 女 2,606	男 2,475 女 2,241	男 2,671 女 2,357	男 3,096 女 2,680	男 3,306 女 2,733	男 3,443 女 2,974	男 3,060 女 2,601	男 2,613 女 2,100	男 3,365 女 2,910	男 2,204 女 1,916	男 33,277 女 28,192
外国人	男 1 女 1	男 1 女 1	男 4 女 1	男 1 女 2	男 5 女 2	男 4 女 2	男 3 女 1	男 6 女 3	男 2 女 1	男 2 女 1	男 1 女 1	男 4 女 1	男 33 女 14
合計	男 2,844 女 2,367	男 3,344 女 2,941	男 3,886 女 3,253	男 3,479 女 3,104	男 3,746 女 3,336	男 4,191 女 3,662	男 4,307 女 3,711	男 4,446 女 3,947	男 4,148 女 3,686	男 3,704 女 3,183	男 2,824 女 2,581	男 2,252 女 1,964	男 47,103 女 40,817

呼吸器病死者月別







八	月	七	九	七八一	八二八	↓	↓
九	月	二	一五	七五三	七四八	↓	↓
十	月	八	六	七七〇	七二四	↓	↓
十一	月	六	四	八〇〇	七二八	↓	↓
十二	月	二	四	八五六	八二四	↓	↓
合	計	八〇	八七	一一、四〇〇	一〇、三九四	—	↓

#### 第四節 死亡の原因

朝鮮に於ける現任人口に就き、その死亡者の病類別を見ると左表の如くなつて居る。即ち内地人は消化器病、呼吸器病最も多く、傳染性病、神経系病も尠くない。朝鮮人は、神経系病第一位を占め、それに亞いで消化器病、呼吸器病、感冒等が多い。外國人は、消化器病、呼吸器病、神経系病が多い。これに依つて見るに、氣候、風土、住居等の關係から來て居る病類の尠くないことが判るのである。特に朝鮮は冬期寒氣酷烈なると、空氣の乾燥甚だしき爲め、呼吸器病、感冒、神経系統の疾病の療養には不適當で、動もすれば病勢を昂進せしむる危険がある。

内鮮外人男女別死亡者病類調 (大正十四年)

病名	內地人		朝鮮人		外國人		合	
	男	女	男	女	男	女	男	女
神經系病	四二	三四八	四,五八四	三,七三五	二〇	一〇	四四,〇六	三,七五九三
消化器病	八三八	七七七	三,三二七	二,八一九一	三三	二四	三四,一四八	二,八九八三
呼吸器病	七五一	六〇五	二,六九五	二,三三〇	三七	一〇	二七,六九三	二,三,九四五
感冒	九四	八九	二〇,六一九	一八,五三一	四	一	二〇,七二七	一八,六〇〇
傳染性病	六九五	六三三	一,七二八三	一,四七三五	一四	四	一七,九九二	一五,三六一
老衰	八〇	八七	一一,四〇〇	一〇,三九四	一	一	一一,三二	一〇,四八一
循環器病	三〇八	二七八	八,八四五	七,六四八	七	三	九,一六〇	七,九二九
全身病	二二九	二一〇	五,九七九	四,五九三	六	一	六,一四	四,七〇三
泌尿生殖器病	一〇九	一九六	五,三五四	五,一五〇	二	四	五,四六九	五,三五〇
鼻咽喉病	二二	二四	四,四二一	三,七四四	二	一	四,四四六	三,七六八
皮膚及其附屬器病	四四	二四	四,三四七	三,六三一	一	一	四,三九一	三,六四五
精神病	二五	三〇	三,九八三	三,〇九九	一	一	四,〇〇八	三,一二九
運動器病	四九	一九	三,〇三三	二,四一四	二	一	三,〇七四	二,四四四
寄生虫病	一八	一一	二,七五七	二,七〇三	一	一	二,七五五	二,七二五
畸形及幼年毒	二二〇	二二七	二,九三四	二,三三三	五	一	三,〇〇五	二,三七一
溺死及縊死	五八	三六	一,九五七	一,六三八	一	一	二,〇七八	一,七五五
			二,〇一八	一,四三五	五	一	二,〇八一	一,四六二
								三,五四三

第六章 死

七

三九七

外傷	五	二六	一九〇六	一三六四	一五	一	一九七	一三九〇	三三六七
妊娠及産	一	七一	一	三〇四	一	二	一	三〇九七	三〇九七
脚氣	六〇	四〇	七八六	四〇九	一	一	八四六	四四九	一二九五
眼及其附屬器病	二	五	四四四	四〇三	一	一	四四六	四〇八	八五四
新生物	三〇	二七	四九五	三七	一	一	四六九	三五四	八三
齒牙病	六	一	三三五	三〇四	一	一	三四一	三〇五	六四六
耳病	一〇	四	三八	一六五	一	一	三八	二六九	五九七
不詳	二五	一〇	二八九四	二三四五	四	一	二九三	二三五五	五二七八
合計	四〇〇八	三六〇七	二〇五、四四八	一七九、三三五	一五九	五〇	二〇九、六二五	一八二、八八二	三九二、四九七

死亡者病類別千分比表 (大正十四年)

病名	内地人		朝鮮人		外國人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
神經系病	一〇三	九六	二二二	二〇八	一六	二〇〇	二〇	二〇六
消化器病	二〇九	二五	一六二	一五七	二〇八	二八〇	一六三	一五八
呼吸器病	一八七	一六八	一三三	一三〇	二三三	二〇〇	一三三	一三三
感冒	二二	二五	一〇〇	一〇三	二五	一	九	一〇三
傳染性病	一七三	一七三	八四	八二	八八	八〇	八六	八四
老衰	二〇	二四	五四	五八	六	一	五三	五七
合計	一〇三	九六	二二二	二〇八	一六	二〇〇	二〇	二〇六













以上は朝鮮に於ける現住人口死亡者の病類別比較であるが、朝鮮には、肺ヂストマ、癩、十二指腸蟲、マラリア、再歸熱の如き地方病の蔓延甚だしく、年々のこれが病患死者は實に尠くない。肺ヂストマはザリ蟹、モクヅ蟹を中間宿主として媒介する悪性の疾病で、全羅南道内に於て最も猖獗を極め、黄海道、江原道、咸鏡南道、平安南道、忠清南道等に多く、その他全鮮にこれが發生を見て居るが、患者は殆んど鮮人のみである。十二指腸蟲病は慶尙北道に最も多く、忠清南道、江原道等にも患者が尠くない。癩患者は慶尙北道第一位を占め、慶尙南道、全羅南道等にも多い。マラリア患者は江原道、及び慶尙北道に最も多く、咸鏡南道、黄海道、京畿道、忠清南道等の各地に於てもその流行が尠くない。再歸熱患者は慶尙北道、黄海道、京畿道等に多く發生する。今試みに最近數年間の地方病患死者を示せば左の通りである。

地方病患死者表

病 種	大正九年		同十年		同十一年		同十二年		同十三年		同十四年		
	發生	死亡	發生	死亡	發生	死亡	發生	死亡	發生	死亡	發生	死亡	
肺ヂストマ	内地人	一七二	一九	四	五	七	一	七	六	九	二	四	三
	朝鮮人	五七三	一四三	四二	三	七	七	九	二	九	二	六	三
外國人	四	一	三	一	一〇	一	一四	一	六	一	一	一	

第六章 死 亡

癩		十二脂腸虫		マラリア		再 歸 熱	
内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
九	1,005	1,554	10,737	6,007	8,033	100	2,433
1	300	3	1,255	5	3,696	5	57
2	1,177	11	9,607	25	6,496	4	1,555
2	3,668	19	9,733	33	2,866	1	1,761
10	76	8	1,094	35	6,917	1	1,377
8	92	1	359	3	1,267	1	9
2	292	2	9,907	3	1,677	1	66
4	1,336	16	560	3	1,368	3	4
1	405	1,433	8,760	3	5,044	4	791
5	1,566	17	6,910	16	2,901	1	41
3	401	21	5,953	27	1,639	1	1,911
1	4,333	26	8,761	33	2,011	1	6
1	1	29	1	33	2,517	1	4

### 第五節 死亡者の年齢

朝鮮に於ける死亡者の年齢別状況を見る爲め、試みに大正十四年の死亡者に就いて分類すると、内地人共に五年未満の死亡者の多いのは一般的傾向である。内地人の死亡者は一年未満の者が最も多く、朝鮮人の死亡者は二年以上五年未満の者が最も多い。朝鮮在住の内地人は、朝鮮に於ける酷寒の



朝鮮の人口現象

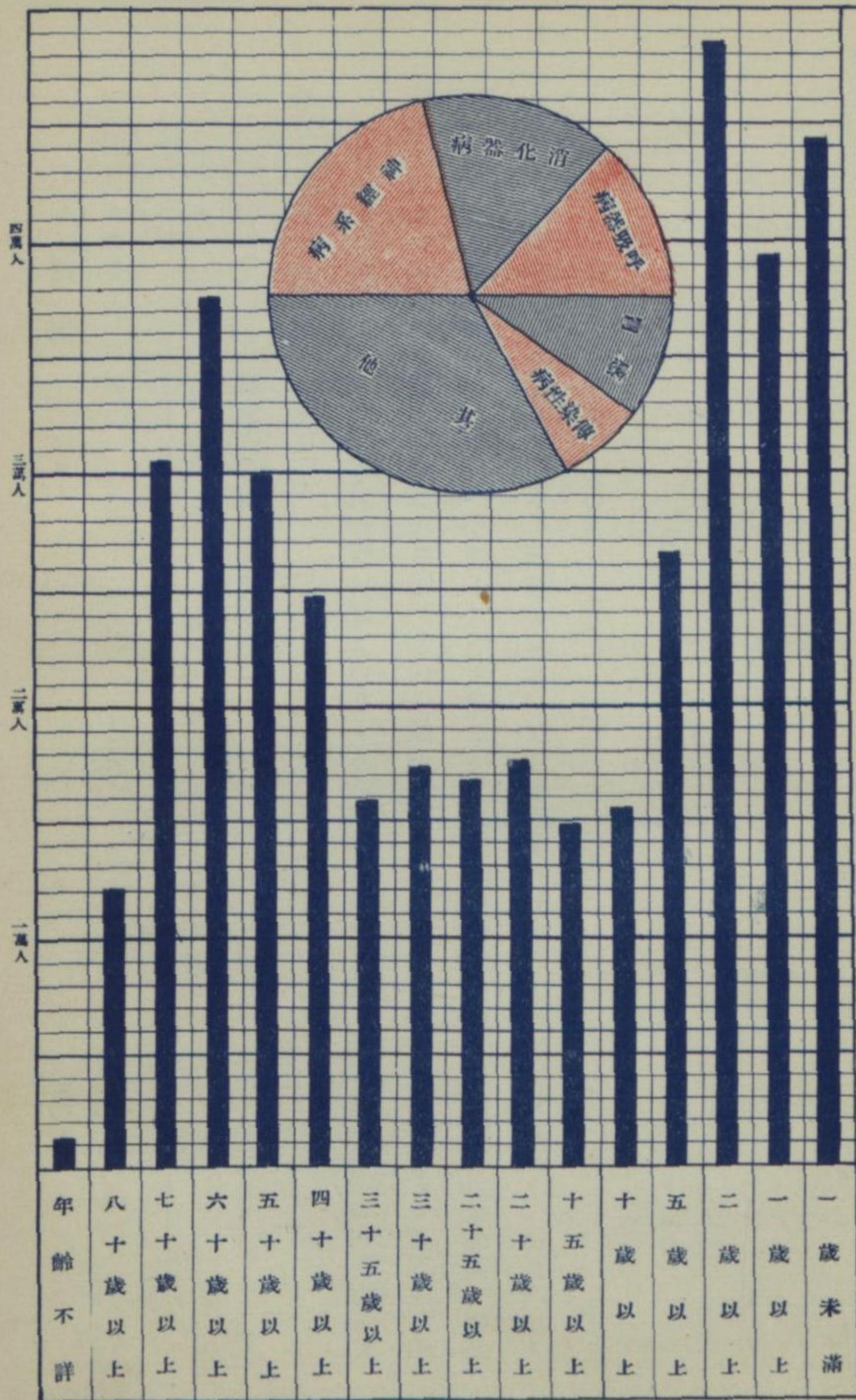
四〇八

五十年以上	三三	一八	一六、五四〇	一三、六八八	一七	四	一六、八七〇	一三、八四〇	三、七〇
六十年以上	三八	一九	一九、七一一	一七、三七八	二〇	二	一九、九四九	一七、四六七	三、七、四二八
七十年以上	一七	一七	一五、四七五	一四、六〇五	三	一	一五、六三三	一四、七七七	三〇、五九〇
八十年以上	三	四	五、八二〇	六、一七四	一	一	五、八五五	六、三三三	一、〇六九
年齢不詳	三	一	七三	四七	一	一	七三	四七	一、一九
合計	四、〇八	三、六七	二〇、五四八	一七、三三五	一九	七	二〇、六二〇	一八、八八三	三九、三四三

死亡者年齢別千分比 (大正十四年)

年齢	内地人		朝鮮人		外国人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
一年未満	一五八	一四三	一七	一〇八	八八	一八〇	一七	一〇九
一年以上	一〇九	九九	一〇四	九八	三五	八〇	一〇四	九六
二年以上	一六	一三	三四	三四	四四	一四〇	三四	一三四
五年以上	六七	六五	六七	七〇	三五	六〇	六七	七〇
十年以上	五九	五九	五九	五九	一九	六〇	五九	五九
十五年以上	四七	五四	五	五	五〇	六〇	六	四〇
二十年以上	六〇	七三	四	六	五七	六〇	四	四六
二十五年以上	五三	六五	四	四	八二	一〇〇	四	四四
三十年以上	五〇	五八	四	四	二六	六〇	四	四五
合計	四、〇八	三、六七	二〇、五四八	一七、三三五	一九	七	二〇、六二〇	一八、八八三

# 死亡者年齡及び死因別表 (大正十四年)



三十五年以上	四三	四五	四〇	四一	一一三	八〇	四〇	四二
四十年以上	八〇	七六	六四	六〇	一八三	三〇	六四	六二
五十年以上	七六	五二	八二	七二	一〇七	八〇	七〇	六六
六十年以上	五七	五二	六六	六六	六三	四〇	九五	九五
七十年以上	四四	四四	七五	八二	一九	一	七九	八一
八十年以上	八	二二	二六	三四	一	三〇	二六	三四
年齢不詳	一	一	四	三	一	一	三	三
合計	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

右の死亡者千分比例の示す如く、内鮮人を通じて五年未満の幼児の死亡率が最も多く、特に内地人は一年未満の嬰兒の死亡率が著しく高くなつて居る。嬰兒、幼児の死亡率に次いで死亡率の高いのは六十年以上の年齢級に属する者であるが、この年齢級以上に属する者の人口数は極めて少数であるから、その人口數に對する死亡率は實際に於ては高くなつて居るのである。試みに一歳未満の死亡者累年數を見ると左の通りである。

一歳未満の死亡者累年表

年次	内地人		朝鮮人		外國人		合計
	男	女	男	女	男	女	
明治四十四年	三四〇	二六五	六九四	五六〇	?	?	七三二
							五九二
							一三二八

朝鮮の人口現象

四一〇

大正元	年	五〇九	四一八	九五九八	八一四五	—	—	一〇,一〇七	八,五六四	一八,六七一
同	二	三七六	三〇八	一〇,一〇三	九,四六六	—	—	一〇,四七九	九,七七五	二〇,二五四
同	三	四一三	三七八	一三,二八四	一二,六八二	二	—	一三,六九九	一三,〇六一	二六,七六〇
同	四	四九五	三五二	一三,八三七	一二,一〇〇	二	—	一四,三三四	一三,三六二	二五,六九六
同	五	六八〇	五〇〇	一八,九〇四	一三,五九六	四	—	一九,五八八	一四,〇九六	三三,六八四
同	六	五七〇	四八六	二四,五八二	一九,六八一	二	二	二五,一五四	二〇,一六九	四五,三三三
同	七	八一八	六三三	二五,六七七	二〇,六三八	一	五	二六,四五六	二二,二六五	四七,七二二
同	八	三七六	五三三	一五,一〇九	一二,三九八	八	二	一五,四九三	一二,七三三	二八,二二五
同	九	四八〇	四五四	二二,七九九	一七,二九九	二	二	一三,二九一	一一,七五五	二五,〇四六
同	十	六二二	四六六	一三,九二六	一一,五五五	七	三	一四,五五四	一一,〇三四	二六,五七一
同	十一	七二〇	六一八	一七,五七二	一四,九二六	九	三	一八,三〇〇	一五,五四七	三三,八四七
同	十二	六六四	五五八	一九,四〇二	一六,〇七二	一〇	三	二〇,〇七六	一六,六三三	三六,七〇九
同	十三	八六六	六九六	二二,一三八	一八,六〇二	七	六	二四,〇二一	一九,三〇四	四三,三二五
同	十四	六三三	五二二	二二,九四〇	一九,三九二	一四	九	二四,五八七	一九,九二二	四四,四九九

右の表に依りて累年の一歳未滿の嬰兒死亡者數を見るに、大正七年の四萬七千七百二十一人最も多く、大正六年の四萬五千三百二十三人がこれに亞いでゐる。その原因は此の兩年に於て流行性感冒の發生數が著しく多かつたのである。尙ほ最近數年間に於て、一歳未滿の死亡者數の漸次増加

して居るのは内地と同様の傾向であるが、この現象は特に注意を要することである。更に一歳未満の死亡者と出生との關係を示せば左の通りになつて居る。

一歳未満の死亡者と出生との比較

年次	出生計		一歳未満死亡計		男女各出生層に於一歳未満の死亡計	
	男	女	男	女	男	女
明治四十四年	一五,二二二	一三,一六五	七,二七四	五,九一五	一三,一八九	四,八一
大正元年	二二,一四七	二〇,一六一	一〇,一〇七	八,五六四	一八,六七一	四,四五
同 二年	二四,九五六	二二,〇三二	一〇,四七九	九,七七五	二〇,二五四	四,三一
同 三年	二五,六三三	二二,三六一	一三,六九九	一三,〇六一	二六,七六〇	五,八一
同 四年	二二,七,二六九	二〇,六,五八二	一四,三三四	一一,三六一	二五,六九六	六,〇四
同 五年	二九,六,七九二	二六,四,四七二	一九,五八八	一四,〇九六	三三,六八四	六,六〇
同 六年	三〇,一,七四九	二七,〇,四三七	二五,一五四	二〇,一六九	四五,三三三	八,三六
同 七年	三〇,四,〇六六	二七,四,五三五	二六,四五六	二二,二六五	四五,七二二	八,七〇
同 八年	二五,二,四四一	二二,一,九七六	一五,四九三	一二,七三三	二八,二二五	六,二四
同 九年	二五,五,六〇七	二二,一,三三六	一三,二九一	一一,七五五	二五,〇四六	五,一〇
同 十年	二七,九,〇三三	二五,八,八六〇	一四,五五四	一二,〇三四	二六,五七八	五,二一
同 十一年	三三,八,九四	二八,一,一一	一八,三〇〇	一五,五四七	三三,八四七	五,八三
			五九,五,〇〇五		五八,三	五,五三
					五八,三	五,六五

朝鮮の人口現象

年 齡 別	内地人		朝鮮人		外国人	
	男	女	男	女	男	女
一 年 未 滿	五八	四三	六〇九五	四八〇六	二	三
一 年 以 上	四五	五二	四〇〇六	三〇七四	一	一
二 年 以 上	五三	五四	四三三二	三六八九	一	一
五 年 以 上	四五	三三	二〇三三	一八〇三	二	一
十 年 以 上	一八	一五	一、一八〇	一、〇一四	一	一
十 五 年 以 上	一五	九	一、一〇〇	一、〇八四	一	一
二 十 年 以 上	一九	一六	一、四八二	一、二五三	一	一
二 十 五 年 以 上	二一	一四	一、五八五	一、三六二	一	一

即ち出生數百に對する一歳未滿の嬰兒死亡數は、大正十四年に於て、男六・四四、女五・八五、平均六・一六を示し、大勢より見て近年漸増の傾向を辿つて居る。尙ほ大正十四年に於ける各種病類の死亡者に付、その年齢別及び内鮮外人別を擧げて見やう。

神經系病死亡者年齢別 (大正十四年)

消化器病死亡者年齡別 (大正十四年)

年齡別	內地人		朝鮮人		外國人	
	男	女	男	女	男	女
三十年以上	14	19	1631	1353	2	2
三十五年以上	10	13	1633	1404	4	1
四十年以上	24	25	2744	2331	5	1
五十年以上	43	19	3724	3009	3	1
六十年以上	33	17	5420	4634	1	1
七十年以上	23	21	4625	4520	1	1
八十年以上	2	1	1767	2020	1	1
合計	43	348	4354	3725	20	20

年齡別	內地人		朝鮮人	
	男	女	男	女
一年未滿	180	136	4183	3338
一年以上	144	126	3957	3296
二年以上	131	133	4894	4275
三年以上	47	48	2683	2361
四年以上	22	25	1415	1244
五年以上	25	37	1286	1130
合計	7	77	1413	1130

第六章 死

四一三

朝鮮の人口現象

年齢別	内地人		朝鮮人		外国人		合計
	男	女	男	女	男	女	
二十年以上	二四	三	一,三四六	一,三三三	三	一	二八
二十五年以上	二六	三六	一,四一九	一,二八四	四	一	三一
三十年以上	三四	三〇	一,三二四	一,三三六	三	一	三七
三十五年以上	三二	二七	一,三四三	一,二二七	三	一	三九
四十年以上	五九	五三	二,三四一	一,七三四	〇	一	四二
四十五年以上	四五	三七	二,六九〇	一,九四四	四	一	四六
五十年以上	四四	三三	二,四八九	二,一三四	一	一	四八
五十五年以上	二〇	三四	一,五〇三	一,三五四	一	一	五〇
六十年以上	五	二	四四八	四六〇	一	一	五二
七十年以上	一	一	六六	七一	一	一	五四
八十年以上	一	一	一	一	一	一	五六
合計	八三六	七七七	三三,三七七	二六,一九一	三三	一四	四一

呼吸器病死者年齢別 (大正十四年)

年齢別	内地人		朝鮮人		外国人	
	男	女	男	女	男	女
一年未満	二四二	一〇二	二,九九三	二,四八九	四	二
一年以上	一一九	九〇	二,八九六	二,四九二	二	三
二年以上	二二〇	一〇五	三,四四八	三,〇一一	一	一
三年以上	五四	四二	一,七九〇	一,五九〇	一	一

十一年以上  
十五年以上  
二十年以上  
二十五年以上  
三十一年以上  
三十五年以上  
四十一年以上  
五十一年以上  
六十一年以上  
七十一年以上  
八十一年以上  
不詳  
合計

感冒死亡者年齡別 (大正十四年)

年 齡 別	男	內 地 人	女	男	朝 鮮 人	女	男	外 國 人	女	二	二六	九七四	八六二	一	二
										二七	二八	九四八	七八四	一	一
十										二	二八	九七四	八六二	一	二
十五										一	二六	九四八	七八四	一	一
二十										三	四四	一〇六三	九七一	三	一
二十五										一	四五	一〇七三	八八一	一	一
三十										三	三〇	一一〇七	九七五	三	一
三十五										五	二四	一〇六一	八五五	五	一
四十										七	四八	一八二八	一四〇六	七	一
五十										一	五〇	二三八二	一七四〇	一	一
六十										五	二二	二七三三	二六二〇	五	一
七十										二	二七	一九七二	一九五六	二	一
八十										一	一	五四四	六六五	一	一
不詳										一	一	八四	四三	一	一
合計										七	七五二	二六九五	一三三三〇	七	一〇

第六章 死

亡

四一五

朝鮮の人口現象

年 齡 別	内地人		朝鮮人		外國人	
	男	女	男	女	男	女
二十五年以上	20	21	334	285	1	1
十五年以上	10	15	168	169	1	1
十年以上	9	7	134	94	1	1
五年以上	7	3	81	85	1	1
二十五年以上	6	2	108	87	1	1
二十五年以上	3	1	93	76	1	1
二十五年以上	1	3	85	78	1	1
二十五年以上	7	1	79	74	1	1
二十五年以上	5	7	131	124	1	1
二十五年以上	6	6	148	153	1	1
二十五年以上	2	0	137	137	1	1
二十五年以上	1	2	94	81	1	1
二十五年以上	1	1	27	33	1	1
二十五年以上	1	1	39	41	1	1
合計	94	89	2029	1853	4	1

傳染性病死者年齡別 (大正十四年)

一 年 齡 別  
年 未 滿

男 36  
女 35

男 2490  
女 1981

男 1  
女 1

老衰死亡者年齡別 (大正十四年)

一	年	以上	五二	二九	一七〇二	一三三三	一	一
二	年	以上	六八	六八	三五〇九	二九六五	一	一
五	年	以上	五〇	五九	一五八六	一五五六	一	一
十	年	以上	三四	四〇	七四六	六九四	一	一
十	年	以上	六〇	六五	六六三	六一一	一	一
二十	年	以上	八〇	八二	七二七	六六四	一	一
二十	年	以上	七三	六四	六八九	五五三	二	一
三十	年	以上	五三	四八	七〇二	五四一	一	一
三十	年	以上	四九	三六	五九八	四九八	二	一
四十	年	以上	六六	五四	八三九	六八四	一	一
五十	年	以上	四四	二三	七四四	六二六	三	一
六十	年	以上	二三	一五	七二二	五九五	一	一
七十	年	以上	五	四一	四二五	三八三	一	一
八十	年	以上	一	二	一〇九	一四五	一	一
不詳			一	一	四二	二七	一	一
合計			六九五	六三	一七二八三	一四、七三五	一四	四

年 齡 別	内地人		朝鮮人		外國人	
	男	女	男	女	男	女
三十一年以上	1	1	1	2	1	1
三十五年以上	1	1	1	7	1	1
四十年以上	2	1	233	268	1	1
四十年以上	2	1	1,297	1,035	1	1
五十年以上	2	4	3,366	3,184	1	1
六十年以上	25	15	3,910	3,779	1	1
七十年以上	31	43	2,019	1,974	1	1
八十年以上	26	25	198	225	1	1
不詳	1	1	198	225	1	1
合計	80	87	11,040	10,394	1	1

### 第六節 傳染病

朝鮮に於ては未だ衛生施設の充分ならざるものあり、國民の衛生思想幼稚にして、種々の迷信祈禱を行ひ、往々豫防處置を忌避し、且つ醫療機關不足の結果、傳染病の流行蔓延甚だしく、コレラ、赤痢、腸チブス、バラチブス、痘瘡、發疹チブス、猩紅熱、デフテリアの如きもの、患者數は多いのであ

る。これ等の流行は年によりて異なるが、コレラは大正九年の二萬四千二十九人、同八年の一萬六千九百十五人、赤痢は大正六年の二千九十七人、同十一年の一千九百三十二人、腸チブスは大正十一年の三千八百一人、同七年の三千七百五十二人、痘瘡は大正九年の一萬二千五百三十二人、同十年の八千三百十六人等が最も流行の猛烈なる年であつた。而して傳染病中にも悪性なるコレラ、痘瘡、赤痢、チブスに就いて見るに、赤痢、腸チブスは内地人の罹病者が最も多く、コレラ、痘瘡は朝鮮人の罹病者が特に多い。また猩紅熱、チフテリア等も内地人の罹病者が多いが、内地人は一般に赤痢、腸チブス等に對して抵抗力弱く、朝鮮人は案外これに對して平氣である。今試みに明治四十三年より大正十四年に至る累年の傳染病患者數及び死亡者數を示せば次の如くなつて居る。

傳染病患者及び死亡者數

年次	種別	流行性									
		コレラ	赤痢	腸チブス	バラチブス	痘瘡	發疹チブス	猩紅熱	チフテリア	腦脊髄膜炎	合計
明治四十三年	患者	四六	一、四六	八七	一	二、五六	一	四	一	一	五、四三
	死者	三二	三三	二五	一	四八	一	八	一	一	一、五〇
同 四十四年	患者	四	一、四八	一、五八	三	三、七三	六	四	一	一	六、〇〇
	死者	二	三三	四〇	一	五二	二	一	一	一	一、三六

朝鮮の人口現象

四二〇

大正元年	死者	1,333	患者	1,935	111	1,141	14	77	140	140	1,110
二年	死者	6	患者	100	9	121	4	7	27	27	27
	死者	1	患者	1,668	130	333	6	14	124	124	2,000
三年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
四年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
五年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
六年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
七年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
八年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
九年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
十年	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000
	死者	1	患者	1,302	26	300	11	10	20	20	2,000

以上は朝鮮に於ける傳染病の患者數及び死亡者數であるが、更に内鮮外人別に最近五箇年の各種傳染病患者數並に死亡數を示し、更にその死亡率を見ると左表の通りである。

内鮮外人別傳染病患者對死亡者及び死亡率調

種別人別	大正十年		大正十一年		大正十二年		大正十三年		大正十四年	
	患者	死亡死亡%	患者	死亡死亡%	患者	死亡死亡%	患者	死亡死亡%	患者	死亡死亡%
コレラ	1	100.0	1	100.0	1	100.0	1	100.0	6	100.0
内地朝鮮人	1	100.0	1	100.0	1	100.0	1	100.0	6	100.0
外朝人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
赤痢	15	100.0	15	100.0	15	100.0	15	100.0	15	100.0
内地朝鮮人	15	100.0	15	100.0	15	100.0	15	100.0	15	100.0
外朝人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
腸チフ	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0
内地朝鮮人	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0	1,107	100.0
外朝人	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0

第六章 死 亡



傾向あるは、文明の缺陷を愈々大ならしむるもので洵に憂慮すべき現象である。大正十四年中の内地に於ける自殺は一萬二千二百四十九人で總死亡の一分に當つて居るが、朝鮮に於ける自殺は僅に一千六百七十七人にして、總死亡に對し四厘二毛に過ぎないのである。即ち總死亡に對する自殺の割合が朝鮮は内地の半ばにも達しないのは、民族性として或は朝鮮人が、内地人に比して樂天的なところもあるかも知れぬが、主として兩者の社會狀態の相違が、人類の生存生活に影響を及ぼし、自殺數の多少を生ずる所以であると信ずる。

自殺者數累年比較表

年次	内地人		朝鮮人		外國人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
明治四十三年	五七	三三	一八九	二〇二	三	一	二四九	二五
同 四十四年	四八	三三	三三三	四一七	一	二	三七一	四五
大正元年	六三	三三	三五五	四八二	三	一	四二一	五二
同 二年	六七	四二	三六〇	四〇六	六	一	四三三	四五〇
同 三年	六六	二四	二九六	四七三	四	一	四六六	四九七
同 四年	五一	三一	四四四	四八八	八	一	四八三	五二〇
同 五年	五五	四五	四七四	五八三	三	一	五三二	六二八

朝鮮の人口現象

四二四

同	六年	五五	三五	五三	五八七	二	一	五八〇	六三三
同	七年	四五	四二	五五	六二〇	九	一	五七九	六六二
同	八年	四五	三四	四八九	六〇八	四	一	五三八	六四二
同	九年	五五	四一	五三	五九	三	一	五九一	五七一
同	十年	六二	四〇	六五	六一〇	七	一	六八四	六五〇
同	十一年	六七	六七	六三	六三	五	一	六九五	七〇〇
同	十二年	八八	八〇	七九	六九八	六	一	八八三	七一九
同	十三年	九八	五〇	七六	六四	四	一	八七六	六四
同	十四年	八〇	五〇	八六	六七	一〇	一	九四八	七一九

右の表に依りて見るに、明治四十三年に於ては男二百四十九人、女二百二十五人、計四百七十四人の自殺者があつたが、大正十四年にはその數が男九百四十八人、女七百二十九人、計一千六百七十七人になつて居る。而して大體に於て最近數年間に於ては自殺者數は年々漸増の傾きがある。尙ほ人口に比して内地人の自殺者が朝鮮人のそれよりも著しく多いのは、内地よりわざわざ死場所を求めて渡鮮し、殊に關釜連絡船などより投身する者の少くないといふ如きことにも原因すると思ふ。

次に大正十四年に於ける自殺者を地方別に觀察すると左表の通りで、京畿道の男二百四十一人、女百十六人が最も多く、慶尙北道の男六十八人、女九十一人これに亞ぎ、最も少きは咸鏡北道の男二十

人、女十五人である。これを見ても、文化の進み經濟の發達した地方が、その然らざる地方に比して自殺數の多いことを示して居るが、内地に於て滋賀、山口、神奈川、長崎、和歌山等に自殺が稍多くして、沖繩には特に少く、青森、富山、石川、佐賀等も少い方であるのと對照して、その地理的分布に興味深い事實を認めることが出来る。

自殺者地方別 (大正十四年)

道名	内地人		朝鮮人		外國人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
京畿道	二三	九	二六	一〇七	二	一	二四	二六
忠清北道	二	二	六〇	四九	一	一	六三	五一
忠清南道	二	五	六六	五〇	一	一	六八	五五
全羅北道	九	二	三七	四三	二	一	四八	四五
全羅南道	一	四	四〇	五五	一	一	四二	五九
慶尙北道	七	六	六二	八五	一	一	六八	九一
慶尙南道	二三	一〇	五五	三五	一	一	七九	四九
黃海道	二	四	六六	四九	一	一	六九	五三
平安南道	五	二	六三	三三	一	一	六九	三五
平安北道	一	一	八三	六三	一	一	八四	六四





親族ノ不和ニ因リ	二	四	三五	九〇	一	一	三七	九四
罪ノ發覺ヲ懼レ又ハ刑ノ免レ難キ爲	一	一	二三	八	一	一	二三	八
將來ノ事ヲ苦慮シテ	六	四	二三	四三	一	一	二九	四七
商業等ノ爲損失シ又ハ負債償却ニ困ミテ	二	一	二七	四	一	一	二九	四
淫逸放蕩ノ末	五	一	二二	二	一	一	二六	三
雇人又ハ父兄等ノ懲戒又ハ譴責ニ因リ	一	一	二〇	二七	一	一	二二	二七
離縁ヲ悲ミテ	一	一	二	七	一	一	二	七
夫又ハ子等ノ不行狀ヲ悲ミテ	一	一	四	二二	一	一	四	二二
私通妊娠ヲ憂ヒテ	一	一	一	五	一	一	一	五
老衰身ノ不自由ヲ苦慮シテ	一	一	八	三	一	一	八	三
結婚ヲ忌ミテ	一	一	一	九	一	一	一	〇
身體ノ不具ヲ歎シテ	一	一	二	二	一	一	二	三
鬱憂ニ因リ	一	一	二六	二五	一	一	二九	二六
其ノ他	六	七	三八	三三	一	一	四三	三九
不詳	一	三	二四	三	一	一	二四	一五
合計	八〇	五〇	八六	六七	二〇	一	九四	七九

次に自殺者の自殺方法を調べて見ると、縊死が著しく多く、男四百九十一人、女二百七十一人である。また入水、毒死も尠からず、入水男二百人、女二百四十九人、毒死男百六十五人、女百七十五人

である。而して内地人は毒死が最も多く、男二十人、女十七人で、縊死がこれに亞ぎ、男十八人、女九人であるが、朝鮮人は縊死が非常に多く、男四百六十六人、女二百六十一人で第一位を占め、入水は男百八十八人、女二百三十六人で第二位を占めて居る。自殺の方法に依りて自殺者の教育程度や性格が彷彿されるとせば、この事實を通じて、内鮮人及び男女の心理状態の一端は窺ひ得られる。

自殺者方法別 (大正十四年)

自殺方法別	内地人		朝鮮人		外國人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
縊死	一八	九	四六六	二六一	七	一	四九一	三七一
入水	二	三	一八八	三三	一	一	二〇〇	二四九
刃物ニテ	二	三	四二	一七	一	一	五三	二〇
銃砲ニテ	六	一	一	一	一	一	七	一
毒物又ハ劇毒藥ヲ服シテ	二〇	一七	一四三	一五八	二	一	一六五	一七五
汽車ニ觸レテ	三	七	一八	六	一	一	三三	一三
爆藥ニテ	一	一	一	一	一	一	一	一
合計	八〇	五〇	八五六	六六八	二〇	一	七四八	七九

更に自殺者の年齢別を見ると内鮮人共、二十歳以上三十歳未滿の者最も多く、三十歳以上四十歳未

満の者がこれに亞いで居る。即ち二十歳以上三十歳未満の者は、内地人四千八百人、朝鮮人四百四十二人で、三十歳以上四十歳未満の者は内地人三十三人、朝鮮人三百二十四人である。この自殺年齢の定型は内地も朝鮮も略ぼ一致し、人生の煩悶時代を明白に示して居る。

自殺者年齢別 (大正十四年)

年齢別	内地人		朝鮮人		外国人		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女
十六歳未満	二	一	一八	二〇	一	一	二〇	二二
二十歳未満	四	七	四七	一三〇	一	一	五二	一三七
三十歳未満	二五	一九	二〇四	二二八	二	一	二三五	二五六
四十歳未満	一八	一五	三二	二三	三	一	二二三	二二六
五十歳未満	一五	四	二九	八五	一	一	一四五	八九
六十歳未満	九	二	九七	四六	二	一	一〇八	四八
七十歳未満	二	一	九二	二四	一	一	九四	二五
七十歳以上	一	一	五四	一八	一	一	五五	一九
年齢不詳	一	一	七	四	一	一	七	四
合計	八〇	五〇	八五八	六七六	二〇	一	九四八	七五九

參考表

阿片癮者及びモルヒネ類中毒者調査表 (大正十四年三月末現在)

道別	種類		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計			
	朝鮮人	内地人																		
京畿道	支那人	朝鮮人	2	1	3	7	4	11	5	2	7	6	1	7	11	8	23			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
忠清北道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
忠清南道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
全羅北道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
全羅南道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
慶尙北道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
慶尙南道	支那人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
	内地人	朝鮮人	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2			
道別	種類		二十歳未満			二十歳以上			三十歳以上			四十歳以上			五十歳以上			合計		
	種類		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計

第六章

死

亡

四三一



農村住民の腸内寄生蟲卵調査表 (大正十四年度)

道名	検査人員		有卵者數		検査人員對有卵者百分比		調査地
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	
京畿道	—	三、三二	—	三〇六七	—	九二六〇	高陽郡上往十里、下往十里、與農里、祭基里、東幕下里、東幕上里
忠清北道	五	八七二	二	五八〇	四〇〇〇	五五七六	鎮川郡、龍莎里、合牧里、閑川里
忠清南道	七五	一、〇〇〇	三七	六五七	四九三三	六五七〇	洪城郡五官里、禮山郡禮山里、保寧郡大川里、論山郡仁川里、道坪里、舒川郡郡司里
全羅北道	一七五	一、四二六	一〇六	八八〇	六〇五七	六二二四	益山郡木川里
全羅南道	—	一、〇〇七	—	八九一	—	八八四八	光州郡鄉社里、院村里
慶尙北道	三五	六、四九八	二二	四八六一	六〇〇〇	七四八一	安東郡安東、豐南、豐山、南復、臥龍、東後、一直、南先の各面
慶尙南道	八	四三六	四	三五二	五〇〇〇	八〇五〇	泗川郡、三千浦、宮旨里
黃海道	四六〇	二七六	四三	二四八	九二七四	八九八六	載寧郡内宗里、北芝里
平安南道	—	五、六三〇	—	一、七七二	—	三、二四七	松石里、江浦里、鳳鳴里、桐林里、龍西里、龍興里、陽德里
平安北道	二二三	九四四	七五	七五八	六、四八	八〇三〇	義州郡威化面下端洞
江原道	—	九三三	—	八〇六	—	八六三九	春川郡牛頭里
咸鏡南道	八	二九九	七	二九四	八七五〇	九八三三	文川郡龜山里
咸鏡北道	—	七三三	—	四四九	—	六一二一	江津洞、富寧洞、元汀洞
合計	八八八	二三、三六六	六七四	一五、六一四	七五九〇	六六八一	

第六章 死 七

各種蟲卵検査成績 (大正十四年度)

道名	蠅 虫		鞭 虫		十二指腸虫		絲 虫		蟻 虫		東洋毛 様線虫		肝チヌ トマ		肺チヌ トマ		横川氏 ノタゴニヌ		其の他	
	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%	有卵者	%
京畿道	2,645	78.83	2,033	61.22	208	6.42	330	9.67	—	—	61	1.91	—	—	—	—	—	—	—	2,024
忠清北道	505	68.93	6	0.82	12	1.60	16	2.16	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
忠清南道	500	69.30	120	16.34	13	1.74	20	2.66	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	51
全羅北道	59	8.06	47	6.30	5	0.67	16	2.16	53	7.17	6	0.82	17	2.28	1	0.13	3	0.40	3	0.40
全羅南道	166	22.55	70	9.43	10	1.34	9	1.21	26	3.51	1	0.13	2	0.27	—	—	—	—	—	2
慶尙北道	3,76	57.53	1,84	26.42	3	0.40	9	1.21	—	—	2	0.27	7	0.93	—	—	—	—	—	2
慶尙南道	30	4.07	15	2.00	3	0.40	—	—	2	0.27	1	0.13	—	—	—	—	—	—	—	4
黄海道	6	0.81	6	0.81	7	0.93	2	0.27	—	—	3	0.40	—	—	—	—	—	—	—	—
平安南道	1,111	17.00	1	0.13	2	0.27	7	0.93	4	0.53	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7
平安北道	78	10.46	1	0.13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
江原道	65	8.68	1	0.13	1	0.13	6	0.81	—	—	1	0.13	—	—	—	—	—	—	—	—
咸鏡南道	26	3.48	2	0.27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
咸鏡北道	40	5.33	5	0.67	1	0.13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合 計	13,301	56.92	6,299	27.60	1,224	4.86	1,681	6.63	1,360	5.33	1,770	6.96	1,616	6.16	1,616	6.16	1,616	6.16	1,616	6.16

學校生徒腸內寄生蟲調查表 (大正十四年度)

道名	小學校		普通學校		中等學校		檢 查 學 校 名
	生徒數	檢 查 人	生徒數	檢 查 人	生徒數	檢 查 人	
京 畿 道	40,570	2,670	3,830	2,933	3,455	2,270	日の出、南大門、西大門、元町 師範附屬、校洞、女子普通、漢河、龍山
忠 清 北 道	40,400	1,444	1,459	500	557	557	清州、私立大成、清南
忠 清 南 道	4,464	700	6,803	3,331	3,360	433	公州、用浦、舒川、青陽、禮山、江景、論山、馬九浦、陽村
全 羅 北 道	6,400	590	2,663	2,024	733	598	全州女子、全州第一、三、新興、紀全、湖英
全 羅 南 道	1,661	1,331	1,121	940	1,031	1,031	順天
慶 尙 北 道	—	—	—	—	88	733	釜山第一、二、三、四、五、六、七、八、島
慶 尙 南 道	5,321	3,690	3,526	2,326	1,806	1,358	釜山、釜山鎮、富民、牧
黃 海 道	1,521	1,741	1,521	333	368	368	海州第一、二、北粟
平 安 南 道	3,455	2,933	2,261	2,100	2,670	2,670	山手、若松、鎮南浦、中和、安州、永興、肅川、順安、軍隅里

第六章 死 亡

四三五

朝鮮の人口現象

平安北道	八元	五〇一	一、〇七七	三六	四九七	新義州	新義州	新義州高普、新義州商業、新義州工業
江原道	三三	一七六	九七九	七六	三七七	三三三	春川	春川高普、道立師範、春川農業
咸鏡南道	六五	五九九	六三一	五九	—	—	咸興第二	—
咸鏡北道	二、四七	一、六三三	八、一八三	六、三三	一、三〇四	七〇	吉州、富寧、雄基、清津、羅南、明川、咸興、羅南中學、穩城高普、羅南高女、道立師範、會寧商業、吉州農業、穩城農業	
合計	一八、九四二	四、四六四	三三、三三三	〇、四三三	一、一、〇九	—	—	—

検査人員に對する蟲卵保有者百分率 (大正十四年度)

道名	有卵者	蛔虫	鞭虫	十二指腸虫	絛虫	蟯虫	東洋毛様線虫	肝臟アストマ	肺ダマ	横川氏マタゴニス	其他の虫
京畿道	六九七四	五六六七	三七四四	五三〇	〇〇五	—	〇四八	〇九〇	〇〇三	—	—
忠清北道	五四六五	四六九九	二二一八	四六五	一五五	〇八〇	〇二三	—	—	—	〇一八
忠清南道	六三二一	五〇二八	二二三四	二二四	〇六八	—	—	〇六〇	—	—	一四六
全羅北道	七二七八	五六五七	四三二二	一〇六	〇〇九	〇八七	〇一九	〇一六	—	—	〇〇三
全羅南道	七〇〇〇	五四一〇	二七九一	六九五	二三二	〇八八	〇四二	〇一九	二〇九	〇〇五	〇七〇
慶尙北道	六四二〇	二九〇七	四二八〇	〇九四	—	—	〇四〇	二六九	—	〇四〇	五三八
慶尙南道	五五九六	二八八七	四一〇二	三四〇	〇〇二	二六三	〇六七	〇三三	—	—	〇二三
黄海道	九〇〇六	八七九五	八九〇三	〇四二	〇六七	〇三二	〇九二	—	〇一〇	〇〇五	—

官公立學校生徒身體檢查表 (大正十三年)

內鮮人學校生徒(男)身長、體重、胸圍比較

年齡	檢 查 人 員		身 長		體 重		胸 圍 (常 時)	
	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人	內地人	朝鮮人
平安南道	五九九	五二八五	六九五	〇五六	〇六六	一〇三	〇〇一	〇二一
平安北道	七三三四	六二八五	一一三三	一五二	四六七	一四三	—	—
江 原 道	七六二三	六〇二〇	三二七四	九一三	二〇六	—	〇四一	〇二五
咸鏡南道	九六〇四	六六七七	八四二五	—	—	—	—	—
咸鏡北道	六〇九五	五四一九	一七四〇	〇九二	〇三四	〇〇九	〇二七	〇一〇
計	六四三八	五二二八	二五七七	二九六	〇六六	〇八〇	〇二六	〇二五

第六章 死 亡

朝鮮の人口現象

年 齡	檢 査 人 員		身 長		體 重		胸 圍 (常 時)	
	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人	内地人	朝鮮人
十四年	一,八九三	一三,二八七	四六五	四六三	九四六	八七四	二二七	二二八
十五年	一,四九九	一九,二七三	四八六	四七五	一〇,三三三	九六〇	二三八	二三三
十六年	一,二四八	一六,七五六	五〇八	四九三	一一,二二二	一〇,五四九	二四四	二四一
十七年	九四三	一一,四七六	五三二	五一〇	一三,三一一	一一,七〇九	二六二	二五〇
十八年	五九五	七,六二〇	五二六	五一五	一三,九一一	一二,六八七	二六六	二五八
十九年	二九九	五,二七八	五三〇	五二九	一四,〇四六	一三,五三二	二七一	二六一
二十年	二四九	二,三五七	五三六	五三六	一四,四一九	一四,三五八	二七三	二六三
二十一年	一一四	一,一三三	五四〇	五三九	一四,八六六	一四,九六四	二七七	二七四
二十二年	七九	二九〇	五三七	五四二	一四,七五九	一五,九三三	二七七	二八〇
二十三年	五四	二〇三	五三四	五四一	一四,八七三	一四,九五六	二七五	二八〇
二十四年	一七	六九	五三七	五四三	一四,八五八	一四,九二一	二七七	二八一

内鮮人學校生徒(女)身長、體重、胸圍比較

十一年	三六〇四	二六三一	四一三	四一三	四一三	六七四二	六四一五	一九七	一九二
十二年	三一六四	二四〇〇	四三〇	四三三	四三三	七三九三	七〇三一	二〇四	一九八
十三年	二七三三	一九六七	四五二	四四一	四四一	八六四二	七六八三	二一五	二〇三
十四年	一六六九	一四一七	四六九	四四七	四四七	九三二八	七六一九	二二六	二二三
十五年	一二八〇	九四五	四八三	四六二	四六二	一一〇七	九四七五	二三三	二一八
十六年	九四八	六五一	四九〇	四八八	四八八	一一九四九	一〇九八八	二四一	二一九
十七年	三四〇	三四四	四九三	四九八	四九八	一二二七七	一一九二	二四八	二三六

內鮮人學校生徒發育概評、營養、脊柱、視力、及び屈折狀態人員比較 (大正十三年)

	發育概評			營養			脊柱			視力及屈折狀態				
	甲	乙	丙	甲	乙	丙	正	彎	正	兩眼	遠視	近視	亂視及其他	
內地人(男)	三、四七	八、〇四六	一七、七六七	五、六四四	一九、三八	一一、〇二二	七、七九	三、三三	二、一〇	二、八四	九二	七	七三	一四
朝鮮人(男)	三四七、六八	六四、九三	二七、〇七六	二九、三五	五九、二二	一〇、九〇	二、〇九	二、〇九	二、四二	七四	二七	九四	九	一五六
內地人(女)	二六、二四	六、〇六	一六、三八	五、一五七	一六、八三	一〇、八四	四、七	三、六	一、八元	一〇、一〇六	六七	二	二五	六三
朝鮮人(女)	一九、四〇〇	三、六六一	九、六五六	六、〇八一	八、三三	一〇、五五	六七	一、八八	〇	八、一四三	七七	八	六	四三

內鮮人學校生徒疾病累年比較 (百分比)

朝鮮の人口現象

年 度 別	検査人員	内地人 (男子)		眼 疾		聽力障害	耳 疾	齲 齒	其 他
		トラホーム	其 他						
大 正 二 年	一,二八六	一四,一九	五,四八	一,七三	三,二五	四,三,五五	五,三一		
〃 三 年	一,四八三	一八,八四	三,二一	〇,八四	三,六三	五,五〇六	九,〇六		
〃 四 年	一,六七〇	一三,五三	二,六三	一,三三	三,六八	五,六〇一	六,八四		
〃 五 年	一,八六三	一三,三二	三,八一	一,二八	三,四六	五,六五五	三,七九		
〃 六 年	二,〇九九	九,九五	二,九八	一,二五	二,九七	五,六七三	五,一〇		
〃 七 年	二,三〇七	一一,二六	二,六一	〇,七一	二,一九	五,五三九	七,四九		
〃 八 年	二,三〇八	一〇,四二	二,九五	〇,八七	二,六〇	五,八三三	八,一八		
〃 九 年	二,四四三	一〇,二四	三,一一	〇,六〇	一,九三	五,五三八	六,四七		
〃 十 年	二,五九六	一〇,五一	二,三二	〇,七七	一,六六	五,五八六	五,七五		
〃 十 一 年	二,八三三	九,三四	三,五六	〇,六四	二,七五	五,一三二	八,四六		
〃 十 二 年	二,八六七	六,七六	三,二〇	一,一一	二,四三	四,八八一	八,四四		
〃 十 三 年	三,二七七	六,四六	三,八六	〇,八一	三,七七	五,三二四	一,二三八		
大 正 二 年	一,一三六	一,三七〇	五,〇一	〇,九八	二,〇二	四,五六七	五,六六		
〃 三 年	一,二八九	二,〇四四	三,八九	〇,五七	二,二六	五,一〇三	八,三〇		

内地人 (女子)

第六章 死

亡

四四一

大正	朝	鮮人	(男子)					
四年	〃	一四、七三二	一六〇九	三七四	〇七三	二八六	五九三七	五四九
五年	〃	一六、八八六	一三六〇	四〇三	〇六二	二三八	五八六二	三七六
六年	〃	一八、二二五	一〇六八	三五七	〇六八	一九二	五八九一	四三五
七年	〃	一八、九二七	一一七八	二五二	〇三六	一五九	五七二八	七四二
八年	〃	一七、〇七〇	一一三三	三二一	一四一	一四四	五六九六	五七八
九年	〃	二一、九三三	一〇六一	三三三	〇三九	一八八	五九〇四	五三六
十年	〃	二三、一九二	一〇九三	二四四	〇六五	一四八	五七二四	五三五
十一年	〃	二五、〇〇八	一〇六九	四〇二	〇六一	二三九	五六九八	七二一
十二年	〃	二九、六一五	六八七	三七七	〇三九	一八九	五四七四	八六〇
十三年	〃	二八、二四四	七六〇	四三三	〇六二	三六七	三八三三	一一三四
二年	〃	二八、五二五	七〇二	二四三	一六八	二九九	一一六七	八〇三
三年	〃	三三、三一九	九六七	一九四	〇九六	一六一	一〇四三	四四〇
四年	〃	四五、一一〇	六七二	二八四	一三五	一八一	一〇三四	五七七
五年	〃	五六、七三二	七五四	二六五	一三六	二三八	一一二五	四六五
六年	〃	六二、六八五	五九一	二六五	一〇五	一八九	一〇八九	五九七
七年	〃	六三、三四六	五二九	二〇四	〇六三	一四三	一〇六八	四六六
八年	〃	五六、三三五	五八五	一八六	一三一	二〇二	一一八一	三九二

朝鮮の人口現象

九	十	十	十	十
年	年	年	年	年
七〇・八三五	九五・一〇七	一四五・七三九	二〇八・九四〇	二四七・六二八
四六六	四・二一	四・四八	三・四五	三・八二
一・八五	一・三八	二・六六	一・四八	一・九三
〇・五三	〇・七〇	〇・七三	〇・四二	〇・四三
一・四五	一・四八	一・六四	一・三三	一・五三
一〇・二七	一〇・二九	一〇・五一	九・四四	九・七四
二・八一	二・九三	三・四一	三・〇五	三・〇一

内鮮人學校生徒疾病比較 (百分比) (大正十三年)

女	朝鮮人	内	地	人	検査人員	眼		聴力障害	耳疾	齲齒	其他
						トランスーム	其他				
男	朝鮮人	内	地	人	検査人員	六・四六	三・八六	〇・八一	三・七七	五・二四	二・二八
						三・八一	一・九三	〇・四三	一・五三	九・七四	三・〇一
女	朝鮮人	内	地	人	検査人員	五・九二	二・八二	〇・三八	二・二九	一・七二	二・八一
						七・六〇	四・五三	〇・六三	三・六七	五・八・二三	二・二四
男	朝鮮人	内	地	人	検査人員	二・四七	三・八六	〇・八一	三・七七	五・二四	二・二八
						二・四七	一・九三	〇・四三	一・五三	九・七四	三・〇一
女	朝鮮人	内	地	人	検査人員	二・八二	四・五三	〇・六三	三・六七	五・八・二三	二・二四
						二・八二	二・八二	〇・六三	三・六七	五・八・二三	二・二四

大阪に於ける朝鮮人



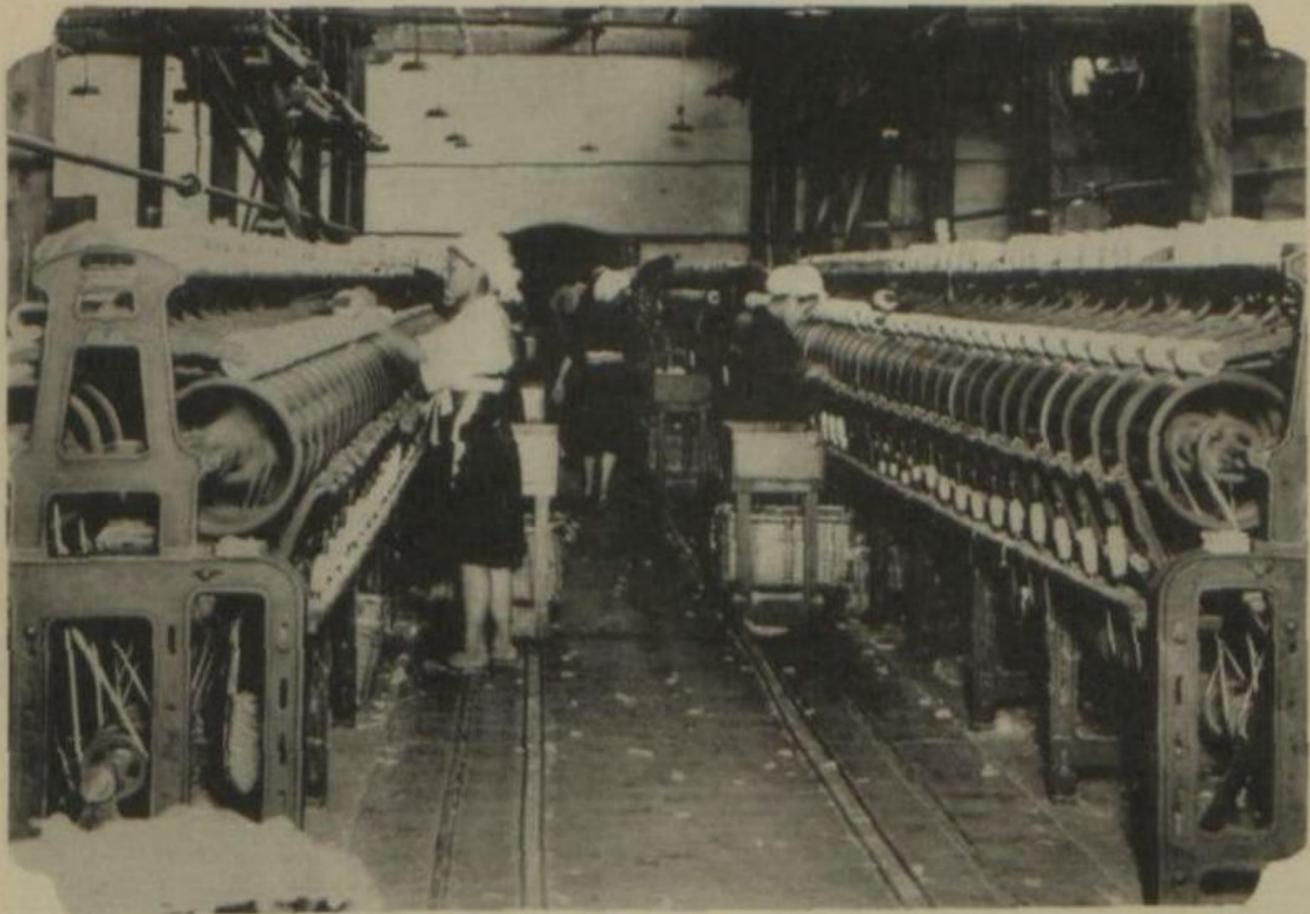
人鮮の頭埠港築阪大るす鮮歸路海



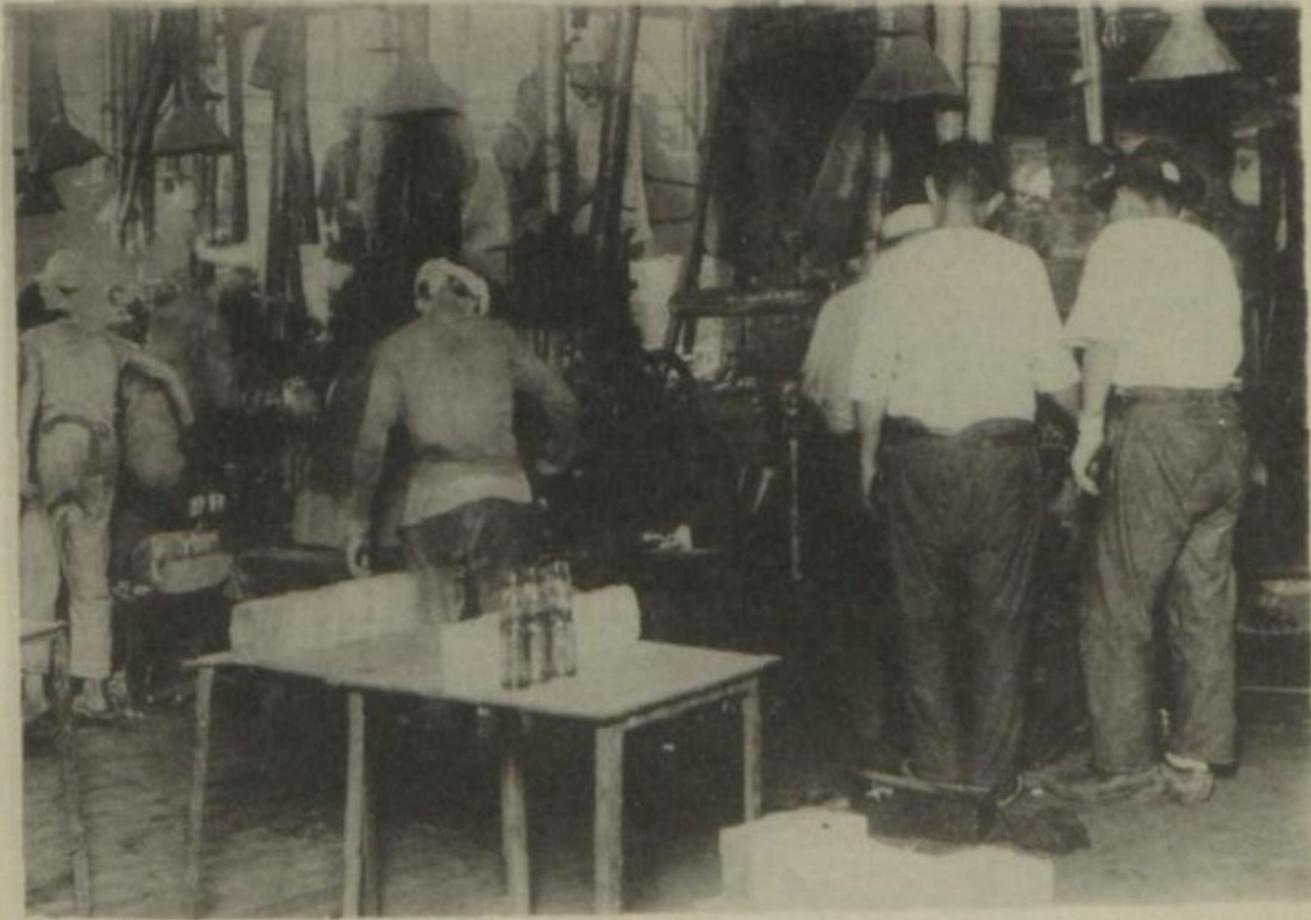
群の人鮮るせ陸上に港築阪大



者働勞人鮮の事従に事工設敷車電村寺井藤



工女人鮮の場工績紡田和岸



山谷硝子工場の働く鮮人職工



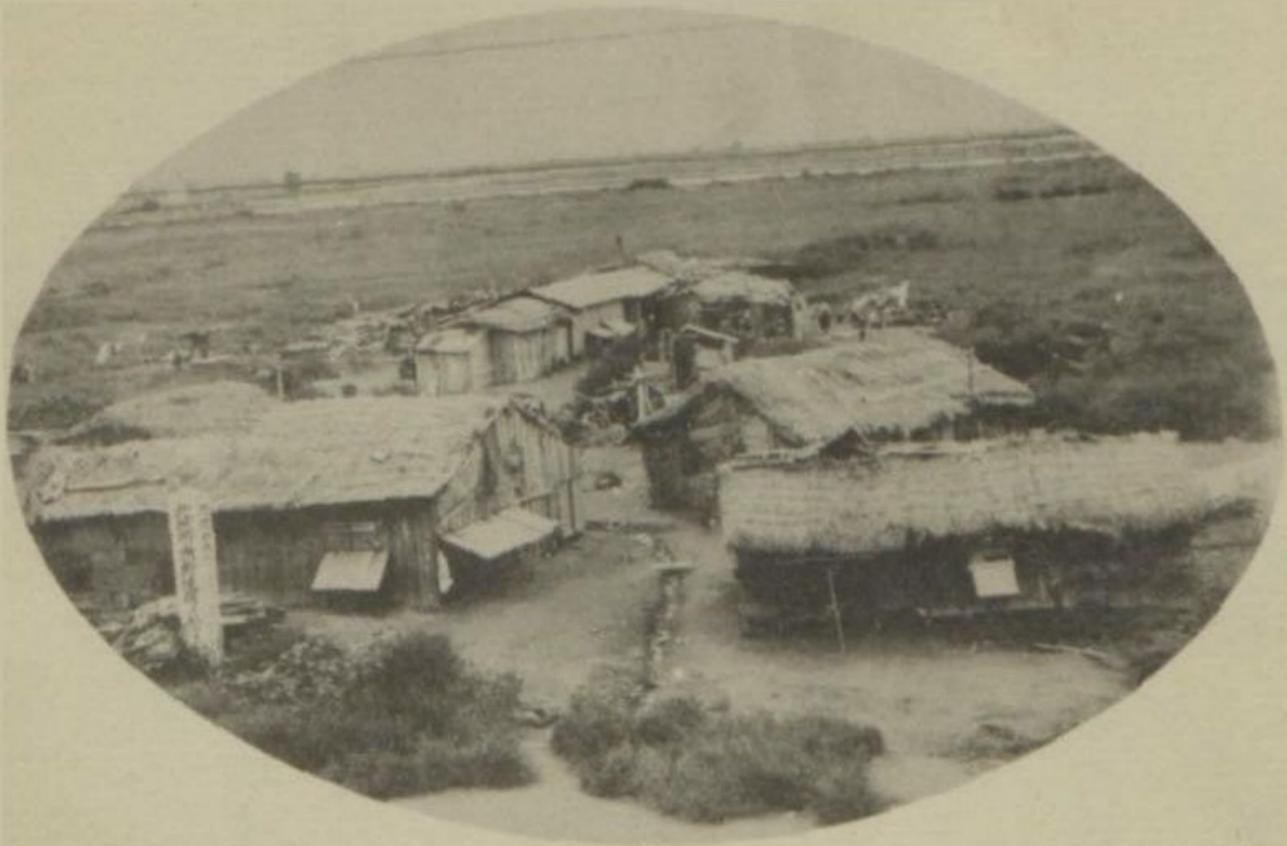
岸和田紡績の食堂の鮮人女工



部學夜人鮮校學小四第美濟



落部集密人鮮の内町橋東



船町空地の鮮人小屋



鮮人の密集せ猪飼町附近

# 第七章 人口の増減

## 第一節 人口の自然増加

凡そ年々の人口の増減は、その年に於ける出生、死亡、移住の如何に依りて多少を生じ、これが數年間に亘る趨勢を見るときは、略ぼ人口増減の大勢は察知し得られるのである。朝鮮に於ける出生、死亡状態に就いては既に説明した通りであるが、先づその人口の自然増加即ち出生死亡の差増を見ると、明治四十三年以降の狀態は左の如くなつて居る。累年の消長を檢するに、差増の最も大なるは、大正十二年の三十五萬二千四十一人この差増率人口千に付一九・六八人にして、明治四十三年の差増六萬九千九百六十人、この差増率五・二六人が最も低いのである。大體に於て、最近に至り差増率は高くなり、大正十二年以降は毎年人口千に付十數人の差増を示して居る。

人口自然増加累年表

年次	出生	死亡	差増	人口千に付差増
明治四十三年	一八〇、五三九	一一〇、五六九	六九、九六〇	五・六

朝鮮の人口現象

四四四

同	四十四年	二八二,八六七	一六七,一五七	一一五,七一〇	八・三三
大正	元年	四一八,三〇八	二二七,〇〇一	一九一,三〇七	二・九〇
同	二年	四五九,九八八	二七八,三六三	一八一,六二五	一・七五
同	三年	四四七,九八五	三〇七,四八一	一四〇,五〇三	八・八二
同	四年	四四三,八五一	三四三,〇二四	一〇八,八二七	六・一九
同	五年	五六一,二六四	三七〇,七四六	一九〇,五二八	一・四五
同	六年	五七二,一七六	四〇九,三三〇	一六二,八四六	九・六〇
同	七年	五七八,五九一	五三三,六〇六	五四,九八五	三・三三
同	八年	四七四,四二七	三九二,二八八	八二,一三九	四・七九
同	九年	四七六,八三三	四〇四,二四〇	七二,五九三	四・二〇
同	十年	五一八,〇六三	三四五,二六二	一七二,八〇一	九・九〇
同	十一年	五九五,〇〇五	三七七,七九〇	二二七,二五五	一・三三
同	十二年	七一九,一六一	三六七,一一〇	三五三,〇四一	一九・六八
同	十三年	六九〇,六二二	三八七,五六六	三〇三,〇三六	一六・七七
同	十四年	七三三,四九三	三九二,四九七	三三九,九九六	一七・三五

併合後に於ける累年の人口自然増加趨勢は右の通りであるが、これを内地に於ける人口自然増加状態に比較するに、過去十年間に於て大正十四年の八十七萬五千三百八十五人、人口千に付差増率四

六五人が最も高く、大正七年の二十九萬八千八百三十人、差増率五・三六人が最も低くかつたのである。大正七年は内地と同じく朝鮮も流行性感冒の猛威を極めた年で、人口の自然増加率は三・二二人に降り、同八、九年も四人臺にあつたのである。然しながら最近數年間に於ては朝鮮は内地に比して著しく人口自然増加率が高く、大正十四年に於ては二・七人の差を生じて居る。更に大正十四年に於ける各道別の人口自然増加状態を見ると、差増數の最も大なるは慶尙北道の四萬一千六百七十五人、最も小なるは忠清北道の一萬二百四十六人にして、差増率の最も高きは平安北道の二五・七八人、最も低きは全羅北道の一〇・一一人である。而して人口千に付一箇年二十人以上の差増ある地方は、平安北道、咸鏡南道、咸鏡北道、平安南道の四道にして、その他の諸道は慶尙北道の一八・三九人を除けば、概して人口の自然増加は餘り高くないのである。

人口自然増加道別表 (大正十四年)

道名	實數			人口千に付差増
	出生	死亡	差増	
京畿道	七〇,六六五	四六,一五一	二四,五五四	二三・二
忠清北道	二九,四三七	一九,一九一	一〇,三四六	二三・六
忠清南道	四三,九〇二	二三,八三二	二〇,〇七〇	一六・四

朝鮮の人口現象

四四六

全羅北道	三六、三七五	三、八一七	一三五五八	一〇・一一
全羅南道	六三、一六四	三、二四二	三三、〇三三	一五・三
慶尙北道	九一、四三五	四九、七六〇	四一、六七五	一八・五九
慶尙南道	七一、〇三〇	三七、九四〇	三三、〇九〇	一六・八七
黃海道	五五、〇四二	三二、七六五	二二、二七七	一六・四四
平安南道	五四、二五五	二六、〇九八	二八、一五七	三三・五八
平安北道	六六、九七六	三、三二八	三五、六九八	三五・七八
江原道	五二、二〇六	三、〇七三	二二、一三四	一六・二三
咸鏡南道	六一、九二三	二九、一九二	三三、七三二	二四・三一
咸鏡北道	二七、〇八三	一三、二二九	一三八六四	三三・六四
總計	二二、四九三	三九、四九七	三九、九九六	一七・五

大正十四年の内地に於ける人口自然増加率の最も多い府縣は、青森縣の二〇・八〇にして、これに亞ぐは宮城縣の二〇・八〇、北海道の二〇・〇六、秋田縣の一九・四五、静岡縣の一八・七三、山形縣の一八・五七、巖手縣の一八・四九、栃木縣の一八・三六、福島縣の一八・二四等である。内地に於ては東北地方及び北海道の人口自然増加率が最も高いが、それでも平安南北道や咸鏡南北道の人口自然増加率に較べると遙かに低いことがわかるであらう。内地に於ける人口自然増加率の最も低い地方は、沖繩縣の六・七五にして、これに亞ぐは大阪府の八・七五、京都府の九・七五、滋賀縣の一

○・○二、石川縣の一〇・三七等である。朝鮮中人口自然増加率の最も低き全羅北道の一〇・一一は、石川縣と滋賀縣の中間に位して居るのである。尙ほ府・郡・島別に就いて、大正十年より同十四年に至る人口自然増加率の高い地方と低い地方とを見ると左の如くなつて居る。

人口自然増加千人に付二十二人以上の地方

地方別	人口千に付 自然増加數	地方別	人口千に付 自然増加數	地方別	人口千に付 自然増加數
慶山郡	二五・二	安州郡	二二・四	朔州郡	二四・四
清道郡	二三・五	寧遠郡	二二・〇	咸興郡	二二・七
鬱陵島	三〇・七	義州郡	二二・〇	定平郡	二五・〇
金海郡	二二・四	泰川郡	二六・三	高原郡	二二・四
南海郡	二二・四	寧邊郡	二四・一	端川郡	二六・四
孟山郡	二二・八	博川郡	三三・三	長津郡	二二・三
陽德郡	二二・四	定州郡	二六・五	豊山郡	二五・〇
成川郡	二二・九	宣川郡	二九・六	明川郡	二二・四
龍岡郡	二二・七	鐵山郡	三三・八	城津郡	二二・五
江西郡	二二・五	龍川郡	二七・三	慶源郡	二二・四

人口自然増加千人に付十人以下の地方

朝鮮の人口現象

地方別	人口千に付 自然増加數	地方別	人口千に付 自然増加數	地方別	人口千に付 自然増加數
京城府	五八八 <sup>人</sup>	長水郡	九二八 <sup>人</sup>	延白郡	五四九 <sup>人</sup>
仁川府	△一三三	淳昌郡	八九七	新義州府	一八〇
高陽郡	九四三	高敞郡	〇六五	慈城郡	九三一
抱川郡	八四一	沃溝郡	八三一	厚昌郡	九二三
楊平郡	九九九	木浦府	五四九	旌善郡	九七〇
陰城郡	八四六	谷城郡	六二六	平昌郡	九三五
忠州郡	九六一	靈岩郡	八二六	原州郡	六〇七
丹陽郡	五八一	靈光郡	八八八	橫城郡	九二九
論山郡	九七五	大邱府	九二三	華川郡	八〇七
洪城郡	八七六	高靈郡	六六一	元山府	△二一八
群山府	四六四	釜山府	二四七	清津府	七〇七
全州郡	七七七	泗川郡	九九九		
茂朱郡	九二九	咸陽郡	四二四		

備考 △印は出生數よりは死亡數の多きものとす。

即ち一箇年の人口自然増加千人に付二十二人以上の地方は三十箇所を算し、その十人以下の地方は三十七箇所に及んで居る。而して人口自然増加率の高い所は沿海地方や山地帯に多く、人口自然増加

率の低い所は市街地やその接續地に多いことを示し、就中十二府中の京城、仁川、群山、木浦、大邱、釜山、新義州、元山、清津の九府までがそれに屬し、殊に仁川、元山の二府は出生よりも死亡の方が多く、人口の自然減少を來して居るのは頗る注目すべきことで、内地に於ては人口十萬人以上の市街で、人口自然増加率の十人以下の地方は、廣島市の八・七二、京都市の八・三七、神戸市の七・九五、大阪市の七・五五、金澤市の四・七〇のみである。

## 第二節 移住人口の推定

朝鮮はその地勢上、陸接國境竝に海上を経て出入する人口の移動往來が極めて自由で、鮮内人口の鮮外移住及び鮮外人口の鮮内移住を正確に知ることは出来ない。現在朝鮮總督府の報告令に基いて調査を行つて居る旅客出入調は、僅に外國及び内地朝鮮間の貿易船に依る旅客數、竝に新義州及び上三峰に於て鐵道に依り對岸に出入せし旅客數の内鮮外人別調査に止まり、貿易船以外の船舶に依り、又は鴨綠江、圖們江を渡渉して出入せし人口に就いては何等の調査資料を有しないのである。試みに最近五年間に於ける旅客出入調を見るに左表の通りにして、大正十年より同十五年までの五箇年間に、内地人は鮮外に出でたる者よりも鮮内に入りたる者の方が十二萬三千百三十六人多く、朝鮮人は鮮内

に入りたる者よりも鮮外へ出てたる者の方が八萬六千八百五人多く、支那人は鮮外へ出たる者よりも鮮内へ入りたる者の方が七萬九千二人多く、その他の外國人は鮮外へ出たる者よりも鮮内へ入りたる者の方が五千二百二十七人多くなつて居り、總體を通じ最近五箇年間に於ける貿易船及び鐵道に依る人口の移動は、鮮外移出よりも鮮内移入の方が十二萬四百六十人超過して居る。即ちこれで見ると、一箇年平均の鮮内人口移入超過數は僅に二萬四千九十二人に過ぎないのである。

自大正十年  
至大正十四年 五年間に於ける旅客出入調

年別	來				往			
	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人
大正十年	三三,九七三	八八,七三九	五八,三三三	三,一七〇	四〇,九三三	二二,一六七	九七,一三三	五二,〇〇九
大正十一年	三三,九七三	八八,七三九	五八,三三三	三,一七〇	四〇,九三三	二二,一六七	九七,一三三	五二,〇〇九
大正十二年	三三,九七三	八八,七三九	五八,三三三	三,一七〇	四〇,九三三	二二,一六七	九七,一三三	五二,〇〇九
大正十三年	三三,九七三	八八,七三九	五八,三三三	三,一七〇	四〇,九三三	二二,一六七	九七,一三三	五二,〇〇九
大正十四年	三三,九七三	八八,七三九	五八,三三三	三,一七〇	四〇,九三三	二二,一六七	九七,一三三	五二,〇〇九
總計	一,七三三,四三三	一,〇九八,八三三	四九二,二二二	三三,一七七・三	三,三六七,七元	一,五九〇,三三二	一,一八五,六六八	四三二,二六〇・二

貿易船に依る旅客出入表

年別	來				往			
	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人
大正十年	一,三五四,七七七	六九三,一一〇	三六,二二二	二〇,九四四	二,三七四,九三三	一,三三〇,八六四	八〇九,七一九	三二七,四三三
大正十一年	一,三五四,七七七	六九三,一一〇	三六,二二二	二〇,九四四	二,三七四,九三三	一,三三〇,八六四	八〇九,七一九	三二七,四三三
大正十二年	一,三五四,七七七	六九三,一一〇	三六,二二二	二〇,九四四	二,三七四,九三三	一,三三〇,八六四	八〇九,七一九	三二七,四三三
大正十三年	一,三五四,七七七	六九三,一一〇	三六,二二二	二〇,九四四	二,三七四,九三三	一,三三〇,八六四	八〇九,七一九	三二七,四三三
大正十四年	一,三五四,七七七	六九三,一一〇	三六,二二二	二〇,九四四	二,三七四,九三三	一,三三〇,八六四	八〇九,七一九	三二七,四三三
總計	六,七二二,二二二	三,四七三,五五五	一八〇,一〇〇	一〇四,八八八	一三,九一七,〇〇〇	六,六五二,〇〇〇	四,〇三九,〇〇〇	一,六三九,〇〇〇

大正十一年	三、四六、一四六	一、〇六、四四四	九六、〇一五	一〇、五五七	五五九、二六二	二、四四、三六五	一、三三、一九七	七、七、九〇五	三、一、三二五	四、四七、九九一
大正十二年	三、五八、五六六	一、一六、六六六	六六、一九二	三、七三三	四、六六、〇七六	三、五三、四四〇	一、七五、七九五	四、八、九二五	五、四、六四四	四、三、六三四
大正十三年	三、〇五、七七八	一、九〇、八五四	六三、八七七	二、二九九	五、〇七、七〇八	二、六二、七六六	二、四四、三七七	五、三、七九三	三、一、六三二	五、三、〇八七
大正十四年	三、三六、五三三	一、一六、四七七	五九、八六六	二、二六五	四、六六、九四三	三、三三、五九四	一、六〇、三三三	六、六、〇二七	二、八、四三〇	四、三、六七六
計	一、三、四四、七七七	六、九三、一一〇	三、六、一三三	一〇、九四四	二、三、四四、九三三	一、二、三三、四八六	八〇、九、七七九	二、五、七、四三三	一、七、六、九九	二、三、九、六〇五

鐵道に依る旅客出入表

年次	來				往					
	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人		
大正十年	四、四、四四四	二、七、四四一	一、八、七七〇	一、三、三〇〇	九、三、五三三	四、一、九八九	三、三、三三三	一、九、九六四	一、三、九七	六、六、六三三
大正十一年	七、〇、九七七	一、九、〇〇〇	三、四、〇〇〇	一、五、五三三	一、五、〇六〇	六、三、〇三六	一、六、七三六	一、八、四三〇	三、九、七四	一〇、一、二七六
大正十二年	七、三、五五六	一、八、六六〇	一、〇、九七七	四、五五六	一、〇、七七五	九、三、四二七	一、七、七〇〇	一、三、六六〇	三、八、五五六	一、二、四、七三三
大正十三年	一、三三、〇六七	六、九、六六七	六、九、七九	二、五、五六七	二、五、九九〇	一、二五、八三四	七、三、九〇四	六、四、九二七	一、八、八九九	二、五、五二四
大正十四年	六、六、六六六	二、三、〇、六五五	五、三、三〇〇	三、一、九五五	五、九、九四六	四、三、一七九	二、四、五、七七	四、〇、三三七	四、七、五	一、三、六、六三六
計	三、八、七、〇〇〇	四、〇、五、〇三三	一、七、五、一六〇	一、三、三、三三三	九、六、七、七六六	三、五、五、四三七	三、七、五、八九九	一、五、〇、八六八	二、〇、〇、六一	八、六、六、六三六

外國及び内地朝鮮間貿易船旅客港別調 (大正十四年)

入港	出港							
	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人	内地人	朝鮮人	支那人	其他の外國人
八、三三三	六、三三三	二、四、一〇六	一、八	三、三、三三三	八、六六六	四、九、九	三、三、三三三	一、五

第七章 人口の増減

朝鮮の人口現象

群	山	浦	城	木	麗	浦	釜	馬	鎮	新	龍	江	元	清	城	雄	西	總
山	浦	浦	浦	浦	水	項	山	山	浦	州	浦	陵	山	津	津	基	水	計
三	四	一	一	四	七	三	八	六	六	三,000	五	四	二,五二	一,三〇〇	六	一三	三	三六,三三
四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
九	九	一	九	七	七	元	三	元	八	四,一七一	五	六	八	一,三〇〇	二	一	九	三,三六
二	一	一	一	二	三	三	三	八	六	二,六六六	一	二	九	一,〇九	二	二	六	一〇,三三
八	八	一	七	四,五〇九	四	一	二	五	四	一五,三六	一	六	三	九	六	一	三	二〇,一三
一	一	一	一	三	一	一	一	一	一	一〇,三七	一	一	一	一	一	一	一	二六,〇七
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	二八,三三
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	四三,七六

新義州並上三峰に於て鐵道に依り對岸に出入せし旅客數(大正十四年)



朝鮮の人口現象

四五四

同	二年末	六三二,七六一	一八一,六五五	四五〇,一三七
同	三年末	四七一,〇九二	一四〇,五〇三	三三〇,五八九
同	四年末	三四八,四三七	一〇〇,八二七	二四七,六一〇
同	五年末	三六九,七四〇	一九〇,五二八	一七九,二二二
同	六年末	三三〇,八六九	一六一,八四六	一五八,〇二三
同	七年末	八八〇,三三五	五四,九八五	三三〇,五〇〇
同	八年末	九二,八七七	八二,二二九	一〇七,四八八
同	九年末	一三九,〇八〇	七二,六三三	六六,四四七
同	十年末	一六三,九三九	一七二,八〇一	八八七一
同	十一年末	一七三,八四三	二二七,二五五	四三,四二二
同	十二年末	二五八,二〇二	三五一,〇四一	九二,八三九
同	十三年末	一八二,一五三	三〇三,〇三六	一一九,八八三
同	十四年末	九四七,四一〇	三九九,九九六	六二七,四二四

備考

大正十四年末の増加人口總数が著しく多いのは、同年十月一日施行の國勢調査の人口總数が一千九百五十二萬二千九百四十五人となり、前年末の現住人口總數一千八百六萬八千百十六人に對し甚だしく増加したる爲め、同年末の現住人口總數が稍過大に計上されたる疑ひあり、翌昭和元年末の人口増加數が僅に八萬八千餘人に過ぎざるも、これが影響に因るものならんか。

大正十四年は異常に人口の増加したる年なるを以てこれを除き、大正四年より同十三年に至る十箇

年間に於ける移住人口數を推定するに、外國及び内地より朝鮮へ入りたる者の總數六十九萬五千九百人、朝鮮より外國及び内地へ出でたる者の總數二十六萬六千六人となり、差引き鮮内への移住超過人口四十二萬八千九百八十四人に達し、この十箇年間に約四十三萬人の人口が朝鮮に移住したことになる。既往十年間に於ける内地人及び外國人の鮮内移住と、朝鮮人の外國及び内地移住の事實とを鑑みて、一箇年平均四萬三千人内外の鮮内移住超過は、大勢より見てその推定計算に大なる誤りはあるまいと思ふ。朝鮮に移住せる内地人及び外國人の人口状態に就いては既に屢々説明したから、左に少しく朝鮮人の内地及び外國移住状況に就いて叙述して見ることにした。

### 第三節 朝鮮人の内地移住

内地と朝鮮とは古來歴史的にも地理的にも密接なる關係あり、彼我人民の往來は隨分頻繁を極めた時代あり、従つて朝鮮人の内地に歸化した者は相當に多いのであるが、こゝでは最近に於ける内地在住朝鮮人の状況を述べて見やう。試みに大正四年以降同十四年までの毎年末現在、内地在住鮮人數を各府縣別に就いて示すと左表の通りに年々著しく増加して居る。殊に歐洲大戰の影響を受けて内地事業界の活況に向つて以來、朝鮮人労働者の需要は俄に増加し、この數年間朝鮮人にして内地に渡航



千	葉	三	二	三六	二二	一九	二四	四〇	一〇三	八	四四	一、七三
茨	城	三	三	一〇〇	三三	六二	四	四	一三〇	二四	三〇	一、八〇
栃	木	三	三	六六	五	七	△八	△八	三	七	六	一、九
奈	良	三〇	一	四	三六	三九	△三	△三	八	六	六	一、〇三
三	重	三	二	五	三	六	△三	△三	五	五	六	一、六
愛	知	二	二	二	四	四	△〇	△〇	一、六	一、二	七	九、三
靜	岡	二七	九	七	九	九	二	二	七	七	一、三	二、二
山	梨	四	六	六	一	一	二	二	九	三	八	二、七
滋	賀	〇	五	元	三	七	△一	△一	三	七	八	一、〇
岐	卓	二	三	一	三	三	二	二	四	〇	三	三、八
長	野	一	三	五	九	七	四	四	一、〇	一、〇	二	一、六
宮	城	六	三	六	九	二	△一	△一	〇	三	七	一、一
福	島	四	二	四	二	二	二	二	三	三	六	一、三
巖	手	八	二	三	二	三	二	二	六	一	一	一、一
青	森	五	三	五	三	六	二	二	七	一	一	一、〇
山	形	四	三	六	一	七	〇	〇	一	一	一	一、〇
秋	田	三	三	二	二	三	△	△	三	三	三	一、三
福	井	三	四	二	二	三	△	△	三	三	三	一、三

第七章 人口の増減



東京に於ける朝鮮人



屋百八の内會愛相町平太



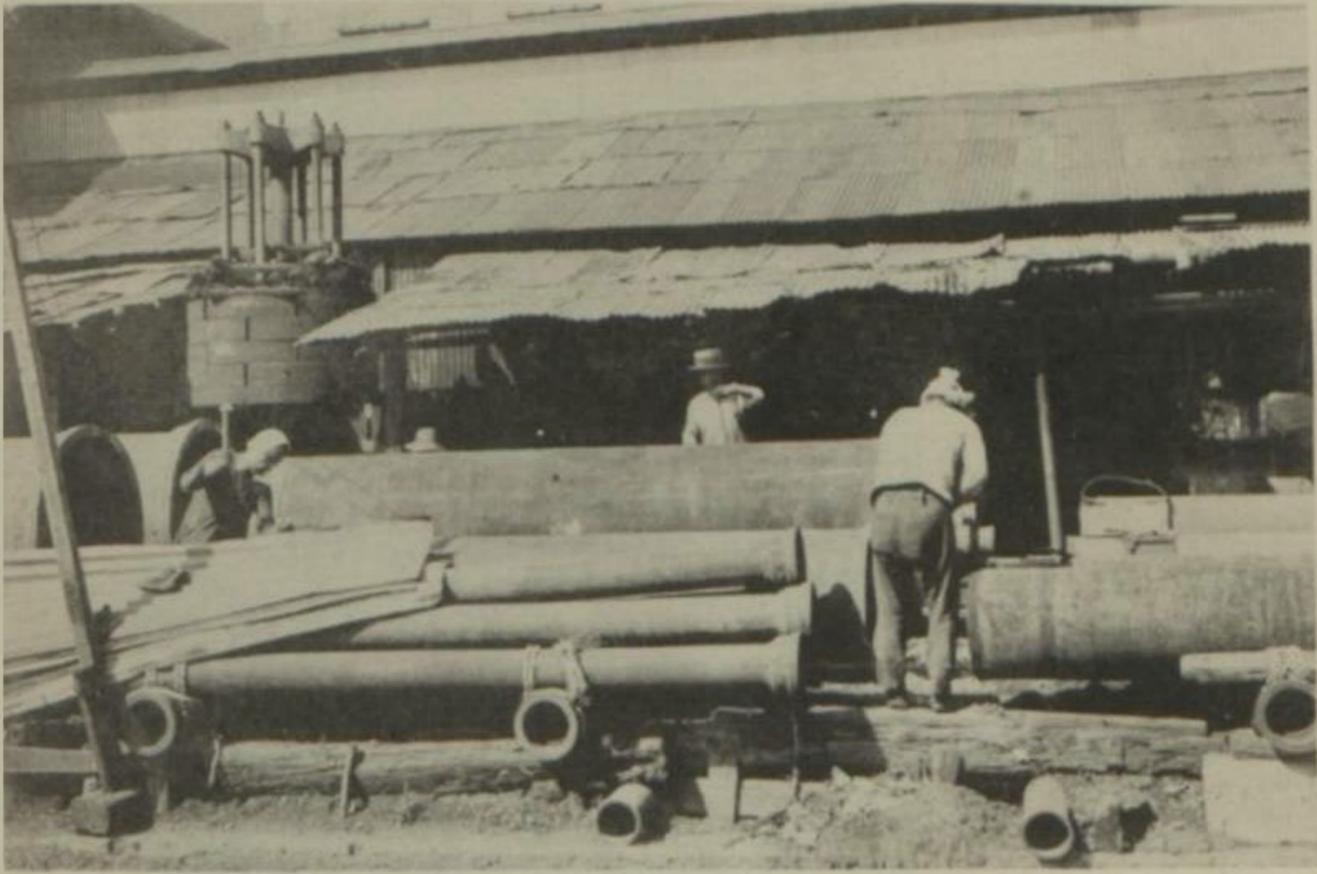
場濯洗の内會愛相町平太



太 平 町 相 愛 會 全 景



日 本 毛 社 會 内 的 鮮 人 女 工

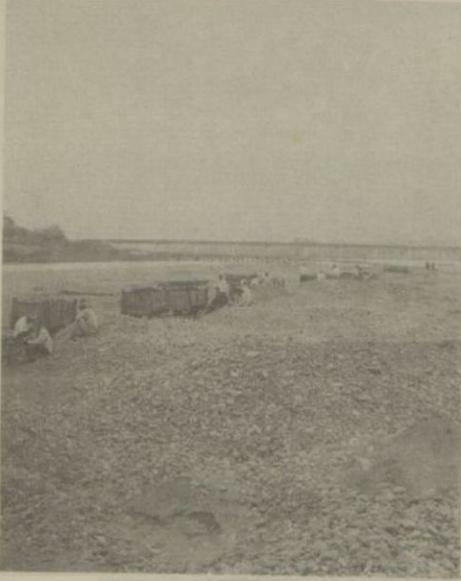


工職人鮮の所工鐵橋緬白



工土人鮮の上防堤島向

多摩川鐵橋附近に於ける鮮人の砂利採取



多摩川鐵橋附近に於ける鮮人の砂利運搬



鮮人苦學生の人蔘人蔘館行商



調布村の鮮人集圃地



三河島町基督教日曜學校



同上鮮人生徒



(一其) 店食飲人鮮の山小町塚平



(二其) 店食飲人鮮の山小町塚平

沖繩	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
臺灣	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
樺太	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
合計	三、九一九	五、六六六	一四、〇六一	三三、三六三	二六、七五三	四〇、一七六	五五、八六六	五九、六六五	〇七、〇六七	一〇〇、三三六	一三三、七三〇	一五三、七三〇	一七三、七三〇

備考 大正十年末人口中東京府外九縣(△印付)の人口數不詳に付各其前年數を掲記せり

即ち大正四年末の内地在住朝鮮人數は三千九百八十九人に過ぎなかつたのであるが、それが大正十四年末現在では十三萬三千七百十人に増加して居る。併合後二十年近くになり、政府や拓殖關係會社が、移住獎勵、その他各種の保護を講じながら、尙ほ且つ朝鮮在住の内地人數四十萬人を出づること餘り多からぬに對比せば、朝鮮人の内地渡航の盛んなることに驚かざるを得ないが、水の卑きに就くが如く、人は生活の安易なる地に趨くのが自然の勢ひである。試みに最近に於ける朝鮮人の内地渡航及び歸還狀況を示すと左の如くなつて居る。

#### 朝鮮人内地渡航者及び歸還者數

渡航者	八、五八六	二〇、〇九〇	二六、七六六	四二、七〇三	五三、六三一	五七、七〇七	三三、二四三	一三三、七三〇
歸還者	一、八〇二	三、〇六六	六、九九二	七、七三三	二五、七七一	三〇、〇八六	四四、四三三	一三三、七三〇
	大正七年	同八年	同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年

最近の狀況を見るに、大正十三年には、十二萬二千二百四十三人の渡航者に對して、七萬四千四百一

三十二人の歸還者があり、大正十四年には十三萬一千二百七十三人の渡航者に對して十一萬二千四百七十一人の歸還者となつて居る。而して内地在住朝鮮人數は、地理的關係上南鮮地方の者が多く、北鮮地方の者は國境を越えて滿洲、西比利亞の方へ出る數が多いのである。南鮮地方でも全羅南道就中濟州島の者が多數を占め、これに亞いで多いのは慶尙南道、慶尙北道の順序にして、京畿道、全羅北道、忠清南道、忠清北道等の者も尠くない。

内地在住朝鮮人の大正十四年十二月末現在數は十三萬三千七百十人に達して居るが、今その内譯を見ると、戸數一萬一千三十戸にして、男數十一萬二百九十一人、女數二萬三千四百十九人である。男數が女數に比して遙かに多きは、渡航者の多數が勞働者である關係によるのである。今大正十四年末現在、内地在住朝鮮人の戸數及人員を各府縣別に就いて示すと左表の通りであるが、經濟界の不況に伴ひ勞働者の需要減退の結果、大阪府の如きは大正十三年に比し同十四年の方が在住朝鮮人數が著しく減少して居る。

内地在住朝鮮人戸數及び人員 (大正十四年末現在)

府縣別	種別		計	府縣別	種別		計
	戸	數			戸	數	
北海道	男	1,336	3,323	東京	男	10,011	20,828
	女	1,987			女	6,817	
	計	3,323			計	16,828	

京	都	三〇〇	五,九三三	一,〇三六	六,九七六	一,五八七	一,三三六	五,四〇〇	一,四四〇
大	阪	二,四四〇	三,七九七	六,〇六六	三,八〇〇	三	一三〇	三	一,四〇〇
神	奈	三,〇〇〇	五,〇六八	五,〇〇〇	五,五六一	一,三三三	一,三三三	二,九	一,四三三
兵	庫	九,七七	五,六四四	二,三三三	七,〇〇〇	三三	一〇六	一一	一一九
長	崎	二,四三三	二,一三九	二,六六	二,四〇七	一七	三六	四	三〇
新	潟	三,〇〇	四,五三	六〇	五,二五	七	一六	一一	七三
埼	玉	七,六	九,三	六	六,九	七	二六	二	三〇
群	馬	二,一六	一,三〇〇	一,三〇〇	一,四八	二六	三三〇	四九	二,六九
千	葉	四,三	一,〇〇〇	八三	一,一七	一九	一七〇	一	一〇六
茨	城	五〇	四,四三	四三	四,八四	三	一,二八	八九	一,三三七
栃	木	一,六	一,七四	一九	一,九三	三	四四四	三	五〇〇
奈	良	一〇三	八四八	二四四	一,〇九	一三	一六四	三	三二九
三	重	一四二	一,五三三	二三三	一,五六	一三	八八九	一一	一,〇〇一
愛	知	四九九	六,六六	三,〇六七	九,七三	三三	三,三三七	六八	四,〇三
靜	岡	三三	一,八六七	五,四三	二,四三	四〇	四,一六七	六六	四,九七九
山	梨	七四	三,〇一七	一六〇	二,一七	一六	九六一	六三	一,九四三
滋	賀	七九	八八七	三〇四	一,〇二	二七	五〇一	三〇	五三三
岐	阜	一四	二,一三	二五	二,三六〇	七	三三	三	四〇三

第七章 人口の増減

朝鮮の人口現象

愛媛	105	556	100	656	宮崎	73	36	元	50
高知	26	37	33	240	鹿児島	4	14	3	17
福岡	1,433	2,38	2,03元	13,37	沖縄	3	25	1	15
大分	130	75	30	1,055	臺灣	6	27	1	7
佐賀	76	63	7	709	樺太	360	26	87	33
熊本	43	88	100	98	計	1,030	110	33	1,570

即ち朝鮮人在住者の最も多い府縣は、大阪府の三萬一千八百六十人を第一位とし、福岡縣の一萬三千三百五十七人にこれに亞ぎ、東京府の一萬八百十八人、愛知縣の九千七百三十三人、兵庫縣の七千八百人、京都府の六千九百七十八人、神奈川縣の五千五百六十一人、山口縣の四千七百九十五人、廣島縣の四千二十五人、北海道の三千六百二十八人の順位である。更にその職業別人員を見るに左の如くなつて居る。

在内地朝鮮人職業別人員調 (大正十三年)

職業別	人員	職業別	人員	職業別	人員
官公吏	72	軍人	14	學生	1,631
銀行會社員	47	船乘業	1,745	農業	684
漁業	36	商業	267	人蔘行商	25

銀行商	四八八	雜行商	一四七	宿屋商	七〇〇
料理飲食店	九〇	雜業	八七四七	諸職工	三二、〇〇〇
坑夫	八三六五	土石工	二〇、二七	其他勞働	三、一七一
藝娼妓	一三四	酌婦	二九一	無職	二〇、八七一
在監人	九四	計	三〇、三三六		

これに依つて見ると、内地在住朝鮮人の職業は、勞働者最も多く、諸職工、土石工、坑夫等の多いことが分るのである。朝鮮人職工勞働者の賃銀は大體に於て内地人より二割方位低廉であるが、力役に従事する者の如きは殆んど内地人勞働者と大差ないやうである。朝鮮人勞働者は内地人勞働者に比して一般に賃銀が幾分低廉にして、これが即ち内地に於て朝鮮人勞働者を需要する重なる原因で、今日では各地とも勞働者の過剩の傾向あるに拘らず、朝鮮人を使用するのは、この經濟上の關係から來て居るのである。然しながらその勞働能率に至つては内地人勞働者に比して多少遜色あり、殊に熟練を要する技術的の職工にありては、内地人に遙かに劣つて居る。これは概して教育なく知識の低い結果であるが、相當訓練をすれば大抵の仕事には従事し得て相當の成績を擧げることが出来る。朝鮮人は一般に力役に適し土方、仲仕、人夫等、主として下級勞働に使用するには、却つて内地人のやうに不平を訴へないから使ひ易いさうである。朝鮮人勞働者の最も大なる缺點は、一定の職業、一定の場

所に長く安定せずして、賃銀が多く得られるとか、面白い仕事があると聽けば、直ちに他に轉ずる弊あり、これは職工、店員、労働者に共通の缺點にして、絶えず轉々して居るから、その労働の日數も少く、就職の困難も伴ひ、従つて収入は多く得られず、殊に一定の職業に熟練することが出来ないの

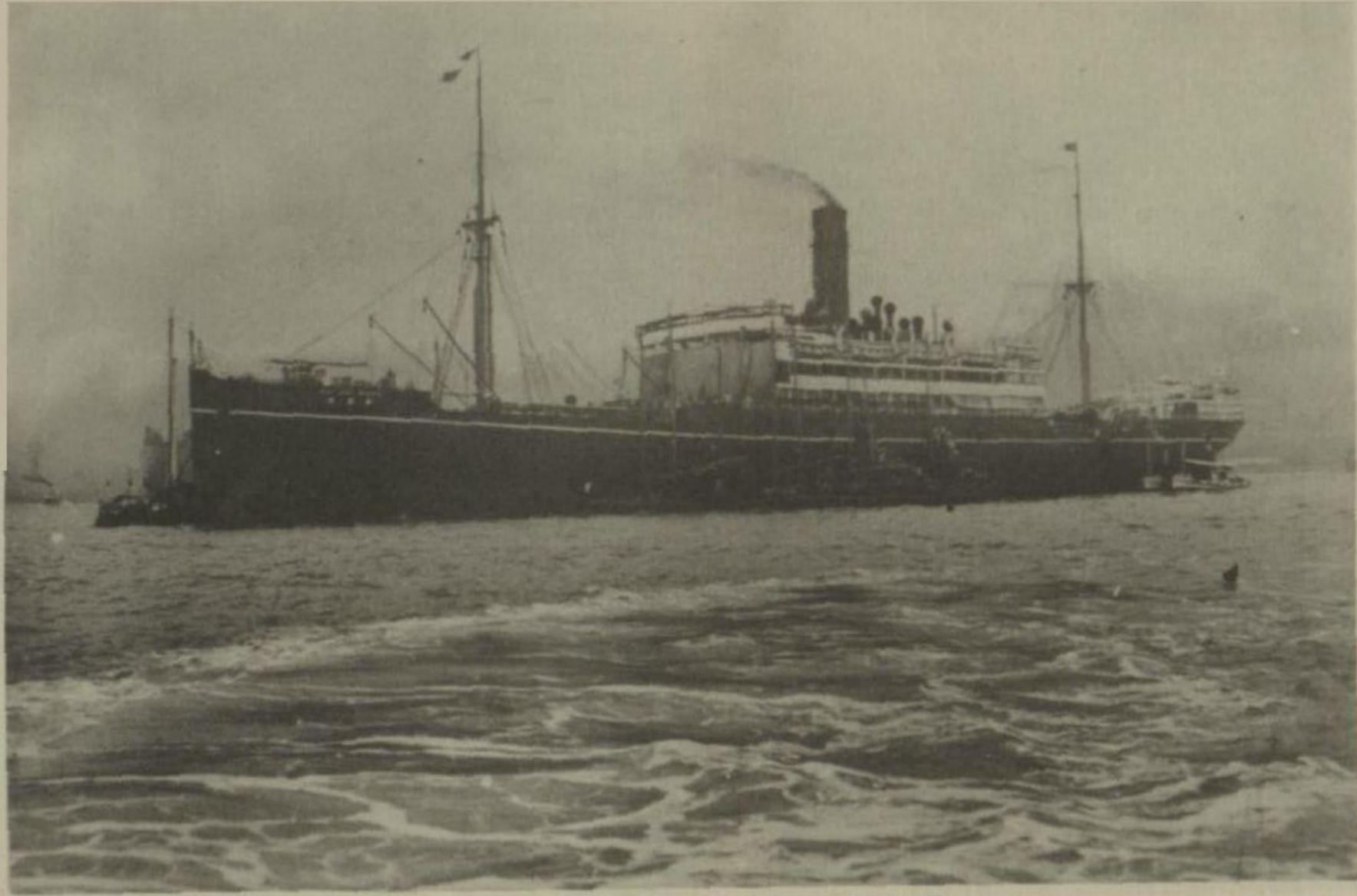
で、自然使用主側の信用も厚くない譯である。  
尙ほ大正十四年中に於ける朝鮮人の内地渡航歸還狀況を示し、渡航歸還者の出身地及び職業別を見

朝鮮人内地渡航歸還 (大正十四年中)

道別	渡航歸還者			歸還者		
	學生	労働者	其他	學生	労働者	其他
京畿道	五三三	三、二六	一、九三	五三三	二、七	一、三
忠清北道	七七七	二、一四	五三	七	二、四〇	二六
忠清南道	一、四一	四、三	一、〇〇	一、七	四、四	一、〇〇
全羅北道	三三三	三、一七	七	三三	三、〇〇	三三
全羅南道	一、一四	三、三六	二、七六	一、一四	一、九三	二、一
慶尙北道	三三三	二、七〇	四、三	三三	三、三	二、一
慶尙南道	三三三	三、九七	六、九三	三三	三、三	三、七
計	五、三三	一、九三	五、三三	五、三三	二、七	一、三

福岡縣下に於ける朝鮮人

——下關要塞司令部検査済——



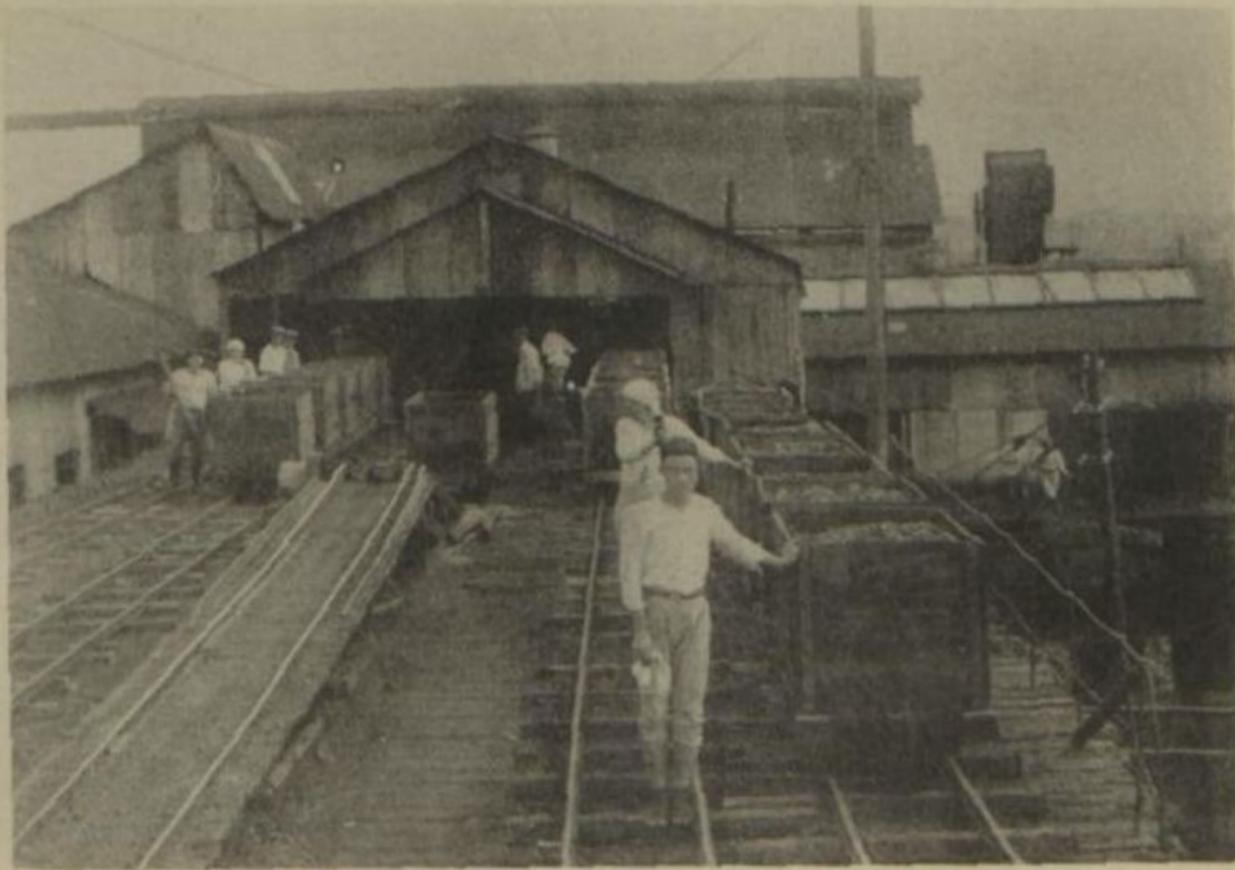
門司港に於ける鮮人の石炭積込



鮮人労働者の食事状況



飯塚鮮人納屋の外休憩



働 勞 る け 於 に 坑 炭 塚 飯



業 作 工 土 る け 於 に 幡 八



飯塚鮮人俱樂部



私立八幡丸山學院

黄 海 道	一七三	一、三三八	四八一	一、九七九	一五三	一、〇六六	三〇四	一、三三四
平 安 南 道	四三三	一、四六八	七九六	三、七一九	三六七	一、四六〇	五二一	二、四八六
平 安 北 道	三三三	六六三	二四六	一、一四四	一九六	六六九	一九九	一、〇七六
江 原 道	一九〇	一、二四四	一九七	一、五六一	一七四	一、二一六	二二八	一、三三〇
咸 鏡 南 道	三三三	一、三二一	三三三	一、八七七	三三三	一、二六六	三九一	一、八〇六
咸 鏡 北 道	一九三	四〇〇	一〇〇	六六三	一一二	六四三	九一	八四九
合 計	一、四八一	一、七〇、三三三	三、〇、九九九	一、三三、七三三	三、〇、七二七	九三、八〇四	一、五、九七〇	一、三三、七七一

#### 第四節 朝鮮人の海外移住

李朝末葉以來、朝鮮人は壓制政治と苛斂誅求の弊に堪へず、國內の地力荒廢して瘠土となり、收穫乏しき爲めに、生活の困難甚だしく、且つ頻々と起る凶歲饑饉に苦み、遂ひに滿洲及び西伯利亞に無限の大沃野を見出し、續々國境外に移住したもので、當時政府の監視の嚴重であつたに拘らず、漁業者が舟運を利用し、農業者が結氷期を待つて渡河し、自由の天地に農耕して定着した數は夥しく、既に露國及び支那の國籍になつて居る者も多いのである。滿洲及び西伯利亞方面一帶の朝鮮人總數は、或は百五十萬人内外に達すべしと云ひ、或は三百萬人にも及ぶといふ者あり、諸説區々にして一致しないのである。然しながらその移住の歴史は相當に古く、露國が支那の領土であつた沿海州を併合す

る以前より、國境を越えて移住し始め、彼是百餘年も經過し、何分廣大無邊の地に點在して居るのであるから、正確なる調査は不可能である。従つて併合以前に於ける朝鮮人の海外移住はこれを明かに知るの資料を有しないが、併合後に於ける狀況は、朝鮮總督府警務局の調査に據りて窺ふことが出来る。即ちこれに據ると、明治四十三年九月以降大正十四年十二月末までに、北間島へ移住した者十一萬四千六百十人、西間島へ移住した者十萬七千七百五十人、その他へ移住した者五萬五千九百七十九人、合計二十七萬八千三百三十九人にして、この中大正元年以降大正十四年までに歸還した者八萬六千九百五十五人となつて居る。海外移住者の最も多きは咸鏡北道の十一萬四千四百八十四人にして、平安北道の五萬一千七百人これに亞ぎ、慶尙北道の二萬九千八百二十七人、咸鏡南道の二萬一千八百九十五人、平安南道の一萬六千二百四人、江原道の一萬四千八十五人、慶尙南道の一萬三千六百三十九人等も多い方で、要するに北鮮西鮮の朝鮮人が滿蒙及び西比利亞方面へ移住した數の尠くないことを示して居るが、近來南鮮地方よりの移住者も漸次増加して來た。

## 併合以後外國移住朝鮮人累年比較表

京畿 忠北 忠南 全北 全南 慶北 慶南 黃海 平南 平北 江原 咸南 咸北 計

百五十一 北 一四五 七 一八 一 四 一三三 二九四 二六 三三 一六〇 四二 二二二 一七三 三〇四









第七章 人口の増減

露領西伯利地方

桓仁縣	10,000
通化縣	13,715
輯安縣	26,240
寬甸縣	33,600
安東縣	6,241
計	178,265
沿海州	250,000
黑龍州	30,000
後貝加爾州	10,000
イルクーツク州	5,000
樺太州	4,250
勸察加州	700
薩哈連州	4,431
計	324,361
東寧縣	1,933
寧安縣	2,856
穆稜縣	1,459
長春縣	3,955

東支沿線地方及  
其以北

德惠縣	4
賓江縣	27,933
扶餘縣	10
双城縣	2,711
依蘭縣	14
黑龍縣	6,611
富錦縣	33
同賓縣	3,866
計	10,745
瀋陽縣	3,951
撫順縣	2,001
本溪縣	5,766
新民縣	1,762
彰武縣	2,477
黑山縣	1
遼陽縣	3,6
鐵嶺縣	5,99
伊通縣	2,189

朝鮮の人口現象

吉奉地方

遼江縣	吉林縣	梨樹縣	法庫縣	康平縣	遼源縣	營口縣	磐山縣	西安縣	東豐縣	西豐縣	遼中縣	莊河縣	岫巖縣	鳳城縣	懷德縣	昌圖縣	開原縣
五,一五〇	二,五七〇	二九	一九五	二二三	二〇	二二八	五	二,九四八	六六三	一,八二八	四一	一九	二二三	三,五六四	一四五	一三〇	六三

關東州

天津	上海	計	金州	大連	旅順	計	海城縣	錦縣	農安縣	蓋平縣	輝南縣	嶺穆縣	双陽縣	敦化縣	樺甸縣	磐石縣	舒蘭縣
一七〇	七〇〇	九〇	二〇	六〇	一〇	四,四二七	一〇	一〇	七	一〇	六五〇	一,六八六	二,四四〇	一,二二五	四,五六九	二,八三四	一,五八〇



## 朝鮮の人口現象

四七四

四、奉天省城

一、三五七

五、同附屬地

一一六

右の調査では、海外在住朝鮮人數は、北間島及び琿春地方に二十九萬一千四百人、西間島地方に十七萬八千二百六十五人、露領西伯利亞地方に三十一萬四千三百六十二人、東支鐵道沿線地方及びその以北に一萬七百四十五人、吉奉地方四萬四千二百七十七人、關東州九十人、支那本部地方一千百人、北米地方一萬七千人、英國二十人、合計八十五萬七千九百九十九人となつて居る。即ち海外在住朝鮮人の大部分は、滿洲及び西伯利亞方面に居ることが分るのであらう。而してこれ等の朝鮮人は殆んど農業に従事し、その他の職業に従事する者は極めて少數である。由來朝鮮人は最も農耕に巧みな國民で、殊に米作はその得意とする所であるから、滿洲に於ても西伯利亞に於ても非常な好成績を收め、就中、西伯利亞に於ては、朝鮮人の手によりて農業の開発せられたる地域頗る多く、露國政府に於ても從來同地方に對する朝鮮人の移住を歓迎して居る。

これまでの經驗によると、露國の極東露領移民は失敗に終り、彼等は朝鮮人や支那苦力を使用し、又は土地を貸付けて農業を營み、然らざれば鐵道沿線等にて商工業に従事したり、或は勞働に従事する者が多數で、自ら農耕に従事する者は少數である。露國側の調査では、支那人は儲けると歸國するから農業には適せぬが、朝鮮人は定着するから、農民として最も成績が良いと云つて居る。西伯利亞

の全體の面積は四百八十三萬方哩に達し、その可耕地面積は約十億露町歩に及び、その中で現に開墾せられて居る部分は僅に可耕地面積の二百分の一内外で、その人口の密度は一方哩平均二人餘といふのであるから、農業開發の餘地と人口の收容力は無限なりと稱するも不可あるまい。西伯利亞の地たるや、元來穀物生産に好適せるのみならず、牧畜、鑛業、製材等に有望であるから、寒地の移住に適する朝鮮人をして西伯利亞の開發に従事せしむるは、我國としては總べての點に有利である。幸ひに勞農政府との交渉を圓滑ならしめ、我國の西伯利亞投資に便宜を得るに至らば、自然朝鮮人の農業者も保護せられやう。また滿洲方面にも、朝鮮人の移住して農耕に従事する餘地は極めて大であるから、大體に於て朝鮮人の居住は將來尙ほ増加すること、思はれる。由來滿洲及び西伯利亞に移住して居る朝鮮人は、概して無資力の窮農が多いから、政府の適當なる保護指導が大切で、これは寧ろ不逞鮮人の取締よりも重大なる問題である。極東の廣大無邊なる大沃野に在住する朝鮮人をして、安んじて農耕の業に従事せしめ、その生活の基礎を鞏固ならしめ、産業の開發を計らしむるに於ては、朝鮮人の人口調節と、我國の食糧問題解決に、大なる光明を與ふるものである。故に我國の資本家がこの地方の農業經營に遠大なる計畫を樹て、朝鮮人を使用して大規模の營農事業を行ふことは、國策としても亦緊要なるものであるが、また移住者の増加に伴ひ、教育機關、醫療機關、布敎事業等に對して、政府

及び民間が相手國の諒解の下に、適當なる施設を爲す如きことも極めて大切である。

## 第五節 將來の人口増加

朝鮮に於ける人口を一定の期日を定めて統一的に調査したのは、明治三十九年十月、韓國政府警務顧問部の調査を以て嚆矢とし、この調査に依る人口總數は九百八十六萬九千二百七十六人と記録せられ、爾後統監府に於て毎年現任調査を行ひ、朝鮮總督府は之を繼いで今日に及んだのである。この間大正九年十月一日、國勢調査施行の豫定なりしも、騷擾事件後一部人心の安定を缺くものありしを以てその計畫を變更し、特に同日を以て現任戸口の臨時調査を行つた。この結果は年末現任調査と大差なく、從來の年末現任調査の正確に近きことを示したが、大正十四年十月一日には、第一回の國勢調査が施行せられ、始めて基本的人口數の確立を見るに至つたのである。同調査に依る人口總數は千九百五十二萬二千九百四十五人にして、これを大正十四年末現任調査に依る人口と比較すると、五十餘萬人の差があるが、兩者は元來調査の方法を異にし、また人口の性質を同うせざるが爲め、右の差を生じたのは已むを得ざる所である。而して明治四十三年末以來の現任人口増加の趨勢を示せば、即ち左の如くなつて居る。

間島に於ける朝鮮人



朝鮮人の發展をせむる爲め問島龍井市街



野平溝道頭い多の落部人鮮



況狀作稻の農鮮住移



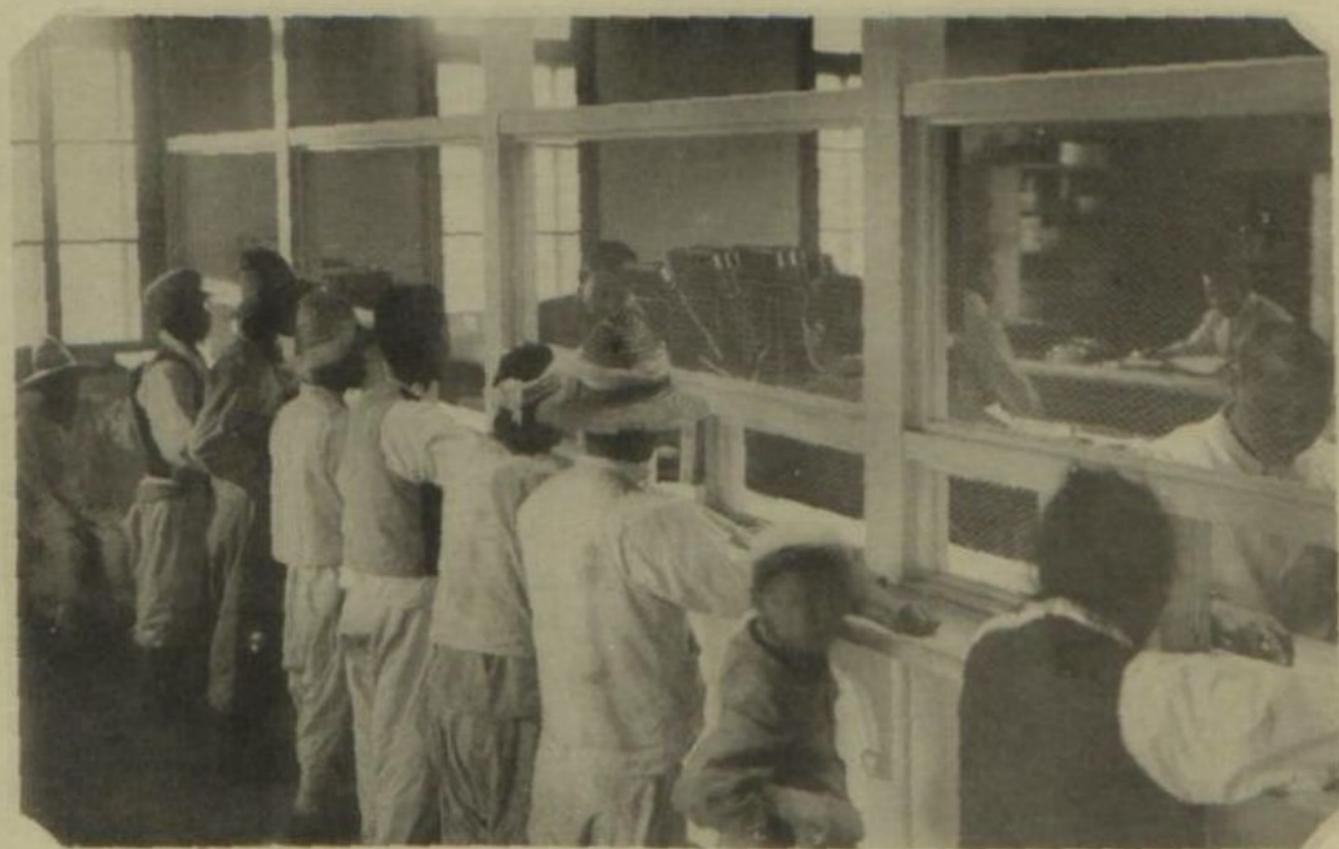
龍井村市場



龍井村牛馬市場



移住鮮農の住宅



朝鮮人民會龍井金融部

人口増加總數及び増加歩合比較

年次	人口總數	毎年増加實數	同上増加歩合
明治四十三年末	一三,三三〇,一七	七四三,八五二	五・五八〇
明治四十四年末	一四,〇五五,八六九	七七二,三三二	五・四八七
大正元年 年末	一四,八二七,一〇一	七七一,二三二	五・四六一
二 年 末	一五,四五八,八六三	六三二,七六一	四・二六一
三 年 末	一五,九二九,九六二	四七二,〇九三	三・〇四七
平均		六五四,三三五	四・五九四
四 年 末	一六,二七八,三八九	三四八,四二七	二・二八七
五 年 末	一六,六四八,二二九	三六九,七四〇	二・三七一
六 年 末	一六,九六八,九九七	三三〇,八六九	一・九二七
七 年 末	一七,〇五七,〇三二	八八〇,三五五	五・一九
八 年 末	一七,一四九,九〇九	九二,八七七	五・四五
平均		二四三,九九九	一・四九〇
九 年 末	一七,二八八,九九九	一三九,〇八〇	八・二一
十 年 末	一七,四五二,九二八	一六三,九二九	九・四八
十 一 年 末	一七,六三六,八六一	一七三,八四三	九・八六
十 二 年 末	一七,八八四,九六三	二五八,〇二二	一・四六五

第七章 人口の増減

朝鮮の人口現象

四七八

年	人口	増加率
十三年末	一八、〇六八、二一六	一八・三・一五三
十四年年末	一九、〇二五、五三六	一八・三・六四一
十五年末	一九、一〇三、九〇〇	一九・四・四二〇
十六年年末	一九、二〇三、九〇〇	一八・三・七四
十七年年末	一九、二〇三、九〇〇	一八・三・七四
十八年年末	一九、二〇三、九〇〇	一八・三・七四
十九年年末	一九、二〇三、九〇〇	一八・三・七四
二十年末	一九、二〇三、九〇〇	一八・三・七四

これに依りて観ると、その實數は逐年増加し、當初の調査より最近調査に至る十六年間に於て、五百七十九萬八百八十三人、即ち四三・五〇%の増加を來したのである。而して各年に於ける増加歩合は年に依りて消長あり、最も高率なりしは明治四十四年の五五・八〇%にして、また最も低率なるは昭和元年末の四・六五%である。この増加率の一高一低は、前に述べた如く、自然的社會的各種の因由が錯綜して、人口現象に影響を及ぼしたことは云ふ迄もないが、また一面より見るときは、施政以來間もなき朝鮮としては、その人口調査の方法に多少適確ならざるものがあつた疑ひもある。近年に於ても大正十四年末には（國勢調査施行の年）一躍百萬人近くの人口増加を示したに反し、昭和元年末には僅に八萬八千餘人の増加を示したるに過ぎない如きは、前年の人口を過大に計上したのに因ると、また財界の不況等に因り朝鮮外移住者の多さを加へたるに因るのではあるまいか。

以上は朝鮮に於ける人口増加の趨勢を簡單に述べたに過ぎないが、試みに大正五年末から昭和元年末に至る十箇年間に於ける朝鮮の人口總數に就いて、その一箇年平均の増加率を算出すると、〇・〇

一三八五二にして、これに依りて將來五十箇年間の人口を推測すると大約左の如くなるのである。

十	年	後	二一、九二〇、〇〇〇人	
二	十	年	後	二五、一五二、〇〇〇
三	十	年	後	二八、八六一、〇〇〇
四	十	年	後	三三、一二〇、〇〇〇
五	十	年	後	三八、〇〇〇、〇〇〇

大正十四年十月一日施行の國勢調査の結果では一方里の人口密度、内地の二千四百十七人に對し、朝鮮は一千三百六十四人であるから、朝鮮は内地に比して著しく人口密度は低いが、その近年に於ける人口増加率は甚だしく高いのである。朝鮮現在の人口密度は恰も今より約五十五年前の、明治五年の内地に於ける人口状態に匹敵して居る。即ち當年の内地の人口は總數三千三百一十一萬七千九百六十六人、一方里當り千三百三十五人四分であつたが、内地が五十餘年間に現在の如き人口密度に達したと同様に、朝鮮も現在の人口増加率で進むと、今後五十年日には昭和元年末の人口千九百十萬三千九百九人に二倍する大人口數に達し、また四十三年後には内地の大正十四年十月一日現在の人口密度と略ぼ同一の増加を見る計算である。

翻つて朝鮮に於ける人口の大部分を占むる朝鮮人のみに就いて、その將來の増加數を推測して見ると、大正五年末より昭和元年末に至る十箇年間の朝鮮に於ける朝鮮人人口の一箇年平均増加率は○・〇一三三一一三である。さればこれに依りて將來五十箇年間の朝鮮人のみの人口數を推測すると概略左の如くなるのである。

十	年後	二一、二四六、〇〇〇
二十	年後	二四、二五〇、〇〇〇
三十	年後	二七、六七八、〇〇〇
四十	年後	三一、五九〇、〇〇〇
五十	年後	三六、〇五六、〇〇〇

尙ほ昭和元年末の朝鮮人の人口數が、その二倍に達するは今後五十二年目となる計算である。斯くの如く將來に於ける朝鮮の人口状態を観察すると、三十年乃至五十年後には、朝鮮自體が内地の現在若くはそれ以上に人口増加に苦むに至るは必然である。殊に現在の人口密度の多少や耕地面積の大小のみを見て、將來の人口收容力を推測せんとするが如きは甚だしき謬想である。人口收容力の大小は面積の廣狹に依るにあらずして、その地味地質の優劣、天然資源の貧富、産業發達の程度、及び風土

氣候の適否、國民勤怠の如何等に負ふ所が多いのである。これ等の點に於て、朝鮮が内地と同程度に人口收容力ありとは、何人も考へられぬであらう。果して然りとせば、我國の人口問題解決に就いて、朝鮮に多くを期待することは不可能である。斯くの如く觀じ來れば、我國の食糧問題解決は將來益々困難になるが、朝鮮はその産業開發の如何によりては、勿論現在以上に内地へ對して、食糧及び原料の供給を爲し得る地位に在る。然しながら朝鮮内の人口が増加し、文化が進み、生活程度が向上するに於ては、その消費が増進することは當然である。されば將來に處する爲めには、獨り食糧品の増産計畫に止らず、朝鮮の經濟政策は、須らく遠大なる抱負を以て施設經營に當らねばならぬ。

朝鮮の人口現象 終

昭和二年十二月十五日印刷  
昭和二年十二月二十日發行

朝鮮總督府

京城府羅漢町三丁目六二

印刷所 朝鮮印刷株式會社